DSP AVアンプ

NATURAL SOUND AV AMPLIFIER

DSP-AX3800

取扱説明書

■ 本機の優れた性能を十分に発揮させると共に、永年支障なくお使いいただくために、ご使用前にこの取扱説明書と保証書をよくお読みください。お読みになったあとは、保証書と共に大切に保管し、必要に応じてご利用ください。

安全上のご注意　本機をお使いいただく前に、「安全上のご注意」をお読みのうえ、正しくお使いください。

もくじ

はじめに

接続する

接続が終わったら

基本的な再生のしかた

いろいろな再生のしかた

オリジナルのリスニング環境をつくる

便利な機能

メニューで設定を変更する

リモコンを使いこなす

その他の情報

安全上のご注意

ご使用の前に、必ずこの「安全上のご注意」をよくお読みください。

ここに示した注意事項は、製品を安全に正しくご使用いただき、お客様や他の方々への危害や財産への損害を未然に防止するためのものです。必ずお守りください。

お読みになったあとは、使用される方がいつでも見られる所に必ず保管してください。

■ 記号表示について

この製品や取扱説明書に表示されている記号には、次のような意味があります。

記号	意味
	「ご注意ください」という注意喚起を示します。
	「～しないでください」という禁止を示します。
	「必ず実行してください」という強制を示します。

■「警告」と「注意」について

以下、誤った取り扱いをすると生じることが想定される内容を、危害や損害の大きさと切迫の程度を明示するために、「警告」と「注意」に区分して掲載しています。

この表示の欄は、「死亡する可能性または重傷を負う可能性が想定される」内容です。

この表示の欄は、「傷害を負う可能性または物的損害が発生する可能性が想定される」内容です。

電源/電源コード

必ず実行

電源プラグは、見える位置で、手が届く範囲のコンセントに接続する。

万一の場合、電源プラグを容易に引き抜くためです。

プラグを抜く

下記の場合には、すぐに電源を切り、電源プラグをコンセントから抜く。

- 異常なにおいや音がする。
- 煙が出る。
- 内部に水や異物が混入した。

そのまま使用すると、火災や感電の原因になります。

禁止

電源コードを傷つけない。

- 重いものを上に載せない。
- ステープルで止めない。
- 加工をしない。
- 熱器具には近づけない。
- 無理な力を加えない。

芯線がむき出しのまま使用すると、火災や感電の原因になります。

必ず実行

必ずAC100V(50/60Hz)の電源電圧で使用する。

それ以外の電源電圧で使用すると、火災や感電の原因になります。

禁止

本機のACアウトレットに、指定された供給電力を超えた機器を接続しない。また、供給電力内であっても電熱器・ドライヤー・電子調理器等は接続しない。

火災の原因になります。

電池

禁止

電池を充電しない。

電池の破裂や液もれにより、火災やけがの原因になります。

禁止

電池からもれ出た液には直接触れない。

液が目や口に入ったり、皮膚についたりした場合はすぐに水で洗い流し、医師に相談してください。

分解禁止

分解禁止

分解・改造は厳禁。キャビネットは絶対に開けない。

火災や感電の原因になります。
修理・調整は販売店にご依頼ください。

設置

水ぬれ禁止

本機を下記の場所には設置しない。

- 浴室・台所・海岸・水辺
- 加湿器を過度にきかせた部屋
- 雨や雪、水がかかるところ

水の混入により、火災や感電の原因になります。

禁止

放熱のため本機を設置する際には：
- 布やテーブルクロスをかけない。
- じゅうたん・カーペットの上には設置しない。
- 仰向けや横倒しには設置しない。
- 通気性の悪い狭いところへは押し込まない。

（本機の周囲に左右20cm、上30cm、背面20cm以上のスペースを確保する。）
本機の内部に熱がこもり、火災の原因になります。

使用上の注意

禁止

放熱用の通風孔、パネルのすき間から金属や紙片など異物を入れない。
火災や感電の原因になります。

必ず実行

本機を落としたり、本機が破損した場合には、必ず販売店に点検や修理を依頼する。
そのまま使用すると、火災や感電の原因になります。

接触禁止

雷が鳴りはじめたら、電源プラグには触れない。
感電の原因になります。

禁止

本機の上には、花瓶・植木鉢・コップ・化粧品・薬品・ロウソクなどを置かない。
水や異物が中に入ると、火災や感電の原因になります。
接触面が経年変化を起こし、本機の外装を損傷する原因になります。

必ず実行

スピーカーターミナルレンチは小さなお子様の手の届かないところに保管する。
小さなお子様があやまって飲むおそれがあります。

手入れ

必ず実行

電源プラグのゴミやほこりは、定期的にとり除く。
ほこりがたまったまま使用を続けると、プラグがショートして火災や感電の原因になります。

⚠ 注意

電源/電源コード

必ず実行

必ず付属の専用電源コードを使用する。
専用電源コード以外の使用は、火災や感電の原因になります。

プラグを抜く

長期間使用しないときは、必ず電源プラグをコンセントから抜く。
火災や感電の原因になります。

ぬれ手禁止

ぬれた手で電源プラグを抜き差ししない。
感電の原因になります。

禁止

電源プラグを抜くときは、電源コードをひっぱらない。
コードが傷つき、火災や感電の原因になります。

必ず実行

電源プラグは、コンセントに根元まで、確実に差し込む。
差し込みが不充分のまま使用すると感電したり、プラグにほこりが堆積して発熱や火災の原因になります。

禁止

電源プラグを差し込んだとき、ゆるみがあるコンセントは使用しない。
感電や発熱および火災の原因になります。

電池

必ず実行

電池は極性表示（プラス＋とマイナス－）に従って、正しく入れる。
間違えると破裂や液もれにより、火災やけがの原因になります。

禁止

指定以外の電池は使用しない。また、種類の異なる電池や、新しい電池と古い電池を混ぜて使用しない。
破裂や液もれにより、火災やけがの原因になります。

禁止

電池と金属片をいっしょにポケットやバッグなどに入れて携帯、保管しない。
電池がショートし、破裂や液もれにより、火災やけがの原因になります。

禁止

電池を加熱・分解したり、火や水の中へ入れない。
破裂や液もれにより、火災やけがの原因になります。

必ず実行

使い切った電池は、すぐに電池ケースから取り外す。
破裂や液もれにより、火災やけがの原因になります。

必ず実行

使い切った電池は、自治体の条例または取り決めに従って廃棄する。

設置

必ず実行

必ず2人以上で開梱や持ち運びをする。
重いので、けがの原因になります。

禁止

不安定な場所や振動する場所には設置しない。
本機が落下や転倒して、けがの原因になります。

禁止

直射日光のあたる場所や、温度が異常に高くなる場所（暖房機のそばなど）には設置しない。
本機の外装が変形したり内部回路に悪影響が生じて、火災の原因になります。

禁止

ほこりや湿気の多い場所に設置しない。
ほこりの堆積によりショートして、火災や感電の原因になります。

必ず実行

他の電気製品とはできるだけ離して設置する。
本機はデジタル信号を扱います。他の電気製品に障害をあたえるおそれがあります。

禁止

他の電気製品を本機の上に置かない。
本機の上部は高温になります。他の電気製品に障害をあたえるおそれがあります。

必ず実行

屋外アンテナ工事は販売店に依頼する。
工事には、技術と経験が必要です。

移動

プラグを抜く

移動をするときには電源スイッチを切り、すべての接続を外す。
接続機器が落下や転倒して、けがの原因になります。
コードが傷つき、火災や感電の原因になります。

使用上の注意

必ず実行

再生を始める前には、アンプの音量（ボリューム）を最小にする。
突然大きな音が出て、聴覚障害の原因になります。

禁止

音が歪んだ状態で長時間使用しない。
スピーカーが発熱し、火災の原因になります。

禁止

大きな音で長時間ヘッドホンを使用しない。
聴覚障害の原因になります。

注意

環境温度が急激に変化したとき、本機に結露が発生することがあります。
正常に動作しないときには、電源を入れない状態でしばらく放置してください。

禁止

業務用機器とは接続しない。
デジタルオーディオインターフェース規格は、民生用と業務用では異なります。本機は民生用のデジタルオーディオインターフェースに接続する目的で設計されています。業務用のデジタルオーディオインターフェース機器との接続は、本機の故障の原因となるばかりでなく、スピーカーを傷める原因になります。

手入れ

必ず実行

手入れをするときには、必ず電源プラグを抜く。
感電の原因になります。

禁止

薬物厳禁
ベンジン・シンナー・合成洗剤等で外装をふかない。また接点復活剤を使用しない。
外装が傷んだり、部品が溶解することがあります。

注意

年に一度くらいは内部の掃除を販売店に依頼する。
ほこりがたまったまま使用を続けると、火災や故障の原因になります。

本書の記載について

・本書では、本体とリモコンのどちらでも操作できる場合は、リモコンでの操作を中心に記載しています。

・**ご注意** は操作・設定を行う際に留意すべき事項、ヒント は知っておくと便利な補足情報を記載しています。

・「(○○ページ)」は参照ページを表しています。

・本書は製品の生産に先がけて印刷されています。製品改良などの理由で、実際の製品と仕様が一部異なる場合があります。また、仕様は予告なく変更されることがあります。ご了承ください。

DOLBY TRUEHD

ドルビーラボラトリーズからの実施権に基づき製造されています。「ドルビー」、「PRO LOGIC」、「Surround EX」およびダブルD記号は、ドルビーラボラトリーズの商標です。

米国特許5, 451, 942、5, 956, 674、5, 974, 380、5, 978, 762、6, 226, 616、6, 487, 535およびその他の国における特許(出願中含む)に基づき製造されています。
DTSはDTS社の登録商標です。また、DTSロゴ、記号、およびDTS-HD、DTS-HD Master AudioはDTS社の商標です。
著作権1996－2007年DTS社。不許複製。

iPodは、米国およびその他の国々で登録されたApple Inc.の商標または登録商標です。

Circle Surround Ⅱ、FOCUS、TruBass、SRSと 記号はSRS Labs, Inc.の商標です。Circle Surround Ⅱ、FOCUSとTruBass技術はSRS Labs, Inc.からのライセンスに基づき製品化されています。

「サイレントシネマ/SILENT CINEMA」はヤマハ株式会社の登録商標です。

HDMI

HDMI、HDMIロゴおよびHigh-Definition Multimedia Interfaceは、HDMI Licensing LLCの商標または、登録商標です。

Fraunhofer Institut
Integrierte Schaltungen

MPEG Layer 3 音声圧縮技術はFraunhofer IISおよびThomsonによってライセンス供与されています。

Windows XP、Windows Vista、Windows Media Audio、Windows Media Connect、Windows Media playerは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標、または商標です。

本製品には、GNU General Public License (GPL)またはGNU Lesser General Public License (LGPL)に基づきライセンスされるソフトウェアが含まれています。

本機はネットワーク接続に対応しています。

AACロゴマーク はドルビーラボラトリーズの商標です。以下はパテントナンバーです。

08/937,95	5,583,962	98/03037	08/039,478	5,490,170
5848391	5,274,740	97/02875	08/211,547	5,264,846
5,291,557	5,633,981	97/02874	5,703,999	5,268,685
5,451,954	5 297 236	98/03036	08/557,046	5,375,189
5 400 433	4,914,701	5,227,788	08/894,844	5,581,654
5,222,189	5,235,671	5,285,498	5,299,238	05-183,988
5,357,594	07/640,550	5,481,614	5,299,239	5,548,574
5 752 225	5,579,430	5,592,584	5,299,240	08/506,729
5,394,473	08/678,666	5,781,888	5,197,087	

本機の特長

高音質7チャンネルパワーアンプ搭載

バランスの良い、7チャンネルパワーアンプを搭載しています。

・フロントL／R：　140W+140W
・センター：　140W
・サラウンドL／R：　140W+140W
・サラウンドバックL／R：　140W+140W
（定格出力時）

視聴環境最適化システム「YPAO」搭載

YPAO（Yamaha Parametric Room Acoustic Optimizer）により、耳で聞くだけでは正確な調整が難しかったマルチチャンネル用のセットアップを、高性能測定用マイクを使用して自動で行います。お使いになるお部屋やスピーカーシステムの構成に合わせて、最適な視聴空間を作り出します。

HDMI対応

次世代のテレビ向けデジタルインターフェイスであるHDMI端子を、入力4つ、出力1つの合計5つ装備しています。1本のHDMIケーブルを接続するだけで、デジタル音声信号とデジタル映像信号をデジタルのまま、高音質／高画質で伝送したり、本機で再生したりすることができます。

ビデオコンバージョン機能

アナログ映像入力信号をHDMIを含むすべての端子から出力できます。また、入力信号を1080pまでの解像度に変換して出力できます。

システムメモリー

視聴環境やソースの違いなどに応じて6種類の設定状態を保存し、あとで簡単に設定を呼び出して最適な再生を楽しめます。リモコンでは4種類の設定を保存したり呼び出したりすることができます。

多機能リモコン

付属リモコンは14面の機器操作エリアを持っており、内蔵プリセットコードやラーニング機能、マクロ機能を利用して、他のAV機器を本機のリモコンで操作できます。

USBデバイス再生機能

USBデバイスを接続すれば、保存されている音楽ファイルの再生が楽しめます。

デジタルサウンドフィールドプロセッサー(DSP)搭載

各種デコーダーとヤマハ独自のDSPによる、効果的な音場再生を実現します。ヤマハが誇るDSPをドルビープロロジックやドルビーデジタル、DTS、AACに融合させて、音場効果を向上させています。

・「CINEMA DSP 3D」：立体的な音場効果を緻密に再現します。
・「バーチャルシネマDSP」：サラウンドL／Rスピーカーなしでも音場効果を楽しめます。
・「サイレントシネマ™」：ヘッドホン使用時でも音場効果を楽しめます。

iPod対応のヤマハ製ドック(別売YDS-10など)接続機能

ヤマハ製ドック（別売YDS-10など）を本機に接続すれば、テレビ画面に映し出されるメニューを見ながら、本機のリモコンを使ってiPod（クリックホイール、nano、mini）を再生できます。

日本語GUI表示

本機とユーザーをつなぐインターフェースには、日本語GUI（グラフィカル・ユーザー・インターフェース）を採用。見やすい表示画面によって、より簡単に操作できます。

ネットワークオーディオ再生機能

ホームネットワークに本機を接続すれば、パソコンに保存されている音楽ファイルの再生や、vTuner社のデータベースサービスを利用してのインターネットラジオ放送が楽しめます。

多彩なデコーダーを搭載

以下の信号方式に対応したデコーダーを搭載しています。

■ドルビーデジタル

DVDで採用されている5.1チャンネル音声フォーマットです。

■ドルビーデジタルEX

専用のマトリクスデコーダーを使用して、5.1チャンネルソフトのサラウンドL／Rチャンネルからサラウンドバックチャンネルを抽出し、6.1チャンネルで再生します。

■ドルビーデジタルプラス

ブルーレイディスクやHD DVDで採用されている次世代音声フォーマットです。最大7.1チャンネルのディスクリート音声信号を最大転送レート6Mbpsで収録可能です。

■ドルビーTrueHD（トゥルー）

ブルーレイディスクやHD DVDで採用されているロスレス(可逆型)次世代音声フォーマットです。96kHz／24bit時には最大8チャンネル、192kHz／24bit時には最大6チャンネルのディスクリート音声信号を最大転送レート18Mbpsで収録可能です。

■ドルビープロロジック

2チャンネルソフトを4チャンネルで再生します。

■ドルビープロロジックⅡx

5.1チャンネルソフトを信号処理し、サラウンドバックチャンネルを加えた6.1／7.1チャンネルで再生します。また、2チャンネル音声(モノラル音声を除く)で記録されたソースも、優れた分離感を保ちながら6.1／7.1チャンネルの迫力ある音声で楽しめます。

■DTS

DVDで採用されている5.1チャンネル音声フォーマットです。

■DTS-ES (エクステンディッド・サラウンド)

フロント3チャンネル、リア2チャンネル、低音チャンネルLFE(ロー・フリークエンシー・エフェクト)という従来の5.1チャンネル構成に、サラウンドバックチャンネルを加えて6.1チャンネルとし、さらにこれらのチャンネルを独立させて収録したディスクリート6.1方式に対応しています。また、マトリクス回路により、5.1チャンネルで収録されたソフトからサラウンドバックチャンネルを抽出するマトリクス6.1方式にも対応しています。

■DTS 96/24

5.1チャンネルすべてを「サンプリング周波数96kHz／量子化ビット数24bit」の高音質で再生します。

■DTS Express（エクスプレス）

ブルーレイディスクやHD DVDのセカンダリーオーディオ、サブオーディオが楽しめます。

■DTS-HD High（ハイ） Resolution（レゾリューション） Audio（オーディオ）

ブルーレイディスクやHD DVDで採用されている次世代音声フォーマットです。96kHz／24bitで最大7.1チャンネルのディスクリート音声信号を、ブルーレイディスクでは最大転送レート6Mbps、HD DVDでは最大3Mbpsで収録可能です。

■DTS-HD Master（マスター） Audio（オーディオ）

ブルーレイディスクやHD DVDで採用されているロスレス(可逆型)次世代音声フォーマットです。96kHz／24bitで最大7.1チャンネルのディスクリート音声信号を、ブルーレイディスクでは転送レート最大24.5Mbps、HD DVDでは最大18Mbpsで収録可能です。

■DTS Neo（ネオ）：6（シックス）

2チャンネル音源から最大7チャンネルを抽出し、再生します。ソースに合わせ、音楽用のMusicモードと、映画用のCinemaモードが用意されています。

■AAC (アドバンスト・オーディオ・コーディング)

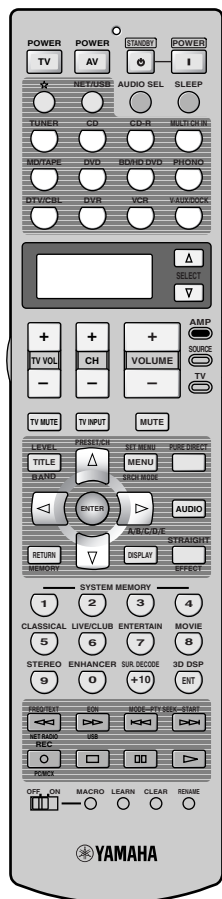
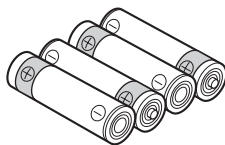
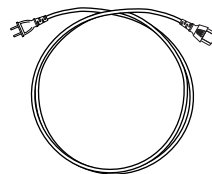
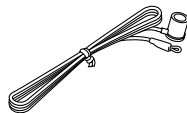
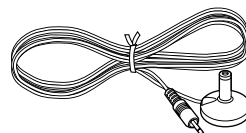
BSデジタル放送や地上波デジタル放送が採用している音声フォーマットです。高圧縮率と高音質が特長で、通常の2チャンネルステレオ音声に加え、5.1チャンネルのサラウンド音声や多言語の放送を可能にしています。

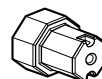
■SRS Circle（サークル） Surround（サラウンド） Ⅱ

アナログソース、デジタルソースに関わらず、あらゆる2チャンネルソースをマトリクス処理し、6.1チャンネルで再生します。

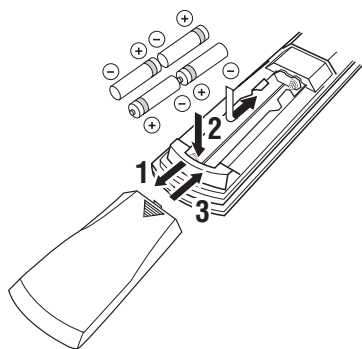
付属品を確認する

ご使用の前に付属品を確認してください。

リモコン

単4アルカリ乾電池×4本

電源コード

FM簡易アンテナ

オプティマイザーマイク

AMループアンテナ

スピーカーターミナルレンチ

スタートアップガイド

リモコンや本体を準備する

リモコンに乾電池を入れる

1 ***裏ぶたの ▽ マークを押しながら、電池カバーを取りはずす***

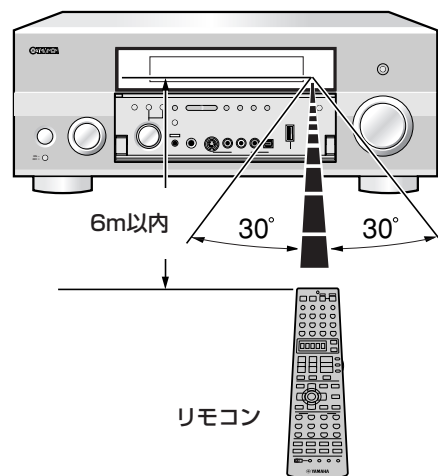
2 ***付属の単4乾電池(4本)を、リモコンの電池ケース内の表示にあわせて、プラス(+)とマイナス(−)の向きを間違えないように正しく入れる***

3 ***裏ぶたを閉じる***

ご注意

- アルカリ乾電池をご使用ください。マンガン乾電池を使用すると、すぐに消耗してしまう場合があります。
- 以下のような症状が発生した場合は、乾電池が消耗しています。すべての乾電池を新品と交換してください。
  - リモコンで操作しづらくなった
  - キーを押してもトランスミッションインジケーター(リモコン正面最上部のインジケーター)が光らなくなった
  - ディスプレイが見づらくなった
- 新しい乾電池と、古い乾電池を混ぜて使わないでください。
- 乾電池には、形状が同じでも性能が異なるものがあります。種類の異なる乾電池(アルカリとマンガンなど)を混ぜて使わないでください。
- 使い切った乾電池は、すぐに電池ケースから取り出してください。乾電池が破裂したり、乾電池から液が漏れたりすることがあります。
- 乾電池が液漏れした場合は、液に触れないよう注意して廃棄してください。液が目や口に入ったり、皮膚についたりした場合はすぐに水で洗い流し、医師に相談してください。新しい乾電池を入れる前に電池ケース内をきれいに拭いてください。
- 乾電池を一般のゴミといっしょに捨てないでください。地域のきまりに従って正しく処置してください。
- 電池を外したまましばらく(2分以上)放置したり、消耗した乾電池をそのまま入れておいたりすると、リモコンに設定したリモコンコードなどのメモリー内容が消えてしまうことがあります。このような場合は、乾電池を新品に交換して、リモコンコードを再設定してください。

リモコンの取り扱い

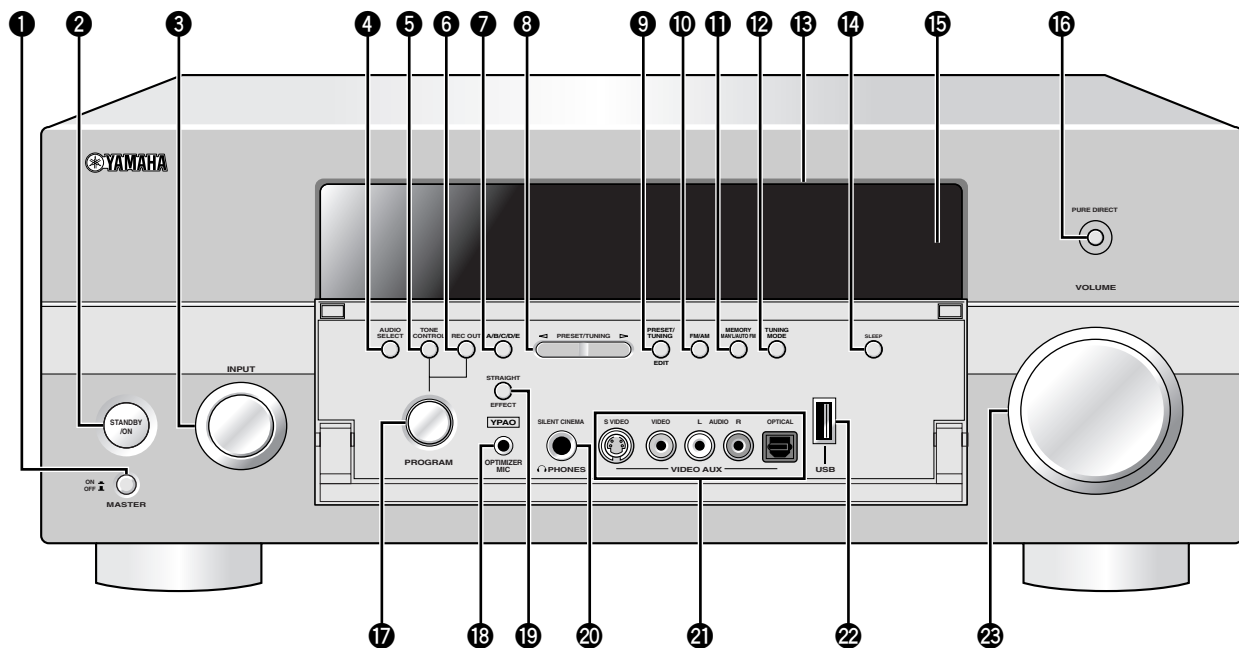
リモコンは直進性の強い赤外線を使用しています。本体のリモコン受光部に向けて正しく操作してください。

リモコンでうまく操作ができないときは、以下のことを確認してください。

- 本体のリモコン受光部が、布などで覆われていませんか?
  →布などを取り除いてください。
- 本体のリモコン受光部に、直射日光や強い照明(インバーター蛍光灯など)、液晶テレビの赤外線ノイズが当たっていませんか?
  →照明の向きを変えるか、本体を置く場所を変えてください。
- 乾電池が消耗していませんか?
  →すべての電池を新しいものに変えてください。

ご注意

- リモコンに水やお茶をこぼさないでください。
- リモコンを落とさないでください。
- 冷暖房器具のそばなど、極端に温度が低くなったり高くなったりするところや、風呂場など、湿度が高くなるところには置かないでください。

各部の名称とはたらき

前面(フロントパネル)

❶ MASTER ON／OFFスイッチ

本機の電源をオン／オフします。

オンになっているときには、フロントパネルスイッチまたはリモコンキーで本機を操作できます。

オフになっている間も、少量の電力を消費しています。

❷ STANDBY/ONキー

MASTER ON／OFFスイッチがオンのとき、本機の電源をオン／スタンバイ(待機)にします。

❸ INPUTセレクター

再生する入力ソースを選びます。

❹ AUDIO SELECTキー

入力信号を自動的に判別するか、または特定の入力信号に固定するかを切り替えます(108ページ)。

❺ TONE CONTROLキー

フロントL／R、センターチャンネルおよびサブウーファーの音色を調節するときに押します。キーを押すごとに、BASS(低音域)とTREBLE(高音域)が切り替わります。このキーを押した後に、PROGRAMセレクター(⓱)で、音色を調節します。

ご注意

トーンコントロールにより低音域／高音域を極端に増強、または減衰した場合、スピーカー同士の音のつながりが悪くなることがあります。

❻ REC OUTキー

録音／録画するソースを選ぶときに押します(111ページ)。

❼ A/B/C/D/Eキー

FM／AM放送を聴くときに、プリセットグループ(A、B、C、D、E)を選びます。

❽ PRESET/TUNING ◁／▷キー

聴く放送局を選びます。1～8の登録(プリセット)した局から選ぶか(73ページ)、周波数で選局します(70ページ)。

❾ PRESET/TUNING (EDIT)キー

FM／AM放送を聴くときに、あらかじめ登録(プリセット)した局から選ぶか、または周波数で選局するかを切り替えます。また、 登録した局の入れ替えもこのキーで行います(74ページ)。

❿ FM/AMキー

FM放送、AM放送の受信を切り替えます。

⓫ MEMORY (MAN' L/AUTO FM)キー

受信した放送局を登録(プリセット)します。3秒以上押すと、オートプリセット機能を利用できます(71ページ)。

⓬ TUNING MODEキー

自動(オート)選局または手動(マニュアル)選局を選びます。自動選局する場合は、このキーを押してAUTOインジケーターを点灯させます。手動選局する場合は、AUTOインジケーターを消します(70ページ)。

⑬ ディスプレイ
音場プログラムの名前や、設定値などを表示します（16ページ）。

⑭ SLEEPキー
スリープタイマーを設定します（110ページ）。

⑮ リモコン受光部
リモコンからの信号を受信します。

⑯ PURE DIRECTキー
原音に忠実な音質で再生するピュアダイレクトモードのオン／オフを切り替えます（96ページ）。オンのときは青色に点灯します。

⑰ PROGRAMセレクター
音場プログラムを選ぶときに回します（68ページ）。
またTONE CONTROLキー（❺）を押したあとは、スピーカーの音色を調節します。

⑱ OPTIMIZER MIC端子
自動測定メニュー（YPAO）用のマイクを接続します（55ページ）。

⑲ STRAIGHT／EFFECTキー
音場効果を加えない音声と、音場効果を加えた音声とを切り替えます。「STRAIGHT」を選ぶと、入力された信号に対応するデコーダで忠実にデコードし、音場効果をかけずに再生します（97ページ）。

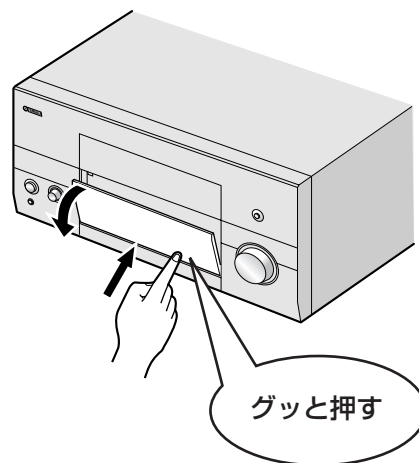
⑳ PHONES（SILENT CINEMA）端子
ヘッドホンを接続します。ヘッドホンを接続すると、すべてのスピーカーから音が出なくなりますので、深夜に再生を楽しむ際はヘッドホンのご使用をおすすめします。
ヘッドホンを接続しているときは、「サイレントシネマ™」で音声を楽しめます（87ページ）。
MULTI CH IN端子に接続した機器の再生をヘッドホンを使用して楽しむときは、フロントL／Rチャンネル音声のみ出力されます。

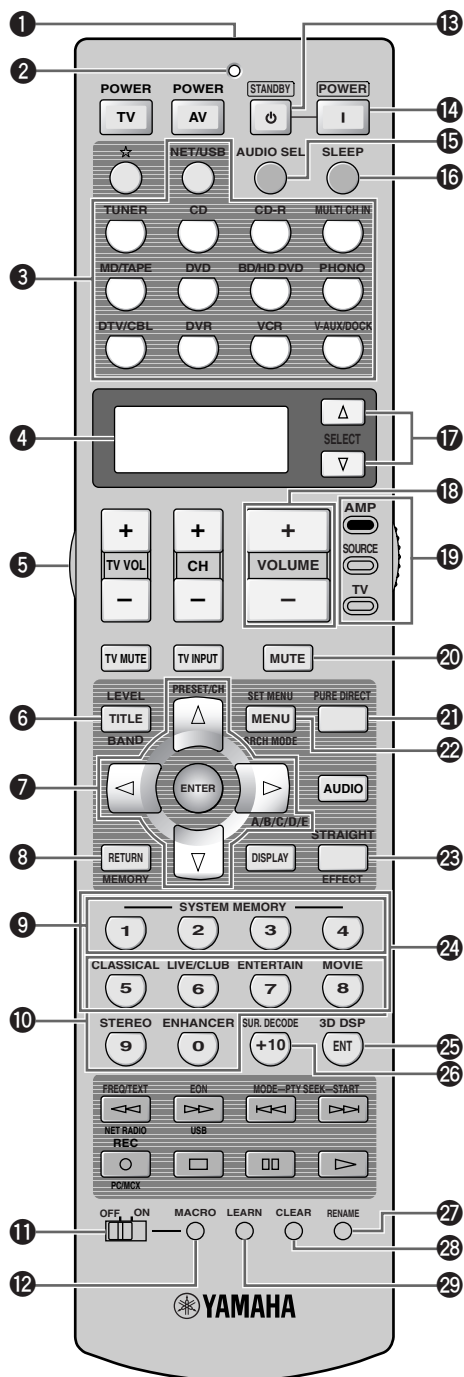
㉑ VIDEO AUX端子
ゲーム機やビデオカメラなどを接続する、補助入力端子です。
この端子に入力された信号を再生するには、INPUT セレクター、またはリモコンの入力選択キーで「V-AUX」を選びます。

㉒ USB端子
USBデバイスを接続します（46ページ）。

㉓ VOLUMEコントロール
本機の音量を調節します（消音〜+16.5dB）。
録音用のOUT（REC）端子の音量には影響しません。

コントロールパネルの開閉

コントロールパネルの中にあるスイッチやキーを使うときは、パネルの下の部分を押すと、パネルが開きます。コントロールパネルの中にあるスイッチやキーを使わないときは、パネルを閉めておきます。パネルの開閉時には指などをはさまないようご注意ください。

リモコン

⓳ 操作機器選択スイッチで「AMP」を選択しているときに、本機のアンプ機能を操作できます。「SOURCE」または「TV」を選択しているときは、本機のチューナー機能や他の機器を操作することもできます。他の機器の操作については158〜163ページをご覧ください。

アンプ機能の操作

「⓳ 操作機器選択スイッチ」を「AMP」にセットして操作します。

❶ 赤外線送受信部

リモコン操作用の赤外線信号を送受信します（11ページ）。

❷トランスミッションインジケーター

リモコン操作用の赤外線信号を送信しているときに、点灯します。

❸ 入力選択キー

再生する入力ソースを選びます。⓳ 操作機器選択スイッチで「SOURCE」または「TV」を選択しているときは、入力ソースに合わせてリモコンの機能も切り替わります。

❹ リモコンディスプレイ

操作できる機器の名前を表示します。

❺ LIGHTキー

リモコンキーとリモコンディスプレイが点灯します。

❻ LEVELキー

各スピーカーの音量を調節します（109ページ）。

❼ カーソル（△／▽／◁／▷）／ENTERキー

セットメニューや音場パラメーターを選んだり、設定したりするときに使います。

❽ RETURNキー

セットメニューで、１つ前のメニュー表示に戻るときに押します。

❾ SYSTEM MEMORY1〜4キー

お気に入りの音場プログラムやYPAOの設定、プリセット局などを簡単に保存したり呼び出したりします（138ページ）。

❿ 音場プログラムキー

音場プログラムを選びます（88ページ）。

⓫ MACRO ON／OFFスイッチ

マクロ機能のオン／オフを切り替えます（168ページ）。

⓬ MACROボタン

一連のキー操作を１つのキー操作でできるように設定するときに押します（167ページ）。

⑬ STANDBYキー
フロントパネルのMASTER ON／OFFスイッチがオンのとき、本機の電源をスタンバイにします（51ページ）。

⑭ POWERキー
フロントパネルのMASTER ON／OFFスイッチがオンのとき、本機の電源をオンにします（51ページ）。

⑮ AUDIO SELキー
入力信号を自動的に判別するか、または特定の入力信号に固定するかを切り替えます（108ページ）。

⑯ SLEEPキー
スリープタイマーを設定します（110ページ）。

⑰ SELECT △／▽キー
入力ソースを切り替えずに、リモコンで操作したい機器を切り替えたいときに押します。操作する機器の名前がリモコンディスプレイに表示されます。

⑱ VOLUME ＋／－キー
本機の音量を調節します（消音～+16.5dB）。
録音用のOUT（REC）端子の音量には影響しません。

⑲ 操作機器選択スイッチ
リモコンで操作する機器を選択します（153ページ）。
- AMP： 本機のアンプ機能を操作するときに選びます。
- SOURCE：本機のチューナー機能や入力選択キーで選んだ機器を操作するときに選びます。
- TV： TVを操作するときに選びます。

⑳ MUTEキー
音量を下げます（69ページ）。
もう一度押すと、元の音量に戻ります。

㉑ PURE DIRECTキー
原音に忠実な音質で再生するピュアダイレクトモードのオン／オフを切り替えます（96ページ）。

㉒ SET MENUキー
セットメニュー画面を表示したり、メニューから抜けたりします（52ページ）。

㉓ STRAIGHT／EFFECTキー
音場効果を加えない音声と、音場効果を加えた音声とを切り替えます。「STRAIGHT」を選ぶと、入力された信号を対応するデコーダーで忠実にデコードし、音場効果をかけずに再生します（97ページ）。

㉕ 3D DSPキー
CINEMA DSP 3Dモードのオン／オフを切り替えます（93ページ）。

㉖ SUR. DECODEキー
2チャンネルソフトをマルチチャンネル化して再生します（86ページ）。

㉗ RENAMEボタン
リモコンディスプレイに表示される入力機器名を変更するときに押します（165ページ）。

㉘ CLEARボタン
設定したリモコンコードや記憶（ラーニング）させた機能、マクロに設定した機能を消去するときや、変更した表示機器名を元に戻すときに押します（169ページ）。

㉙ LEARNボタン
リモコンコードを設定するときや、他の機器のリモコン信号を記憶させるときに押します（154、163ページ）。

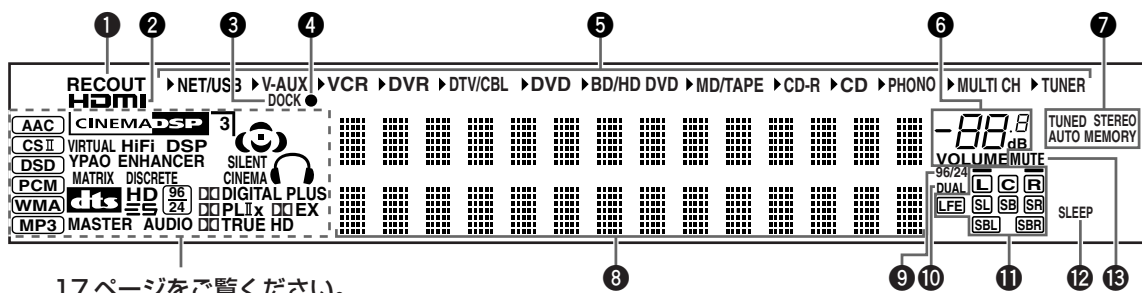
チューナー機能の操作

「⑲ 操作機器選択スイッチ」を「SOURCE」にセットして操作します。

⑥ BANDキー
受信するバンド（FM／AM）を切り替えます。

⑦ PRESET/CH △／▽キー、A/B/C/D/E ◁／▷キー
△／▽キーでプリセット番号（1～8）を、◁／▷キーでプリセットグループ（A、B、C、D、E）を選びます。

㉔ プリセット番号1～8キー
プリセット番号（1～8）を選びます。

ディスプレイ

❶ RECOUT（レコーディングアウト）インジケーター

録音／録画するソースを選ぶときに点灯します（111ページ）。

❷ HDMIインジケーター

HDMI IN 端子に他の機器を接続し、HDMI入力信号を選択しているときに点灯します。HDMI入力信号を選択していないときには消灯します。

❸ DOCK（ドック）インジケーター

入力ソースでV-AUXを選んでいて、ヤマハ製ドック（別売YDS-10など）にセットしたiPodからの信号を本機が認識しているときに点灯します。

❹ 充電インジケーター

本機がスタンバイのときにiPodを充電しているときは「●」が赤色で点灯し、充電が完了すると自動的に消灯します。

❺ 入力ソースインジケーター

現在選んでいる入力ソース名の左側に、「▶」が点灯します。

❻ VOLUME（ボリューム）インジケーター

現在の音量を表示します（--～+16.5dB）。

❼ チューナーインジケーター

FM／AM放送を聴くときや、放送局をプリセットするときに点灯します（70ページ）。

❽ マルチインフォメーションディスプレイ

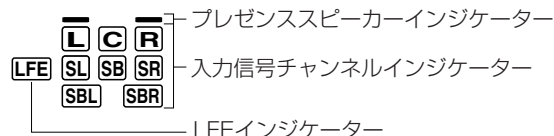
音場プログラムの名前など、さまざまな情報を表示します。

❾ 96/24インジケーター

DTS 96/24信号が入力されているときに点灯します。

❿ DUAL（デュアル）インジケーター

ドルビーデジタル、DTSおよびAACのDUAL MONOまたはMULTI MONOなど、音声多重モノラルのデジタル信号が入力されているときに点灯します（122ページ）。

⓫ LFE／入力信号チャンネルインジケーター

LFEインジケーター

入力されているデジタル信号に、LFE（低域効果音）チャンネルが含まれているときに点灯します。

入力信号チャンネルインジケーター

入力されているデジタル信号に含まれているチャンネルに合わせて点灯します。

プレゼンススピーカーインジケーター

セットメニュー「パラメトリックEQ」（119ページ）の「テストトーン」が「出力する」で、「スピーカーの設定」（126ページ）の「プレゼンス」が「使用する」に設定されているときに点灯します。

⓬ SLEEP（スリープ）インジケーター

スリープタイマーが作動しているときに点灯します（110ページ）。

⓭ MUTE（ミュート）インジケーター

MUTEキーを押して音量を下げているときに点滅します（69ページ）。

⑭ YPAOインジケーター

自動測定メニューを実施したとき(54ページ)、または自動測定メニューでの設定値に戻したとき(63ページ)に点灯します。

⑮ デコーダーインジケーター

本機内蔵のデコーダー(9ページ)が作動しているときに、それぞれのインジケーターが点灯します。

⑯ 入力フォーマットインジケーター

現在入力されているフォーマットを表示します。

⑰ ENHANCERインジケーター

コンプレストミュージック・エンハンサーモードで再生しているときに点灯します(92ページ)。

⑱ DSPインジケーター

CINEMA DSPインジケーター

CINEMA DSP音場プログラムを使って再生しているときに点灯します。

HiFi DSPインジケーター

HiFi DSP音場プログラムを使って再生しているときに点灯します。

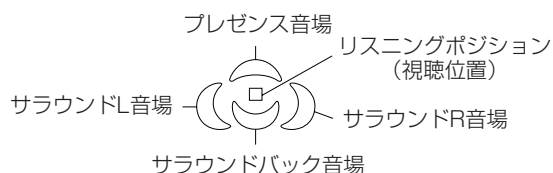
VIRTUALインジケーター

バーチャルシネマDSPモードで再生しているときに点灯します(87ページ)。

3Dインジケーター

CINEMA DSP 3Dモードで再生しているときに点灯します(93ページ)。

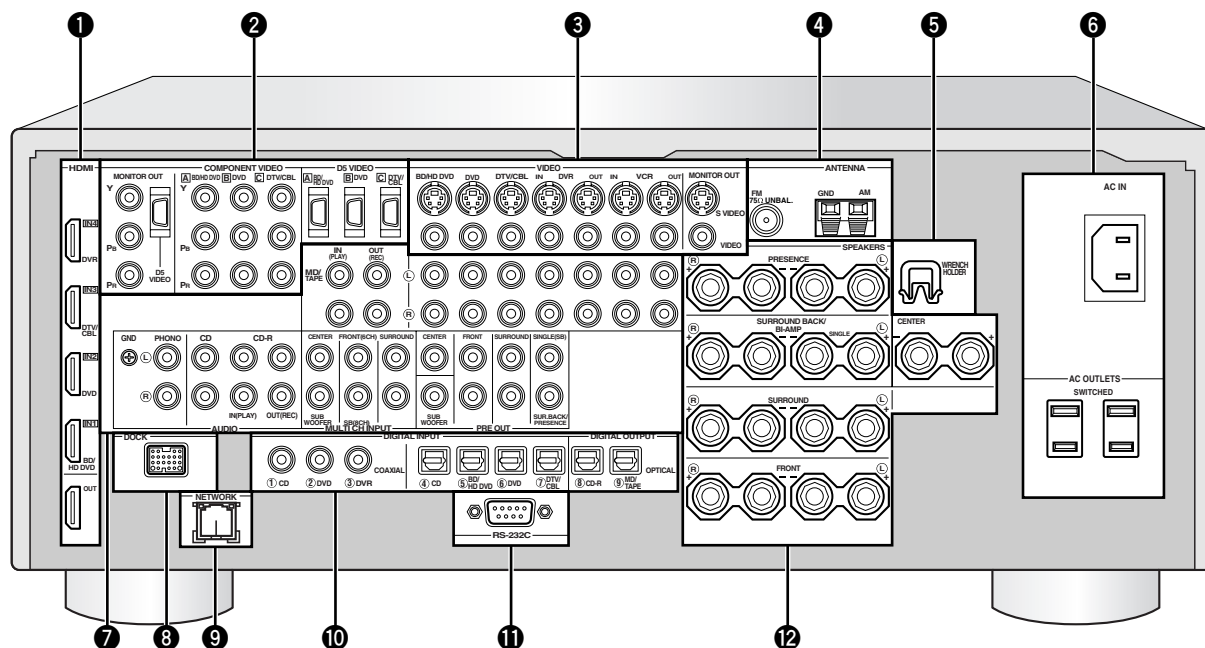
⑲ 音場インジケーター

DSP音場プログラムを使っているときに、本機がどのように音場を処理しているかを表示します。

⑳ ヘッドホンインジケーター

PHONES(SILENT CINEMA)端子にヘッドホンを接続しているときに点灯します。

㉑ SILENT CINEMAインジケーター

ヘッドホンを接続して「サイレントシネマ™」で再生しているときに点灯します(87ページ)。

背面（リアパネル）

❶ HDMI端子

HDMI信号を入力／出力します（22ページ）。

❷ COMPONENT（コンポーネント） VIDEO（ビデオ）／D5 VIDEO（ビデオ）端子

コンポーネントビデオ信号を入力／出力します（19ページ）。

❸ VIDEO（ビデオ）端子

コンポジットビデオおよびSビデオ信号を入力／出力します（19ページ）。

❹ ANTENNA（アンテナ）端子

FM／AMアンテナを接続します（49ページ）。

❺ WRENCH（レンチ） HOLDER（ホルダー）

スピーカー端子を回すときに使うスピーカーターミナルレンチをかけておくフックです（34ページ）。

❻ AC IN（イン）／AC OUTLET（アウトレット）

本機や外部機器の電源コードを接続します（50ページ）。

❼ アナログ音声端子

アナログ音声信号を入力／出力します（24ページ）。

❽ DOCK（ドック）端子

ヤマハ製ドック（別売YDS-10など）からの音声信号を入力します（41ページ）。

❾ NETWORK（ネットワーク）端子

ホームネットワークに接続します（48ページ）。

❿ デジタル音声端子

デジタル音声信号を入力／出力します（21ページ）。

⓫ RS-232C端子

サービス用の端子です（24ページ）。

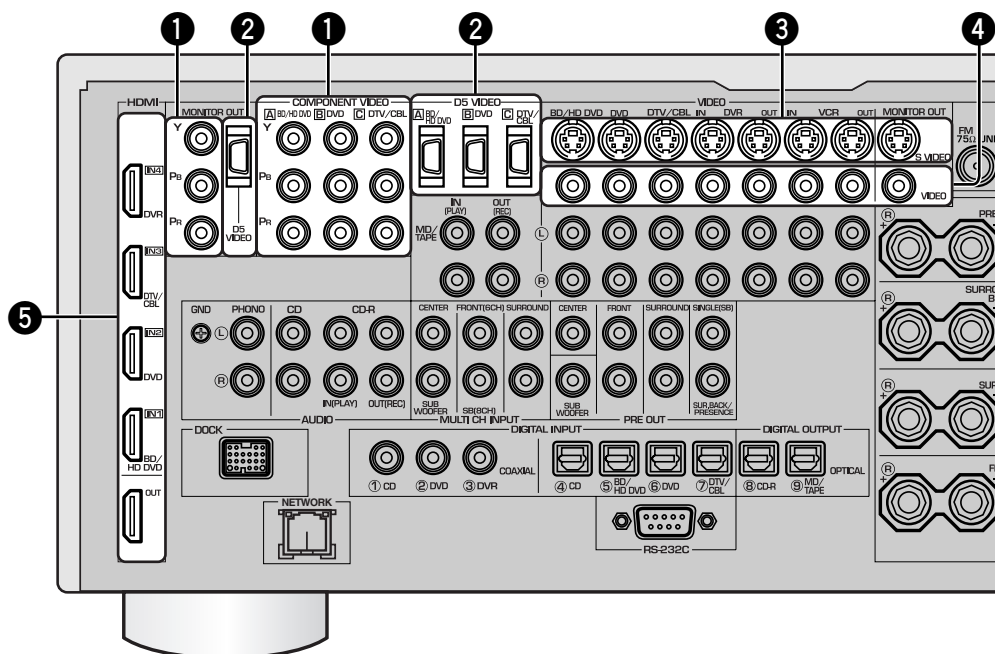
⓬ SPEAKERS（スピーカー）端子

スピーカーと接続します（32ページ）。

接続の基礎知識

本機に装備されているビデオ端子、デジタル音声端子、映像信号と音声信号を同時に伝送するHDMI端子について、種類や役割を説明します。

映像端子について

本機は5種類の映像端子を装備しています。

❶ コンポーネントビデオ端子

コンポーネントビデオ信号を伝送します。
コンポーネントビデオ入出力端子がある機器を接続すれば、ビデオ端子(❹)またはSビデオ端子(❸)よりも高画質な映像を再生できます。

❷ D5ビデオ端子

1080pまでのコンポーネントビデオ信号とコントロール信号(走査線、アスペクト比などの情報)を伝送します。

❸ Sビデオ端子

Sビデオ信号を伝送します。
Sビデオ入出力端子がある機器を接続すれば、ビデオ端子(❹)よりも高画質な映像を再生できます。

❹ ビデオ端子

コンポジットビデオ信号を伝送します。

❺ HDMI端子

HDMI IN1～4から入力したHDMI映像信号を、HDMI OUT端子に伝送します。
HDMI入出力端子がある機器を接続すれば、すべてのビデオ端子の中で最も高画質な映像を再生できます。
音声信号も同時に伝送します。

ヒント

- 最良の画質でお楽しみいただくために、なるべく画質のよい端子を使って接続してください。
- コンポーネント／D5ビデオ、Sビデオ、ビデオ端子に同時に信号が入力されている場合は、コンポーネント／D5ビデオ、Sビデオ、ビデオ信号の順に入力信号が優先されます。
- コンポーネントビデオ出力(MONITOR OUT)端子とD5ビデオ出力(MONITOR OUT)端子は同時に使うことができます。例えば、コンポーネントビデオ出力端子にプロジェクターを、D5ビデオ出力端子にテレビを接続して、同じ映像を両方でお楽しみいただけます。

ご注意

- 同じ機器名が書かれたコンポーネントビデオ入力端子とD5ビデオ入力端子の両方を同時に接続することはできません(例：❶の B DVDと❷の B DVD端子)。
- D5ビデオ端子を使って接続する場合、再生機器に装備されているD端子の規格(D1～D5)よりもテレビに装備されているD端子の規格が低いと、映像が高画質で再生されません。テレビ側の規格にあわせて再生機器の設定を変更してください。
- 本機のSビデオ出力端子は、S1／S2規格には対応していません。
- VCR IN端子に入力した信号は、VCR OUT端子から出力できません。同様に、DVR IN端子に入力した信号はDVR OUT端子から出力できません。

ビデオコンバージョン機能について

セットメニュー「映像の設定」の「ビデオコンバージョン」(123ページ)を「する」に設定すると、HDMI端子を除くすべての種類のビデオ入力端子(D5、コンポーネント、Sビデオ、ビデオ)へ入力した信号を、HDMI端子を含むすべての種類のビデオ出力端子(HDMI、D5、コンポーネント、Sビデオ、ビデオ)から出力できます。これにより、入力端子と出力端子の種類の違いを気にすることなく、映像を楽しめます。(例:ビデオ入力端子に接続したDVDプレーヤーの映像を、HDMI出力端子に接続したテレビで楽しめます。)

○:対応

△:一部対応(下記の「ご注意」をご覧ください。)

×:非対応

入力端子 \ 出力端子	HDMI端子	D5ビデオ端子	コンポーネントビデオ端子	Sビデオ端子	ビデオ端子
HDMI端子	○	×	×	×	×
D5ビデオ端子	△	○	○	△	△
コンポーネントビデオ端子	△	○	○	△	△
Sビデオ端子	○	○	○	○	○
ビデオ端子	○	○	○	○	○

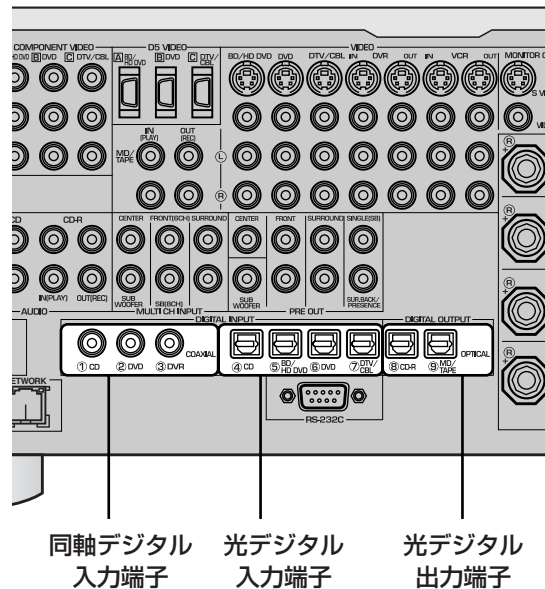
ご注意

- D5、コンポーネントビデオ端子へ入力した映像信号が1080iまたは720pの場合、ビデオコンバージョン機能によってHDMI端子を経由して映し出された映像画質は、元の画質よりも劣ることがあります。
- D5、コンポーネントビデオ端子へ入力した映像信号が1080pの場合、D5、コンポーネントビデオ端子からのみ出力されます。ビデオコンバージョン機能によってHDMI端子から出力することはできません。
- D5、コンポーネントビデオ端子へ入力した映像信号が480i以外の場合、Sビデオ、ビデオ端子からは出力されません。
- 特殊な映像信号を出力する機器(ゲーム機など)と接続した場合、ショートメッセージ(125ページ)が正しく出力されない場合があります。

ヒント

セットメニュー「映像の設定」の「コンポーネントI/P」や「HDMI解像度」で、映像信号の解像度を変換できます(123、124ページ)。

デジタル音声端子(光／同軸)について

本機は、デジタル音声信号を直接伝送できる光デジタル(OPTICAL)端子と同軸デジタル(COAXIAL)端子を装備しています。

- 光デジタル端子と同軸デジタル端子は、PCM、ドルビーデジタル、DTS、AAC(BS／地上波デジタル放送)兼用です。
- 同じ機器に割り当てられた同軸デジタル入力端子と光デジタル入力端子に同時に信号が入力されると、同軸デジタル入力端子に入力された信号が優先されます。工場出荷状態では、CDプレーヤーおよびDVDプレーヤーに同軸／光の両端子が割り当てられています。
- 本機のデジタル信号回路とアナログ信号回路は独立しています。デジタル入力端子に入力されたデジタル信号は、デジタル出力端子からのみ出力されます。

ご注意

本機の光デジタル端子は、JEITA(社会法人 電子情報技術産業協会)規格に基づいて設計されています。JEITA規格を満たさない光ファイバーケーブルを使うと、正常に動作しないことがあります。

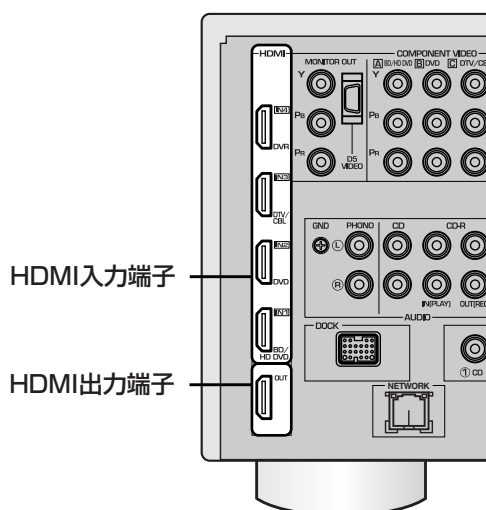
HDMI端子について

HDMIとは、High-Definition Multimedia Interfaceの略です。パソコンディスプレイなどで使われているDVI(Digital Video Interface)端子を拡張した、次世代テレビ向けのデジタルインターフェースの規格です。HDMI対応機器とHDMI対応のプラズマディスプレイなどを接続することで、圧縮されていないデジタル映像と音声(ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AAC、またはリニアPCM)を1本のケーブルで伝送できます。接続にはHDMIケーブルをお使いください。

- 本機はHDMI Ver. 1.3aに対応しており、HDMI対応機器をHDMIケーブル1本で接続すれば、ブルーレイディスクなどの高画質デジタルビデオ信号に加え、従来の2チャンネルPCM信号やマルチチャンネル圧縮オーディオ信号、DVDオーディオ(マルチチャンネルPCM信号)などのマルチチャンネルオーディオ信号、DSD信号をデジタルのまま伝送したり、本機で再生したりすることができます。
- 著作権保護技術(HDCP: High-bandwidth Digital Content Protection System)に対応しているため、デジタルビデオ/オーディオ信号をデジタルのまま劣化させることなく伝送できます。

この機器のHDMIインターフェースは、以下の規格に準拠しています。
High-Definition Multimedia Interface Specification Version 1.3a

ヒント

- 接続には、19ピンのHDMIケーブルで、HDMIロゴのついているものをお使いください。また、長さ5.0m以下のものを使うことをおすすめします。
- セットメニュー「信号の情報」で、HDMI接続した機器との入出力信号情報を確認できます(144ページ)。
- HDMI IN端子に入力された映像および音声信号は、HDMI OUT端子からのみ出力されます。
- セットメニュー「ビデオコンバージョン」(123ページ)を「する」に設定すれば、コンポジットビデオ、Sビデオ、コンポーネントビデオ端子から入力した映像信号をHDMI OUT端子から出力できます。

ご注意

- 本機はHDCP非対応のHDMI機器またはDVI機器には対応していません。HDCP対応の有無については、HDMI機器またはDVI機器の取扱説明書をご覧ください。
- 本機をDVI端子のある機器に接続する場合は、HDMI端子 ⇔ DVI-D端子の変換ケーブルが必要です。
- お使いのテレビやプロジェクターによっては、本機とDVI接続した場合、それらの電源がオフ、またはスタンバイのときや、DVI入力を選択していないときに、HDMI接続したプレーヤーからの音声が出力されない場合があります。
- 制限台数を超えるHDMI機器を接続すると、HDMI接続した機器を再生できない場合があります。
- 本機をスタンバイやオフにすると、本機のHDMI IN1～4端子から入力された信号は、本機のHDMI OUT端子へ伝送しません。
- HDMIで接続した機器を再生中に、本機のHDMI OUT端子に接続しているHDMI／DVI機器の電源をオン/オフしたり、HDMIケーブルを抜き差ししたりしないでください。音声が途切れたり、ノイズが発生したりすることがあります。
- HDMIで接続した場合は、入力モードを「AUTO」または「HDMI」に設定して再生してください(108ページ)。

入力端子の割り当てについて

本機のHDMI入力端子には、以下の機器が割り当てられています。

HDMI入力端子	機器
IN1	BD／HD DVDプレーヤー
IN2	DVDプレーヤー
IN3	デジタルテレビ／ケーブルテレビチューナー
IN4	DVDレコーダー

ヒント

セットメニュー「端子の割り当て」の「HDMI IN」で、HDMI入力端子の割り当てを変更できます（135ページ）。

映像信号について

本機の HDMI は以下の映像信号に対応しています。

映像信号の種類	480i／480p／720p／1080i／1080p
リフレッシュレート	59.94（60）／50Hz

本機は、30ビットまたは36ビットのディープカラー映像信号にも対応しています。

音声信号について

本機の HDMI は以下の音声信号フォーマットに対応しています。

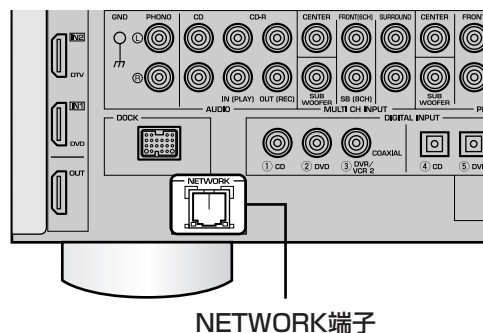
音声フォーマット	詳細	ディスク（例）
2チャンネル リニア PCM	2ch 32-192kHz 16／20／24bit	CD DVD-Video DVD-Audio
マルチチャンネル リニア PCM	8ch 32-192kHz 16／20／24bit	DVD-Audio
DSD	2／5.1ch 2.8224MHz 1bit	SACD
ドルビーデジタル、 DTS、AAC	ビットストリーム	DVD-Video
ドルビーTrueHD、 ドルビーデジタルプラス、 DTS-HDマスターオーディオ、 DTS-HDハイレゾリューション	ビットストリーム （HDオーディオ）	ブルーレイディスク HD DVD

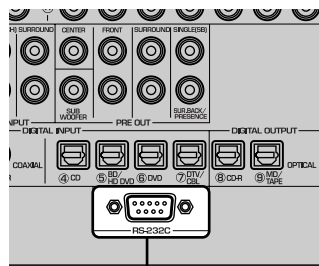
ヒント

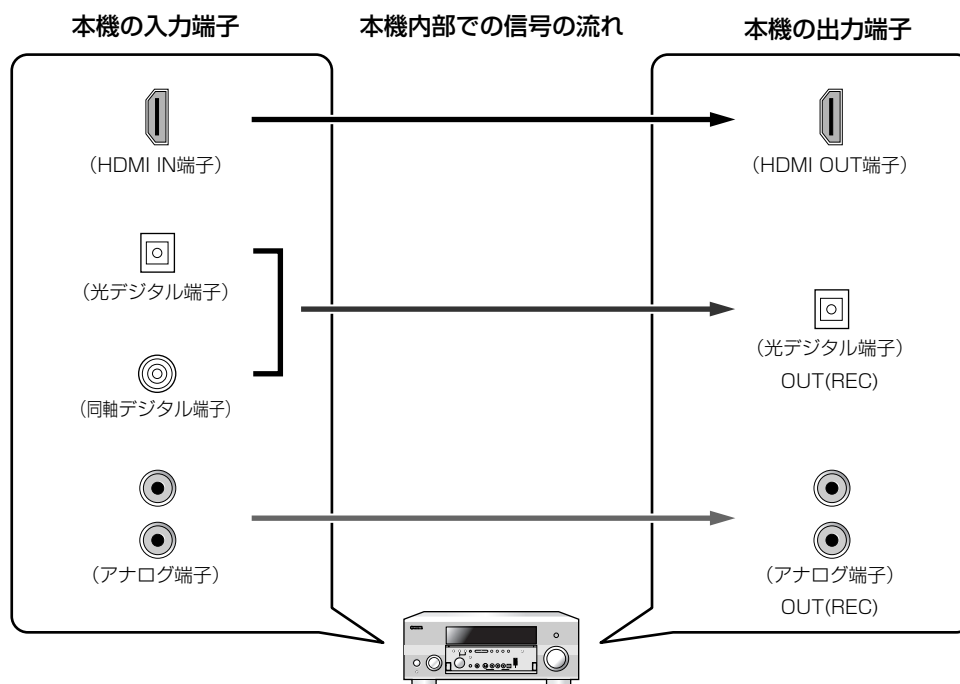
再生機器がブルーレイディスクやHD DVDの音声解説（例：インターネットからダウンロードした音声コンテンツなど）のビットストリーム信号をデコードできる場合、本機と再生機器をアナログマルチチャンネル接続（45ページ）またはデジタル音声接続すれば、音声解説を楽しめます。再生機器で音声解説をデコードし、本機へ出力する方法について詳しくは、再生機器の取扱説明書をご覧ください。

NETWORK端子について

本機はNETWORK端子を装備しています。NETWORK端子を使ってホームネットワークに接続すれば、ホームネットワークに接続したパソコンに保存されている音楽ファイルや、インターネットラジオの再生をお楽しみいただけます。ホームネットワークへの接続について詳しくは、「ホームネットワークに接続する」をご覧ください（47ページ）。

NETWORK端子

RS-232C端子について

RS-232C端子はサービス用の端子です。通常は使用しません。

音声信号について

本機は4種類の音声入出力端子を装備しています。

ヒント

- 本機の音声入力端子に入力された音声信号は、PRE OUT端子からも出力されます（44ページ）。
- HDMI IN端子に入力されたPCM、ドルビーデジタル、DTS信号は、セットメニュー「対応音声」（134ページ）を「その他の機器」に設定しているときのみHDMI OUT端子から出力されます。
- 以下の種類の音声信号は、HDMI IN端子からのみ入力されます。
  - DSD
  - ドルビーTrueHD
  - ドルビーデジタルプラス
  - DTS-HDマスターオーディオ
  - DTS-HDハイレゾリューションオーディオ
  - マルチチャンネルPCM
  - DTS Express

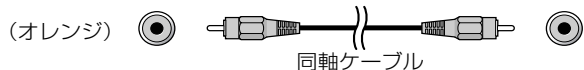
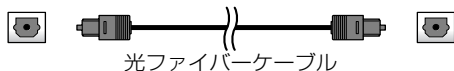
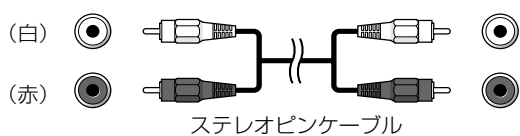
ご注意

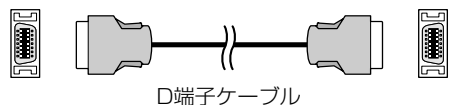
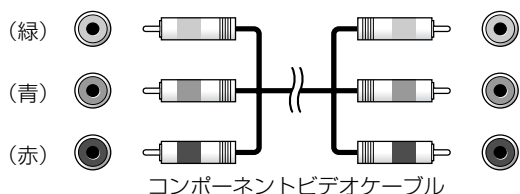
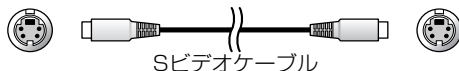
MD/TAPE IN(PLAY)端子に入力した信号は、MD/TAPE OUT(REC)端子から出力されません。同様に、CD-R IN (PLAY)端子に入力した信号はCD-R OUT(REC)端子から出力されません。

接続に使うケーブルの種類

お使いになる機器に合わせて、ケーブルをご用意ください。

音　　声

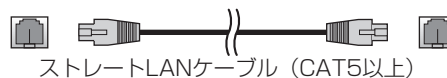
同軸デジタル端子

光デジタル端子

アナログ端子

映　　像

D端子

コンポーネントビデオ端子

Sビデオ端子

ビデオ端子

音　　声・映　　像

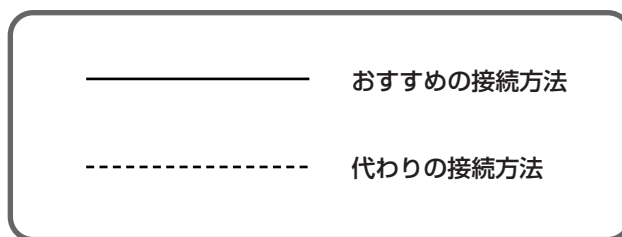
HDMI端子

ネットワーク

NETWORK端子

外部機器と接続する

左チャンネル(L)、右チャンネル(R)、入力(IN)、出力(OUT)をご確認のうえ、正しく接続してください。また、接続機器の取扱説明書もあわせてご覧ください。

各機器との接続図について

各機器との接続図(37ページ~)では、工場出荷時に割り当てられている端子に合わせて本機に外部機器を接続しています。各機器を図のように接続すれば、入力選択したい機器を呼び出す場合にリモコンの入力選択キーに書かれている機器名や、フロントパネルディスプレイ/テレビ画面(52ページ)表示と、実際に呼び出す機器を一致させられます。たとえば、「DVD」と書かれた端子にDVDプレーヤーを接続すれば、リモコンの入力選択キーを押す、または本体のINPUTセレクターを回して「DVD」を選べば、DVDプレーヤーを入力選択できます。
機器によっては、本機に音声用と映像用のそれぞれに複数の端子をその機器の接続用として装備している場合があります。その場合は、接続する機器が装備している端子に合わせて、音声で1つ、映像で1つを接続してください。すべての端子を接続する必要はありません。
接続図では、下図のように、おすすめの接続方法を実線、代わりの接続方法を破線で表しています。

外部機器を接続図とは違う端子に接続する場合

外部機器を、各機器との接続図(37ページ~)で接続している端子とは違う端子に接続することもできます。たとえば、「DTV/CBL」と書かれた端子にDVDレコーダーを接続できます。そのように、端子に書かれた機器名とは異なる機器を接続した場合は、セットメニュー「端子の割り当て」(135ページ)で、端子の割り当てを変更することをおすすめします。また、各機器との接続図には記載されていない機器を接続することもできます。その場合は、接続した端子に書かれている機器名で入力ソースを選択してください(67ページ)。セットメニュー「入力名変更」で入力ソース名を変更すれば、変更した名前で入力ソースを選択することもできます(136ページ)。

録音機器との接続について

本機では、同軸/光デジタル端子、またはアナログ端子から入力した音声信号を録音できます。再生機器と本機、および本機と録音機器の音声接続は、必ず同じ方法で行ってください。たとえば、再生機器と本機をアナログ接続した場合、本機と録音機器もアナログ接続してください。デジタル接続する場合は、再生機器と本機を同軸接続しても、光デジタル接続した録音機器で録音できます。

録画機器との接続について

本機では、Sビデオまたはビデオ端子から入力した映像信号を録画できます。テレビと本機、および本機と再生／録画機器の映像接続は、必ず同じ方法で行ってください。たとえば、テレビと本機をSビデオ接続した場合、本機と再生／録画機器もSビデオ接続してください。

ご注意

- 本機の入力／出力端子は電源をオンにした状態で正常に機能します。必ずオンにした状態でお使いください。
- ビデオコンバージョン機能がオフのときは（123ページ）、映像機器と本機、およびテレビと本機を同じ種類の映像端子を使って接続してください。たとえば、映像機器と本機をSビデオ端子を使って接続している場合は、テレビと本機もSビデオ接続してください。

スピーカーを接続する

スピーカーシステムの構成

使用するスピーカーの本数および種類に応じて、スピーカー構成を設定してください。スピーカー構成は、「自動測定メニュー」(54ページ)、またはセットメニュー「基本設定」(126ページ)で設定できます。これにより、環境に応じた最適な再生が可能になります。下図は本機が対応している、代表的なスピーカー構成を表わしています。29〜33ページでは、例として7.1/6.1/5.1チャンネル構成の場合を説明しています。

スピーカー構成	使用するスピーカー
7.1チャンネル	フロントL/R、センター、サラウンドL/R、サラウンドバックL/R、サブウーファー
6.1チャンネル	フロントL/R、センター、サラウンドL/R、サラウンドバック、サブウーファー
5.1チャンネル	フロントL/R、センター、サラウンドL/R、サブウーファー
3.1チャンネル	フロントL/R、センター、サブウーファー
2.1チャンネル	フロントL/R、サブウーファー
2チャンネル	フロントL/R

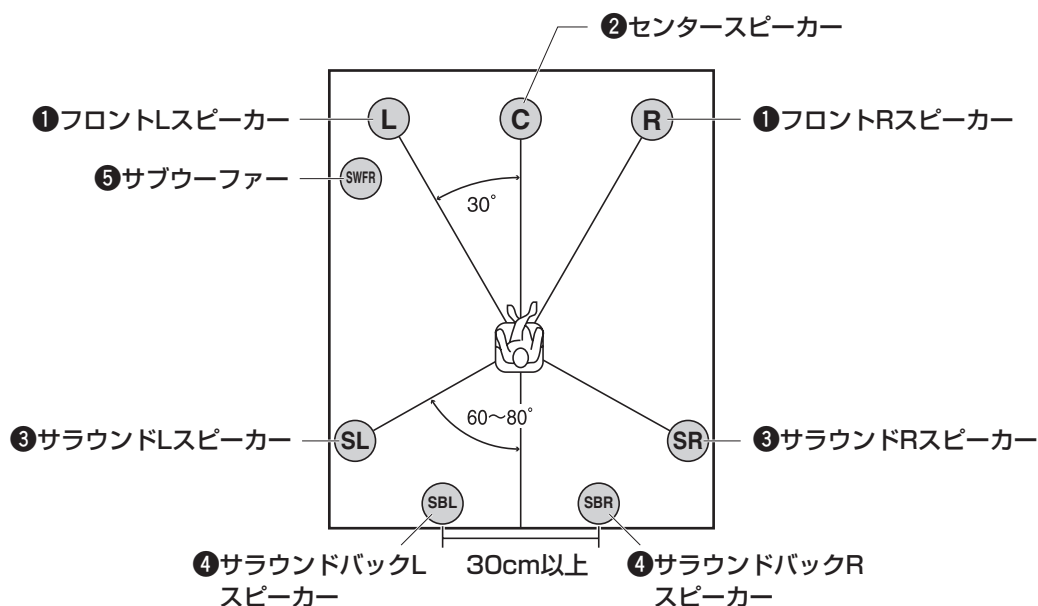
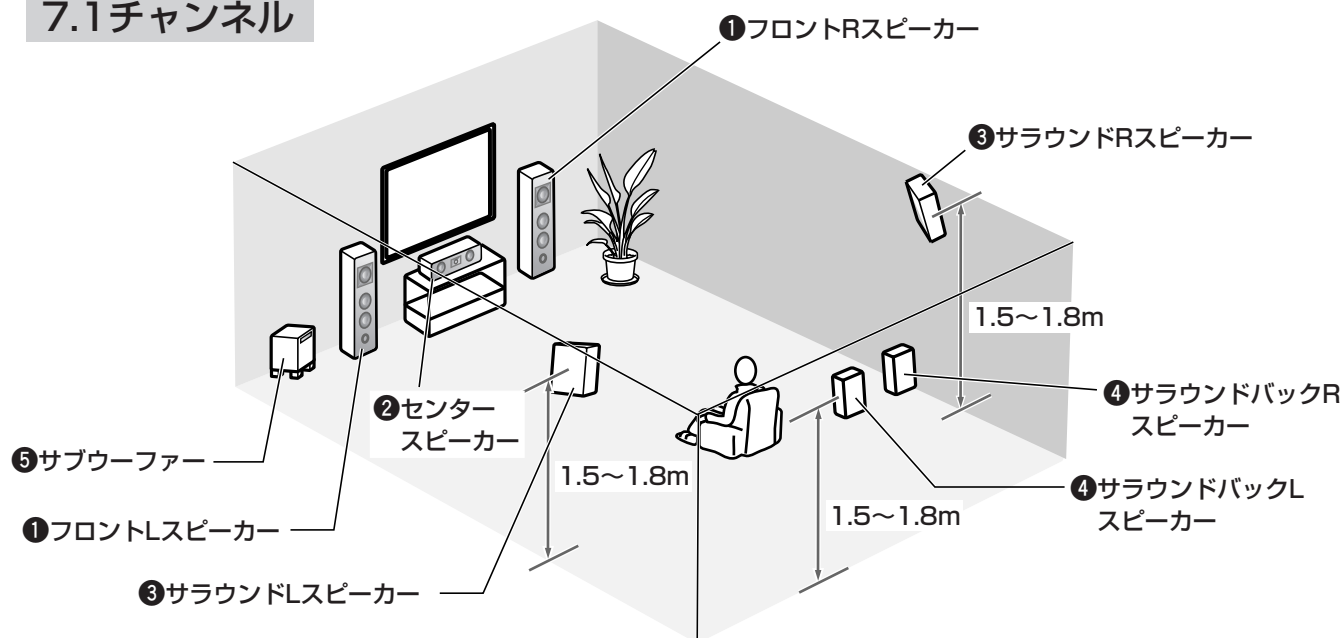
本機では、映画の迫力と臨場感を、Movieプログラムによってリアルに再現しています。会話は画面上に定位し、効果音は画面後方、音楽はさらにその後方に広がりを持って再現されます。次ページの図は本機が最も性能を発揮できるスピーカー配置を示したものです。このようにスピーカーを配置することにより、お気に入りの映画をシネマDSPプログラムによってさらに臨場感豊かに再生したり、スーパーオーディオCDやDVDオーディオなどのマルチチャンネルオーディオを、音声に包みこまれるような雰囲気でお楽しみいただけます。

スピーカーを設置する

下図は本機の性能やブルーレイディスク、HD DVDなどの高品質音声を最大に発揮できるスピーカー配置を表しています。スピーカー構成が6.1／5.1チャンネルの場合は31ページをご覧ください。
接続する前に、本機および接続する機器の電源コードがコンセントに接続されていないことをご確認ください。

ヒント

- シネマDSPの効果をさらに楽しむには、プレゼンススピーカーも使用することをおすすめします。プレゼンススピーカーについて詳しくは、「プレゼンススピーカーについて」をご覧ください(36ページ)。
- 入力信号や音場プログラムと、各スピーカー出力の関係について詳しくは、「入力信号と再生スピーカー対応表」をご覧ください(94ページ)。
- 各スピーカーの設置について詳しくは、「各スピーカーの設置」をご覧ください(30ページ)。

7.1チャンネル

各スピーカーの設置

❶ フロントL／Rスピーカー
左右のスピーカーをリスニングポジションから等距離に設置します。
スクリーンをお使いの場合は、スクリーンの下辺から1／4位の高さが適当です。

❷ センタースピーカー
フロントL／Rスピーカーの中間に設置します。
スクリーンをお使いの場合は、スクリーン真下の中央に設置します。
テレビをお使いの場合は、画面とスピーカー前面とを揃え、テレビの上や下など、できるだけ画面に近いところに設置します。

❸ サラウンドL／Rスピーカー
左右後方に、スピーカーをリスニングポジションに向けて設置します。床から1.5～1.8mの高さが適当です。

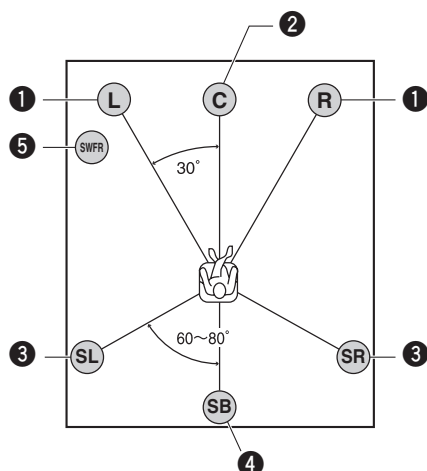
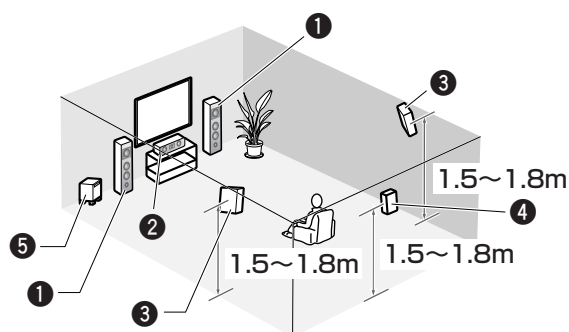
❹ サラウンドバック(L／R)スピーカー
リスニングポジションの後方にスピーカーをリスニングポジションに向け、2本の間隔を30cm以上離して設置します。床から1.5～1.8mの高さが適当です。6.1チャンネルシステムでサラウンドバックスピーカーを1本のみ設置する場合は、リスニングポジションの真後ろに設置します。

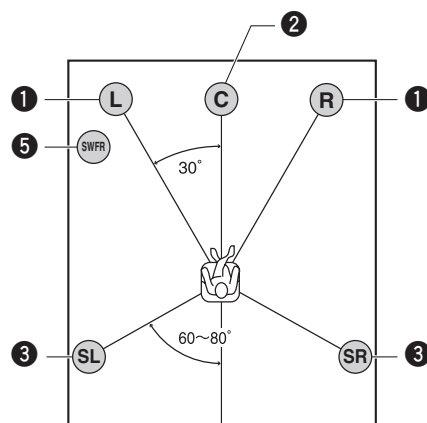
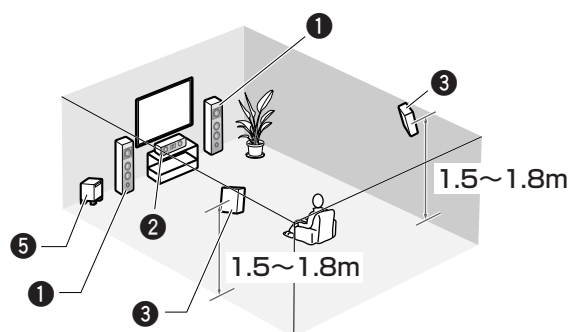
❺ サブウーファー
フロントL／Rスピーカーの外側に、壁の反射を防ぐために少し内向きにして設置します。

ご注意
スピーカーは防磁型のものをご使用ください。防磁型以外のスピーカーをご使用になると、テレビの画像が乱れる場合があります。特に画面近くに設置するセンタースピーカーやフロントスピーカーには、防磁型スピーカーの使用をおすすめします。防磁型スピーカーをご使用の場合でも画像が乱れるときは、テレビとスピーカーを離して設置してください。

6.1／5.1チャンネル構成の設置図

6.1または5.1チャンネル構成の場合は、下図のようにスピーカーを配置します。

6.1チャンネル

5.1チャンネル

ヒント

- 各スピーカーの設置については、30ページをご覧ください。
- サラウンドバックLチャンネルとサラウンドバックRチャンネルの音声信号は、ミックスされてサラウンドバックスピーカーから出力されます。
- サラウンドバックスピーカーは、SURROUND BACK L (SINGLE)端子に接続してください。詳しくは、「本機とスピーカーの接続図」の「6.1チャンネル」をご覧ください(33ページ)。
- セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンドバック」を、「小1台」または「大1台」に設定してください(126ページ)。

ヒント

- 各スピーカーの設置については、30ページをご覧ください。
- サラウンドバックチャンネルの音声信号は、サラウンドL／Rチャンネルにミックスされてサラウンド L／Rスピーカーから出力されます。
- より自然な音のつながりを得るために、サラウンドL／Rスピーカーはやや後方寄りに設置してください。
- セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンドバック」を、「無」に設定してください(126ページ)。

接続する

スピーカーを接続する

本機とスピーカーの接続図

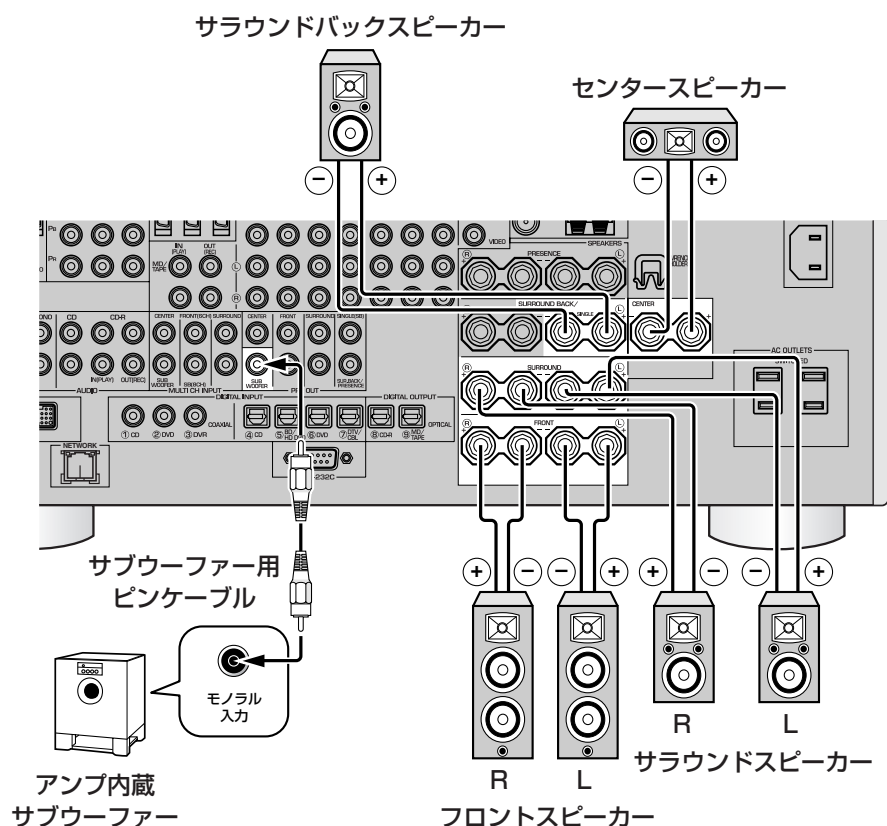
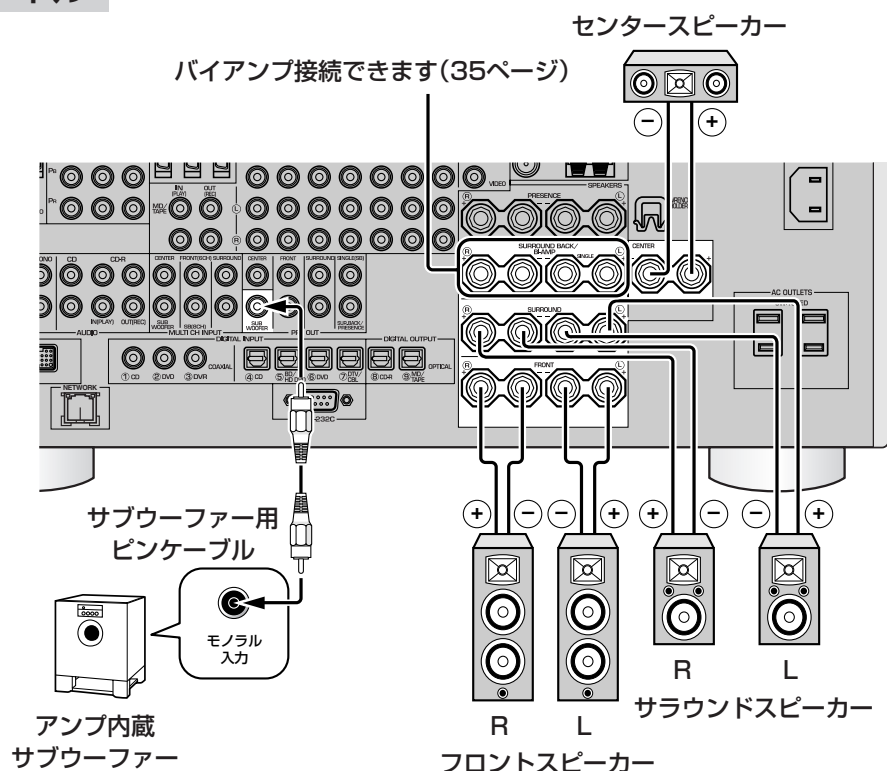
スピーカー構成に合わせて、スピーカーを接続してください。

ヒント

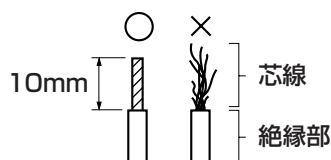
- サブウーファーにモノラル入力端子がない場合は、FRONT端子に接続してください。詳しくは、サブウーファーの取扱説明書をご覧ください。
- プレゼンススピーカーも接続する場合は、「プレゼンススピーカーについて」をご覧ください(36ページ)。

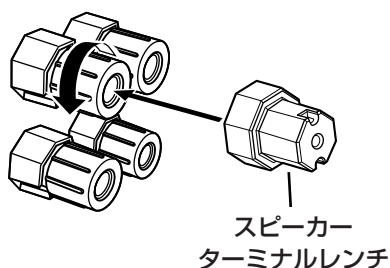
7.1チャンネル

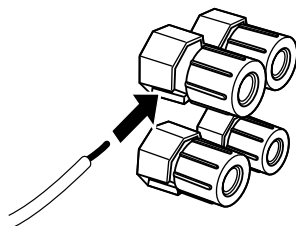
6.1チャンネル

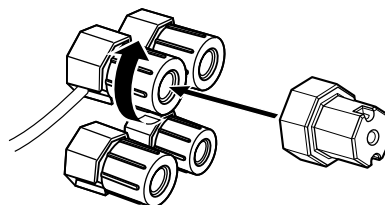
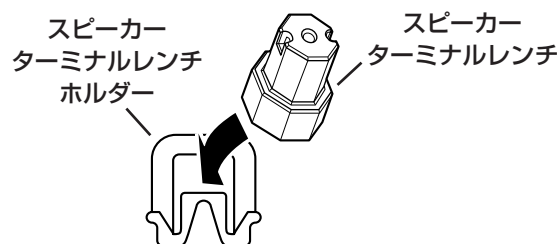
サラウンドバックスピーカーは、SURROUND BACK L(SINGLE)端子に接続してください。

5.1チャンネル

スピーカーケーブルを接続する

左チャンネル(L)、右チャンネル(R)、＋(赤)、－(黒)をよく確認して、正しく接続してください。

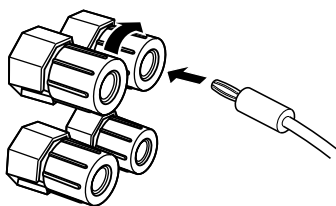
1 スピーカーケーブル先端の絶縁部(被覆)を、10mmぐらいはがし、芯線をしっかりよじる

2 スピーカー端子を左に回して、ゆるめる

ヒント

付属のスピーカーターミナルレンチを使うと、端子を回しやすくなります。

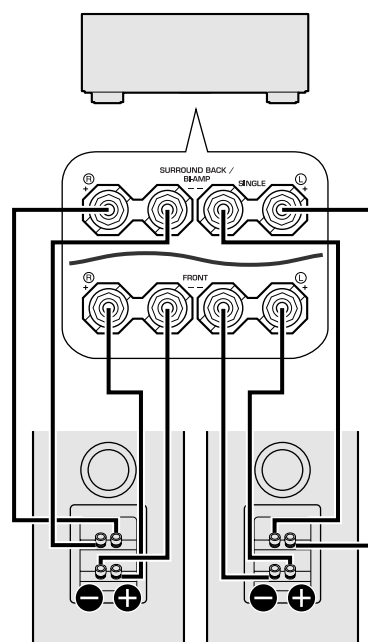
3 スピーカー端子の根元の隙間に、スピーカーケーブルの芯線を差し込む

4 スピーカー端子を右に回して、しめる

ヒント

スピーカーターミナルレンチは、使い終わったらリアパネルのホルダーにかけておくことをおすすめします。

ご注意

- スピーカーは、インピーダンスが6Ω以上のものをお使いください。
- スピーカーケーブルの芯線はしっかりよじり、スピーカー端子からはみ出さないように接続してください。芯線がリアパネルに接触したり、＋側と－側が接触したりすると、保護回路がはたらいて電源がスタンバイになることがあります。
- スピーカーケーブルの芯線が、スピーカー端子の金属部にしっかりと接触するように接続してください。絶縁部(被覆)をスピーカー端子に挟み込むと、音声が出力されない場合があります。
- スピーカーの＋端子と本機の＋端子、スピーカーの－端子と本機の－端子をそれぞれ接続してください。間違えて接続すると、音が不自然になります。

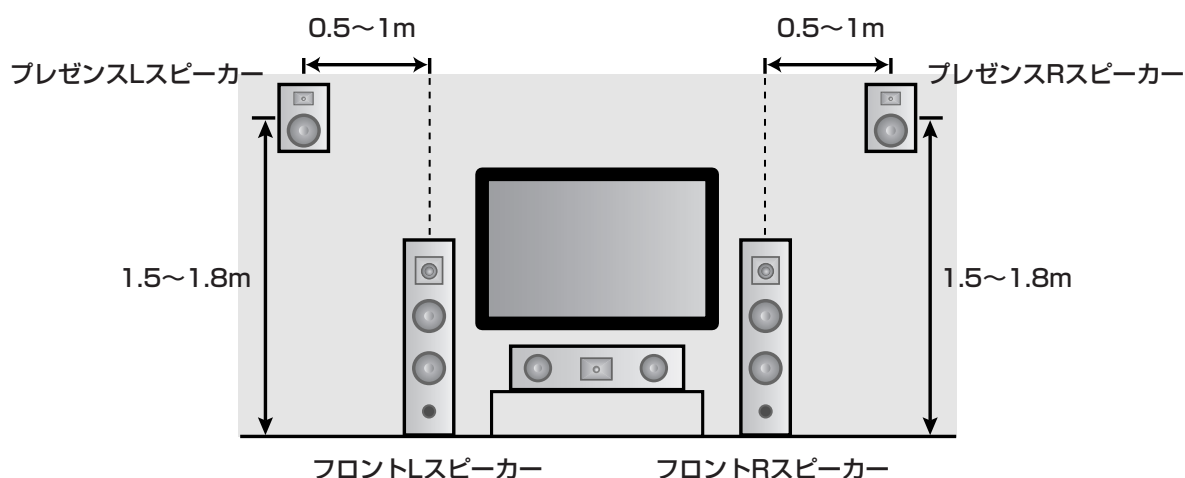
市販のバナナプラグを使用する場合

端子を強くしめてから差し込んでください。

バイアンプ接続する場合

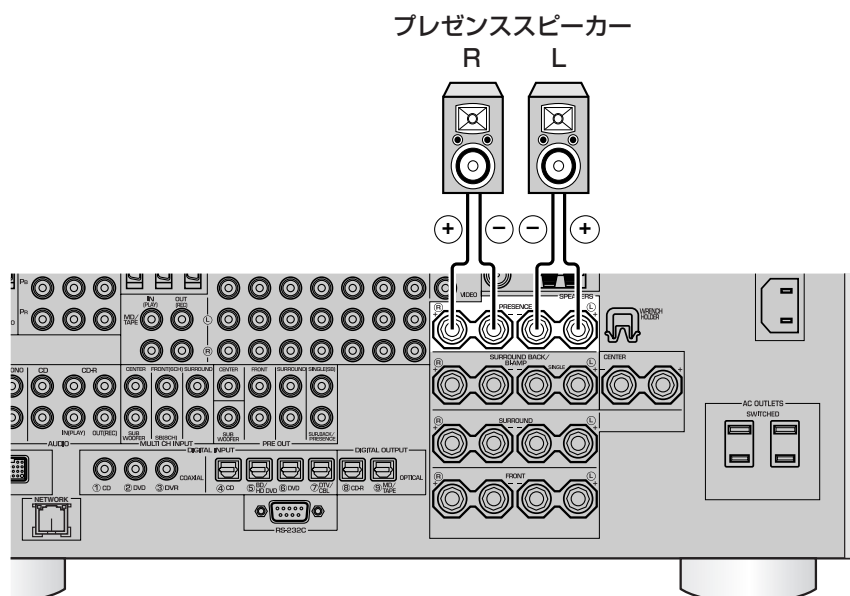
スピーカーのウーファー端子とツィーター端子を、それぞれFRONT端子とSURROUND BACK/BI-AMP端子に接続します。
ご使用になるときは、アドバンストセットアップメニュー「BI-AMP」を設定してください(149ページ)。

ご注意

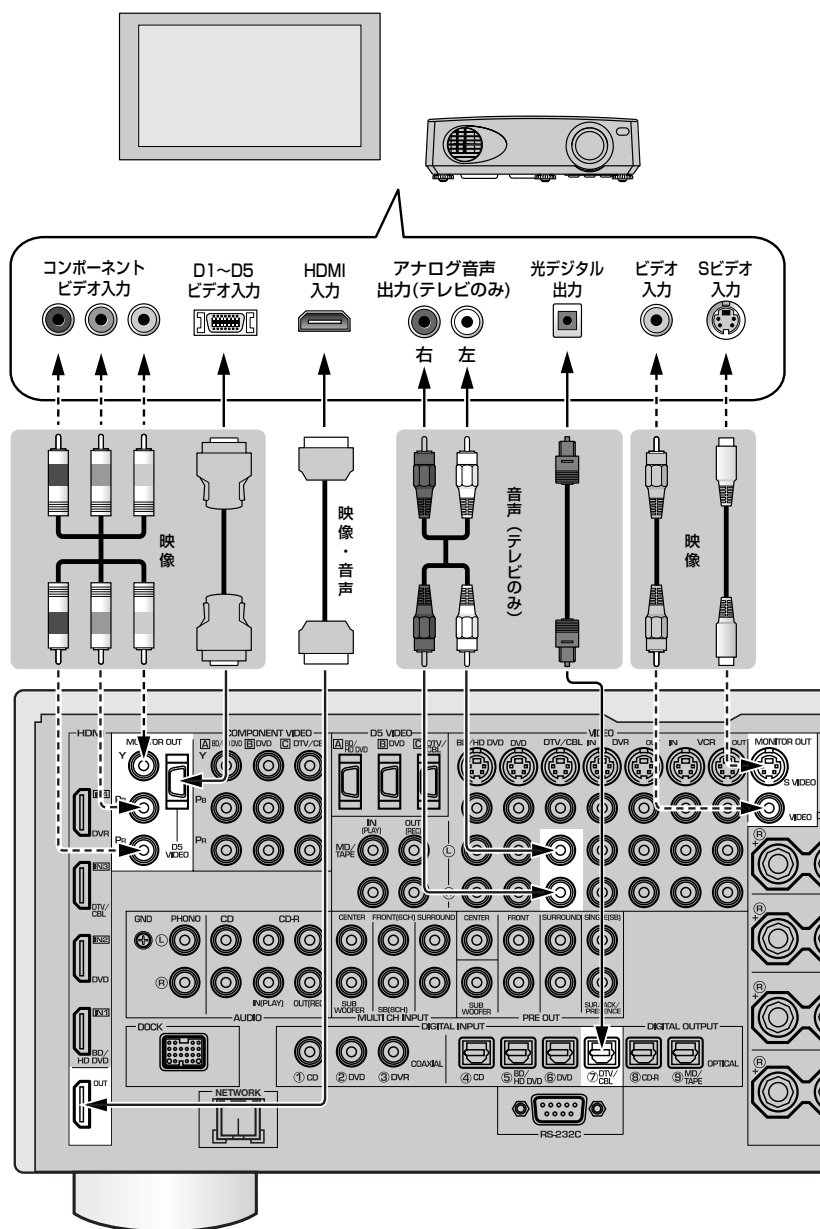
- バイアンプ接続する場合は、サラウンドバックスピーカーは接続できません。また、プレゼンススピーカーも使用できません。
- 本機とスピーカーを接続する前に、必ずウーファー端子とツィーター端子をつないでいる金具またはケーブルを取り外してください。

プレゼンススピーカーについて

プレゼンススピーカーを使用すれば、シネマDSPプログラム(90ページ)を選んでいるときに前方の効果音を出力することによって、より豊かなプレゼンス音場(98ページ)を演出できます。CINEMA DSP 3Dモードをオンにすれば、プレゼンススピーカーの効果が向上し、より緻密で立体的な音場効果を楽しめます(93ページ)。本機では、入力している音声信号の種類や選んでいる音場プログラムに応じて、音声を出力するスピーカー(サラウンドバック／プレゼンス)を自動的に切り替えます。
フロントL／Rスピーカーの外側0.5～1mの範囲に、スピーカーをリスニングポジションに向けて設置します。床から1.5～1.8mの高さが適当です。

ヒント

- セットメニュー「スピーカーの設定」の「プレゼンス」を、「使用する」に設定してください(127ページ)。
- セットメニュー「PR/SBの優先」で、優先的に音声を出力するスピーカー(サラウンドバック／プレゼンス)を設定できます(127ページ)。
- 音場パラメーター「セリフの位置調整」で、セリフなどの中央に定位する音の定位位置(上下方向)を調節できます(101ページ)。

プレゼンススピーカーを接続する

テレビ／プロジェクターを接続する

テレビ／プロジェクターのHDMI入力端子を本機のHDMI OUT端子に接続します。または、テレビ／プロジェクターの映像入力端子を本機のMONITOR OUT端子に接続します。お使いになるテレビ／プロジェクターの端子をよく確認して、**1つ**を選んで接続してください。テレビの音声信号を本機に入力する場合は、テレビの音声出力端子を本機の音声入力端子に接続します。お使いになるテレビの端子をよく確認して、**1つ**を選んで接続してください。

ヒント

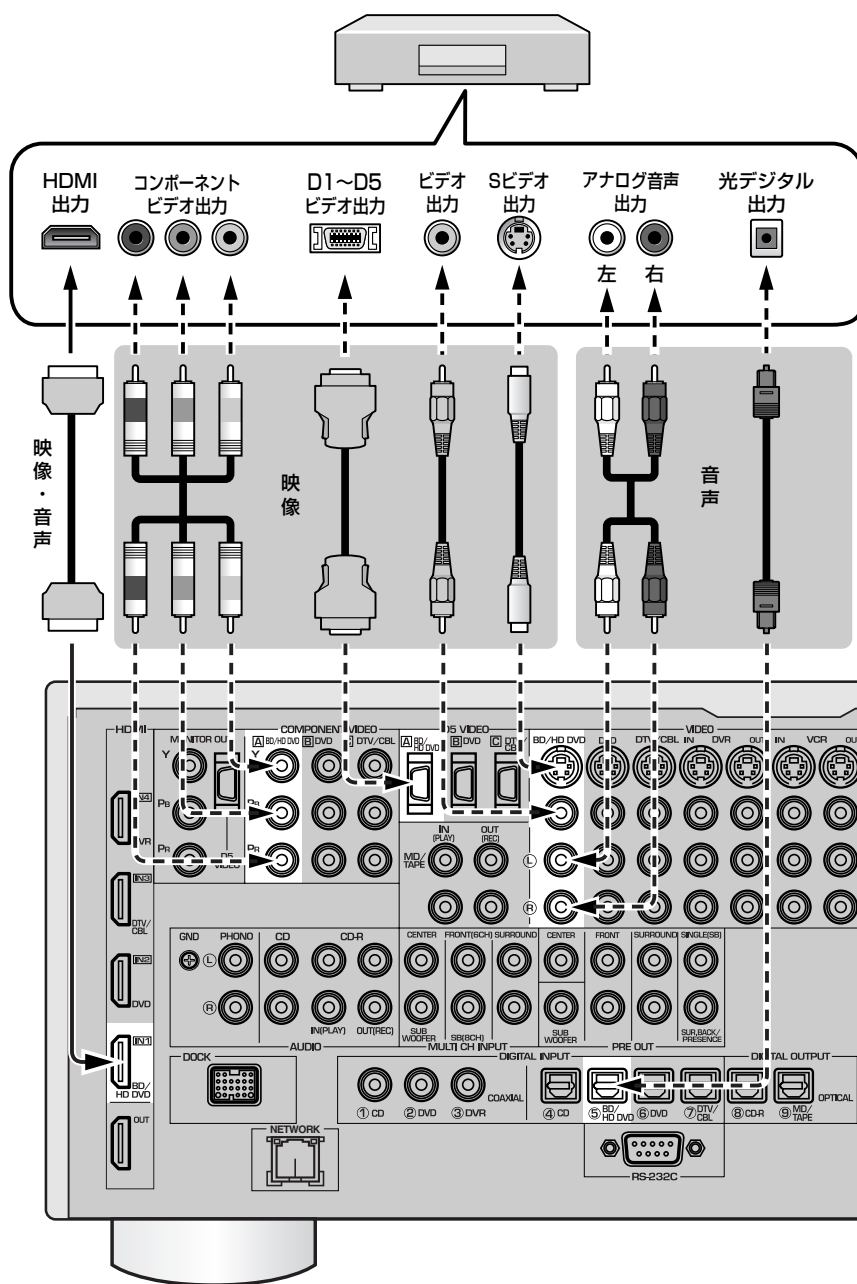
- テレビと本機をHDMI接続した場合、セットメニュー「対応音声」で、本機とHDMI接続した再生機器の音声を本機で出力するか、テレビで出力するかを設定できます（134ページ）。
- リップシンク（音声と映像の出力タイミング補正）の自動補正機能と互換性をもつテレビと、本機をHDMI接続した場合、本機は自動的に出力タイミングを補正します。リップシンクの自動補正機能について詳しくは、セットメニュー「リップシンク」をご覧ください（121ページ）。
- コンポーネントビデオ出力（MONITOR OUT）端子とD5ビデオ出力（MONITOR OUT）端子は同時に使用できます。たとえば、コンポーネントビデオ出力端子にプロジェクターを、D5ビデオ出力端子にテレビを接続して、同じ映像を両方でお楽しみいただけます。

再生機器を接続する

左チャンネル(L)、右チャンネル(R)、入力(IN)、出力(OUT)をよく確認して、正しく接続してください。

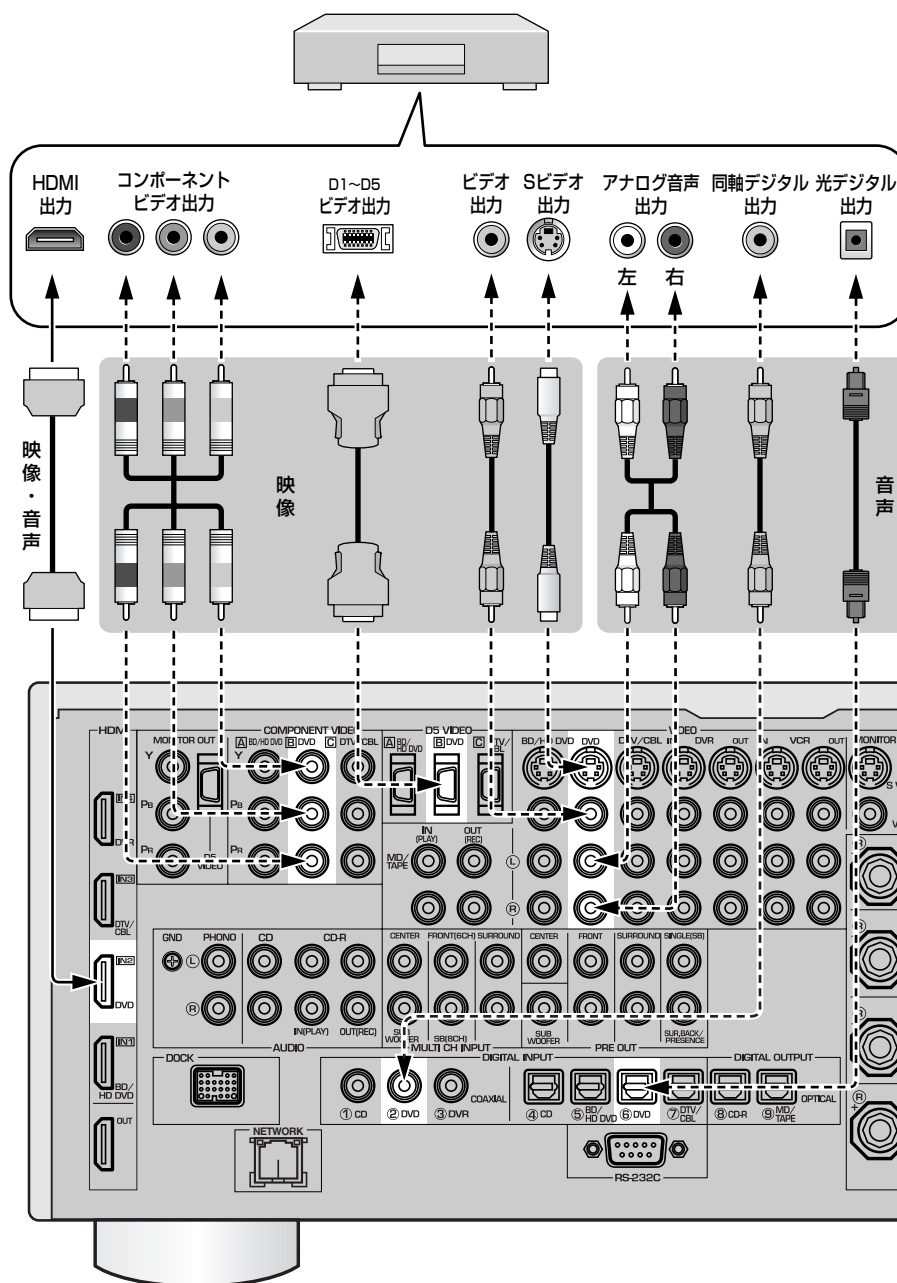
ブルーレイディスク／HD DVDプレーヤーを接続する

ブルーレイディスク／HD DVDプレーヤーのHDMI出力端子と本機のHDMI IN1端子を接続します。または、ブルーレイディスク／HD DVDプレーヤーの音声／映像出力端子と本機の音声／映像入力端子を接続します。お使いになる機器の端子をよく確認して、**音声で1つ、映像で1つ**を選んで接続してください。

ご注意

コンポーネントビデオ入力端子とD5ビデオ入力端子の両方を同時に接続することはできません。お使いになるブルーレイ／HD DVDプレーヤーを確認のうえ、どちらか片方を接続してください。

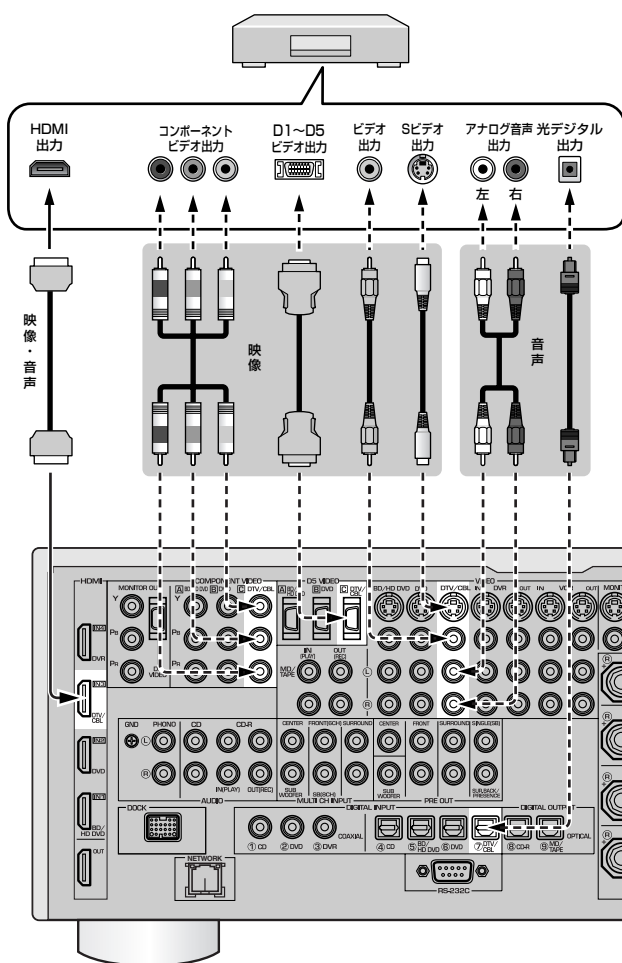
DVDプレーヤーを接続する

DVDプレーヤーのHDMI出力端子と本機のHDMI IN2端子を接続します。または、DVDプレーヤーの音声／映像出力端子と本機の音声／映像入力端子を接続します。お使いになる機器の端子をよく確認して、**音声で1つ、映像で1つ**を選んで接続してください。

ご注意

コンポーネントビデオ入力端子とD5ビデオ入力端子の両方を同時に接続することはできません。お使いになるDVDプレーヤーを確認のうえ、どちらか片方を接続してください。

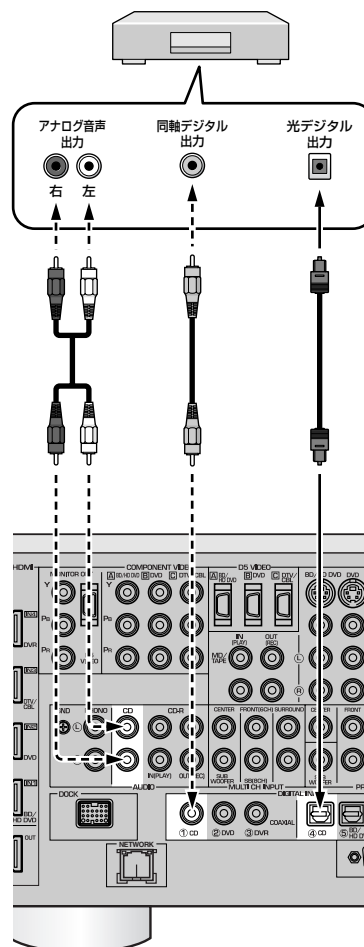
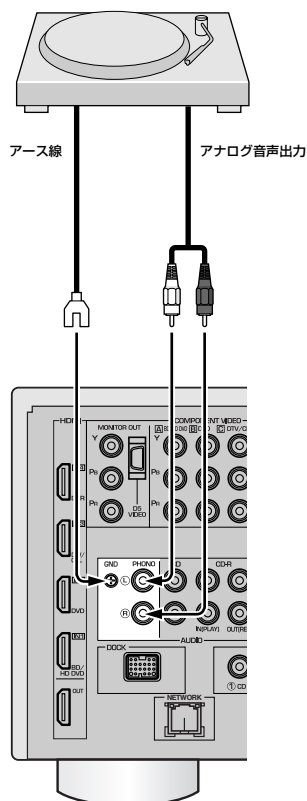
デジタルテレビ／ケーブルテレビチューナーを接続する

チューナーのHDMI出力端子と本機のHDMI IN3端子を接続します。または、チューナーの音声／映像出力端子と本機の音声／映像入力端子を接続します。お使いになる機器の端子をよく確認して、**音声で1つ、映像で1つ**を選んで接続してください。

ご注意

コンポーネントビデオ入力端子とD5ビデオ入力端子の両方を同時に接続することはできません。お使いになるチューナーを確認のうえ、どちらか片方を接続してください。

CDプレーヤーを接続する

お使いになる機器の端子をよく確認して、**どれか1つ**を選んで接続してください。

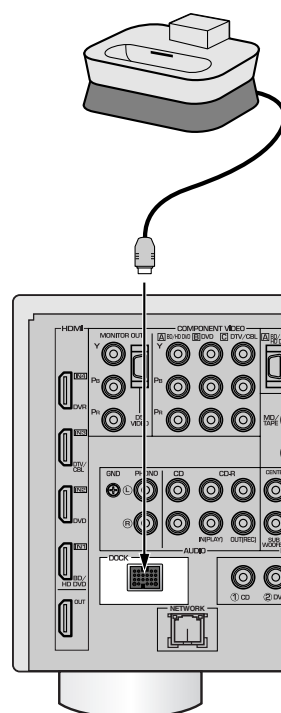
アナログ音声
出力
右 左
同軸デジタル
出力
光デジタル
出力

レコードプレーヤーを接続する

低出力型MCカートリッジ付のレコードプレーヤーを接続するときは、昇圧トランスまたはMCヘッドアンプを使って接続します。

ご注意

GND端子は安全アースではありません。一般的に、ノイズが多いときに接続するとノイズレベルを低減できます。レコードプレーヤーによってはノイズレベルが高くなってしまうことがありますので、お使いのレコードプレーヤーに合った接続をお試しください。

ヤマハ製ドックを接続する

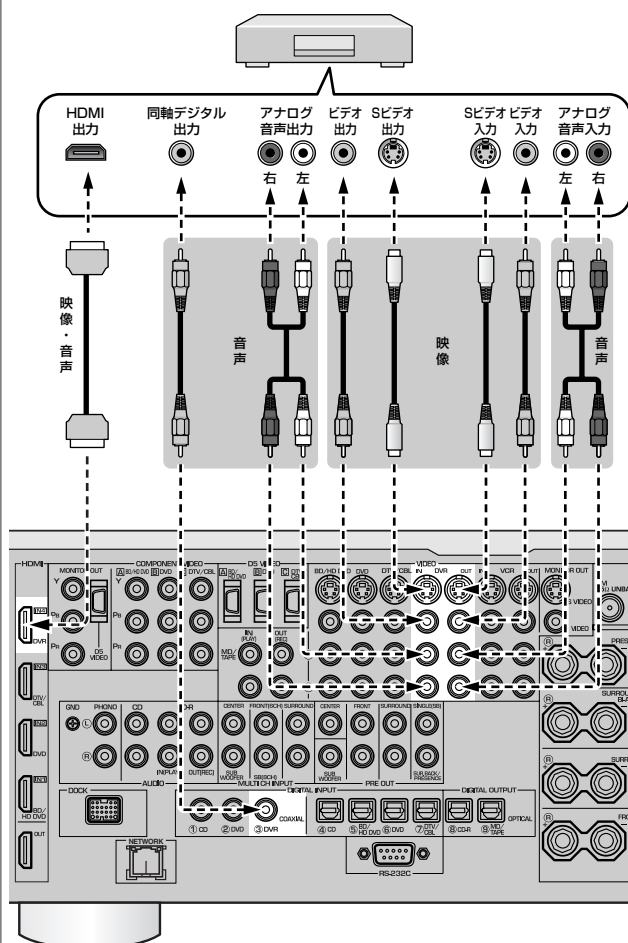
ヤマハ製ドック(別売 YDS-10など)の接続ケーブルのプラグを本機のDOCK端子に接続します。

ヒント

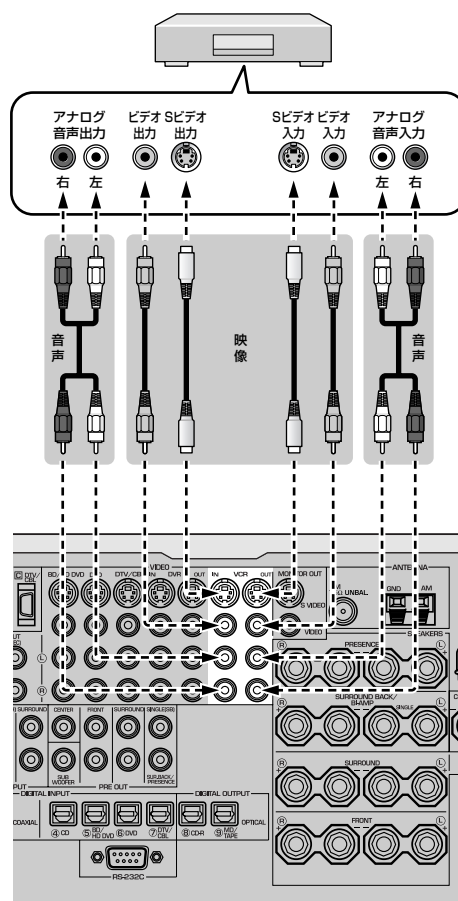
上図のようにヤマハ製ドックを本機に接続し、iPodをセットすれば、本機でiPodの再生を楽しんだり、付属のリモコンでiPodを操作したりすることができます。詳しくは、「iPodを再生する」(75ページ)をご覧ください。

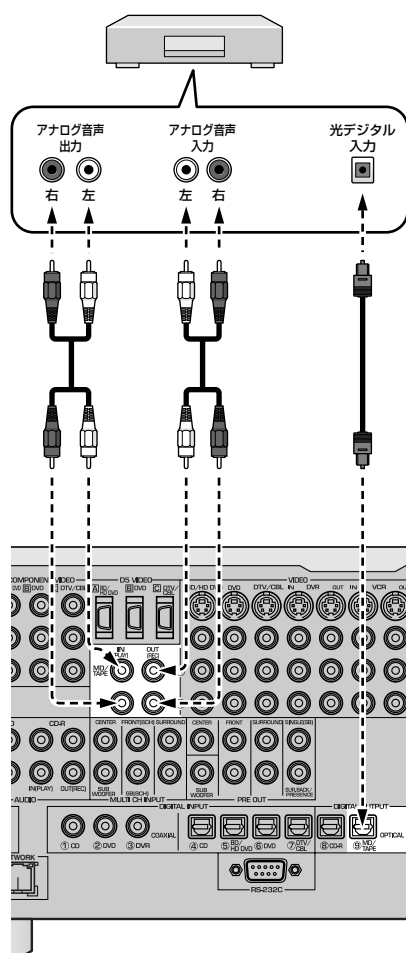
録音／録画機器を接続する

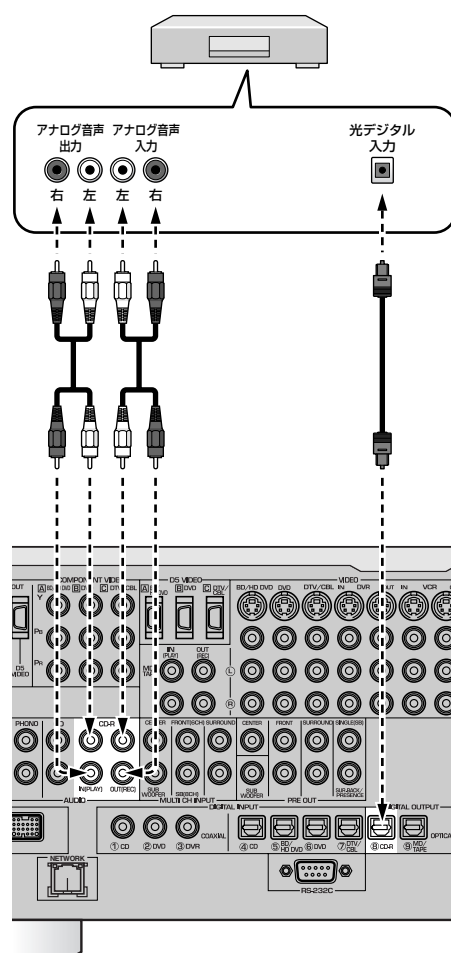
左チャンネル(L)、右チャンネル(R)、入力(IN)、出力(OUT)をよく確認し、録音／録画元となる再生機器と同じ方法で接続してください。詳しくは、「録音機器との接続について」(26ページ)および「録画機器との接続について」(27ページ)をご覧ください。

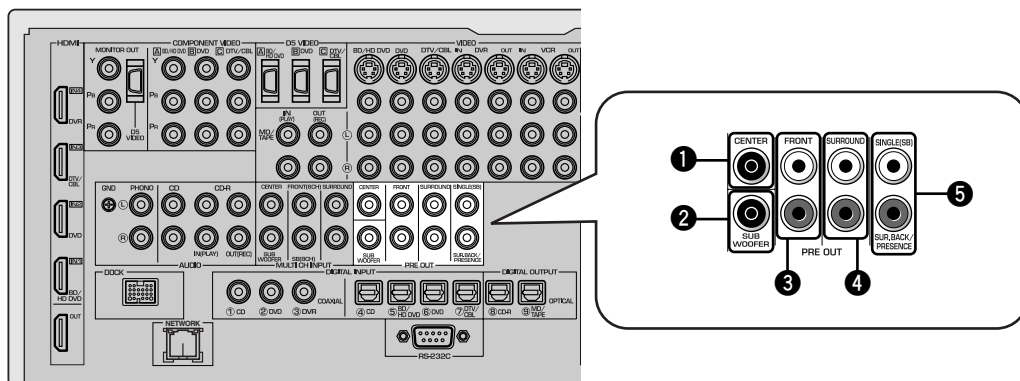
DVDレコーダーを接続する

DVDレコーダーのHDMI出力端子と本機のHDMI IN4端子を接続します。または、DVDレコーダーの音声／映像出力端子と本機の音声／映像入力端子を接続します。お使いになる機器の端子をよく確認して、**音声で1つ、映像で1つ**を選んで接続してください。

ビデオデッキを接続する

お使いになる機器の端子をよく確認して、入出力それぞれ**音声で1つ、映像で1つ**を選んで接続してください。

MDレコーダー／テープデッキを接続する

お使いになる機器の端子をよく確認して、アナログ音源を録音する場合はアナログ接続を、デジタル音源を録音する場合はデジタル接続をしてください。

CDレコーダーを接続する

お使いになる機器の端子をよく確認して、アナログ音源を録音する場合はアナログ接続を、デジタル音源を録音する場合はデジタル接続をしてください。

外部パワーアンプを接続する

外部パワーアンプを使う場合や、お手持ちのアンプを使う場合などは、PREOUT（プリアウト）端子と接続します。

❶ CENTER（センター）端子

センターチャンネルの信号を出力します。外部パワーアンプを接続して、センタースピーカーを駆動させる場合に使います。

❷ SUBWOOFER（サブウーファー）端子

ヤマハアクティブサーボサブウーファーシステムなどの、アンプ内蔵サブウーファーを使うときに、この端子に接続します。フロント、センター、サラウンドおよびサラウンドバックチャンネルの低音信号が出力されます。また、ドルビーデジタル、DTSやAACデコード時のLFE信号も、この端子に出力されます。

❸ FRONT（フロント）端子

フロントL／Rチャンネルの信号を出力します。外部パワーアンプを接続して、フロントL／Rスピーカーを駆動させる場合に使います。

❹ SURROUND（サラウンド）端子

サラウンドL／Rチャンネルの信号を出力します。外部パワーアンプを接続して、サラウンドL／Rスピーカーを駆動させる場合に使います。

❺ SUR.（サラウンド） BACK（バック）/PRESENCE（プレゼンス）端子

サラウンドバックL／Rチャンネルまたはプレゼンスし／Rチャンネルの信号を出力します。外部パワーアンプを接続して、サラウンドバックL／RスピーカーまたはプレゼンスL／Rスピーカーを駆動させる場合に使います。サラウンドバック用として使うか、プレゼンス用として使うかは、セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンドバック」および「プレゼンス」で設定します（126ページ）。どちらか一方をスピーカーありの設定、もう一方をスピーカーなしの設定にしてください。

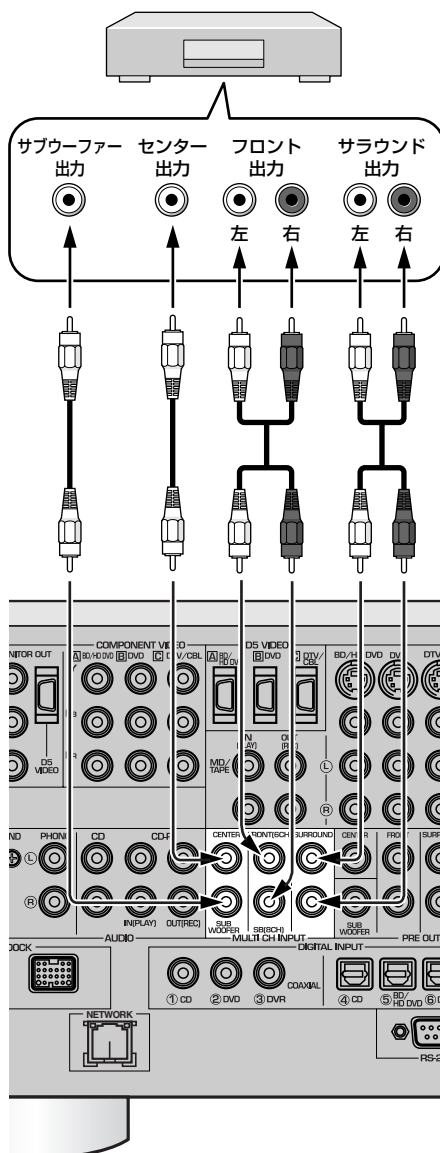
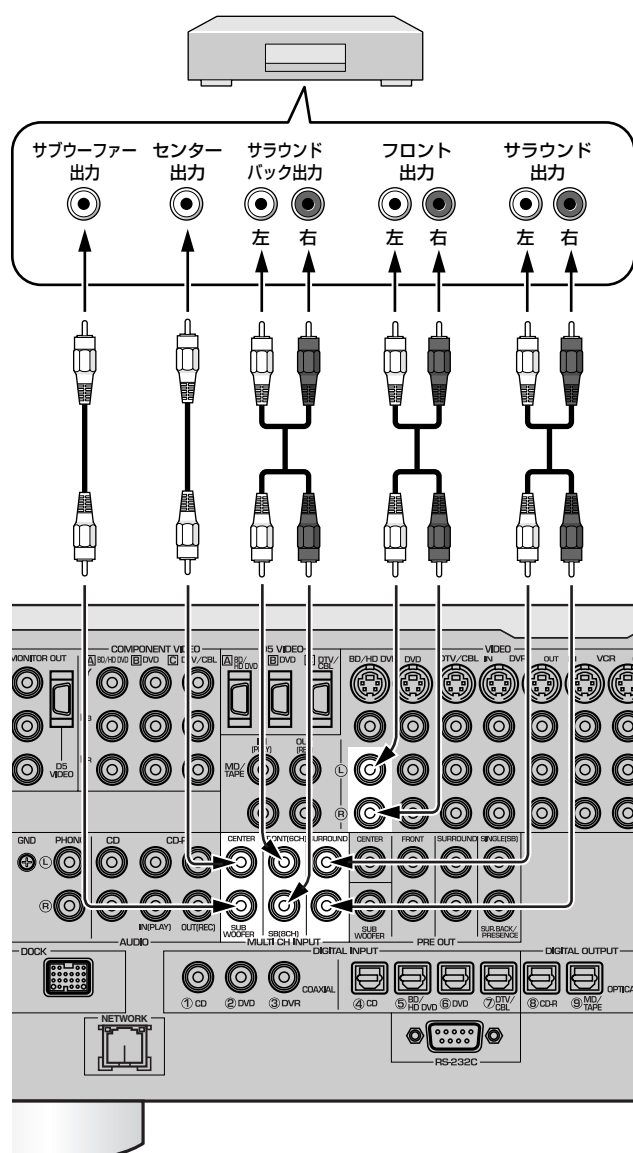
ヒント

- 各PRE OUT端子からは、対応するスピーカー端子と同じチャンネル信号を出力します。
- サラウンドバック用の外部アンプを１台のみ使う場合は、SINGLE(SB)端子に接続してください。
- バイアンプ接続する場合は、SUR. BACK/PRESENCE端子をフロントチャンネル（ツィーター）用として使います。アドバンストセットアップメニュー「BI-AMP」（149ページ）を「ON」に設定してください。

ご注意

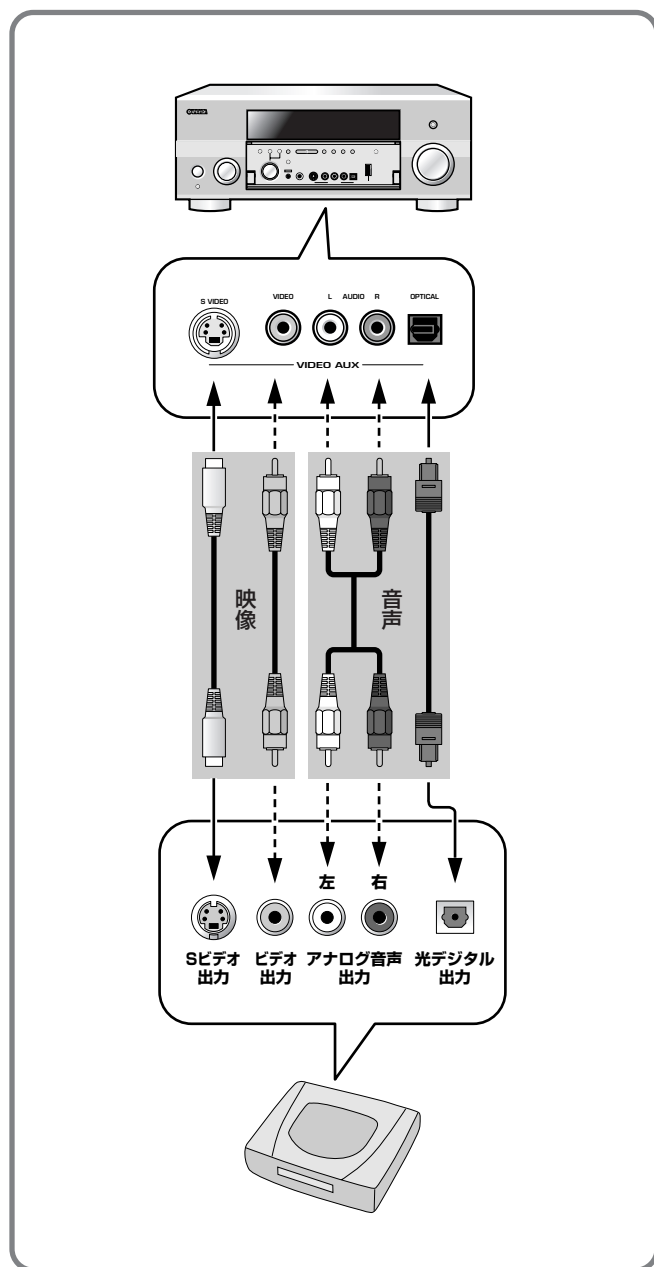
- PRE OUT端子に外部パワーアンプを接続するときには、対応するスピーカー端子を使わないでください。また、接続する外部パワーアンプに音量調節機能がある場合は、音量を最大にしてください。
- 「SPEAKERS」のSURROUND BACK/PRESENCE端子と「PRE OUT」のSUR. BACK/PRESENCE端子の両方を使って、サラウンドバックスピーカーとプレゼンススピーカーの両方から同時に音声を出力することはできません。
- セットメニュー「スピーカーの設定」の設定によっては、SUBWOOFER端子から出力されない信号があります（126ページ）。

マルチチャンネル出力端子がある機器を接続する

DVDプレーヤーやスーパーオーディオCDプレーヤーなど、マルチチャンネル出力端子がある機器を接続します。7.1チャンネル音声を入力する場合は、空いているアナログ音声入力端子をフロントL／Rチャンネル用として使います。セットメニュー「入力チャンネル」を「8チャンネル」に設定し、「フロント入力」で、フロントL／Rチャンネル用として使うアナログ音声入力端子を設定してください(137ページ)。

ご注意

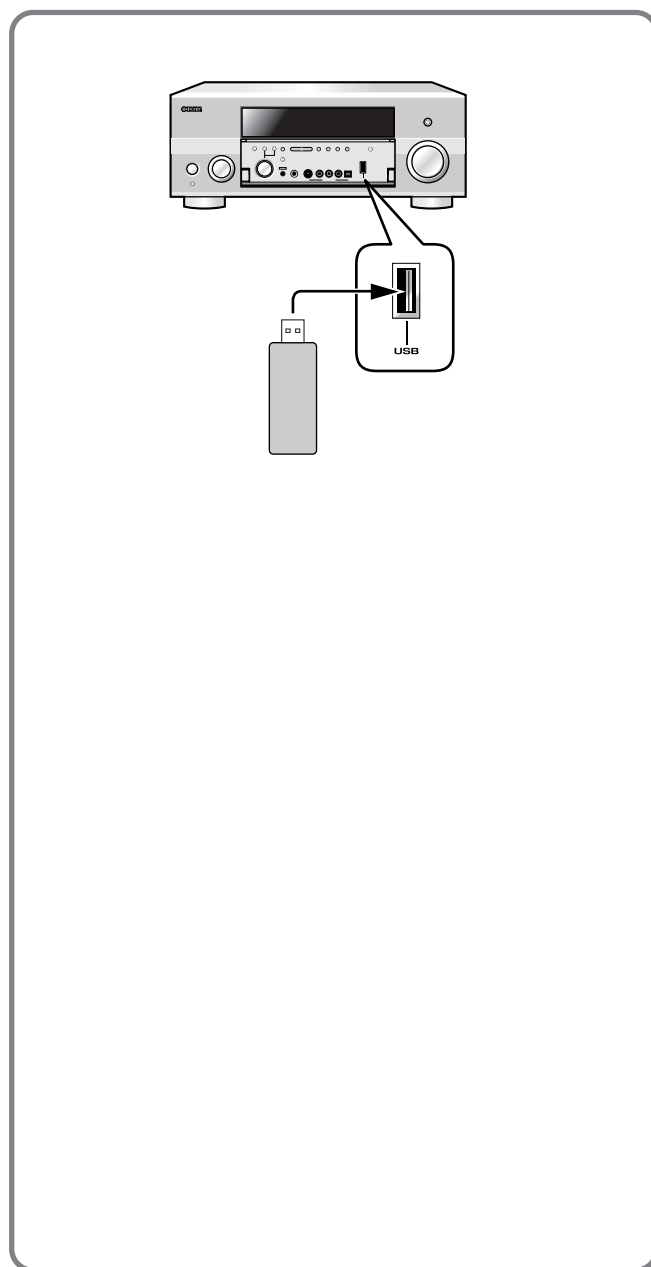
- 音場プログラムおよびコンプレストミュージック・エンハンサーモードの効果はオフになります。
- セットメニュー「スピーカーの設定」(126ページ)でスピーカーなしに設定されているチャンネルの音声信号は出力されません。
- ヘッドホンを使用しているときは、MULTI CH INPUT FRONT端子から入力した信号のみ出力されます。
- サブウーファーの音量が小さく感じられる場合は、サブウーファーに装備されている音量調節機能を使って音量を大きくしてください。

ゲーム機やビデオカメラなどを接続する

フロントパネル(前面)のVIDEO AUX端子に接続します。

ヒント

本機に接続したヤマハ製ドック(別売YDS-10など)にiPodをセットし、本機がiPodを認識しているときには、iPodの信号をVIDEO AUX端子に接続した機器の信号よりも優先的に出力します。

USBデバイスを接続する

フロントパネル(前面)のUSB端子に接続します。

ヒント

USBデバイスが500mAを超える電流を必要とする場合は、USBデバイスに付属しているACアダプターなどで電源を供給してください。

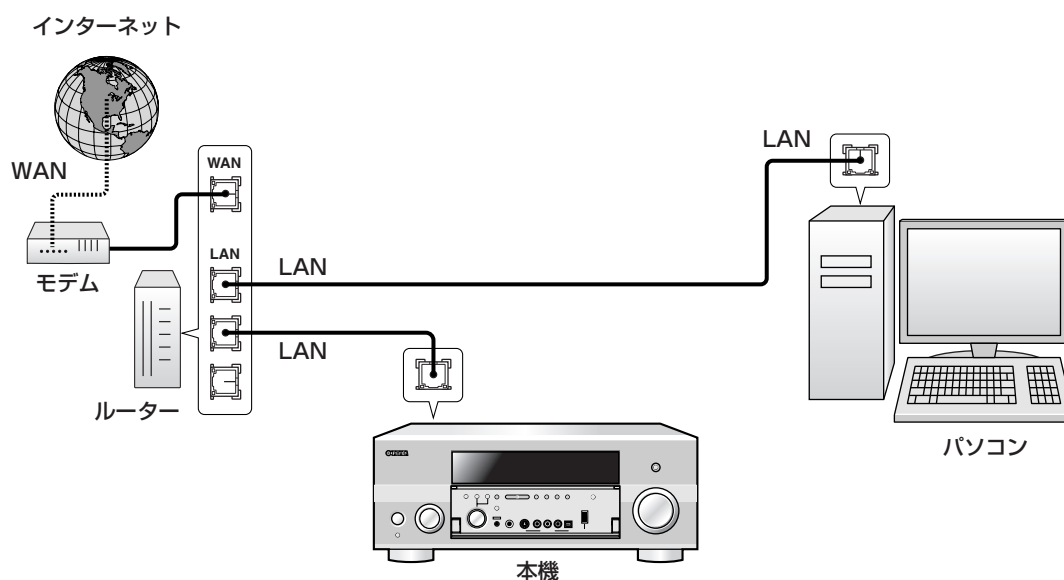
ご注意

- USBデバイスのメーカーや種類により、ファイルを再生できない場合があります。
- 映像ファイルは再生できません。

ホームネットワークに接続する

本機をホームネットワークに接続すれば、パソコンに保存されている音楽ファイルやインターネットラジオの音声をお楽しみいただけます。

ホームネットワーク環境について

下図はホームネットワーク環境の一例をあらわしています。

ネットワークについて詳しくは、ネットワーク機器の取扱説明書をお読みになるか、接続業者にお問い合わせください。

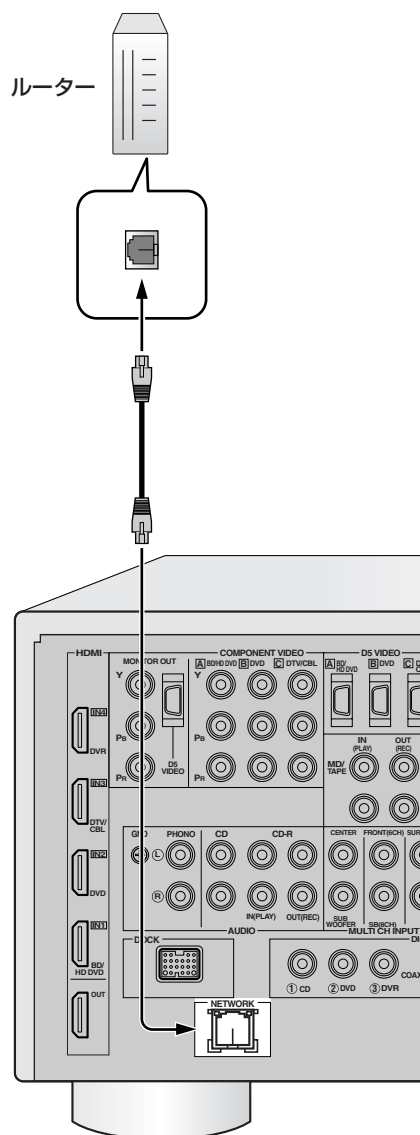
ヒント

- インターネットに接続してインターネットラジオを聴くには、インターネットサービスを提供するプロバイダーとの契約が必要です。
- 本機とホームネットワークの接続について詳しくは、「ホームネットワークに接続する」をご覧ください。（48ページ）

ご注意

- Macintosh OSでは、本機のネットワークオーディオ機能は使えません。
- 映像ファイルは再生できません。

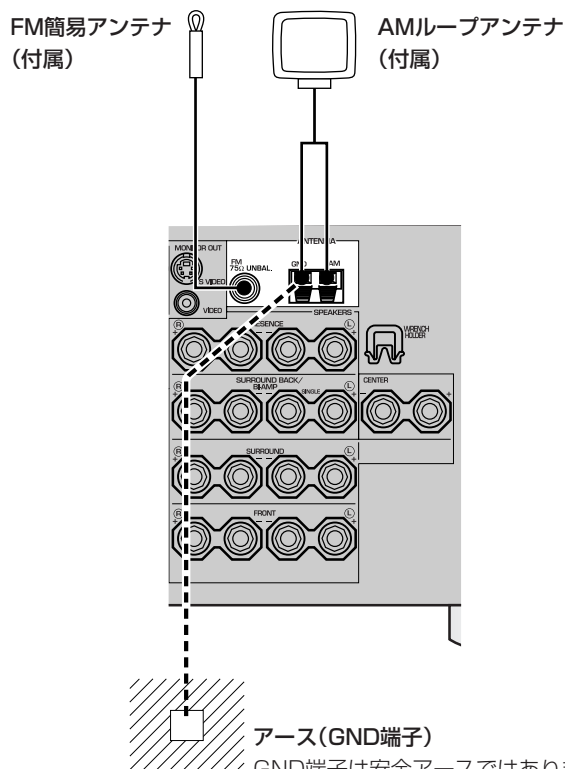
ホームネットワークに接続する

本機のNETWORK端子を、CAT5以上のストレートLANケーブルで、ルーターの空いているNETWORK端子に接続します。
ルーターのDHCPサーバー機能をオンにします。

ストレートLANケーブルは、STPケーブルのご使用をおすすめします。

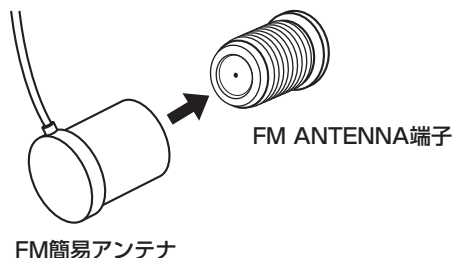
ご注意

ルーターにDHCPサーバー機能がない場合は、セットメニュー「ネットワーク設定」で、ネットワークを手動で設定してください(130ページ)。

アンテナを接続する

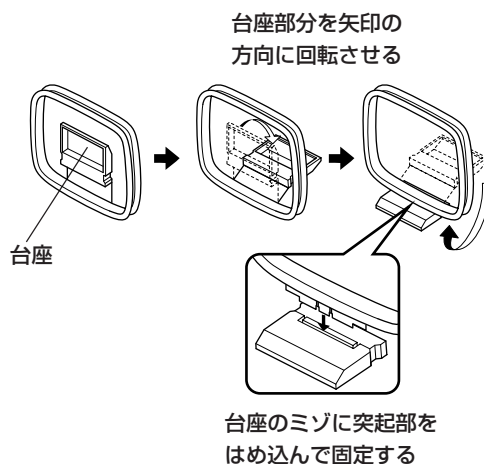
本機には、FM簡易アンテナおよびAMループアンテナが付属されています。付属のアンテナでうまく受信できない場合は、屋外アンテナを接続してください。

アース（GND端子）
GND端子は安全アースではありません。雑音が多いときに、接続すると雑音を低減することができます。アースは市販のアース棒か銅板に、ビニール被覆線を接続し、湿気の多い地中に埋めてください。

FM簡易アンテナを接続する

付属のFM簡易アンテナを、FM ANTENNA端子に接続してください。

FM屋外アンテナを接続する場合

アンテナの同軸ケーブルを、市販のF型コネクターを使って、FM ANTENNA端子に接続します。詳しくは、屋外アンテナをお買い求めの販売店にご相談ください。

AMループアンテナを接続する

1 アンテナをアンテナスタンドに取り付ける

2 AM ANTENNA端子とGND端子のレバーを押し込んだ状態で、AMループアンテナのコードをAM ANTENNA端子とGND端子に差し込む

コードに極性（＋／−）はありません。

3 レバーを放して、コードを固定する

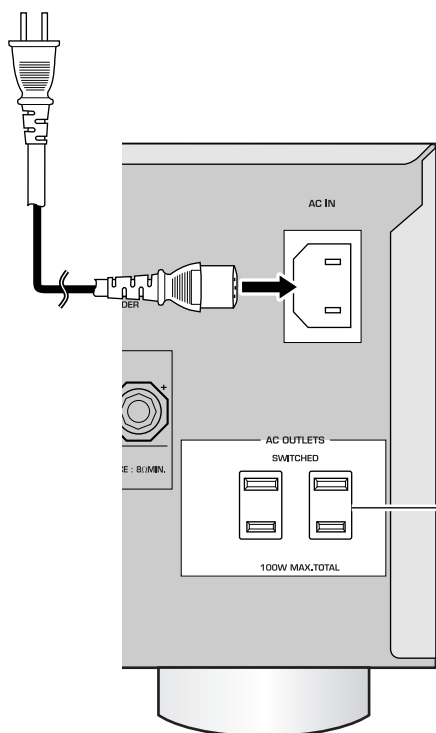
コードを軽く引いて、正しく固定されたかどうか確認してください。

ヒント

• 受信がうまくいかない場合は、アンテナを左右に回し、受信状態が最も良くなる方向に向けてください。
• 放送を良好に受信するには、屋外アンテナを設置することをおすすめします。詳しくは、本機をお買い求めの販売店にお問い合わせください。

ご注意

• AMループアンテナは、本機から離して設置してください。
• 屋外アンテナを接続した場合でも、AMループアンテナは必ず接続しておいてください。

電源コードを接続する

AC アウトレット

外部オーディオ機器に電源を供給するコンセントで、本機のSTANDBY/ONキーと連動しています。STANDBY/ONキーがONのとき、合計で消費電力100Wまでのオーディオ機器を接続し、電源を供給できます。本機の電源について詳しくは、51ページをご覧ください。
接続するときの電源プラグの向き（極性）によって音質が変わることがありますので、お好みの向きで接続してください。

ご注意
本機のACアウトレットに消費電力100Wを超える機器（サブウーファーなど）を接続しないでください。本機が故障するおそれがあります。

電源コード

すべての接続が終了したら、電源コードを本機のAC IN端子にしっかりと差し込み、家庭用AC100V、50／60Hzのコンセントに電源プラグを接続します。
接続するときの電源プラグの向き（極性）によって音質が変わることがありますので、お好みの向きで接続してください。

メモリーバックアップ

メモリーバックアップ機能は本機がスタンバイの時に、記憶されたデータが失われるのを防ぎます。電源コードがコンセントから抜けていたり、電源供給が一週間以上遮断されると、本機のメモリー内容が消えてしまうことがあります。この場合は各設定を再度やり直してください。

電源をオン／スタンバイにする

本機の電源の操作方法を説明します。

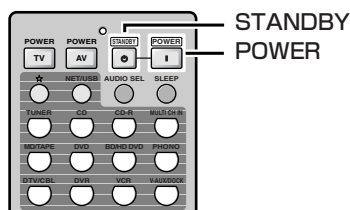
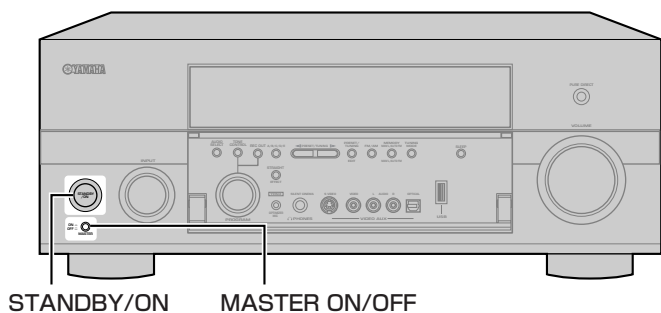
電源の入れかた

本体のMASTER ON/OFFスイッチを押して、ONにします。本体スイッチやリモコンキーで本機を操作できるようになります。

ご注意

フロントパネルディスプレイに「CHECK SP WIRES!」と表示された場合は、本機の電源を切り、すべてのスピーカーケーブルについて以下の事項をご確認ください。
- スピーカーケーブルがリアパネルに接触していないか。
- スピーカーケーブル同士が接触していないか。

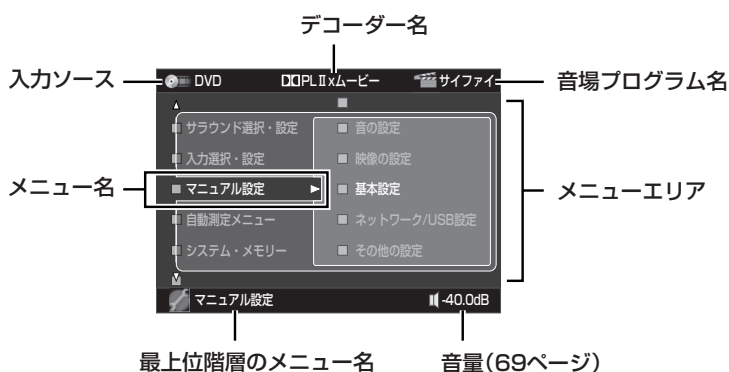
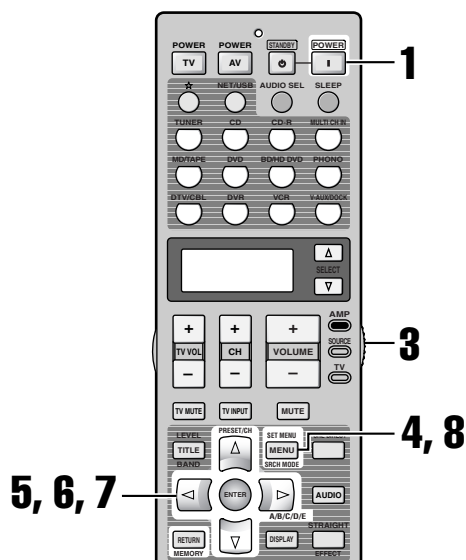
電源の切りかた

本体のMASTER ON/OFFスイッチを押して、OFFにします。電源がオフになり、本体スイッチやリモコンキーで本機を操作できなくなります。

オン／スタンバイの切り替えかた

本機の電源がオンのときにリモコンのSTANDBYキーを押すと、電源はスタンバイになります。また、電源がスタンバイのときにリモコンのPOWERキーを押すと、電源はオンになります。

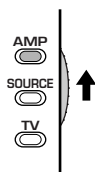
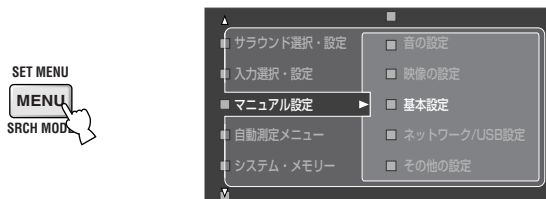
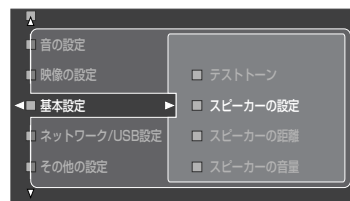
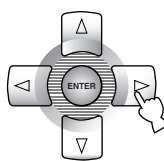
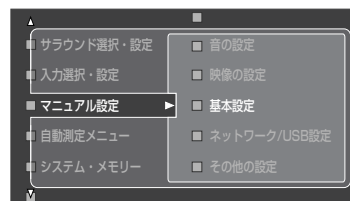
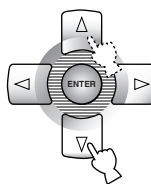
本体のSTANDBY/ONキーを押して、オン／スタンバイを切り替えることもできます。

テレビ画面を見ながら操作する

本機にテレビを接続すれば、メニュー画面や音場パラメーター・メッセージなどをテレビに表示できます。テレビ画面に表示されるセットメニューを見ながら本機を操作したり、設定を変更したりすることができます。

1 本機とテレビの電源を入れる

2 テレビの映像入力を切り替えて、本機の映像に合わせる

詳しくはテレビの取扱説明書をご覧ください。

3 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

4 SET MENUキーを押す

セットメニュー画面が表示されます。

ヒント

セットメニュー画面が表示されない場合は、以下のことをご確認ください。

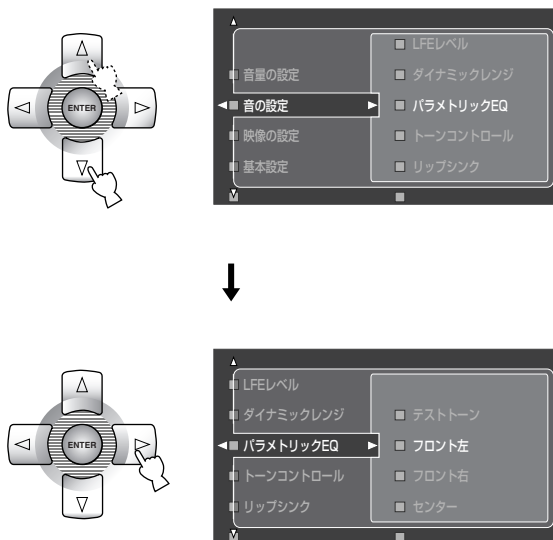
- 本機とテレビが正しく映像接続されている（37ページ）
- テレビの入力切替が正しく選択されている

5 △／▽キーを押して、設定するカテゴリーを選び、▷キーを押す

↓

選べるカテゴリーは以下のとおりです。

- 「サラウンド選択・設定」:
  音場プログラムの選択や、パラメーターの設定(99ページ)
- 「入力選択・設定」:
  入力ソースの選択や、ソースごとの設定(135ページ)
- 「マニュアル設定」:
  音声出力やスピーカーの設定など、本機のシステム設定(115ページ)
- 「自動測定メニュー」:
  YPAOによる自動システム設定(54ページ)
- 「システム・メモリー」:
  音声プログラムなどの設定の保存・呼び出し(138ページ)
- 「信号の情報」:
  信号情報の確認(144ページ)
- 「表示言語」:
  テレビ画面に表示する言語の選択(146ページ)

6 △ ／▽ キーを押して、設定するメニューを選び、▷キーを押す

メニューによっては、さらに△／▽／◁／▷キーでサブメニューを選ぶ必要があります。

7 △／▽／◁／▷／ENTERキーを繰り返し押して、選んだメニューの設定を変更する

8 変更し終わったら、SET MENUキーを押して終了する

テレビ画面の表示が消えます。

ご注意

本機とテレビをコンポーネントまたはHDMI接続せずに480p信号をコンポーネント入力した場合、テレビ画面は表示されません。

最適な視聴空間を自動的に設定する(自動測定メニュー)

本機に搭載の「YPAO(Yamaha Parametric Room Acoustic Optimizer)」により、ご使用になるスピーカーの配置、能力やお部屋の音響特性を測定し、最適な視聴空間を自動的に設定できます。スピーカーから出力されるテストトーンを、付属のマイク(オプティマイザーマイク)で拾い、自動的に測定、設定します。

ご注意

本機のPRE OUT端子に外部パワーアンプを接続している場合でも自動測定メニューによる設定は可能ですが、本機の出力レベルと接続したパワーアンプの出力レベルの差が大きい場合など、YPAOの補正範囲を超えてしまう場合は正しく設定できません。

測定の準備をする

自動測定メニューでは以下の測定をすることにより、最適な視聴空間を自動的に設定します。

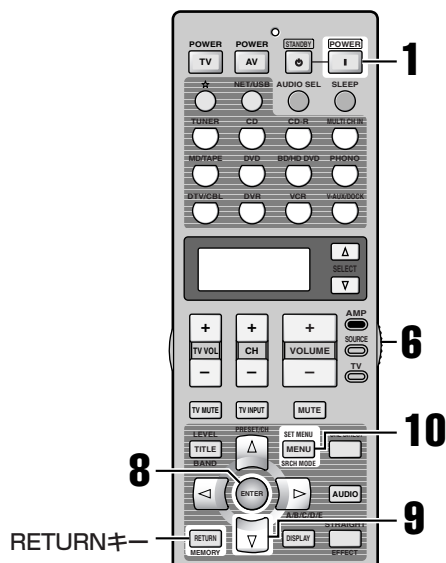
- **結線の確認**
  スピーカーの接続状態や極性をチェックします。
- **距離の補正**
  リスニングポジションから各スピーカーまでの距離の差を補正します。
- **大きさの判定**
  各スピーカーのサイズを設定します。
- **周波数補正**
  各スピーカーの周波数特性を補正します。
- **音量の調整**
  各スピーカーからの音量を調節します。

「周波数補正」について

周波数特性の補正には、周波数、レベル、Qファクターの3つのパラメーターがそれぞれ独立して可変するパラメトリックイコライザーを使用しています。これらのパラメーターの組み合わせにより、精度の高い周波数特性の補正を、YPAOで自動的に行うことができます。

正しく測定するために、測定を始める前に以下の事項をご確認ください。

□すべてのスピーカーおよびサブウーファーが正しく接続されているか
□テレビが正しく映像接続されているか
□ヘッドホンが取り外されているか
□リスニングルームや周囲の環境ができるだけ静かに保たれているか

測定する

ヒント

- セットメニューで設定中に前の画面に戻りたいときは、リモコンのRETURNキーを押します。
- 接続しているスピーカーの数やリスニングルームの環境により、測定にはおよそ30秒～3分かかります。

ご注意

- 測定中は大きなテストトーンが出ます。小さなお子様などをリスニングルームに立ち入らせないようご配慮ください。
- 各スピーカーとオプティマイザーマイクの間に、障害物がないか確認してください。障害物があると、正しく測定できない場合があります。
- 測定中に声を出したり、周囲の騒音が大きかったりすると、正しく測定ができなかったり、エラー表示が出たりする場合があります。測定中はなるべく静かにしてください。

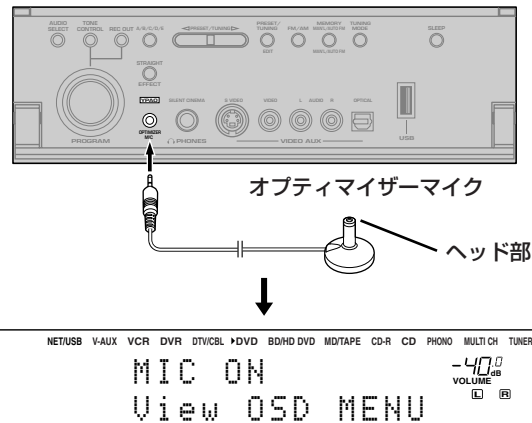
1 本機とテレビの電源を入れる

本機の電源について詳しくは、「電源をオン／スタンバイにする」(51ページ)をご覧ください。テレビの電源について詳しくは、テレビの取扱説明書をご覧ください。

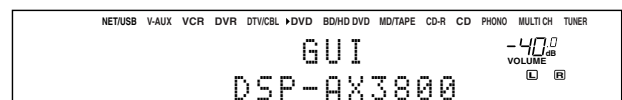
2 テレビの映像入力を切り替えて、本機の映像に合わせる

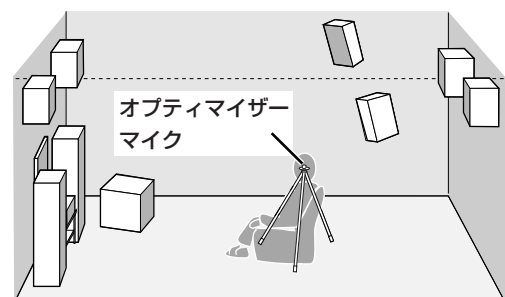
詳しくはテレビの取扱説明書をご覧ください。

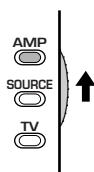
3 本機前面のOPTIMIZER MIC端子に、付属のオプティマイザーマイクを接続する

フロントパネルディスプレイ、およびテレビ画面は、以下のように表示されます。

ヒント

約3秒後にフロントパネルディスプレイ表示は以下のように変わります。自動測定メニューなどのメニューは、テレビ画面でのみ設定を変更できます。

NET/USB V-AUX VCR DVR DTV/CBL DVD BD/HD DVD MD/TAPE CD-R CD PHONO MULTI CH TUNER
GUI
DSP-AX3800

4 オプティマイザーマイクを視聴位置（リスニングポジション）に、ヘッド部を上に向けて耳と同じ高さに置く

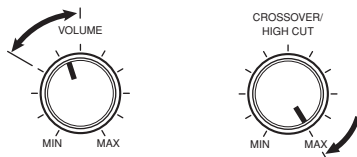
耳と同じ高さに設置するために三脚などを使うことをおすすめします。その場合は、三脚に付属のネジでオプティマイザーマイクを固定してください。

5 「スタート」が選ばれていることを確認する

6 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

7 以下のことを確認する

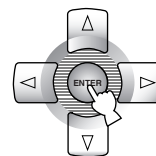
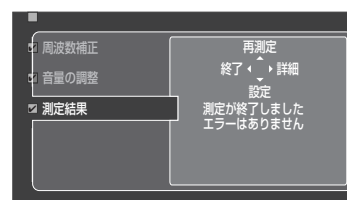
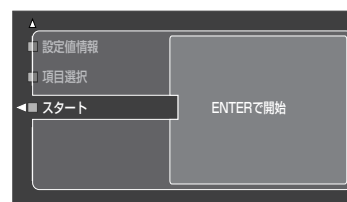
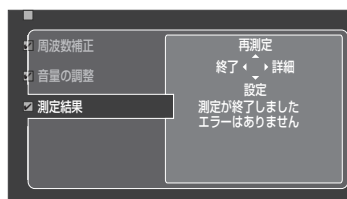
次の手順で測定を開始します。測定を開始する前に、以下の内容をご確認ください。

より正確な測定結果を得るため、測定中はリスニングルームの外で待機するか、測定を妨げない位置(オプティマイザーマイクから離れた位置など)に移動することをおすすめします。リスニングルームの中にいる場合は、測定が終わるまで物音を立てたり話したりしないでください。測定終了まで、約3分かかります。

サブウーファーについて

サブウーファーを接続している場合は電源を入れて、下図の位置(半分または半分よりやや小さめ)に音量を設定してください。
クロスオーバー周波数の設定機能がある場合は、クロスオーバー周波数を最大に設定してください。

ご注意
測定中は本機を操作しないでください。測定中に本機を操作すると、測定が中止されます。

8 ENTERキーを押す

測定を開始します。大きなテストトーンが各スピーカーから出力されます。

テレビ画面は下図のように変わります。手順の途中で測定を中止したい場合は、∆ キーを押してください。

以下の画面が表示されると、測定終了です。「E○○」と表示されている場合は、「エラーメッセージが表示された場合」(58ページ)をご覧ください。また、「W○」と表示されている場合は、「警告メッセージが表示された場合」(59ページ)をご覧ください。

- 測定をやり直す場合は、△キーを押して、「再測定」を選びます。
- 各項目の測定結果を確認する場合は、▷キーを押して、「詳細」を選びます。詳しくは、「結果を確認する」(60ページ)をご覧ください。
- 自動測定メニューから抜ける場合は、◁キーを押して、「終了」を選びます。「終了」を選ぶと、「最適化しますか？」というメッセージが表示されます。測定した値で設定して自動測定メニューから抜ける場合は「はい」を、設定せずに抜ける場合は「いいえ」を選びます。

9 ▽キーを押す

自動測定メニューで測定、最適化した視聴環境を適用します。テレビ画面に、自動測定メニューの初期画面が表示されます。

10 SET MENUキーを押す

自動測定メニューを終了します。テレビ画面の表示が消えます。

11 本機前面のOPTIMIZER MIC端子から、オプティマイザーマイクを取りはずす

オプティマイザーマイクは熱に弱いため、直射日光が当たる場所や、AV機器の上など、高温になる場所を避けて保管してください。

ヒント

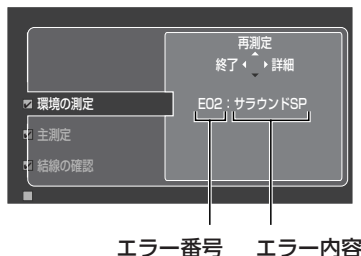
- 以下の場合は、もう一度自動測定メニューで設定しなおすことをおすすめします。
  - リスニングルームを変更した
  - リスニングポジションを変更した
  - スピーカーの設置位置を変更した
  - スピーカーの数を変更した
  - スピーカーを別のものに変更した
  - すべての設定を初期設定に戻した(149ページ)
- 手動で視聴環境を設定したい場合や、自動測定メニューでの設定値を変更したい場合、より細かい設定をしたい場合は、マニュアル設定を実施してください(115ページ)。
- 「項目を選んで測定する」で、測定する項目を選んで自動測定メニューを実施することもできます(61ページ)。
- 「設定値を以前の状態に戻す」で、以前実施した自動測定メニューの設定値に戻せます(63ページ)。

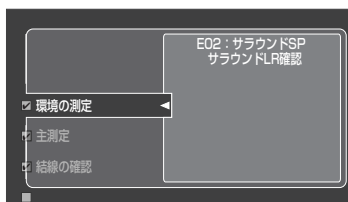
メモリー機能(SYSTEM MEMORY)について

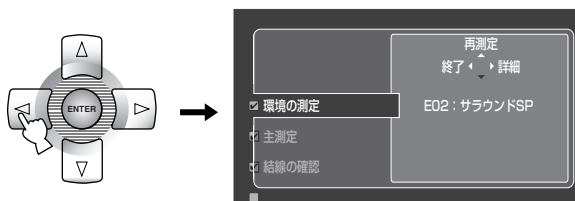
本機のメモリー機能を使えば、自動測定メニューによる複数の設定を記憶し、その中から、使い方や環境に応じて最適な設定を呼び出せます。メモリー機能について詳しくは、138ページをご覧ください。

エラーメッセージが表示された場合

「E○○：○○○○」と表示されている場合は、以下の手順で再測定することをおすすめします。

1 エラー番号とエラー内容を確認する

2 ▷キーを押す

より詳しいエラー内容が表示されます。エラー内容について詳しくは、「測定中のエラーメッセージ」をご覧ください(64ページ)。

3 問題を解決する

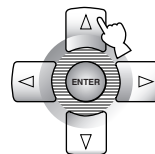
4 ◁キーを押す

ヒント

「E05:雑音大」が表示された場合は、▽キーを押せば、自動測定メニューを続行できます。

ご注意

「E10:内部エラー」が表示された場合、「再測定」は表示されません。

5 △キーを押す

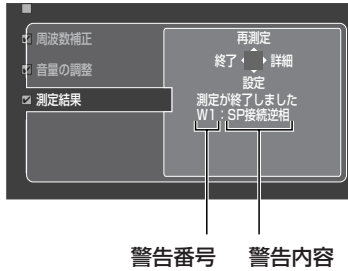
自動測定メニューの設定を始めからやり直します。

ヒント

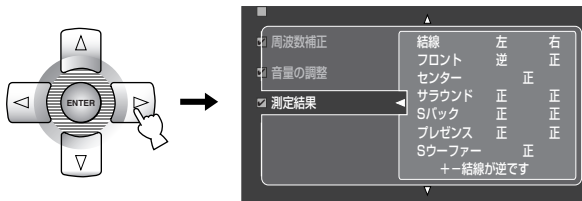
終了する場合は◁キーを押してください。

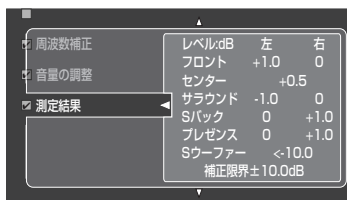
6 「測定する」の手順9(57ページ)から自動測定メニューを続行する

警告メッセージが表示された場合

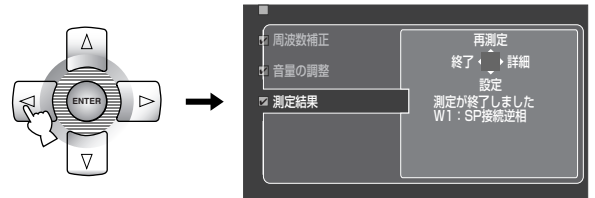
「結果は保障されません　再測定をお勧めします　W○：○○○○」と表示されている場合は、以下の手順で再測定することをおすすめします。

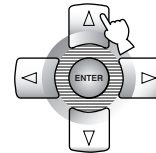
1 警告番号と警告内容を確認する

2 ▷キーを押す

より詳しい警告内容と、警告対象のスピーカーが表示されます。警告が2つ以上ある場合は、△／▽キーを押して表示内容を切り替えてください。

ヒント

- 警告対象のスピーカーは、赤色で表示されます。
- 接続しているサブウーファーの音量が大きすぎたり小さすぎたりすると、「レベル：ｄＢ」画面に「<-１０．０」または「>+10.0」、および「補正限界±10dB」と表示されます。このような場合は、サブウーファーの音量を調節してください。

3 表示されている問題を解決する

警告内容について詳しくは、「測定終了後の警告メッセージ」をご覧ください（65ページ）。

4 ◁キーを押す

5 △キーを押す

自動測定メニューで再度測定します。

ヒント

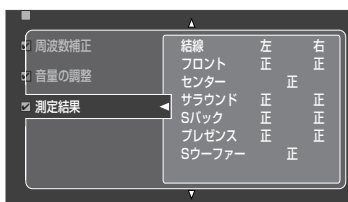
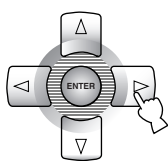
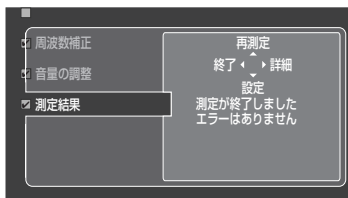
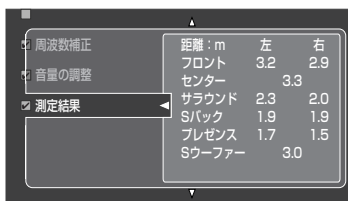
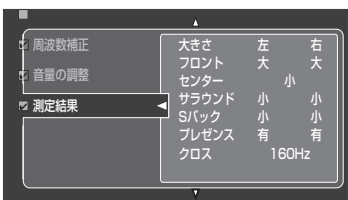
再測定せずに設定する場合は▽キーを、終了する場合は◁キーを押してください。

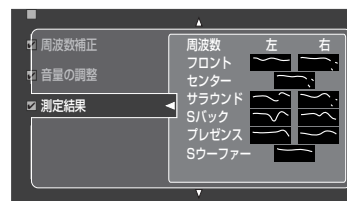
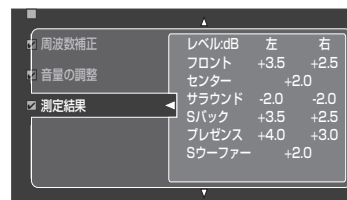
ご注意

▽キーを押して設定した場合、設定値は最適ではありません。

6 「測定する」の手順9（57ページ）から自動測定メニューを続行する

結果を確認する

すべての測定が終わると、「測定が終了しました」と表示されます。▷キーを押して測定結果の詳細を確認します。表示されている項目を切り替えるには△／▽キーを押してください。

スピーカーの接続状態や極性を表示します。

リスニングポジションからスピーカーまでの距離を表示します。

各スピーカーのサイズを表示します。

（プレゼンススピーカーは大小の区別がないので、「有」または「無」と表示されます。）

各スピーカーの周波数補正結果を表示します。

各スピーカーからの音量を表示します。

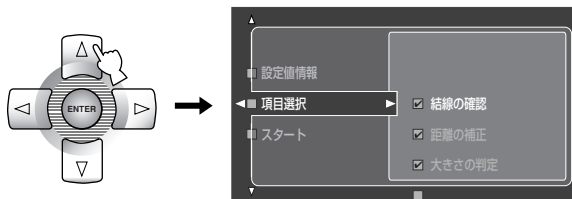
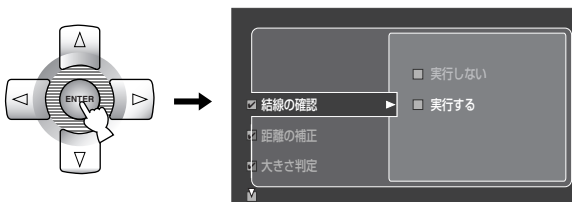
ご注意

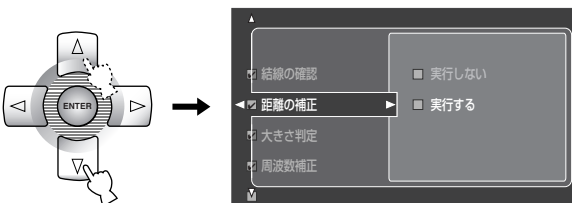
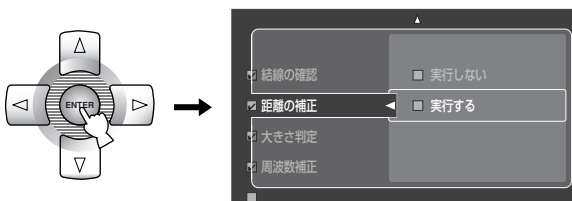
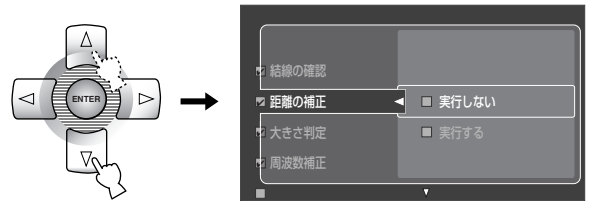
- 設定後は、「設定値情報」で設定値を確認することができます。
- より細かい設定をしたい場合は、マニュアルで各項目を設定することができます（115〜134ページ）。マニュアル設定後に、各項目の設定を自動測定メニューでの設定に戻したい場合は、「設定値情報」で戻せます。△／▽キーで戻したい項目を選び、ENTERキーを押してください。
- 「結線の確認」では、ご使用のサブウーファーに最適な位相を判断して、サブウーファーの位相を表示しています。また、この結果にしたがって、セットメニュー「スピーカーの設定」の「位相」の設定が自動的に変更されます（127ページ）。
- 視聴環境によっては、サブウーファー側での位相設定とは逆の結果が表示されることがあります。このような場合は、実際にお聴き比べのうえ、お好みの設定に変更してください。
- 「距離の補正」では、ご使用のサブウーファーの特性により、サブウーファーの設定値が実際の配置距離よりも長くなることがあります。また、外部アンプ使用時にも、各スピーカーの測定値が実際の配置距離よりも長くなることがあります。
- 「周波数特性」では、周波数をより精密に補正するため、同じ周波数帯域で違うレベル値が測定されることがあります。

項目を選んで測定する

結線、距離、大きさ、周波数特性、音量の中から、項目を選んで測定します。

1 「測定する」の手順4(55ページ)まで操作する

2 ∆キーを押して、「項目選択」を選ぶ

3 ENTERキーを押す

4 ∆／∇キーを押して、測定する項目を選ぶ

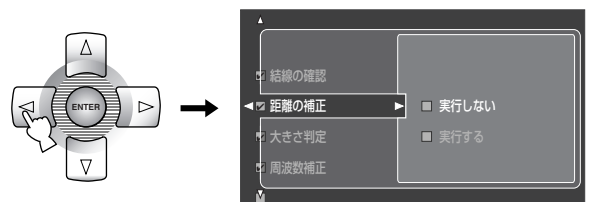
各項目の内容について詳しくは、「測定の準備をする」をご覧ください(54ページ)。

5 ENTERキーを押す

6 ∆／∇キーを押して、各測定項目を設定するかしないかを選ぶ

〈結線の確認、距離の補正、大きさ判定、音量の調整〉

実行する：　自動的に測定、設定します。
実行しない：測定、設定しません。

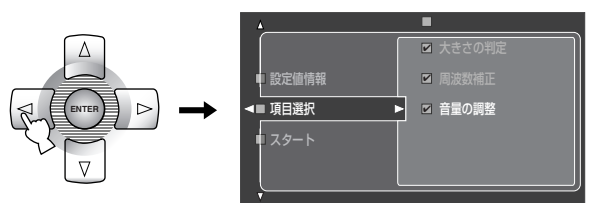
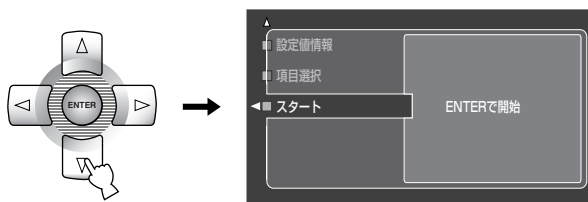
〈周波数補正〉

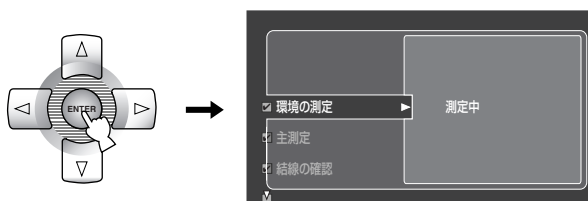
測定を行わない：測定、設定しません。
ナチュラル：　すべてのスピーカーの音質を、高域特性を下げた状態にそろえます。高域がきつく聞こえるときに設定してください。
フラット：　各スピーカーの特性を均一(フラット)にします。
フロントに近似：フロントL／Rスピーカーの特性に、各スピーカーの特性を合わせます。

7 ◁キーを押す

測定項目選択画面に戻ります。

8 手順4〜7を繰り返す

9 各項目の設定が終わったら◁キーを押して「項目選択」に戻る

接続が終わったら

10 ▽キーを押して、「スタート」を選ぶ

11 ENTERキーを押す

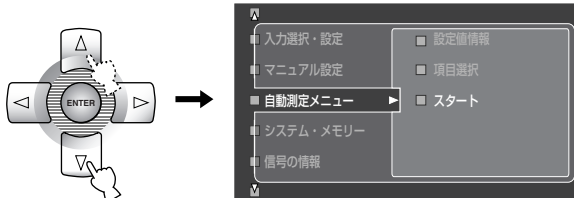
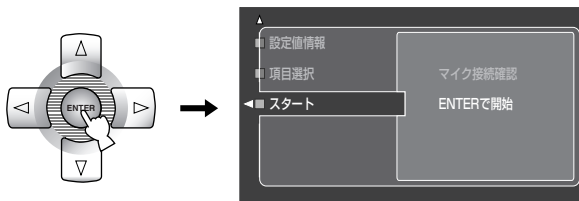
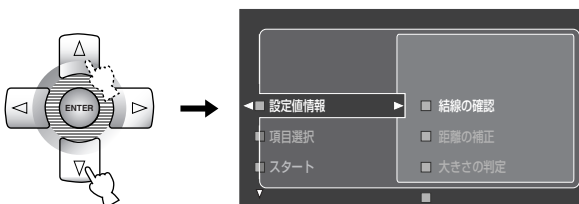
選んだ項目のみ測定を開始します。

12 「測定する」の手順9（57ページ）から操作を続ける

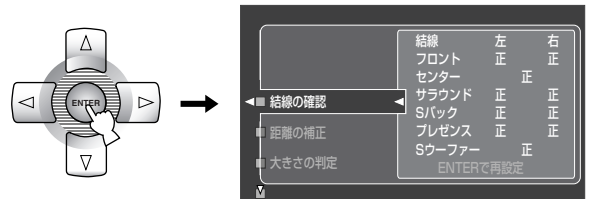
設定値を以前の状態に戻す

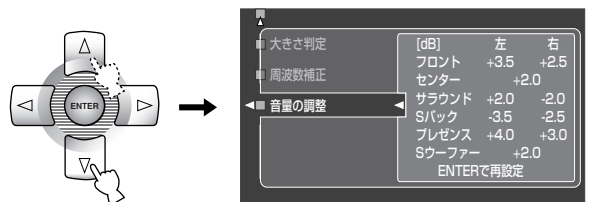
自動測定メニューで測定・設定してから、マニュアル設定(115～134ページ)で設定値を変更しても、前回測定・設定した自動測定メニューの値に戻せます。

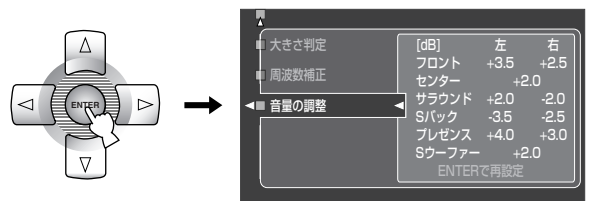
1 SET MENUキーを押す

テレビ画面にメニューが表示されます。

2 △ ／▽ キーを押して、「自動測定メニュー」を選ぶ

3 ENTERキーを押す

4 △／▽キーを押して、「設定値情報」を選ぶ

5 ENTERキーを押す

前回自動測定メニューで測定・設定した値が呼び出されます。

6 △／▽キーを押して、以前の状態に戻す項目を選ぶ

マニュアル設定で設定が変更されている項目は、「ENTERで設定」と表示されています。

7 ENTERキーを押す

前回自動測定メニューで測定・設定した値に戻ります。

8 SET MENUキーを押す

自動測定メニューを終了します。テレビ画面の表示が消えます。

表示メッセージについて

測定開始前の表示

エラーメッセージ	原因	対策
「マイク接続確認」	付属のオプティマイザーマイクが接続されていません。	本機前面のOPTIMIZER MIC端子に、オプティマイザーマイクを接続してください。
「HPを抜いてください」	ヘッドホンが接続されています。	本機前面のPHONES端子から、ヘッドホンを抜いてください。
「測定項目 未選択」	すべての項目を、「実行しない」に設定しています。	測定する項目を、「実行する」に設定してください。
「保護されています」	設定が保護されています。	セットメニュー「設定の保護」を「可変」に設定してください(133ページ)。

測定中のエラーメッセージ

エラー表示画面で「詳細」を選ぶと、各メッセージの詳細を表示することができます。各メッセージの内容を確認のうえ、「再実行」を選んで測定をやりなおしてください。

エラーメッセージ	原因	対策
「E01:フロントSP」	フロントL／Rスピーカーが検出されませんでした。	フロントL／Rスピーカーが正しく接続されているか確認してください。
「E02:サラウンドSP」	サラウンドL／Rスピーカーが片側しか検出されませんでした。	サラウンドL／Rスピーカーが正しく接続されているか確認してください。
「E03:プレゼンスSP」	プレゼンスL／Rスピーカーが片側しか検出されませんでした。	プレゼンスL／Rスピーカーが正しく接続されているか確認してください。
「E04:SBR→SBL」	サラウンドバックスピーカーを1本のみ接続している場合に、R側から検出されました。	サラウンドバックスピーカーを1本のみ接続する場合は、L側(SINGLE)端子に接続してください。
「E05:雑音大」	暗騒音(部屋の騒音)が大きすぎて、正確な測定ができません。	エアコンなど騒音を発生する機器の電源を一時的に切るか、遠ざけてみてください。
		周囲が静かな時間帯にやり直してみてください。
「E06:サラウンド確認」	サラウンドL／Rスピーカーが接続されておらず、サラウンドバックスピーカーだけが接続されています。	サラウンドバックスピーカーを使うときは、サラウンドL／Rスピーカーを接続する必要があります。正しく接続されているか確認してください。 後方にスピーカーを2台のみ接続する場合は、SURROUND L/R端子に接続してください。
「E07:マイク未接続」	測定の途中でオプティマイザーマイクが外れました。	本機前面のOPTIMIZER MIC端子に、オプティマイザーマイクを接続してください。
「E08:信号入力無し」	テストトーンが出ているにもかかわらず、オプティマイザーマイクがテストトーンを検知していません。	オプティマイザーマイクが正しく接続されているか確認してください。
		各スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
「E09:測定キャンセル」	音量の調節や消音などの操作をしたため、測定をキャンセルしました。	測定の精度が落ちるため、測定中は音量を変えないでください。
「E10:内部エラー」	アンプ内部のエラーが発生しました。	測定を再実行してください。

測定終了後の警告メッセージ

測定は終了しましたが、測定値に問題がある可能性がある場合に表示されます。各メッセージの内容をご確認のうえ、「再測定」を選んで測定をやりなおすことをおすすめします。

警告メッセージ	原因	対策
「W1:SP接続逆相」	表示されたスピーカーの極性が、逆に接続されています。	スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
		スピーカーによっては、正しく接続してもこの表示が出ることがあります。接続が正しければ、このエラーメッセージが出ても設定は正常に終了しています。
「W2:距離補正限界」	表示されたスピーカーとリスニングポジションとの距離が、24m以上あります。	スピーカーの設置場所を確認してください。
「W3:音量補正限界」	各チャンネル間の音量差が大きすぎて、補正ができません。	スピーカーの設置場所を確認してください。
		スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
		なるべく近い性能のスピーカーを使用することをおすすめします。
		サブウーファーの音量を調節してください。
「W4:SPの不一致」	各スピーカーの設定内容と測定結果が異なります(「結線の確認」を実行しなかった場合のみ表示されます)。	スピーカーが正しく接続されているか確認してください。

基本的な再生のしかた

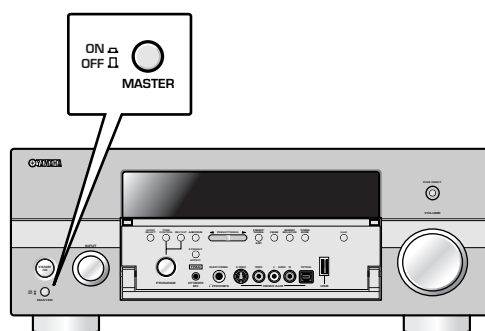
DVDプレーヤーを例に、基本的な再生のしかたを説明します。DVDプレーヤー以外の機器を再生する場合も、手順5で機器を選べばDVDプレーヤーと同様に再生できます。「こんなときは」(69ページ)も合わせてご覧ください。

DTS LD/DTS CD音声の再生について

DTS信号は、デジタルビットストリームで伝送されるため、DTS信号をデジタルで録音したものをデコーダーを通さずに再生するとノイズだけが再生されます。

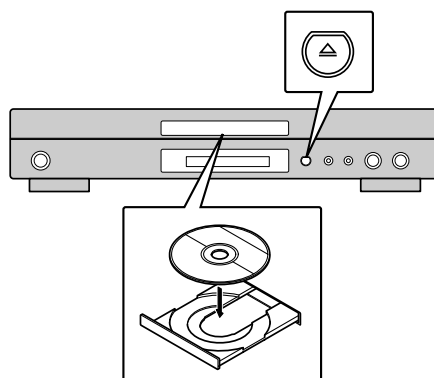
DTS LD/DTS CDを再生する場合は、セットメニュー「デコードモード」を「DTS固定」に設定してください(136ページ)。

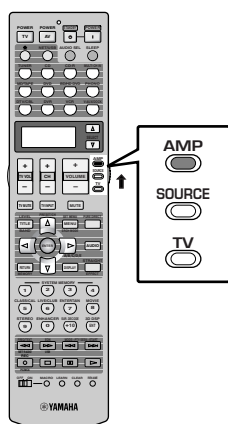
1 本機の電源をオンにする

本体のMASTER ON/OFFスイッチを押して、ONにします。

2 テレビの電源をオンにする

詳しくはテレビの取扱説明書をご覧ください。

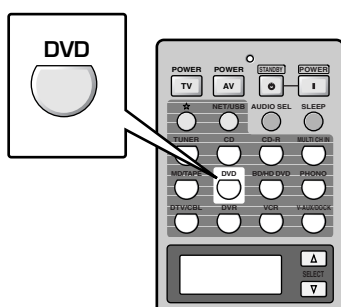
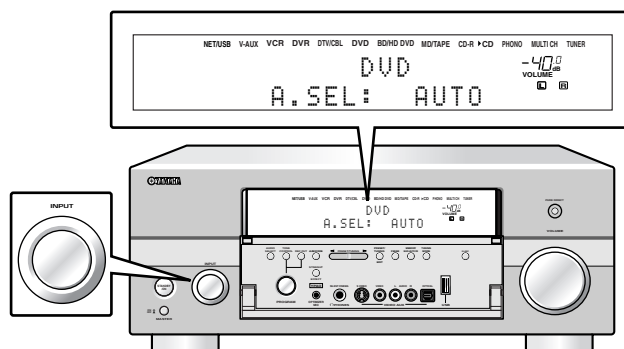
3 DVDプレーヤーを準備する

詳しくはDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

4 リモコンの操作モードを切り替える

操作機器選択スイッチをスライドさせて「AMP」を選びます。

操作モードの切り替えは、本機をリモコンで操作する上でとても重要な操作です。操作しようとしても本機が動かなかったり、ほかの機器が動いたりする場合は、操作機器選択スイッチの位置が「SOURCE」や「TV」になっている場合があります。本機を操作するときは、かならず操作機器選択スイッチの位置が「AMP」になっていることをご確認ください。

5 本体の入力を切り替える

リモコンの入力選択キーを押す、または本体のINPUTセレクターを回して、DVDを選びます。入力を切り替えると、フロントパネルディスプレイに選んだ入力の名前と入力モードが（108ページ）数秒間表示されます。

リモコンの操作

本体の操作と表示

・FM／AM放送を選ぶ
　→TUNERキー
・CDプレーヤーを選ぶ
　→CDキー
・CDレコーダーを選ぶ
　→CD-Rキー
・アナログマルチチャンネル入力端子を持つ機器を選ぶ
　→MULTI CH INキー
・MD／カセットデッキを選ぶ
　→MD/TAPEキー
・ブルーレイディスクプレーヤー／HD DVDプレーヤーを選ぶ
　→BD/HD DVDキー
・レコードプレーヤーを選ぶ
　→PHONOキー
・デジタルテレビチューナー／ケーブルテレビチューナーを選ぶ
　→DTV/CBLキー
・DVDレコーダーを選ぶ
　→DVRキー
・ビデオデッキを選ぶ
　→VCRキー
・補助入力に接続した機器／ヤマハ製ドックを選ぶ
　→V-AUX/DOCKキー

6 テレビの入力を本機の映像に切り替える

例えば、本機がテレビのビデオ入力端子2に接続されている場合はビデオ入力2を選びます。詳しくはテレビの取扱説明書をご覧ください。

7 再生を始める

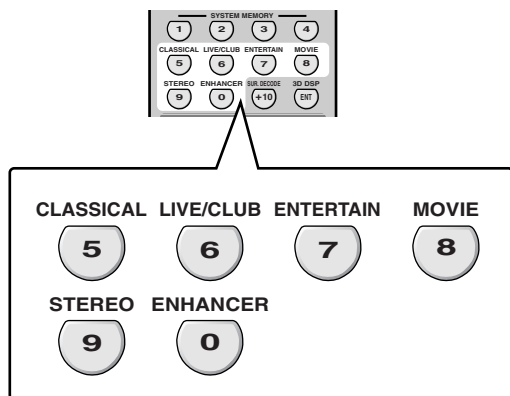
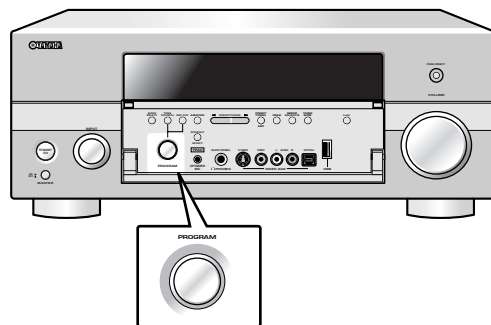
詳しくはDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

「入力信号を切り替える」(108ページ)で、入力する音声信号の種類を選べます。

8 音場プログラムを選ぶ

お好みの音場プログラムを呼び出して、臨場感と効果をお楽しみください。リモコンの音場プログラムキーを押してお好みの音場プログラムを選びます。
本体のPROGRAMセレクターを回して音場プログラムを選ぶこともできます。

リモコンの操作

CLASSICAL 5　LIVE/CLUB 6　ENTERTAIN 7　MOVIE 8
STEREO 9　ENHANCER 0

おすすめ

以下は映画を見るとき、音楽を聴くときにおすすめの音場プログラムです。なお、それぞれの音場の特長など、詳しくは「音場プログラムについて」(88ページ)をご覧ください。

・映画を見るとき
→MOVIE
→ENTERTAINMENT

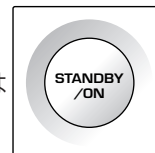
・音楽を聴くとき
→CLASSICAL　→STEREO
→LIVE/CLUB　→MUSIC ENHANCER

・音の大きさを調節するには?(69ページ)
・本機の使用を終了するには?(69ページ)
・リモコンコードを設定すると、本機のリモコンで、お使いの外部機器を操作することができます。詳しくは「本機のリモコンで本機以外の機器を操作する」154ページをご覧ください。

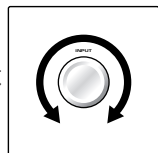
こんなときは・・・

●使い終わった！

STANDBYキー、または本体のSTANDBY/ONスイッチを押すと、本機の電源をスタンバイ状態にすることができます。

本体では

●DVDプレーヤー以外の機器を再生したい！

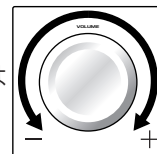
入力選択キーを押して、再生する機器を選びます。たとえば、CDプレーヤーを再生するときは、CDキーを押すか、本体のINPUTセレクターを回して「CD」を選びます。

本体では

●本機のリモコンで他の機器を操作したい！

リモコンコードを設定すれば、本機のリモコンでテレビなど他の機器を操作できます。詳しくは154ページをご覧ください。

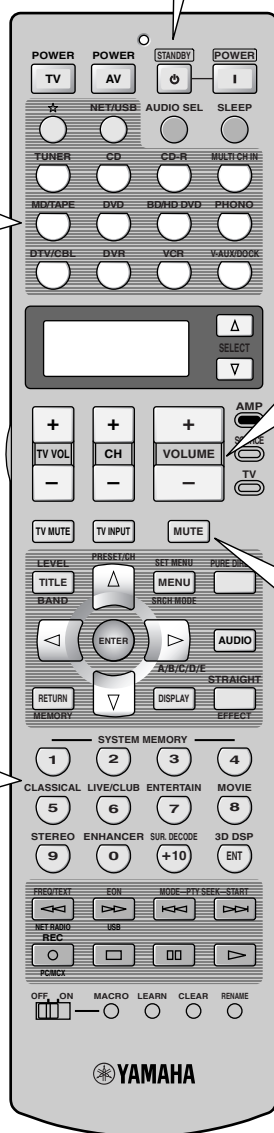
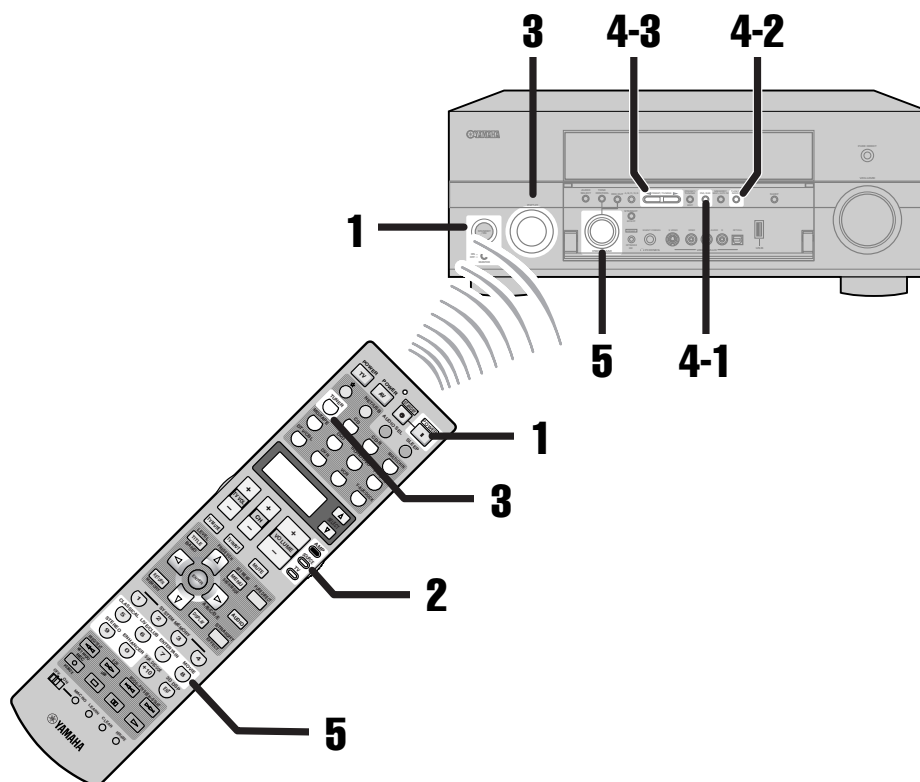
●音の大きさを調節したい！

VOLUME+／−キーを押します。または本体のVOLUMEコントロールを回します。

本体では

●一時的に音を下げたい！(消音)

MUTEキーを押します。もう一度MUTEキーを押すと元の音量に戻ります。

お知らせ

- 消音中は、本体ディスプレイに「AUDIO MUTE ON」と表示され、MUTEインジケーターが点滅します。
- VOLUMEキーを押しても消音は解除されます。
- セットメニュー「音量の設定」の「ミューティング量」で下げる音量を選べます。詳しくは117ページをご覧ください。

FM ／ AM 放送を聴く

1　本機の電源を入れます

2　リモコンの操作モードを切り替えます

操作機器選択スイッチをスライドさせて、「AMP」を選びます。

3　本機の入力をTUNERに切り替えます

入力を切り替えると、フロントパネルディスプレイに「TUNER」と数秒間表示されます。

4　放送局を選びます

＜自動的に選局する場合（オート選局）＞

4-1.FM/AM キーを押して、FM または AM を選ぶ

4-2.TUNING MODE（AUTO/MAN'L）キーを押して、フロントパネルディスプレイに AUTO インジケーターを点灯させる

4-3.PRESET/TUNING⊲／⊳キーを押して、受信したい放送局を選ぶ

＜手動で選局する場合（マニュアル選局）＞

4-1.FM/AM キーを押して、FM または AM を選ぶ

4-2.TUNING MODE（AUTO/MAN'L）キーを押して、フロントパネルディスプレイの AUTO インジケーターを消す

4-3.PRESET/TUNING⊲／⊳キーを押して、受信したい放送局を選ぶ。

5　音場プログラムを選びます

おすすめ

以下は音楽を聴くときにおすすめの音場プログラムです。なお、それぞれの音場の特長については 88 ページをご覧ください。

・音楽を聴くとき

→ CLASSICAL　　→ STEREO

→ LIVE/CLUB　　→ MUSIC ENHANCER

ヒント 音の大きさを調節するには？（69 ページ）

こんなときは・・・

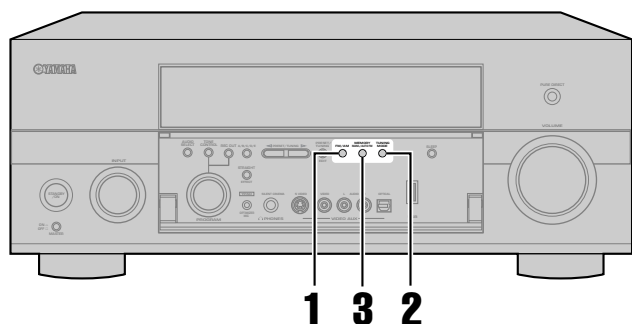
●雑音が入って聴きづらい！

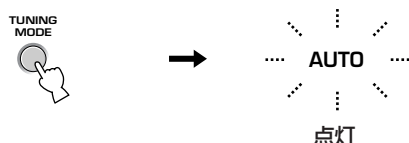
アンテナの高さや方向、接続などを確認してください。詳しくは 49 ページをご覧ください。

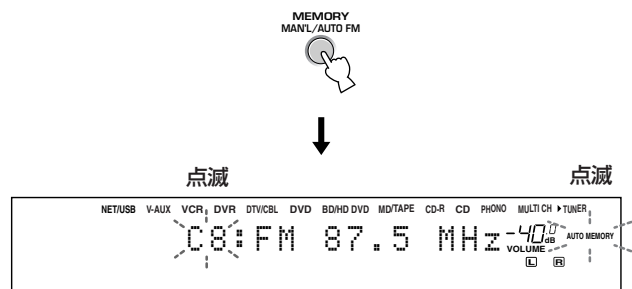
●放送局を登録したい！

お好みの放送局を登録することにより、簡単に放送局を呼び出せます。詳しくは 71 ～ 73 ページをご覧ください。

FM放送局を自動登録する（オートプリセット）

FM放送局を自動的に40局(8局×5グループ：A1からE8)まで登録(プリセット)できます。放送局を登録しておけば、あとは簡単なキー操作で選局できます。

1 FM/AMキーを押して、FMを選ぶ

2 TUNING MODEキーを押して、ディスプレイにAUTOインジケーターを点灯させる

3 MEMORY(MAN' L/AUTO FM)キーを約3秒押し続ける

プリセット番号とMEMORYインジケーター、AUTOインジケーターが点滅します。 数秒後に、周波数の低い方から放送局を探し始め、自動的に登録していきます。オートプリセットが終了すると、最後に登録された放送局の周波数が表示されます。

ヒント

- 放送局が登録されると、放送局の周波数と受信モードも同時に登録されます。
- FM局の登録を始めるプリセット番号を指定したり、周波数の高い方から低い方へ向けて、自動登録を始めたりすることもできます（下記参照）。
- 登録されたFM放送局の順序を、あとから手動で入れ替えることもできます（74ページ）。
- プリセットする放送局の数が40（A1～E8）に満たない場合は、全周波数帯域を一巡して停止します。

ご注意

- 同じプリセット番号に新しい放送局を登録すると、前に登録されていた放送局は消え、新しい放送局に入れ替わります。
- オートプリセットでは、電波の強いFM放送局だけが登録されます。電波の弱いFM放送局を登録したいときは、手動で登録してください（72ページ）。

登録を始めるプリセット番号を指定する場合

左に記載の「FM放送局を自動登録する（オートプリセット）」の手順3でMEMORY（MAN' L/AUTO FM）キーを約3秒間押したあと、A/B/C/D/EキーとPRESET/TUNING⊲／⊳キーを使って、最初に登録するプリセット番号を選びます。

数秒後に、選んだプリセット番号から登録を始めます。

放送局がE8まで登録されると、オートプリセットが停止します。

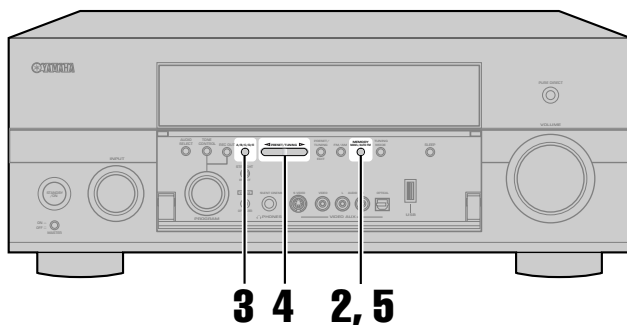
周波数の高い方から低い方に向けて登録する場合

左に記載の「FM放送局を自動登録する（オートプリセット）」の手順3でMEMORY（MAN' L/AUTO FM）キーを約3秒間押したあと、PRESET/TUNING（EDIT）キーでコロン（：）を消してから、PRESET/TUNING⊲キーを押します。

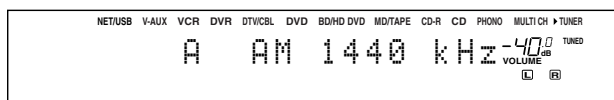
周波数の高い方から放送局を探し始め、自動的に登録していきます。

AM放送局は手動で登録してください。

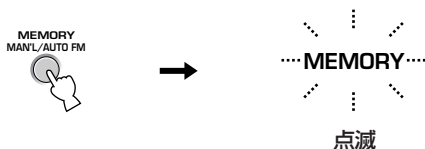
手動で登録する（マニュアルプリセット）

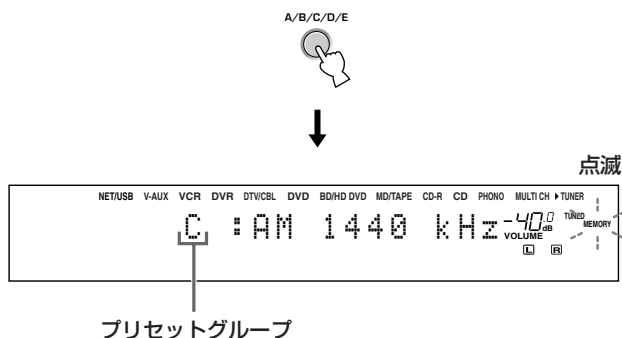
放送局を最大40局まで、手動で登録することもできます。

1 プリセットしたい放送局を選局する

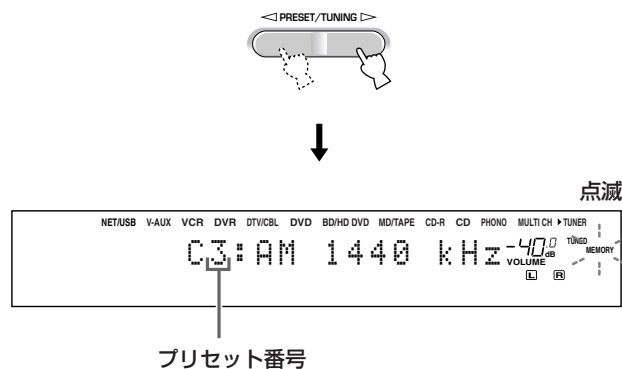
詳しくは70ページをご覧ください。

NET/USB V-AUX VCR DVR DTV/CBL DVD BD/HD DVD MD/TAPE CD-R CD PHONO MULTI CH ▸TUNER
A AM 1440 kHz -40.0dB VOLUME TUNED

フロントパネルディスプレイに、受信している局の周波数と放送バンド（「FM」または「AM」）が表示されます。

2 MEMORY(MAN' L/AUTO FM)キーを押す

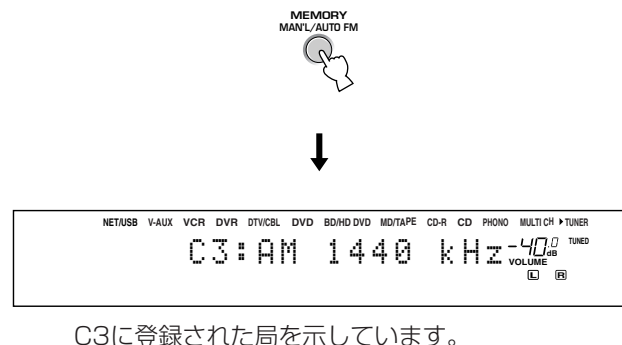
放送局が登録できる状態になります。ディスプレイのMEMORYインジケーターが約5秒間点滅します。

3 MEMORYインジケーターの点滅中にA/B/C/D/Eキーを押して、プリセットグループ（A～E）を選ぶ

グループが表示されます。放送バンド表示の隣にコロン(:)が点灯していることを確認してください。

4 MEMORYインジケーターの点滅中にPRESET/TUNING⊲／⊳キーを押して、プリセット番号（1～8）を選ぶ

⊳キーを押すと数が大きくなり、⊲キーを押すと小さくなります。

5 MEMORYインジケーターの点滅中に、MEMORY(MAN' L/AUTO FM)キーを押す

選択したプリセットグループ、プリセット番号と放送バンド（「FM」または「AM」）、周波数がディスプレイに表示されます。

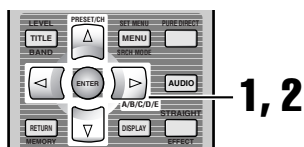
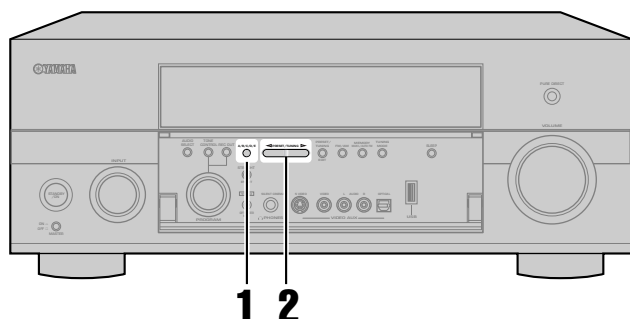
NET/USB V-AUX VCR DVR DTV/CBL DVD BD/HD DVD MD/TAPE CD-R CD PHONO MULTI CH ▸TUNER
C3:AM 1440 kHz -40.0dB VOLUME TUNED

C3に登録された局を示しています。

6 他の放送局を続けて登録するときは、手順1～5を繰り返す

ご注意

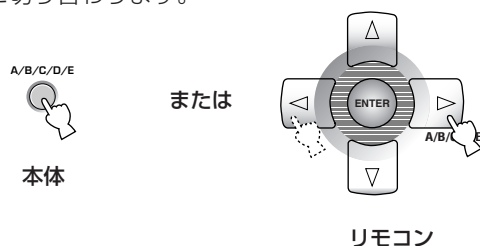
- 同じプリセット番号に新しい放送局を登録すると、前に登録されていた放送局は消え、新しい放送局に入れ替わります。
- 新しい放送局を登録すると、放送局の周波数と受信モード（ステレオ／モノラル）も同時に登録されます。

登録した放送局を選んで聴く（プリセット選局）

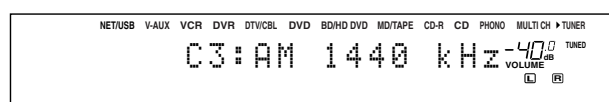
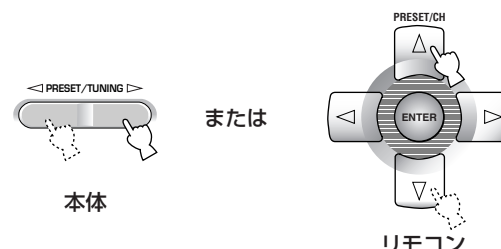
プリセット番号を選ぶだけで、登録した放送局を選局できます。

ご注意

リモコンで操作する場合は、操作機器選択スイッチをSOURCEに設定し、TUNERキーを押して、リモコンの機能をチューナー操作用に切り替えてから操作してください。

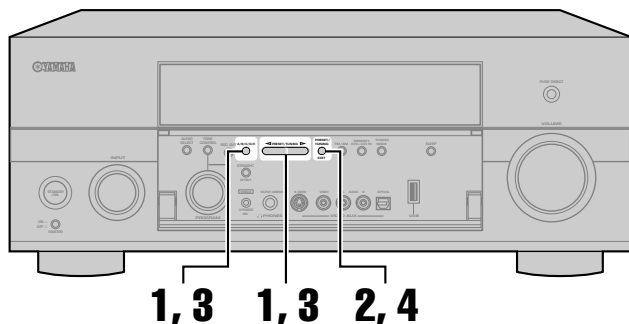
1 本体のA/B/C/D/Eキー（またはリモコンのA/B/C/D/E◁／▷キー）を何回か押して、放送局をプリセットしたグループを選ぶ

フロントパネルディスプレイに表示されるプリセットグループはA/B/C/D/E（A/B/C/D/E◁／▷）キーを押すたびに切り替わります。

2 本体のPRESET/TUNING◁／▷キー（またはリモコンのPRESET/CH△／▽キー）を押して、プリセット番号を選ぶ

プリセットグループとプリセット番号が、放送バンド（「FM」または「AM」）と周波数とともにディスプレイに表示され、TUNEDインジケーターが点灯します。

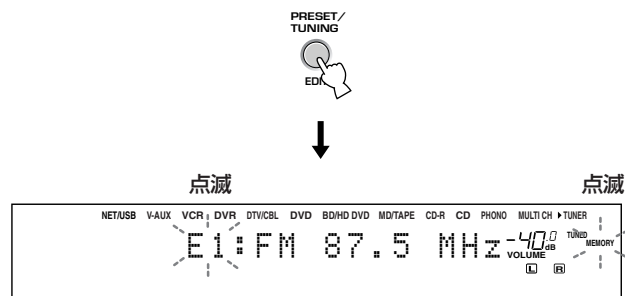
NET/USB V-AUX VCR DVR DTV/CBL DVD BD/HD DVD MD/TAPE CD-R CD PHONO MULTI CH TUNER
C3:AM 1440 kHz -40.0dB VOLUME TUNED

- プリセット番号は、プリセット番号キー（1～8）でも選べます。
- 自動的に選局するオート選局と、手動で選局するマニュアル選局については、70ページをご覧ください。

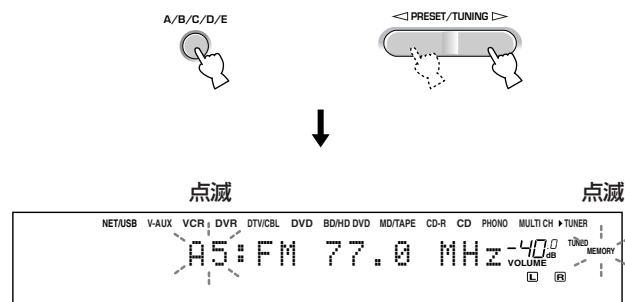
登録した放送局を入れ替える

登録した放送局を入れ替えることもできます。
ここでは「E1」に登録した放送局を「A5」に、「A5」の放送局を「E1」に変更する場合の手順を説明します。

1 「E1」に登録した放送局を、A/B/C/D/EキーとPRESET/TUNING ◁／▷キーを使って選局する

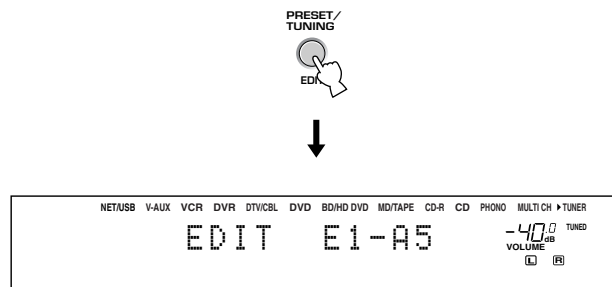
詳しくは、「登録した局を選んで聴く（プリセット選局）」をご覧ください（73ページ）。

2 PRESET/TUNING（EDIT）キーを約3秒間押す

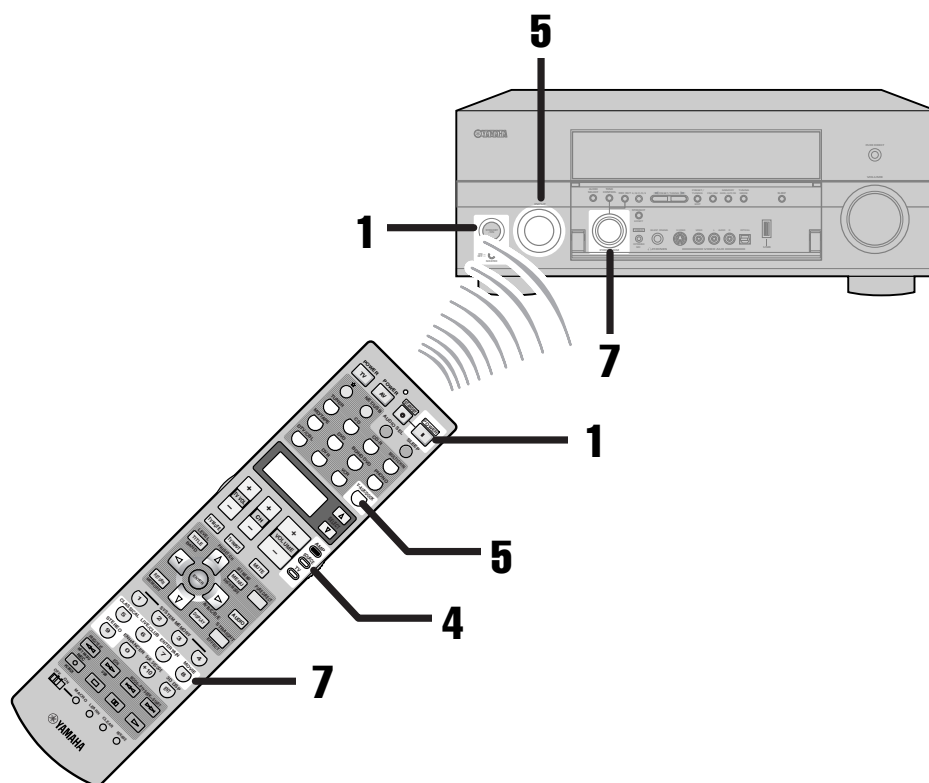
フロントパネルディスプレイのMEMORYインジケーターと「E1」が点滅します。

3 「A5」に登録した放送局を、A/B/C/D/EキーとPRESET/TUNING ◁／▷キーを使って選局する

フロントパネルディスプレイのMEMORYインジケーターと「A5」が点滅します。

4 PRESET/TUNING（EDIT）キーを押す

プリセット局が入れ替わります。

EDIT E1-A5

プリセットした局の入れ替えが完了したことを示しています。

iPodを再生する

ヒント

本機では、ヤマハ製ドック(別売YDS-10など)にセットしたiPod(クリックホイール、nano、mini)の再生を楽しめます。

1 本機の電源を入れます

2 iPodをヤマハ製ドック(別売YDS-10など)にセットします

3 iPodの電源を入れます

詳しくはiPodの取扱説明書をご覧ください。

4 リモコンの操作モードを切り替えます

操作機器選択スイッチをスライドさせて、「AMP」を選びます。

5 本機の入力をV-AUX/DOCKに切り替えます

フロントパネルディスプレイに、「DOCK」と数秒間表示されます。

6 再生を始めます

詳しくは76〜77ページをご覧ください。

ご注意

iPodの種類やソフトウェアのバージョンにより、一部の機能が使えない場合があります。

7 音場プログラムを選びます

おすすめ

以下は音楽を聴くときにおすすめの音場プログラムです。なお、それぞれの音場の特長については88ページをご覧ください。

・音楽を聴くとき

→CLASSICAL　→STEREO

→LIVE/CLUB　→MUSIC ENHANCER

・音の大きさを調節するには?(69ページ)
・セットメニュー「スタンバイ時の充電」で、ヤマハ製ドック(別売YDS-10など)にセットしたiPodの充電モードを設定できます。詳しくは132ページをご覧ください。
・セットメニュー「スクロール表示」で、再生されている曲の名前が14文字を超える場合のフロントパネルディスプレイの表示方法を設定できます。詳しくは132ページをご覧ください。

ノーマルモードで再生する

リアパネルのDOCK端子に接続したヤマハ製ドック（別売YDS-10など）にiPodをセットすると、ノーマルモードに入ります。ノーマルモードでは、テレビ画面を表示させずに、以下の基本的な操作をすることができます。

・再生
・停止
・巻戻し
・早送り
・スキップ
・一時停止

ヒント

iPod本体でも操作できます。

操作機器選択スイッチをスライドさせて「SOURCE」を選び、V-AUX/DOCKキーを押してから操作してください。

メニュー表示モードで再生する

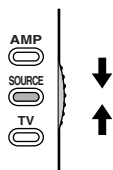
テレビ画面に表示されるメニュー画面を見ながら、基本的な操作をしたり、お好みに合わせて設定を変更したりすることができます。また、コンテンツの情報を見たり、本機の動作状況などを確認したりすることもできます。
操作にはリモコンを使用します。リモコンでの操作内容について詳しくは、「iPodを操作する」（159ページ）をご覧ください。

ヒント

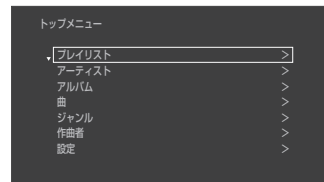
メニュー表示モードで操作中に1つ前の画面表示に戻りたい場合は、リモコンのMENUキーまたは◁キーを押します。

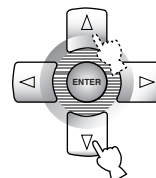
ご注意

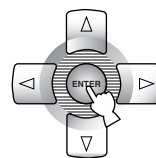
- 映像系のファイルはメニュー表示モードで選択できません。ノーマルモードで再生してください。
- 本機が認識できない文字は「＿」（アンダーバー）で表示されます。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、SOURCEを選ぶ

2 V-AUX/DOCKキーを押す

3 DISPLAYキーを押す

iPod再生メニューがテレビ画面に表示されます。

プレイリスト
アーティスト
アルバム
曲
ジャンル
作曲者
セットアップメニュー

4 △／▽ キーを繰り返し押して、設定したいメニューを選ぶ

5 ENTERキーを押す

選んだメニューに入ります。

・プレイリスト → 曲
・アーティスト → アルバム → 曲
・アルバム → 曲
・曲
・ジャンル → アーティスト → アルバム → 曲
・作曲者 → アルバム → 曲
・設定 → シャッフル、リピート

■シャッフル

曲やアルバムの順番をランダムに再生します。

オフ：ランダム再生しません
曲：曲の順番をランダムに再生します
アルバム：アルバムの順番をランダムに再生します

ヒント

「曲」または「アルバム」を選んでいるときは、テレビ画面右上に「⤮」が表示されます。

■リピート

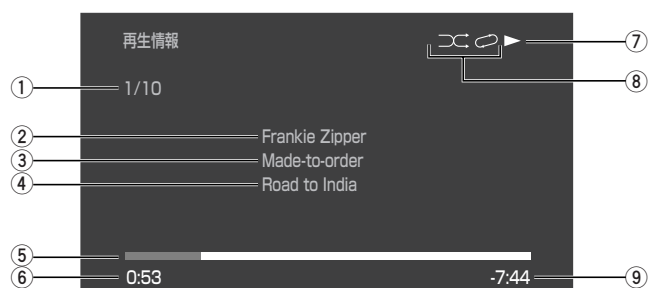
曲やアルバムを繰り返し（リピート）再生します。

オフ：リピート再生しません
曲：選んだ曲をリピート再生します
全曲：すべての曲をリピート再生します

ヒント

「曲」または「全曲」を選んでいるときは、テレビ画面右上に「🔁」または「🔂」が表示されます。

6 メニュー表示モードを終了するときは、DISPLAYキーを押す

■再生情報画面表示について

① トラック番号／トラック数
② アーティスト名
③ アルバム名
④ 曲名
⑤ 進捗表示
⑥ 経過時間
⑦ ▶（再生）、❚❚（一時停止）、▶▶（早送り）、◀◀（巻き戻し）
⑧ シャッフル／リピート表示
⑨ 残り時間

■iPod接続時のメッセージについて

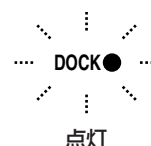
本機に接続したヤマハ製ドック（別売YDS-10など）にiPodをセットし、V-AUX/DOCKを入力選択しているときに、フロントパネルディスプレイに表示されるメッセージの一覧です。

メッセージ	内容
Loading...	iPodとの接続を確認中です。 iPodから情報を取得中です。
Connect error	iPodが正しく接続されていません。 iPodとの通信に問題が発生しています。
Unknown iPod	本機に対応していない種類のiPodが接続されています。
iPod connected	iPodがヤマハ製ドックに正しく接続されました。
Disconnected	iPodがヤマハ製ドックから取り外されました。
Unable to play	何らかの原因で再生できません。

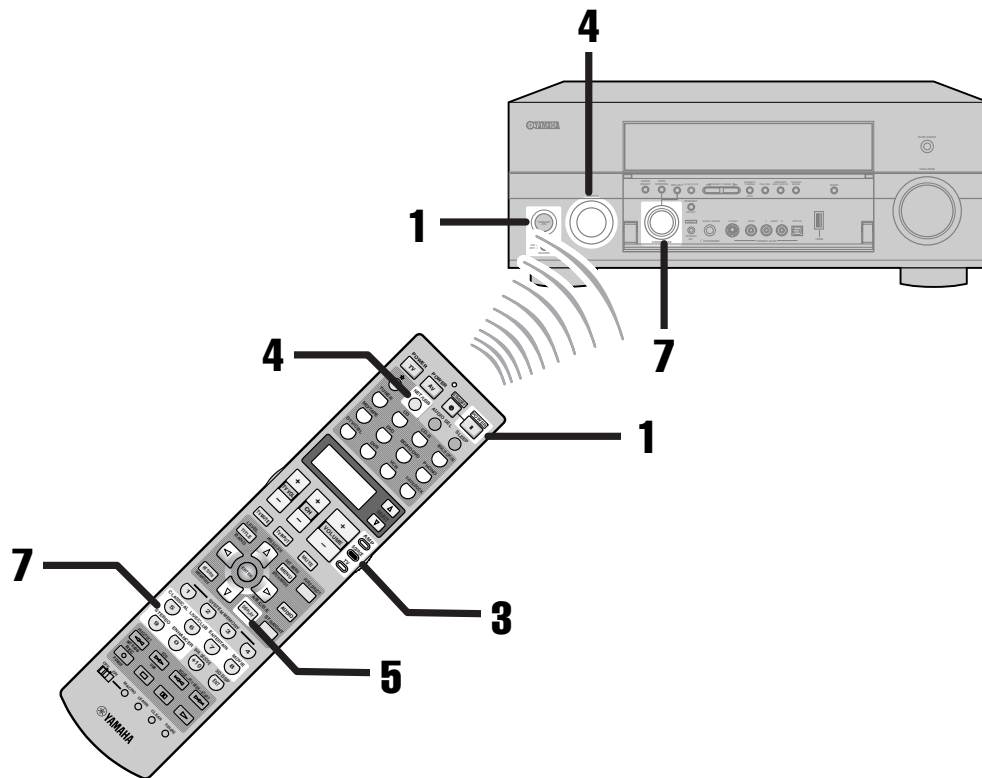
■iPodの充電について

本機に接続したヤマハ製ドック（別売YDS-10など）にiPodをセットしているときは、本機でiPodを充電できます。本機の電源がオンのときは、常に充電状態になります。
本機がスタンバイのときも、セットメニュー「スタンバイ時の充電」（132ページ）で、充電モードを設定できます。「スタンバイ時の充電」を「自動」に設定し、スタンバイ中にiPodを充電しているときは、DOCKインジケーターおよび右側の「●」が点灯します。充電が終了すると、自動的に消灯します。

点灯

ヒント

iPodからの充電情報が取得できない場合は、約4時間後に自動的に充電を終了し、インジケーターが消灯します。

基本的な再生のしかた

ネットワークオーディオ／USBデバイスの再生を楽しむ

1 本機の電源を入れます

2 パソコンやUSBデバイスの準備をします

3 リモコンの操作モードを切り替えます

操作機器選択スイッチをスライドさせて、SOURCEを選びます。

4 本機の入力を切り替えます

本体ディスプレイに、「NET/USB」と数秒間表示されます。

5 GUI画面を表示します

6 再生を始めます

詳しくは79～83ページをご覧ください。

7 音場プログラムを選びます

おすすめ

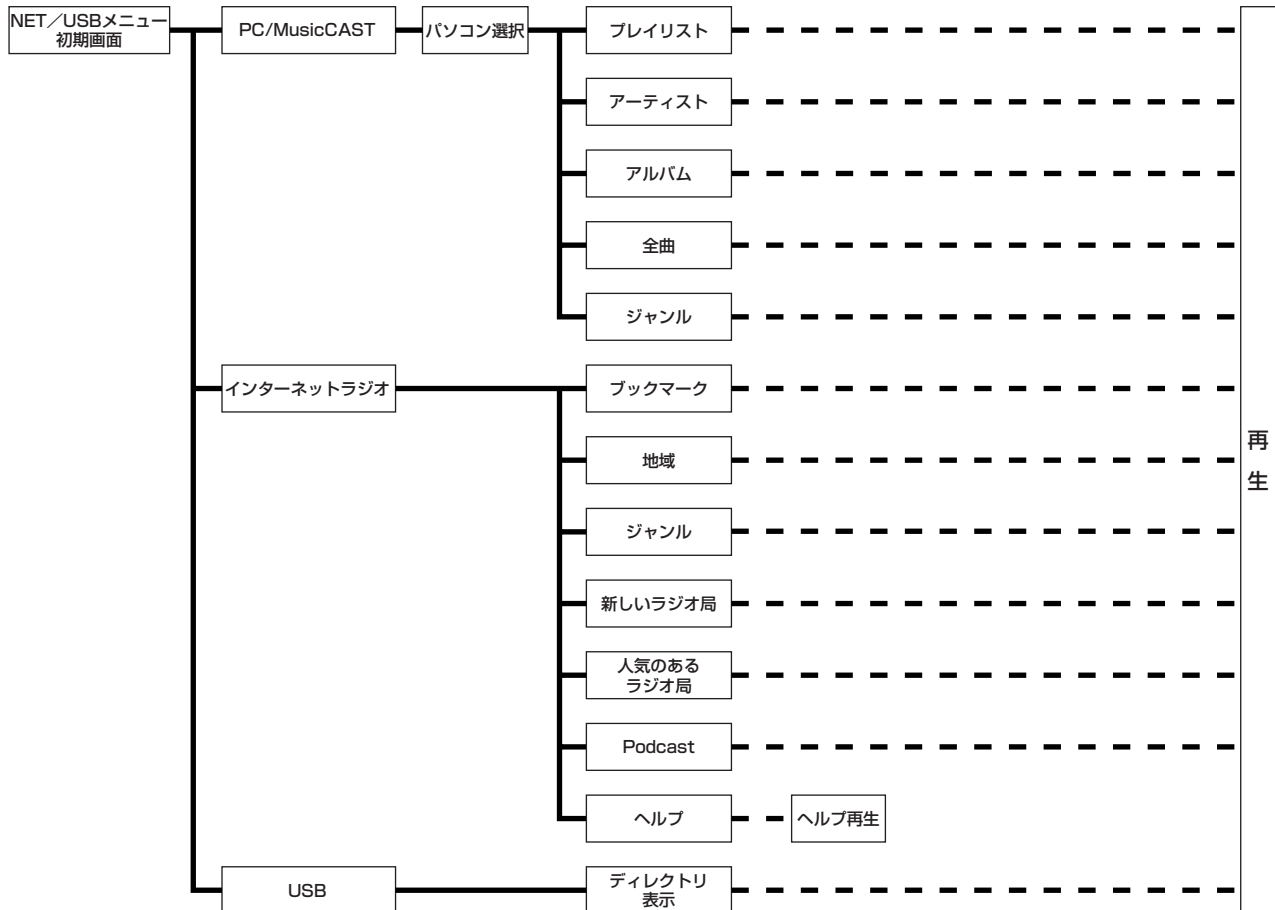
以下は音楽を聴くときにおすすめの音場プログラムです。なお、それぞれの音場の特長については88ページをご覧ください。

・音楽を聴くとき

→CLASSICAL　→STEREO
→LIVE/CLUB　→MUSIC ENHANCER

ヒント 音の大きさを調節するには？（69ページ）

NET／USBメニュー一覧

ホームネットワークに接続したパソコンおよびUSBデバイス(USBメモリーやポータブルオーディオプレーヤーなど)に保存されている音楽ファイルや、インターネットラジオ放送を再生します。ネットワークオーディオを楽しむ場合は、セットメニュー「ネットワーク／USB設定」(130ページ)を設定してください。
下図は、ネットワークオーディオやUSBを再生するときのメニュー構造をあらわしています。メニューの操作方法については、「ネットワークオーディオ／USBデバイスを再生する」をご覧ください(80ページ)。

パソコンの音楽ファイルを再生するための準備をする

パソコンに保存されている音楽ファイルを再生するための準備をします。再生のしかたについて詳しくは、右に記載の「ネットワークオーディオ／USBデバイスを再生する」をご覧ください。

1 パソコンにWindows Media Player 11をインストールする

Windows Media Player 11やアップグレードファイルは、マイクロソフト社のウェブサイトからダウンロードできます。

2 パソコンを再起動し、音楽ファイルを共有ディレクトリに保存する

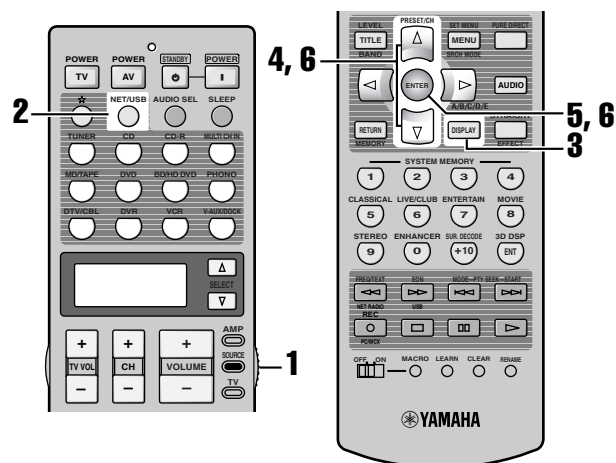
パソコンに保存されている音楽ファイルを再生できるようになります。

ヒント

- 上記の手順は、パソコンに保存されている音楽ファイルを本機ではじめて再生するときのみ必要です。1度Windows Media Player 11をインストールすれば、2回目以降は必要ありません。
- 音楽ファイルを再生するためにWindows Media Playerの設定が必要な場合があります。設定について詳しくは、Windows Media Playerに付属の取扱説明書などをご覧ください。
- Windows Media Connect 2.0でも再生できます。

ネットワークオーディオ／USBデバイスを再生する

パソコンまたはUSBデバイスに保存されている音楽ファイルやインターネットラジオを再生します。

ヒント

- 以下のフォーマットで記録された音楽ファイルを再生できます。インターネットラジオを聴く場合は、MP3のみ再生できます。
  - MP3： 2チャンネル音声信号に対応。MP3 PROには対応していません。
  - WAV： 2チャンネルリニアPCMに対応。PCM以外のフォーマットは、ブラウズできますが再生できません。
  - WMA： WMA9までの2チャンネル音声信号に対応。マルチチャンネル音声信号はフロントL／R信号のみ再生します。WMA PRO、Losslessには対応していません。また、DRM（著作権保護）がかけられているファイルは再生できません。
- NET／USBメニュー操作中に1つ前の操作に戻りたい場合は、リモコンの⊲キーを押します。
- メニュー名右側の「＞」は、下の階層にサブメニューがあることをあらわしています。
- リモコンの⊳／□／⋉⊲⊲／⊳⊳⋊などのキーで、再生や停止、頭出しなどの操作ができます。ネットワークオーディオ／USBデバイスを操作するときに使うキーについて詳しくは、「ネットワークオーディオ／USBデバイスを操作する」（163ページ）をご覧ください。

ご注意

- 選択した音楽ファイルにより、上記のフォーマットで記録されていても再生できない場合やノイズが出力される場合があります。
- 映像ファイルは再生できません。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、SOURCEを選ぶ

AMP
SOURCE
TV

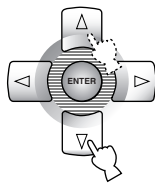
2 NET/USBキーを押す

ヒント

ネットワークオーディオまたはUSBデバイスを2回目以降に再生する場合は、前回聴いた入力ソースの再生が自動的に始まります。

3 DISPLAYキーを押す

テレビ画面にトップメニューが表示されます。

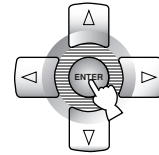
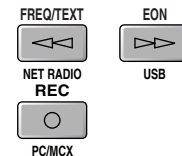
4 ∆／∇キーを押して、聴きたいソースを選ぶ

PC/MusicCAST：パソコンを選択します。
インターネットラジオ：インターネットラジオを選択します。
USB：USBデバイスを選択します。

ご注意

本機とネットワーク接続して使用できるミュージックキャスト(MusicCAST)は、日本国内では販売されていません。

5 ENTERキーを押す

PC/MusicCASTを選んだ場合は、パソコン選択画面が表示されます。∆／∇キーを押して、聴きたい音楽ファイルが保存されているパソコンを選び、ENTERキーを押してください。

ヒント

- ▷キーでも操作できます。
- 手順3～5のかわりに、リモコンのPC/MCXキーまたはNET RADIOキー、USBキーを押して、聴きたいソースを選ぶこともできます。各ソースを2回目以降に再生する場合は、前回聴いたコンテンツの再生が自動的に始まります。

6 ∆ ／∇ キーを押して聴きたい項目を選び、ENTERキーを押す

メニュー表示にしたがって、再生する項目が表示されるまで繰り返します。
曲名やラジオ局名が表示されているときにENTERキーを押すと、再生が始まります。再生が始まると、テレビ画面に再生情報が表示されます。
パソコンまたはUSBデバイスに保存されている音楽ファイルを再生しているときは、リモコンの ⏮／⏭キーや▷キー、□キーで、スキップや再生、停止の各操作をすることができます。

ヒント

- メニュー画面では、最大で40文字のディレクトリおよびファイル名を表示できます。
- 再生情報画面について詳しくは、「再生情報画面表示について」をご覧ください(77ページ)。
- 再生情報画面を表示中にメニュー画面に戻りたい場合は、MENUキーを押してください。
- セットメニュー「プレイスタイル」で、再生スタイルを設定できます(131ページ)。
- セットメニュー「スクロール表示」で、フロントパネルディスプレイの表示方法を設定できます(132ページ)。

パソコンに保存されている音楽ファイルを聴く

「ネットワークオーディオ／USBデバイスを再生する」（80ページ）の手順4で「PC/MusicCAST」を選んで、パソコンに保存されている音楽ファイルを再生します。

· プレイリスト → 曲
· アーティスト → 曲
· アルバム → 曲
· 全曲
· ジャンル → 曲

ヒント

- 同一サブネットに接続されている、4台までのパソコンをブラウズできます。
- 操作中に1つ前の画面表示に戻りたい場合は、リモコンのMENUキーを押します。
- プレイリストのフォーマットやプレイリストの作成方法などについて詳しくは、サーバーソフトの取扱説明書をご覧ください。

ご注意

- パソコンにインストールされているセキュリティソフト（ウィルス対策ソフトやファイアウォールソフトなど）により、本機がパソコンにアクセスできない場合があります。パソコンに保存された音楽ファイルを再生するときは、セキュリティソフトの設定をご確認ください。
- OSにWindows XP Professionalを使っていて、ドメインにログオンしている場合は、パソコンに接続できません。ドメインではなく、ローカルマシンにログオンしてください。
- 選択した音楽ファイルにより、本機が対応しているフォーマットで記録されていても再生できない場合やノイズが出力される場合があります。

インターネットラジオを聴く

「ネットワークオーディオ／USBデバイスを再生する」（80ページ）の手順4で「インターネットラジオ」を選んで、インターネットラジオ放送を聴きます。本機のインターネットラジオ局リストは、ラジオ局データベースサービス（vTuner）を利用しています。このデータベースサービスは、本機用に編集・作成されたリストです。

ブックマーク：
インターネットラジオ局を、登録したラジオ局から選びます。登録のしかたについて詳しくは、右に記載の「ブックマークにラジオ局を登録する」をご覧ください。

地域：
配信されている場所からインターネットラジオ局またはポッドキャストを選びます。

ジャンル：
聴きたいジャンルからインターネットラジオ局またはポッドキャストを選びます。

新しいラジオ局：
新しく始まった放送局のなかからインターネットラジオ局を選びます。

人気のあるラジオ局：
人気がある放送局のなかからインターネットラジオ局を選びます。

Podcast（ポッドキャスト）：
配信されている場所または聴きたいジャンルからポッドキャストを選びます。

ヘルプ：
操作方法などのヘルプメニューが再生されます。

ヒント

- インターネットラジオは、ラジオ局により異なったポート番号を利用しています。インターネットラジオを再生するときは、ファイアウォールの設定をご確認ください。
- ポッドキャストはインターネットサービスの一つで、インターネット上に数多く存在しています。インターネットラジオ番組が音声ファイルとして配信されるため、通常のインターネットラジオ番組とは異なり、放送開始時間にとらわれることなく好きな時間に楽しめるのが特長です。1回分の放送が終わると、再生が停止します。
- リモコンの▷キーや□キーで再生、停止の各操作をすることができます。

ご注意
- ラジオ局データベースサービスは、予告なく停止される場合があります。
- インターネットラジオメニューで選択できる放送局であっても、再生できない場合があります。
- インターネットラジオを再生中は、スキップや一時停止できません。
- インターネットがナローバンド(56Kモデム、ISDNなど)で接続されていると、インターネットラジオを十分にお楽しみいただけません。ブロードバンド(ケーブルモデム、xDSLなど)で接続してください。詳しくは、インターネットサービスプロバイダーにお問い合わせください。

ブックマークにラジオ局を登録する

お気に入りのインターネットラジオ局をブックマークに登録します。

登録したいラジオ局を再生中に、リモコンのTITLEキーを約2秒間押し続ける

テレビ画面に「ブックマーク　オン」と表示され、ラジオ局がブックマークに登録されます。

ヒント
- ブックマークの登録を解除するには、以下の手順を操作してください。
1. 「ネットワークオーディオ／USBデバイスを再生する」(80ページ)の手順4で「インターネットラジオ」を選ぶ
2. 手順5で決定する
3. 手順6で「ブックマーク」を選ぶ
4. ブックマーク画面に表示されている項目のなかから、削除するものを選ぶ
5. テレビ画面に「ブックマーク　オフ」と表示されるまで、TITLEキーを約2秒間押し続ける
- パソコンから以下のヤマハウェブサイトにアクセスしてお気に入りのインターネットラジオ局を登録することもできます。
URL: http://yradio.vtuner.com/
マックアドレスを確認するためには、セットメニュー「ネットワーク／USB設定」の「ネットワーク情報」をご覧ください(131ページ)。

USBデバイスに保存されている音楽ファイルを聴く

「ネットワークオーディオ／USBデバイスを再生する」(80ページ)の手順4で「USB」を選んで、USBデバイスに保存されている音楽ファイルを再生します。USBメニューで表示されたディレクトリイメージから、再生するファイルを選びます。

ヒント
- 本機でUSBデバイスに保存された音楽ファイルを再生する際は、以下のことをご確認ください。
  - USBデバイスがUSBマスストレージクラスに対応している
  - データがFAT16またはFAT32ファイルシステムで記録されている
  - データ容量32GB以下
- USBデバイスが複数のパーティションに分割されている場合は、先頭にあるパーティションのみブラウスできます。
- 最大8階層までのディレクトリにあるファイルをブラウズ、再生できます。
- 1つのディレクトリにつき、最大500までのディレクトリ／ファイルをブラウズ、再生できます。
- リモコンの⏮／⏭キーや▷キー、□キーで、スキップや再生、停止の各操作をすることができます。
- エラーメッセージが表示された場合、⏮または⏭キーを押すと、再生できるファイルをサーチします。
- サーチしているときに、再生できるファイルが見つからない場合、ディレクトリの最初または最後まで到達したら自動的にサーチを停止します。
- セットメニュー「プレイスタイル」で、再生スタイルを設定できます(131ページ)。
- セットメニュー「スクロール表示」で、フロントパネルディスプレイの表示方法を設定できます(132ページ)。

ご注意
- USBデバイスのメーカーや種類により、ファイルを再生できない場合があります。
- 選択した音楽ファイルにより、本機が対応しているフォーマットで記録されていても再生できない場合やノイズを出力する場合があります。
- USBデバイスを接続した際に、約10秒間音が出ない場合があります。
- プレイリストには対応していません。

ショートカットを登録する

数字キー(1～8)にショートカットを登録することにより、お気に入りの音楽ファイルやインターネットラジオを、1つのキーを押すだけで簡単に呼び出して再生できます。

ショートカットを登録する

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、SOURCEを選ぶ

2 NET/USBキーを押す

3 登録したい音楽ファイルやインターネットラジオを再生する

再生のしかたについて詳しくは、80～83ページをご覧ください、

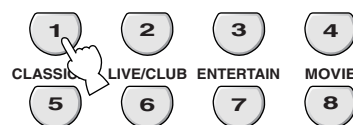
4 MEMORYキーを押す

フロントパネルディスプレイのMEMORYインジケーターが点滅し、ショートカット登録モードに入ります。

ヒント

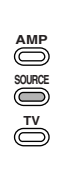
以下の手順5および手順6の操作は、10秒以内におこなってください。

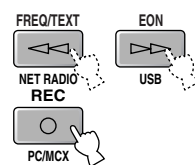
5 ショートカットを登録する数字キー(1～8)を押す

フロントパネルディスプレイに、登録する数字が表示されます。

6 MEMORYキーを押す

ショートカットが登録されます。

登録したショートカットを選んで再生する

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、SOURCEを選ぶ

2 NET/USBキーを押す

3 ネットワークオーディオ／USBデバイス入力選択キーを押して、入力ソースを選ぶ

4 数字キー(1～8)を押す

ショートカットに登録した曲またはインターネットラジオの再生がはじまります。

- ショートカットを登録する数字キーにあらかじめ音楽ファイルやラジオ局が登録されていない場合は、フロントパネルディスプレイに「Empty Memory!」と表示されます。
- 以下の場合は、ショートカットを登録した数字キーを押しても登録した音楽ファイルやラジオ局は呼び出されません。
  - 音楽ファイルを登録したときとは異なるUSBデバイスを接続している
  - パソコンの電源が切れている、またはホームネットワークから切断されている
  - 登録したラジオ局に一時的に接続できない、または放送を停止した
- USBデバイスおよびパソコンに保存されている音楽ファイルをショートカットに登録する際、本機では音楽ファイル名を記憶するのではなく、ディレクトリやプレイリスト内における音楽ファイルの相対的な位置を記憶しています。したがって、ディレクトリやプレイリスト内で音楽ファイルの位置を変更したり、音楽ファイルを追加／削除したりした場合は、登録した音楽ファイルとは異なるファイルが呼び出されることがあります。そのような場合は、必要に応じてショートカットを再登録してください。

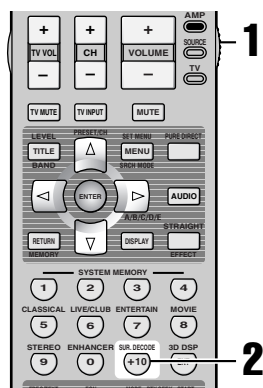
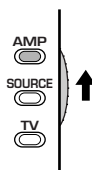
以下は、ショートカット機能を上手に利用するためのおすすめの方法です。
- USBデバイス内にディレクトリを8つ作成し、その中に音楽ファイルを保存します。次に、それぞれのディレクトリ内の先頭の音楽ファイルを1から8までのショートカットに登録します。ショートカットで呼び出す音楽ファイルを変更する場合は、ディレクトリは削除せずに、現在登録されている音楽ファイルを、新しく登録する音楽ファイルと入れ替えます。
- パソコンにプレイリストを8つ作成します。次に、それぞれのプレイリストの先頭の音楽ファイルを1から8までのショートカットに登録します。ショートカットで呼び出す音楽ファイルを変更する場合は、プレイリストは削除せずに、現在登録されている音楽ファイルを、新しく登録する音楽ファイルと入れ替えます。

表示メッセージについて

本機でネットワークオーディオまたはUSBデバイスを再生するときに、フロントパネルディスプレイに表示されるメッセージの一覧です。

メッセージ	内容	対策
Please wait	パソコンまたはUSBデバイスにアクセスしています。	本機がパソコンまたはUSBデバイスにアクセスできるまでお待ちください。
Connect error	選んだファイルまたはラジオ局にアクセスできません。	ホームネットワーク環境内にある機器（本機、ルーター、モデムなど）が正しく接続され、電源がオンになっているか確認してください。
Disconnected	USBデバイスが取りはずされました。	USBデバイスが正しく接続されているか確認してください。
	パソコンとの接続が遮断されました。	再度パソコンにアクセスしてください。
	USBデバイスとの通信に異常があります。	本機の電源をオフにしてからUSBデバイスを接続しなおしてください。
		USBデバイスを再セットアップしてください。
Access error	USBデバイスにアクセスできません。	別のUSBデバイスをお試しください。USBデバイスを再セットアップしてください。
	USBデバイスの電源に異常があります。	本機の電源をオフにしてからUSBデバイスを接続しなおしてください。
Unable to play	パソコンに保存されている音楽ファイルを再生できません。	Windows Media Connect 2.0がパソコンに正しくインストールされているか確認してください。
		パソコンに保存されている音楽ファイルが、本機で再生可能なファイル形式（MP3、WMA、WAV）か確認してください。
		本機で再生可能なファイル形式（MP3、WMA、WAV）で保存してください。
	ネットワークが混雑しているため再生できません。	
List updated	パソコンのリストが更新されました。	
Bookmark ON	ブックマークにお気に入りのラジオ局が登録されました。	
Bookmark OFF	ブックマークからお気に入りのラジオ局が削除されました。	
Empty Memory!	曲やラジオ局がショートカットに登録されていません。	ショートカットを登録してください。
Not found	ショートカット先が見つかりません。	ショートカットを登録したUSBデバイスを接続してください。
		パソコンの電源をオンにしてください。
		ショートカットを登録したインターネットラジオが放送している時間に再度お試しください。

2チャンネルソースをマルチチャンネルで楽しむ(サラウンドデコード)

ドルビープロロジック、ドルビープロロジックⅡxまたはDTS Neo:6、SRS CSⅡデコーダーを選ぶと、2チャンネルソースをマルチチャンネルにしてお楽しみいただけます。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

2 SUR. DECODEキーを押して、サラウンドデコードモードを選ぶ

2チャンネル音声がマルチチャンネル化されます。押すごとに、右図のようにデコーダーが切り替わります。

ヒント

- 各デコーダーのパラメーターを変更することで、ソースやリスニングルームの音響にあわせて音場効果を調節できます(99ページ)。
- 音場パラメーター「デコーダー選択」で、デコーダーを選ぶこともできます(104ページ)。

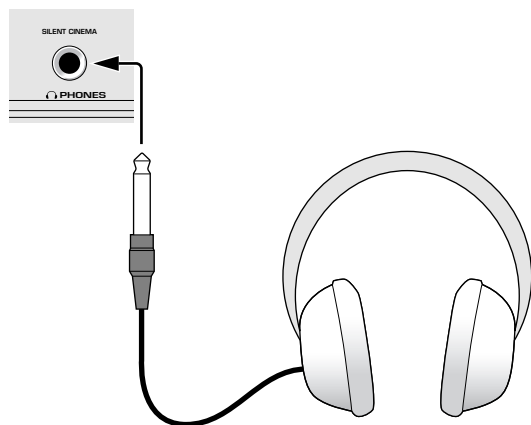
ご注意

セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンドバック」を「無」に設定しているときは、プロロジックⅡxデコーダーは自動的にプロロジックⅡデコーダーに切り替わります(126ページ)。

ヒント

マルチチャンネルデジタル音声信号を入力している場合、本機は自動的に入力信号に適したデコーダーを選んで再生します。

ヘッドホンで音場プログラムを楽しむ(サイレントシネマ™)

ヘッドホンを本体のPHONES端子に接続しているときでも、「サイレントシネマ™」によって音場プログラムを楽しめます。

「サイレントシネマ™」モードでは、マルチスピーカーによる音場プログラムの効果をヘッドホンで擬似的に再現します。「サイレントシネマ™」モードで再生している間は、フロントパネルディスプレイのSILENT CINEMAインジケーターが点灯します。

音場効果をかけずに通常のヘッドホン再生を楽しむには

以下のプログラム/モードを選びます。

- 2ch Stereo(96ページ)
- ピュアダイレクトモード(96ページ)
- ストレートデコードモード(97ページ)

ヒント

マルチチャンネルデジタル音声信号は、ヘッドホンの左右チャンネルに振り分けられます(DSD信号を除く)。

ご注意

MULTI CH INPUT端子に接続した機器を入力ソースとして選んでいる場合は、「サイレントシネマ™」モードには切り替わりません。

サラウンドL/Rスピーカーなしで音場プログラムを楽しむ(バーチャルシネマDSP)

サラウンドL/Rスピーカーがない場合でも、バーチャルシネマDSPモードにより、臨場感あふれる再生を楽しめます。セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンド」を「無」に設定すると(126ページ)、バーチャルシネマDSPモードで再生を楽しめます。

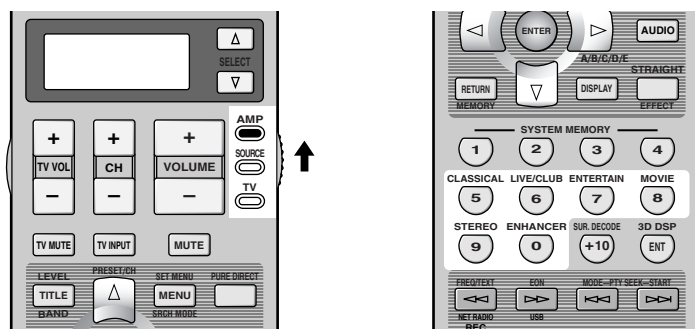
バーチャルシネマDSPモードでは、入力ソースの音声に、選んだ音場プログラムの音場効果を付加して、フロントL/Rスピーカー、センタースピーカーとサブウーファーから出力します。バーチャルシネマDSPモードで再生している間は、フロントパネルディスプレイのVIRTUALインジケーターが点灯します。

ご注意

以下の場合は、セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンド」を「無」に設定しても、バーチャルシネマDSPモードには切り替わりません。

- 2ch Stereoで再生しているとき(96ページ)
- 7ch Stereoで再生しているとき(89ページ)
- コンプレストミュージック・エンハンサーモードで再生しているとき(92ページ)
- サラウンドデコードモードで再生しているとき(86ページ)
- ピュアダイレクトモードで再生しているとき(96ページ)
- ヘッドホンを接続しているとき
- MULTI CH INPUT端子に接続した機器を入力ソースとして選んでいるとき

音場プログラムについて

本機には、音楽に最適なHiFi DSP音場プログラム、映画に最適なCINEMA DSP音場プログラムが搭載されています。また、コンプレストミュージック・エンハンサーモードで圧縮オーディオフォーマットをダイナミックに再生したり、ノーマルサラウンドプログラムで元の音を忠実にデコードして再現したりすることもできます。さらにCINEMA DSP 3Dモードをオンにすれば、より緻密で立体的な音場効果を楽しめます。操作機器選択スイッチをスライドさせてAMPを選んでから、表中の「キー」欄に描かれているリモコンキーを押して、音場プログラムを変更します。繰り返し押すと、サブプログラムが切り替わります。

ご注意

- 本機の音場プログラムは、世界各地の実在のホールなどの音響特性を測定した結果に基づいて設計されています。そのため、前後左右で響きの強さや音量が異なると感じられる場合がありますが故障ではありません。
- 音場プログラムの名前や説明にこだわらず、最も心地よく聞こえる音場プログラムをお選びください。

ヒント

各音場プログラムやデコーダーのパラメーターを変更して、ソースやリスニングルームの音響にあわせて音場効果を調節できます（99ページ）。

HiFi DSP音場プログラム

プログラムと特長

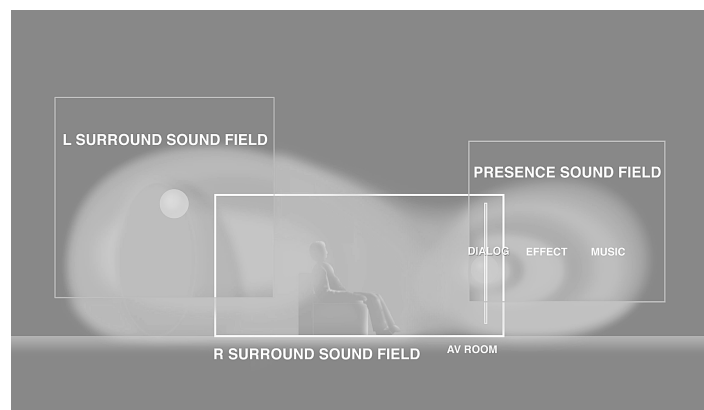
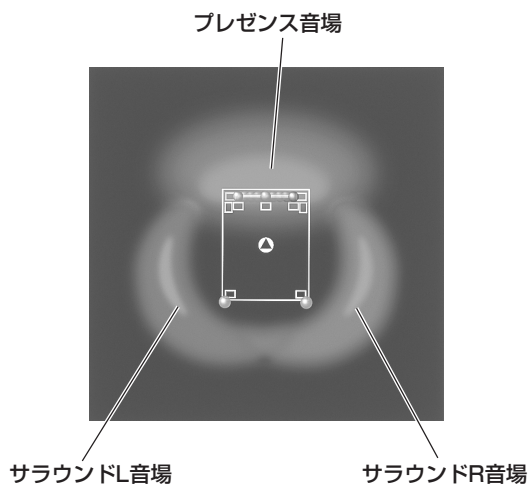
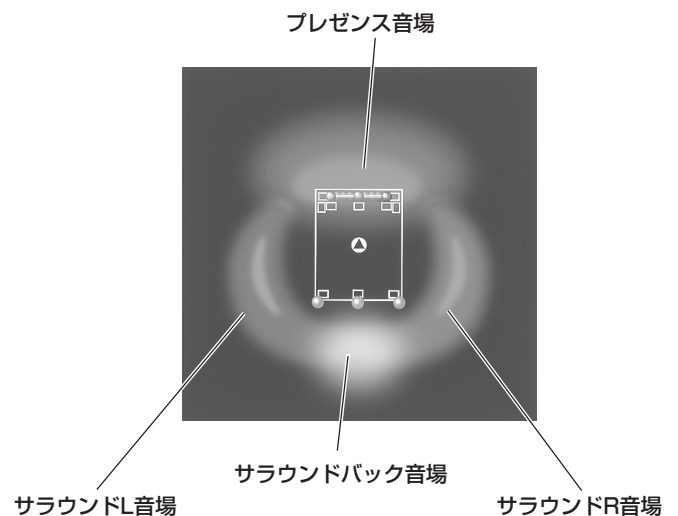
- CDなどのステレオ音楽ソースに最適なプログラムです。
- 入力信号に応じて各種デコーダーが使用されます。

キー	プログラム	サブプログラム	特長
CLASSICAL 5	CLASSICAL（クラシカル）	Hall in Munich（ホール イン ミュンヘン）	ヨーロッパに多くみられる、内装材にシックな木の内張りが使われた、ミュンヘンにある2500席程度のコンサートホールです。繊細な美しい響きが豊かに拡がり、落ち着いた雰囲気を持っています。座席の位置は、1階の中央左寄りです。
		Hall in Vienna（ホール イン ウィーン）	1700席程度のウィーンの伝統的なシューボックス型の中規模コンサートホールです。周囲の柱や彫刻により、全方向からの複雑な反射音を生み出しています。豊かな響きが特長です。
		Hall in Amsterdam（ホール イン アムステルダム）	アムステルダムの広幅化したシューボックス型の大ホールで、サークルステージ、ステージバック席があり、客席は2200程です。
		Church in Freiburg（チャーチ イン フライブルグ）	ドイツ南部の120m近い尖塔を持つ大きな教会です。石を積み上げて造られており、天井が高く、細長い空間を持っています。残響時間は非常に長くなりますが、逆に初期反射は少なくなります。そのため、直接音の厚みはあまりありませんが、響きが多く、教会特有の音場を再現します。
		Chamber（チェンバー）	宮廷の大広間のような天井の高い比較的広めの空間で、宮廷音楽や室内楽に適した心地よい残響が特長の音場です。

キー	プログラム	サブプログラム	特長
LIVE/CLUB 6	ライブ クラブ LIVE/CLUB	ビレッジ バンガード Village Vanguard	ニューヨークの7番街にあるジャズクラブです。天井が低く、狭い室内の角にあるステージ付近に強い反射音が集中しています。
		ウェアハウス ロフト Warehouse Loft	ソーホーのロフトを思わせるコンクリートの空間です。壁面からの反射音は比較的明瞭で、エネルギッシュな音場です。
		セラー クラブ Cellar Club	天井の低いアットホームなライブハウスです。小さなステージのすぐ前にいるような、リアルでライブな音場で、強い響きが特長です。
		ザ ロキシー シアター The Roxy Theatre	ロサンゼルスにあるロック系ライブハウスで、客席は最高時で約460程です。客席中央左寄りの音場です。
		ザ ボトム ライン The Bottom Line	かつてニューヨークに存在した有名なライブハウス「ザ・ボトム・ライン」のステージ正面の音場です。フロアは300席ある左右に幅広い客席で占められ、リアルでライブな音場です。
STEREO 9	ステレオ STEREO	チャンネル ステレオ 7ch Stereo	後方からも直接音が聴け、広いエリアで楽しめる効果が特長の再生モードです。ホームパーティーのBGM に最適です。セットメニューの設定により、最大7つのスピーカーから音が出力されます。

CINEMA DSP音場プログラム

CINEMA DSP音場プログラムのサウンドデザイン

映画製作者の意図するサウンドは、セリフは明瞭にスクリーン上に定位し、効果音はその奥に、音楽はさらにその奥に広がり、そしてサラウンドは視聴者を取り囲んでスクリーンの映像と一体になるようにデザインされています。
ヤマハDSPをAV再生用に進化させたプログラムが「CINEMA DSP音場プログラム」です。映画サラウンドデコーダーであるドルビープロロジック、ドルビーデジタルやDTS、またBS/地上波デジタル放送の音声フォーマットであるAACなどの各デコーダーとヤマハDSPを融合し、映画のサウンドを最良の状態でデザインするダビングステージ（最終的な映画のサウンドデザインを完成させるファイナルミックス）でのクオリティをAVルームに再現します。
CINEMA DSP音場プログラムでは、ヤマハDSP処理による音場を加えることで、視聴者はセリフの実在感や効果音、音楽の奥行き感とともに、スムーズな音源の移動感とスクリーンまで回り込むサラウンド音場に包まれます。プレゼンススピーカーを使用すれば、よりはっきりとしたセリフの定位が得られるとともに、さらなる音場の立体感を演出できます。

3音場
ドルビーデジタル、DTSなどの5.1チャンネルソースに対して、前方のプレゼンス音場と、後方の左右それぞれに独立したサラウンド音場を付加します。

4音場
ドルビーデジタルEX、DTS-ES、ドルビーTrueHD、DTS-HDなど、6.1／7.1チャンネルソースに対応して、3音場にサラウンドバック音場を加えた4つの音場を付加します。

プログラムと特長

- 入力信号に応じて、各デコーダーが使用されます。
- センタースピーカーを使用した場合は、良好なセンター定位が得られます。
- プレゼンス音場処理により、画面奥行きへの音場表現が得られます。さらに、サラウンド音場処理によってスケールの大きなサラウンド感が得られます。

キー	プログラム	サブプログラム	特長
ENTERTAIN 7	ENTERTAINMENT	Sports	ステレオ放送のスポーツ中継やスタジオバラエティ番組がライブ感豊かに楽しめます。スポーツ中継では解説者やアナウンサーの声はセンターに明瞭に定位し、歓声も含め場内の雰囲気は適度な空間の中で周囲に拡がり、その場にいるような臨場感が体感できます。
		Action Game	カーレースやFPS（First Person Shooter）などのアクションゲームに合わせてデザインされた音場です。チャンネル毎に効果の範囲を制限した反射音データを用いることで、明瞭な方位感を保ちつつ様々な効果音の存在感を高め、臨場感と迫力のあるプレイ環境を提供します。
		Roleplaying Game	RPG やアドベンチャーゲームなどに合わせてデザインされた音場です。映画用の音場効果と、Action Game で用いた音場デザインを組み合わせることで、プレイ中のフィールドの奥行きや立体感を演出し、ムービーシーンでは映画的なサラウンド効果を提供します。
		Music Video	ポップス・ロック・ジャズなどのライブコンサート会場のイメージです。ステージ上のボーカルやソロ楽器のリアル感と、リズム音楽のノリを重視したプレゼンス音場に加え、広大なライブ会場の空間を再現するサラウンド音場により、ホットなライブ空間に浸れます。
		Recital/Opera	響きの量を適度に抑えてあり、声の奥行き感、明瞭度に優れています。オペラではステージでの定位や臨場感とともに、オーケストラボックスの響きが眼前にくり広げられます。サラウンド音場は控えめながら、コンサートホールのデータを使用することで音楽の楽しさを演出。長時間のオペラものでも疲れません。
MOVIE 8	MOVIE	Spectacle	壮大なスケール感を演出するスペクタクルな音場です。シネスコサイズのワイド画面にマッチする広大な空間再現と微少な効果音から迫力の大音響まで、ダイナミックレンジの広い音場感が特長です。
		Sci-Fi	最新のSFX映画の緻密なサウンドデザインを鮮やかに描き分ける抜けの良い音場です。セリフ、効果音、BGMの明快な分離感を保ちつつ各々の異なった空間を鮮やかに再現します。
		Adventure	アクション＆アドベンチャー映画に最適な音場です。響きを抑え、左右の拡がり感を重視した力強い空間を再現します。奥行感は浅めで各チャンネルのセパレーションや音の明瞭度を保ちつつ、クリアで力強い空間を再現します。
		Drama	シリアスなドラマからミュージカルやコメディまで、幅広いジャンルの映画に対応する落ち着いた響きが特長の音場です。控えめな響きでありながら適度な立体感を持ち、セリフの明瞭度とセンター定位を軸に効果音やBGMが柔らかな響きで立体的に再現されます。長時間聴いていても疲れません。
		Mono Movie	往年のモノラル映画を当時の映画館の雰囲気で楽しめる音場です。音声に拡がりと適度な残響が付加され、奥行感を伴った心地よい空間が再現されます。
		Standard	ドルビーデジタル、DTSおよびAACなどの各種マルチチャンネル音声のオリジナル定位を乱すことなく、サラウンドの包囲感を重視した音場です。「理想的な映画館」をコンセプトにデザインされた音場で、視聴者を左右後方から美しい響きで包み込みます。

MOVIEプログラム（Mono Movieを除く）を選んでいる場合は、音場パラメーター「デコーダー選択」（104ページ）でデコーダーを選べます。

コンプレストミュージック・エンハンサーモード

MP3やAACなどの圧縮オーディオフォーマットは、圧縮される際に高音域がカットされています。コンプレストミュージック・エンハンサーモードを設定すると、高音域を拡張するうえに、低音域を強調することによって、圧縮オーディオをダイナミックかつ臨場感たっぷりに再生できます。

キー	プログラム	サブプログラム	特長
ENHANCER O	ミュージック エンハンサー MUSIC ENHANCER	ストレート エンハンサー Straight Enhancer	2チャンネル／マルチチャンネル圧縮オーディオフォーマットを、音源のチャンネル数はそのままにダイナミックに再生します。
		チャンネル エンハンサー 7ch Enhancer	7チャンネルステレオ音声でダイナミックに再生します。

ノーマルサラウンドプログラム

音場効果をかけずに元の音で再生したい場合は、下記のノーマルサラウンドプログラムを選んでください。

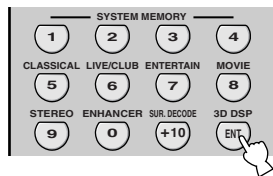
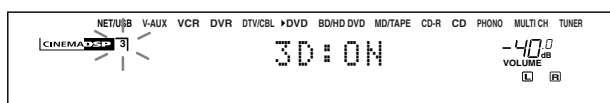
本機には下記のデコーダーが搭載されています。

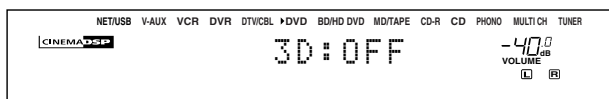
- **ドルビーデジタル、DTS、AACデコーダー：**マルチチャンネルソース用
- **ドルビーデジタルEX、DTS-ES、ドルビープロロジックⅡxデコーダー：**サラウンドバックチャンネル音声再生用
- **DTS 96/24デコーダー：**96kHz/24bitの高音質再生用
- **ドルビープロロジック、ドルビープロロジックⅡx、DTS Neo：6、SRS CSⅡデコーダー：**ドルビーサラウンドと2チャンネルソース用
- **ドルビーデジタルプラス、ドルビーTrueHD、DTS-HDマスターオーディオ、DTS-HDハイレゾリューションオーディオデコーダー：**HDオーディオ再生用

PLⅡ　：PRO LOGICⅡ（プロロジックⅡ）
PLⅡx：PRO LOGICⅡx（プロロジックⅡx）
CSⅡ　：Circle SurroundⅡ（サークルサラウンドⅡ）

キー	プログラム	デコーダー	特長
SUR. DECODE +10	サラウンド デコード SUR. DECODE	ドルビー デジタル Dolby Digital	ドルビーデジタル、DTS、AACで処理されたソースの再生用プログラムです。セパレーションに優れ、安定したデコードが得られます。
		DTS	
		AAC	
		プロ ロジック PRO LOGIC	2チャンネル音声をそれぞれの方式でマルチチャンネル化して再生します。
		ムービー PLⅡx Movie	
		ミュージック PLⅡx Music	
		ゲーム PLⅡx Game	
		ネオ シネマ Neo：6 Cinema	
		ネオ ミュージック Neo：6 Music	
		シネマ CSⅡ Cinema	
		ミュージック CSⅡ Music	

CINEMA DSP 3Dモード

プレゼンススピーカーを使用してCINEMA DSPまたはHiFi DSPをお楽しみの場合、CINEMA DSP 3Dモードを選べます。
CINEMA DSP 3Dモードでは、より緻密で立体的な3D感覚の音場をリスニングルームに再現します。
CINEMA DSP 3Dモードをオン／オフするには、リモコンの3D DSPキーを押します。

オンにすると、フロントパネルディスプレイに「3D：ON」と表示され、3Dインジケーターが点灯します。音に包みこまれるような立体的な音場効果を楽しめます。

オフにすると、フロントパネルディスプレイに「3D：OFF」と表示され、3Dインジケーターが消灯します。元の音場プログラムが持つ個性や拡がり感が強調されます。

ご注意

- ヘッドホンを接続しているときは、CINEMA DSP 3Dモードを選べません。
- CINEMA DSP 3Dモードを選べない場合、フロントパネルディスプレイに「3D：−−」と表示されます。

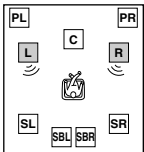
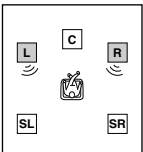
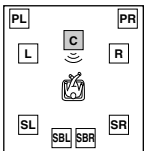
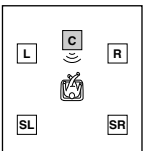
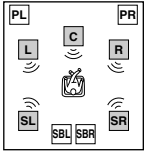
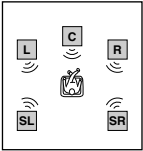
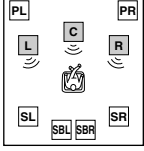
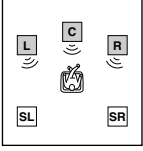
入力信号と再生スピーカー対応表

入力信号の種類により、下図で示されたスピーカーから音声が出力されます。下図の 1 〜 8 の番号は95ページ表中の番号と対応しています。

ご注意
入力信号の種類により、スピーカーから音が出なかったり、小さい音しか出なかったりする場合があります。映画の効果音など、シーンに合わせて部分的にしか使用されないチャンネルもあります。

表中のイラストは以下の内容を表しています。

L	フロントLスピーカー
C	センタースピーカー
R	フロントRスピーカー
PL	プレゼンスLスピーカー
PR	プレゼンスRスピーカー
SL	サラウンドLスピーカー

SR	サラウンドRスピーカー
SBL	サラウンドバックLスピーカー
SBR	サラウンドバックRスピーカー
■	音が出るスピーカー
□	音が出ないスピーカー

	スピーカー設置図	
	7.1チャンネル構成	5.1チャンネル構成
1		
2		
3		
4		

	スピーカー設置図	
	7.1チャンネル構成	5.1チャンネル構成
5		
6		
7		
8		

ヒント

上図の「7チャンネルシステム」では、スピーカーを9本接続している場合を表しています。

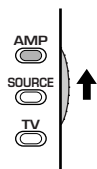
音場プログラム	3D＊1	PR/SBの優先＊2	入力信号			
			2チャンネル音声 （モノラル）	2チャンネル音声 （ステレオ）	5.1チャンネル音声 (DDEX／DDPLⅡx／ES インジケーター消灯時)	6.1/7.1チャンネル音声 (DDEX／DDPLⅡx／ES インジケーター点灯時)
STEREO 2ch Stereo	−−	プレゼンス／ サラウンドバック	5	5	5	5
STEREO 7ch Stereo MUSIC ENHANCER 7ch Enhancer	−−	プレゼンス／ サラウンドバック	4	4	4	4
CLASSICAL Hall in Munich Hall in Vienna Hall in Amsterdam Church in Freiburg Chamber LIVE/CLUB Village Vanguard Warehouse Loft Cellar Club The Roxy Theatre The Bottom Line	ON	プレゼンス／ サラウンドバック	1	1	2	2
	OFF	プレゼンス	1	1	2	4
		サラウンドバック	1	1	2	4
ENTERTAINMENT Sports Music Video Recital/Opera Action Game Roleplaying Game MOVIE Standard Spectacle Sci-Fi Adventure Drama Mono Movie	ON	プレゼンス／ サラウンドバック	2	2	2	2
	OFF	プレゼンス	3	2	2	4
		サラウンドバック	7	4	2	4
MOVIE Mono Movie	ON	プレゼンス／ サラウンドバック	2	2	2	2
	OFF	プレゼンス	3	2	2	4
		サラウンドバック	3	2	2	4
SUR. DECODE Sur. Decode PRO LOGIC PLⅡ Movie PLⅡ Game	−−	プレゼンス／ サラウンドバック	6	7	7	4
SUR. DECODE Sur. Decode PLⅡ Music	−−	プレゼンス／ サラウンドバック	8	7	7	4
SUR. DECODE Sur. Decode PLⅡx Movie PLⅡx Game Neo:6 Cinema	−−	プレゼンス／ サラウンドバック	6	4	7	4
SUR. DECODE Sur. Decode PLⅡx Music Neo:6 Music	−−	プレゼンス／ サラウンドバック	8	4	7	4
STRAIGHT PURE DIRECT MUSIC ENHANCER Straight Enhancer	−−	プレゼンス／ サラウンドバック	5	5	7	4

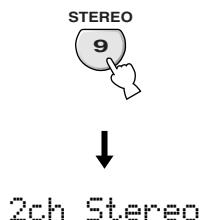
＊1　CINEMA DSP 3Dモードの設定（93ページ）
＊2　セットメニュー「PR/SBの優先」の設定（127ページ）

高音質で再生を楽しむ

ステレオ再生する（2チャンネルステレオ）

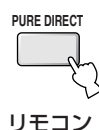
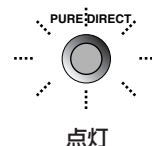
フロントL／Rスピーカーからステレオ音声で再生します。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

2 STEREOキーを繰り返し押して、「2ch Stereo」を選ぶ

2ch Stereo

2チャンネルソースの場合：
フロントL／Rスピーカーからステレオ音声で再生します。

マルチチャンネルソースの場合：
フロントL／Rチャンネル以外の音声をフロントL／Rチャンネルにミックスして、フロントL／Rスピーカーからステレオ音声で再生します。
LFEチャンネルは、セットメニュー「スピーカーの設定」の「低音出力先」を「フロントに出力」に設定した場合(127ページ)のみ、フロントL／Rスピーカーにミックスして出力されます。

原音に忠実な音質で再生する（ピュアダイレクトモード）

音声信号に与えるビデオ回路の影響をおさえ、原音に忠実な高品質音声で再生します。
ドルビーデジタル、DTS、マルチチャンネルPCM、DSD信号を再生する場合、入力モード（108ページ）を「AUTO」または「HDMI」、「COAX/OPT」に設定すれば、本機は入力信号をデコードして再生します。
リモコンまたは本体のPURE DIRECTキーを押します。

ピュアダイレクトモードで再生している間は、本体のPURE DIRECTキーが青色に点灯します。

ピュアダイレクトモードをキャンセルするには、もう一度PURE DIRECTキーを押します。

ご注意

- ピュアダイレクトモードで再生中は、以下の操作ができません（「Not Available」と表示されます）。
  - 音場プログラムの切り替え
  - セットメニューの設定
  - システムメモリーの呼び出し
- ピュアダイレクトモードで再生中は、以下の設定が無効になります。
  - セットメニュー「Adaptive DRC」の設定
  - セットメニュー「パラメトリックEQ」の設定
  - フロントL／Rスピーカーの音質（トーンコントロール）設定
- ピュアダイレクトモードで再生中は、フロントパネルディスプレイの表示が消えます。入力切り替えや音量調節などの操作をすると、数秒間だけ点灯します。
- ピュアダイレクトモードで再生中は、MONITOR OUT端子、およびHDMI OUT端子、REC OUT端子から映像信号は出力されません。
- 本機をスタンバイにすると、ピュアダイレクトモードは解除されます。

音場効果をかけずに再生する（ストレートデコードモード）

入力された信号を、音場効果をかけずにそのまま再生します。リモコンのSTRAIGHT／EFFECTキーを押すと、ストレートデコードモードで再生します。

STRAIGHT

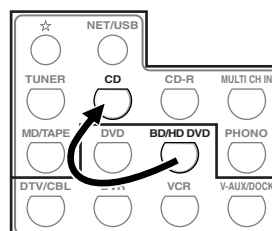
2チャンネルソースの場合：
フロントL／Rスピーカーからステレオ音声で再生します。

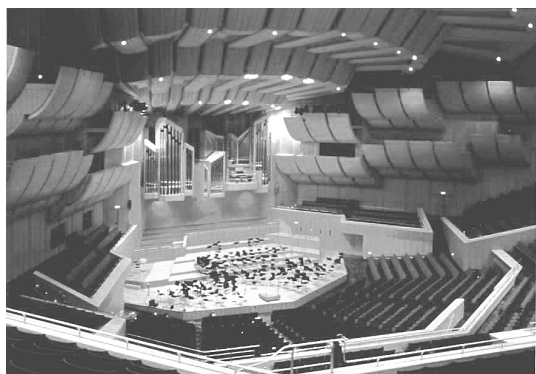
マルチチャンネルソースの場合：
入力信号により、適切なデコーダーでデコードしたあと、マルチチャンネル音声で再生します。

元の状態（音場効果をかけた状態）に戻るには、もう一度STRAIGHT／EFFECTキーを押します。

フロントパネルのSTRAIGHT／EFFECTキーでも操作できます。

音楽と映像で異なるソースを楽しむ（バックグラウンドビデオ機能）

バックグラウンドビデオ機能とは、映像系ソースの映像と、音楽系ソースの音声を組み合わせて楽しむ機能です(たとえばビデオを観ながら、クラシック音楽を楽しめます)。
リモコンの入力選択キーを押して、映像系ソースを選んでから、オーディオ系ソースを選びます。

セットメニュー「映像選択」(137ページ)で、MULTI CH INPUT端子からの入力音声と組み合わせて再生する映像系ソースを選べます。

音場とは？

「その空間が持つ特有の音の響き」を「音場」と呼んでいます。
コンサートホールなどで、私達は、楽器の音や歌手の声が直接聴こえてくる「直接音」のほかに、床や壁・天井などに1回反射してから聴こえてくる「初期反射音」、さらに何回も反射を繰り返しながら次第に減衰してゆく「後部残響音」を聴くことになります。建物内部の形状や広さ、それに内装材料の種類などによって、初期反射音や残響音の構成が異なり、そのホール特有の響きが生まれます。それが「音場」です。
ヤマハでは、世界の著名なコンサートホールやオペラハウスなどで、反射音の方向・強さ・帯域特性・遅延時間等の音場情報を実際に測定し、その膨大なデータを蓄積しています。
本機では、この音場測定の実測データを基に作成された音場プログラムを自由に選択し、著名ホールやライブハウスなどの音場をリスニングルームに再現することができます。

音場を構成する要素

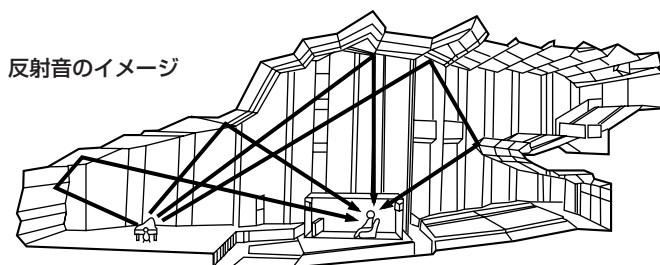
直接音

楽器やボーカルなどの音源からどこにも反射することなく、直接リスナーの耳に届く音です。

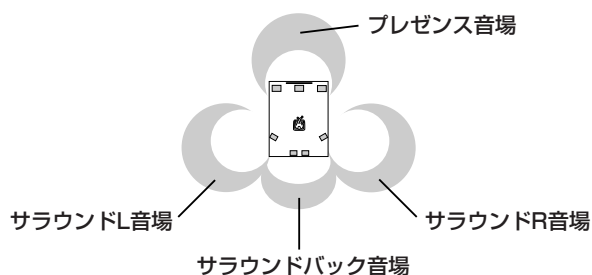
初期反射音

壁や天井などに1回反射してからリスナーの耳に到達する音です。初期反射音は直接音が発生してから50msから80msくらい後に耳に届きます。初期反射音により、直接音に明瞭さが付加されます。

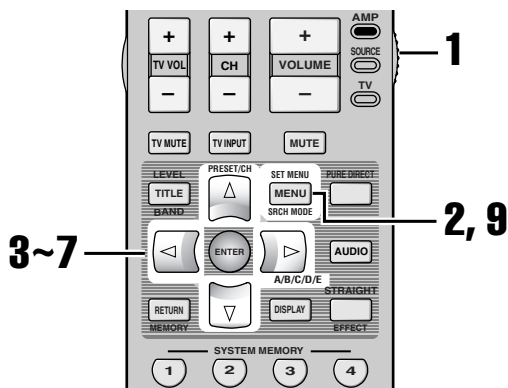
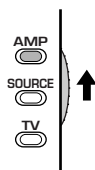
後部残響音

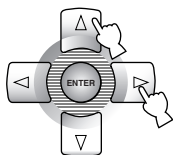
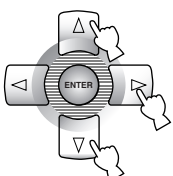
壁や天井、部屋の後部などに2回以上反射を繰り返しながら、多数の反響音がひとまとめになり、連続した音響の余韻となる音です。これらの反射音は方向性がなく、直接音の鮮明さを劣化させます。

直接音、初期反射音、後部残響音がひとつになることで、リスナーは演奏会場や劇場をイメージすることができます。デジタル音場プロセッサーはこの反射音、残響音を再現することで、音場を作り出します。
また、リスニングルームにおいて適切な反射音や後部残響音を再現できれば、独自のリスニング音場を作り出すことができます。つまりリスニングルームをコンサートホール、ダンスフロア、大聖堂などさまざまな演奏会場や劇場の音響効果に変えることができるのです。意のままに音場を再現する能力こそ、デジタル音場プロセッサーを通じてヤマハがこれまでに実践してきたことです。

音場の種類

本機がつくりだす音場は大きくわけて以下の3つです。
プレゼンス音場：前方に広がる音です。
サラウンド音場：後方に広がる音です。
サラウンドバック音場：後方中央につくりだされる音場です。

音場パラメーターを変更する

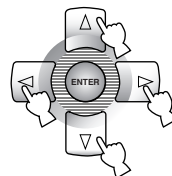
各音場プログラムおよびサラウンドデコードモードは初期設定のままで十分お楽しみいただけますが、音場パラメーターを変更することにより、ソースやリスニングルームの音響に合わせて音場効果をアレンジできます。

ご注意
- 操作を始める前に、本機および本機に接続したテレビの電源が入っていることを確認してください。
- セットメニュー「設定の保護」を「保護」に設定しているとパラメーターを変更できません。変更する前に、「可変」に設定してください(133ページ)。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

2 SET MENUキーを押して、セットメニュー画面を表示する

3 △キーを押して「サラウンド選択・設定」を選び、▷キーを押す

4 △/▽キーを押して音場プログラムまたは「サラウンドデコード」を選び、▷キーを押す

5 △/▽キーを押してサブプログラムを選び、▷キーを押す

「サラウンドデコード」を選んだ場合は、「デコーダー選択」でパラメーターを変更するデコーダーを選び、◁キーを1度押してから手順6へ進みます。

6 △/▽キーを押して変更したいパラメーターを選び、▷キーを押す

7 △/▽/◁/▷キーを押して、設定値を変更する

8 他の音場プログラムまたはサラウンドデコードモードのパラメーターを変更する場合は、手順2~7を繰り返す

9 SET MENUキーを押して終了する

メモリー機能(SYSTEM MEMORY)について

本機のメモリー機能を使えば、音場パラメーターによる複数の設定を記憶し、その中から、使い方や環境に応じて最適な設定を呼び出せます。メモリー機能について詳しくは、138ページをご覧ください。

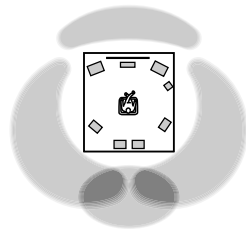
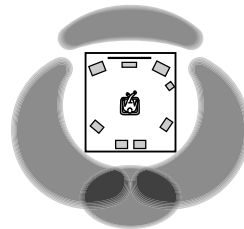
音場パラメーター一覧

項　目	内　容	参照ページ
エフェクト量の加減	エフェクトレベル(効果音)の微調節を行います。	101
セリフの位置調整	セリフなど、中央に定位する音の高さを調節します(プレゼンススピーカー使用時のみ有効)。	101
ディレイ	音源と壁面との距離感を調節します。	102
音場空間の大きさ	広がり感を調節します。	102
響きの強さ	響き具合を調節します。	103
サラウンド音場の遅れ	サラウンド音場の遅延時間を調節します。	103
サラウンド音場の広さ	サラウンド音場の広がり感を調節します。	103
サラウンド音場の響き	サラウンド音場の響き具合を調節します。	103
サラウンドバックの遅れ	サラウンドバック音場の遅延時間を調節します(6.1または7.1チャンネルで再生しているときのみ有効)。	103
サラウンドバックの広さ	サラウンドバック音場の広がり感を調節します(6.1または7.1チャンネルで再生しているときのみ有効)。	103
サラウンドバックの響き	サラウンドバック音場の響き具合を調節します(6.1または7.1チャンネルで再生しているときのみ有効)。	103
デコーダー選択	Movieプログラム(Mono Movie以外)およびサラウンドデコードモードを選んでいるときのデコーダーを設定します。	104
ダイレクト	2チャンネルアナログソースを、デコーダーをバイパスして出力します。	104
センター音量	7ch Stereo音場でのセンターチャンネルの出力レベルを調節します。	104
サラウンド左音量	7ch Stereo音場でのサラウンドLチャンネルの出力レベルを調節します。	104
サラウンド右音量	7ch Stereo音場でのサラウンドRチャンネルの出力レベルを調節します。	104
サラウンドバック音量	7ch Stereo音場でのサラウンドバックチャンネルの出力レベルを調節します。	104
プレゼンス左音量	7ch Stereo音場でのプレゼンスLチャンネルの出力レベルを調節します。	105
プレゼンス右音量	7ch Stereo音場でのプレゼンスRチャンネルの出力レベルを調節します。	105
レベル	コンプレストミュージック・エンハンサーモードの効果レベルを調節します。	105
パノラマ	ドルビープロロジックⅡxおよびドルビープロロジックⅡのフロント音場の広がり感を調節します(ドルビープロロジックⅡxおよびドルビープロロジックⅡデコーダーのMusicモード再生時のみ有効)。	105
センターの広がり	ドルビープロロジックⅡxおよびドルビープロロジックⅡのセンター音声左右への広がり感を調節します(ドルビープロロジックⅡxおよびドルビープロロジックⅡデコーダーのMusicモード再生時のみ有効)。	105
ディメンション	ドルビープロロジックⅡxおよびドルビープロロジックⅡのサラウンド音場のフロント側とリア側のレベル差を調節します(ドルビープロロジックⅡxおよびドルビープロロジックⅡデコーダーのMusicモード再生時のみ有効)。	105
センター・イメージ	DTS Neo:6のフロント音場の広がり感を調節します(DTS Neo:6デコーダーのMusicモード再生時のみ有効)。	105
フォーカス	SRS CSⅡのフロント定位感を調節します(SRS CSⅡデコーダーのCinemaおよびMusicモード再生時のみ有効)。	106
トゥルーベース	SRS CSⅡの低音域出力レベルを調節します(SRS CSⅡデコーダーのCinemaおよびMusicモード再生時のみ有効)。	106
残響時間	余韻の長さを調節します。	106
残響音の遅れ	残響音の遅延時間を調節します。	106
残響音の強さ	余韻の強さを調節します。	107
初期化	サブプログラムごとに、変更した音場パラメーターを初期化します。	107

基本的な音場パラメーター

音場パラメーターを変更する際は、はじめに「エフェクト量の加減」および「セリフの位置調整」を調節し、音場効果を一度確認したあとでその他のパラメーターを変更することをおすすめします。

エフェクト量の加減

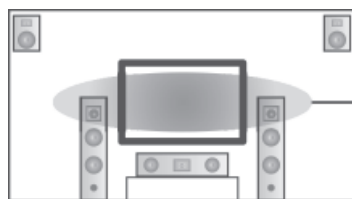
エフェクト音量（音場効果のかかり具合＝DSPレベル）を微調節するパラメーターです。視聴環境にあわせて、直接音のレベルを確認しながら音場効果のかかり具合を変更できます。

エフェクト量　小

エフェクト量　大

効果音が小さく感じられたり、各音場プログラム間の違いが感じ取れない場合は：
効果レベルを大きくしてください。

音がぼんやりと聴こえたり、音場効果のかかり具合が過剰に感じられる場合は：
効果レベルを小さくしてください。

可変範囲：−6〜+3dB

セリフの位置調整

プレゼンススピーカーを使っている場合に、セリフなどの中央に定位する音の定位位置（上下方向）を調節するパラメーターです。値を小さくすると音が下方に定位し、大きくすると上方に定位します。

セリフの理想的な
定位位置

理想的な定位位置に移動

セリフがテレビ画面よりも低い位置から聞こえる場合、セリフの上下位置を上に移動してください。数値を大きく設定するほど、セリフの位置は上に移動します。

可変範囲：0〜5
初期設定値：0

ご注意

- プレゼンススピーカーを使用していない場合は、「セリフの位置調整」を調節できません。また、セットメニュー「PR/SBの優先」（127ページ）を「サラウンドバック」に設定して、6.1または7.1チャンネルで再生しているときも、プレゼンス成分がフロントL／Rスピーカーに振り分けられて出力されるため、「セリフの位置調整」を調節しても効果はありません。
- セリフの上下位置を初期設定よりも下に移動することはできません。

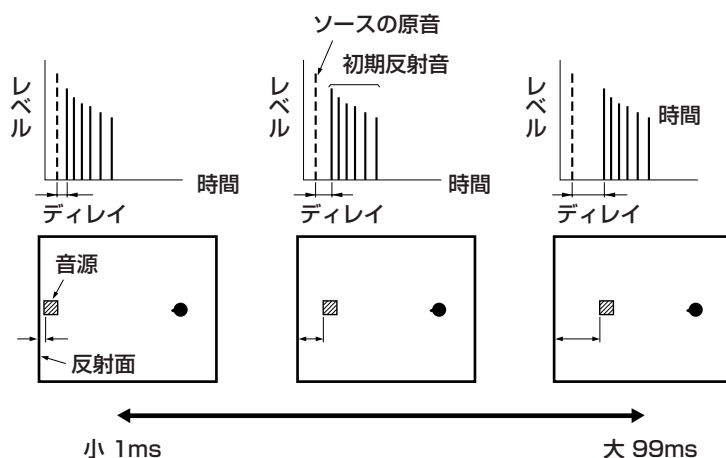
その他の音場パラメーター

「エフェクト量の加減」および「セリフの位置調整」のほかにも、以下の音場パラメーターを変更できます。

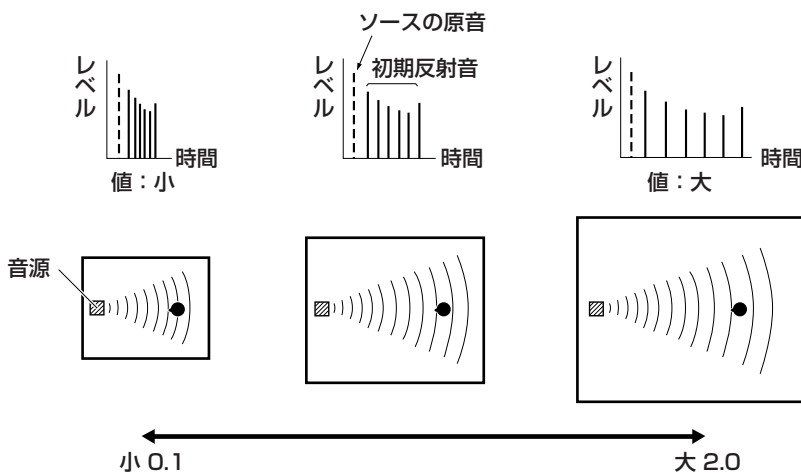
すべてのプログラム用

ディレイ

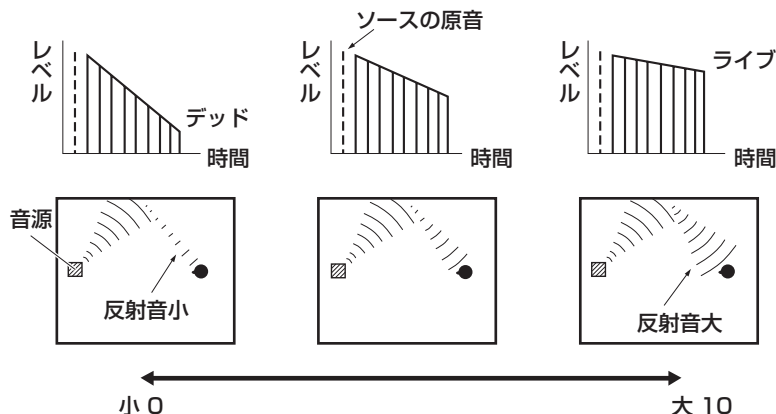
直接音から初期反射音が始まるまでの時間(遅延時間)を調節するパラメーターです。初期反射音の遅れは、音源と反射面との距離によって決まります。つまり、遅延時間を短くすると、音源が壁面に近づいた感じになり、逆に遅延時間を長くすると、音源は壁面から離れた感じになります。「ディレイ」を調節することにより、ソースの原音から周りの壁までの距離感、空間の大きさ感、音像のできかたなどが調節できます。

可変範囲：1〜99ms

音場空間の大きさ

空間の広がり感を調節するパラメーターです。値を大きくするほど広い空間(部屋)になり、値を小さくするほど狭い空間になります。壁と壁の間が広くあいている大きなホールほど、音が反射を繰り返す間隔が長くなります。したがって、反射音同士の時間間隔をコントロールすれば、広がり感を変えることができます。1.0で実測値そのままに、2.0にすると、1辺の長さが倍の空間になります。

可変範囲：0.1〜2.0

響きの強さ

初期反射音の減衰特性を決めるパラメーターです。値を大きくするほど、ライブな(反響が多い)音場になり、値を小さくするほどデッドな(反響が少ない)音場になります。実際のホールでのライブ感／デッド感は、反射面の吸音特性によって決定され、反射音の減衰が早ければデッドに、遅ければライブに感じられます。

可変範囲：0〜10

サラウンド音場の遅れ

直接音が出てからサラウンド音場が発生するまでの時間を調節するパラメーターです。値を大きくするほどサラウンド音場が遅れて発生します。

可変範囲：1〜49ms

サラウンド音場の広さ

サラウンド音場の広がり感を調節するパラメーターです。値を大きくするほどサラウンドの音場空間が広がります。

可変範囲：0.1〜2.0

サラウンド音場の響き

サラウンド音場の減衰量を調節するパラメーターです。値を大きくするほどサラウンド音場の響きが強くなります。

可変範囲：0〜10

サラウンドバックの遅れ

直接音が出てからサラウンドバック音場が発生するまでの時間を調節するパラメーターです。値を大きくするほどサラウンドバック音場が遅れて発生します。
6.1または7.1チャンネルで再生しているときのみ有効です。

可変範囲：1〜49ms

サラウンドバックの広さ

サラウンドバック音場の広がり感を調節するパラメーターです。値を大きくするほどサラウンドバックの音場空間が広がります。
6.1または7.1チャンネルで再生しているときのみ有効です。

可変範囲：0.1〜2.0

サラウンドバックの響き

サラウンドバック音場の減衰量を調節するパラメーターです。値を大きくするほどサラウンドバック音場の響きが強くなります。
6.1または7.1チャンネルで再生しているときのみ有効です。

可変範囲：0〜10

Movie/SUR.DECODE用

デコーダー選択

Movieプログラム(Mono Movieは除く)およびサラウンドデコードモードを選んでいるときのデコーダーを設定します。セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンドバック」(126ページ)が「なし」の設定になっている場合は「PLIIx」は「PLII」に変わります。

Movie用

選択項目:PLIIxムービー、PLIIムービー、Neo:6シネマ
初期設定値:PLIIxムービー

SUR. DECODE用

選択項目:プロロジック、PLIIxムービー、PLIIxミュージック、PLIIxゲーム、
Neo:6シネマ、Neo:6ミュージック、CSIIシネマ、CSIIミュージック
初期設定値:プロロジック

2ch Stereo用

ダイレクト

「自動判別」に設定すると、本機のデコーダーをバイパスして2チャンネルアナログソースを出力します。「自動測定メニュー」の「周波数補正」を、「フロントに近似」または「測定を行わない」で設定した場合(61ページ)、セットメニュー「パラメトリックEQ」ですべてのチャンネルのゲインを0dBに設定している場合、「トーンコントロール」(120ページ)の「低音」と「高音」を0dBに設定している場合、セットメニュー「Adaptive DRC」(116ページ)が「オフ」で、音色の調節(TONE CONTROL)の「BASS」および「TREBLE」が「0dB」に設定されている場合に有効になります。

選択項目:自動判別、オフ
初期設定値:自動判別

ご注意

- ドルビーデジタル、DTSまたはAACのマルチチャンネル信号が入力されると、2チャンネル(フロントL/Rスピーカー)に振り分けられます。
- 以下の場合は、フロントL/Rスピーカーの低音はサブウーファーから出力されます。
  - セットメニュー「スピーカーの設定」の「低音出力先」が「フロントとサブウーファー」に設定されているとき
  - セットメニュー「スピーカーの設定」の「フロント」が「小」に設定されていて、「低音出力先」が「サブウーファー」に設定されているとき

7ch Stereo用

センター音量

7ch Stereoプログラムでのセンターチャンネルの音量を調節します。

可変範囲:0~100%
初期設定値:100%

サラウンド左音量

7ch StereoプログラムでのサラウンドLチャンネルの音量を調節します。

可変範囲:0~100%
初期設定値:100%

サラウンド右音量

7ch StereoプログラムでのサラウンドRチャンネルの音量を調節します。

可変範囲:0~100%
初期設定値:100%

サラウンドバック音量

7ch Stereoプログラムでのサラウンドバックチャンネルの音量を調節します。

可変範囲:0~100%
初期設定値:35%(サラウンドバックスピーカー2本使用時)
50%(サラウンドバックスピーカー1本使用時)

プレゼンス左音量

7ch Stereoプログラムでのプレゼンスレチャンネルの音量を調節します。

可変範囲：0〜100%
初期設定値：33%

プレゼンス右音量

7ch StereoプログラムでのプレゼンスRチャンネルの音量を調節します。

可変範囲：0〜100%
初期設定値：33%

コンプレストミュージック・エンハンサー用

レベル

コンプレストミュージック・エンハンサーモードの効果レベルを調節します。「効果小」にすると効果レベルは弱くなり、「効果大」にすると強くなります。

可変範囲：効果小、効果大
初期設定値：効果大

PLIIx Music/PLII Music用

パノラマ

PRO LOGIC Ⅱx MusicおよびPRO LOGIC ⅡMusicプログラムでのフロント音場の広がり感を調節するパラメーターです。フロントL／Rの音声を左右に大きく回り込ませることで、サラウンド音場につながるような広がり感が得られます。

選択項目：オン、オフ
初期設定値：オフ

センターの広がり

PRO LOGIC Ⅱx MusicおよびPRO LOGIC ⅡMusicプログラムでのセンター音声の左右への広がり感を調節するパラメーターです。センターからの音声をお好みに合わせて左右に振り分けることができます。0にするとセンターのみ、7にするとフロントL／Rのみからセンター音声が出力されます。

可変範囲：0〜7
初期設定値：3

ディメンション

PRO LOGIC Ⅱx MusicおよびPRO LOGIC ⅡMusicプログラムでのフロント音場とサラウンド音場のレベル差を調節するパラメーターです。再生するソフトによって生じる、フロントとサラウンドのレベル差を調節してお好みのバランスにすることができます。−にするとサラウンド側、＋にするとフロント側が強くなります。

可変範囲：−3〜標準〜+3
初期設定値：標準

Neo:6 Music用

センター・イメージ

DTS Neo: 6 Musicプログラムでのフロント音場の広がり感を調節するパラメーターです。値を小さくするとフロント音場の広がりが大きくなり、大きくすると狭く（センターへの定位が強く）なります。

可変範囲：0.0〜1.0
初期設定値：0.3

SRS CSⅡ用

フォーカス

SRS CSⅡプログラムでのセリフの明瞭感を調節するパラメーターです。値を大きくするほどセリフがはっきりと聞こえるようになります。

可変範囲：0〜8
初期設定値：0

トゥルーベース

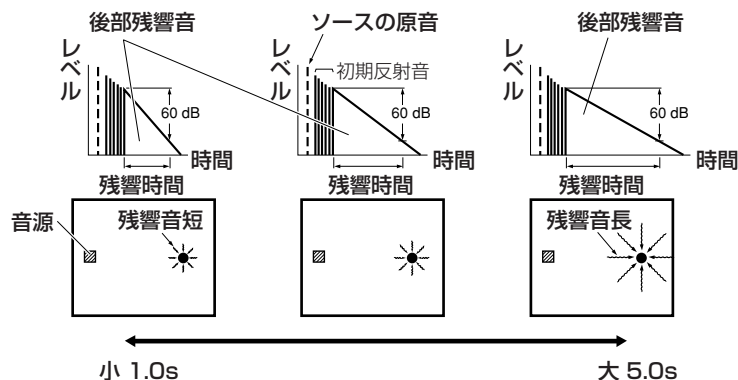
SRS CSⅡプログラムでの低音域を調節するパラメーターです。値を大きくするほど低音域が強調され、サブウーファーがない場合でも効果的に低音を再生することができます。サブウーファーがある場合は、より重厚な低音を再生することができます。

可変範囲：0〜8
初期設定値：0

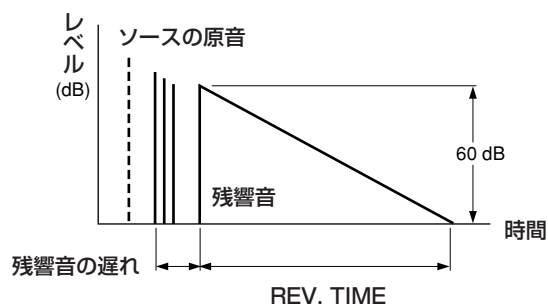
その他

残響時間

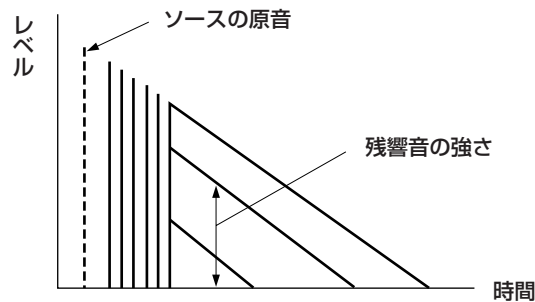
後部残響音が減衰していく時間を調節するパラメーターです。約1kHzの残響音が60dB減衰するのにかかる時間を基準にしています。値を小さくするほど残響音が早く減衰します。長めの残響時間を設定すれば豊かな残響音に、短めの残響時間を設定すればすっきりした残響音になります。

可変範囲：1.0〜5.0s

残響音の遅れ

残響音が発生し始めるまでの時間を調節するパラメータです。値を大きくするほど残響音が初期反射音より遅れて発生するようになります。同じ「残響時間」でも、「残響音の遅れ」を長くしていくと大きな空間の残響感になります。

可変範囲：0〜250ms

残響音の強さ

後部残響音のレベルを調節するパラメーターです。値を大きくするほど後部残響音のレベルが大きくなり、余韻が強く感じられます。値を小さくするほど後部残響音のレベルが小さくなり、余韻が弱く感じられます。

可変範囲：0〜100%

初期化

変更した音場パラメーターをサブプログラムごとに初期設定に戻します。

音場パラメーターを初期設定に戻す

すべてを初期設定に戻す

アドバンストセットアップメニュー「INITIALIZE」の「DSP PARAM」で、すべての音場パラメーターを初期設定に戻せます(149ページ)。

サブプログラムごとに初期設定に戻す

「初期化」(上記)で、設定を変更したすべてのパラメーターをサブプログラムごとに初期設定に戻せます。

入力信号を切り替える(入力モード切り替え)

1つの再生機器を複数の方法で音声接続している場合(例：DVDプレーヤーをHDMI、同軸／光デジタル、アナログの4種類の方法で同時に接続している)に入力する音声信号を選びます。

フロントパネルのAUDIO SELECTキー、またはリモコンのAUDIO SELキーを押すと、現在の入力モードが表示されます。入力モード表示中にもう一度押すと、入力モードが切り替わります。

自動判別

以下の順序で入力信号を自動的に選びます。通常はこの設定でお使いください。

① HDMI信号
② 同軸／光デジタル信号
③ アナログ信号

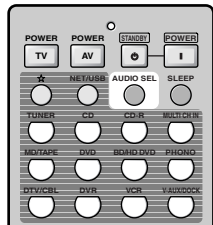
HDMI

HDMI信号を入力します。HDMI信号以外の信号が同時に入力されても再生されません。

同軸/光

同軸デジタル信号または光デジタル信号を入力します。両方の信号が同時に入力された場合は、同軸デジタル端子が優先されます。同軸／光デジタル信号以外の信号が同時に入力されても再生されません。

アナログ

アナログ信号を入力します。アナログ信号以外の信号が入力されても再生されません。

ヒント

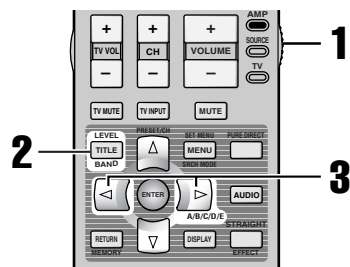
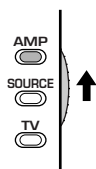
- セットメニュー「音声入力選択」(135ページ)で、入力モードを切り替えることもできます。
- セットメニュー「音声入力初期値」(133ページ)で、電源を入れたときに適用する入力モードを設定できます。
- デジタル入力信号をピュアダイレクトモード(96ページ)で楽しみたい場合は、「自動判別」または「HDMI」、「同軸/光」に設定してください。

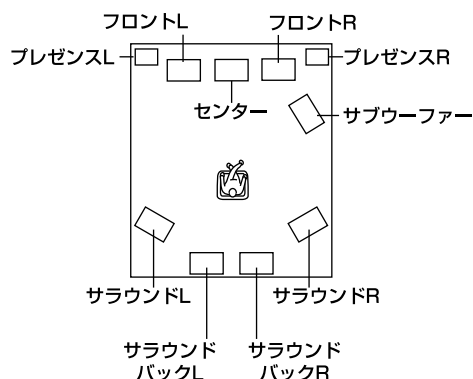
ご注意

- 各入力端子に外部機器が接続されていない場合、入力端子を指定しても音声は出力されません。
- セットメニュー「デコードモード」(136ページ)で、「DTS固定」または「AAC固定」を選択している場合、入力モードを「アナログ」にしてもアナログ音声は本機から出力されません。
- 各端子に外部機器が割り当てられていない場合、その端子は選べません。

スピーカーの音量を調節する

再生しながら調節する

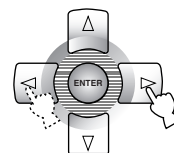
再生音を聴きながら、各スピーカーからの音量を調節します。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

2 LEVELキーを繰り返し押して、調節したいスピーカーを選ぶ

FRONT L	フロントLスピーカー
CENTER	センタースピーカー
FRONT R	フロントRスピーカー
SUR.R	サラウンドRスピーカー
SB	サラウンドバックスピーカー
SB R	サラウンドバックRスピーカー
SB L	サラウンドバックLスピーカー
SUR.L	サラウンドLスピーカー
SWFR	サブウーファー
PRNS L	プレゼンスLスピーカー
PRNS R	プレゼンスRスピーカー

ヒント

- ∆／∇キーでも操作できます。
- セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンドバック」を「大1台」または「小1台」に設定した場合、「SB R」および「SB L」は表示されません。代わりに「SB」と表示され、1台のみの調節になります（126ページ）。

3 ◁／▷キーを押して、スピーカーの音量を調節する

音量の調節範囲は、－10.0～＋10.0dBです。

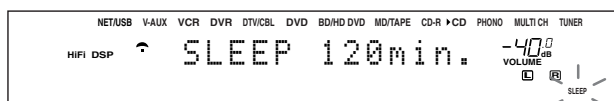
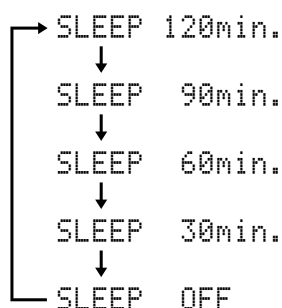
ご注意

- セットメニュー「スピーカーの設定」で「無」に設定されているスピーカーの音量は調節できません（126ページ）。
- セットメニュー「スピーカーの設定」の「低音出力先」を「フロントに出力」に設定している場合、サブウーファーは調節はできません（127ページ）。
- LEVELキーでスピーカーの音量を調節すると、セットメニュー「スピーカーの音量」（129ページ）で調節したスピーカーの音量も自動的に変更されます。

一定時間後に自動的に電源を切る(スリープタイマー)

設定した時間が経過すると、自動的にスタンバイになるように設定します。聴きながら、または録音しながらおやすみになりたいときに便利です。スリープタイマーが作動すると、本機背面のACアウトレットに接続した機器の電源も切れます。

1 ***ソースを再生する***

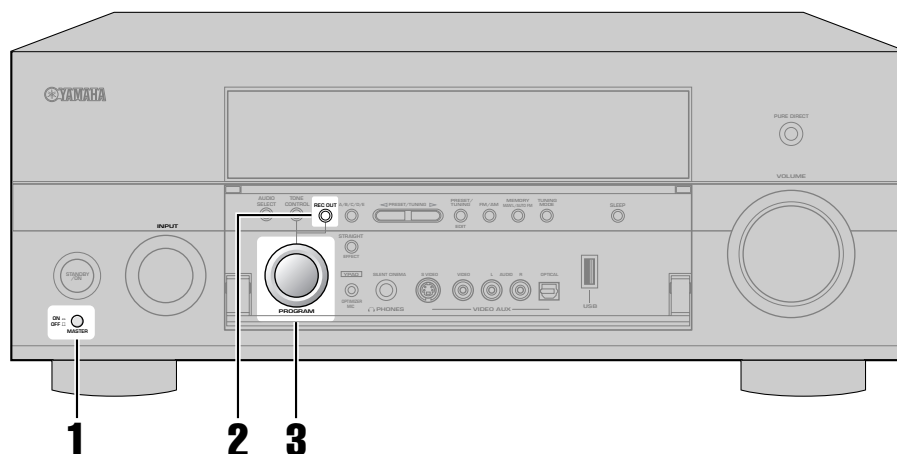
2 ***SLEEPキーを繰り返し押して、スタンバイになるまでの時間を選ぶ***

SLEEPキーを押すごとに、下記のように時間が切り替わります。時間を選んでいるあいだは、フロントパネルディスプレイにSLEEPインジケーターが点滅します。

SLEEPインジケーターが点灯に変わると、スリープタイマーの設定は完了です。

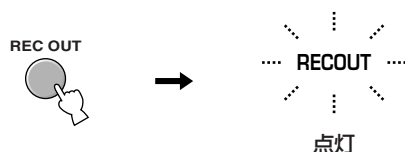
ヒント

- スリープタイマーを解除するには、「SLEEP OFF」を選んでください。
- スリープタイマーが設定されているときに再度SLEEPキーを押すと、残り時間はリセットされ、スリープタイマーが再設定されます。
- リモコンのSTANDBYキー、本体のSTANDBY/ONキーやMASTER ON/OFFスイッチを押して本機の電源をスタンバイ、またはオフにしたり、電源コードを抜いたりすると、スリープタイマーは解除されます。
- タイマー再生したいときは、市販のタイマーを使います。本機では再生したい入力ソースを選び、音量を調節しておきます。セットメニュー「音量の初期値」を設定すれば、設定した音量で再生を始めることもできます(117ページ)。再生機器やタイマーの取扱説明書もあわせてご覧ください。

外部機器で録音／録画する

本機に接続した録音／録画機器で、音声や映像を録音／録画できます。

1 ***本機および本機に接続されている、すべての機器の電源を入れる***

2 ***REC OUTキーを押す***

RECOUTインジケーターが点灯します。

3 ***RECOUTインジケーター点灯中に、本体のPROGRAMセレクターで録音／録画したいソースを選ぶ***

フロントパネルディスプレイに、録音／録画する入力名が表示されます。「SOURCE」を選べば、見ている（聴いている）ソースを録音／録画できます。

4 ***ソースを再生する***

再生する機器の取扱説明書をご覧ください。

FM／AM放送を録音したいときは、放送局を選びます（70ページ）。

5 ***録音／録画を開始する***

録音／録画する機器の取扱説明書をご覧ください。

ヒント

- 録音／録画する前に、あらかじめ「試し録音」「試し録画」をしてください。
- 録音されるレベルの調節や操作は、それぞれの録音機器で行います。お使いの機器の取扱説明書をご覧ください。

あなたが録音したものは、個人で楽しむ場合以外は、著作権者に無断で使用することはできません。

ご注意

- 本機をスタンバイにすると、接続した機器間で録音／録画できません。
- 入力ソースのOUT(REC)端子からは、信号は出力されません(例：DVR IN端子に入力された信号は、DVR OUT端子から出力されません)。
- 本機のDSP処理による音場効果は録音できません。
- 録音中に、音量や音質を調節したり、音場プログラムを変更したりしても、録音される音声には影響しません。
- MULTI CH INPUT端子またはHDMI IN端子に入力された信号は録音できません。
- アナログ音声出力端子からアナログで録音する場合は、録音したい入力ソースをアナログで接続します。また、光デジタル出力端子から、デジタルで録音する場合は、録音したい入力ソースをデジタルで接続します。
- Sビデオ入力端子に入力されたSビデオ信号は、Sビデオ出力端子からのみ録画できます。同様に、ビデオ入力端子に入力されたビデオ信号は、ビデオ出力端子からのみ録画できます。ビデオコンバージョン機能は作動しません。

DTS LD／DTS CD音声の録音について

DTS信号は、デジタルビットストリームで伝送されるため、DTS信号をデジタルで録音したものをデコーダーを通さずに再生するとノイズだけが再生されます。

DTS CDの音声を録音する場合は、DTSデコーダー内蔵のDVDプレーヤーからアナログで録音することをおすすめします。詳しくは、お使いのプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

セットメニュー一覧

本機ではお使いのシステムで最適な音声や映像をお楽しみいただけるように、下記のセットメニューで設定を変更できます。
お使いの環境に合わせて設定を変更してください。

サラウンド選択・設定

各音場プログラムやサラウンドデコードモードのパラメーターを調整します。（99ページ）

入力選択・設定

入出力端子の割り当て変更や、表示される入力機器名の変更など、信号の入出力に関して以下のメニューを設定／変更できます。以下の7つのメニューがあります。

項　目	内　　容	参照ページ
端子の割り当て	使用する機器が本機の入出力端子の機器名と異なる場合に、使用する機器に合わせて端子を割り当てます。	135
音声入力選択	音声入力端子の種類を選択します。	135
デコードモード	アナログ／デジタル信号の入力モードを切り替えます。	136
再生レベル補正	選んでいる入力の再生レベルを補正します。	136
入力名変更	各入力名を変更します。	136
入力端子設定	MULTI CH INPUT端子に入力する信号を設定します。	137
映像選択	MULTI CH INPUT端子に入力された音声信号に組み合わせる映像入力ソースを設定します。	137

マニュアル設定：音量の設定

ダイナミックレンジや音量に関して以下のメニューを設定／変更できます。以下の5つのメニューがあります。

項　目	内　　容	参照ページ
Adaptive DRC	本機の音量とダイナミックレンジを連動して調節します。	116
Adaptive DSP Level	本機の音量とDSPレベルを連動して調節します。	117
音量の上限	音量の最大値を設定します。	117
音量の初期値	電源をオンにしたときの音量を設定します。	117
ミューティング量	ミュート時に下げる音量を調節します。	117

マニュアル設定：音の設定

音質や音色の調整など、音声の出力に関して以下のメニューを設定／変更できます。以下の8つのメニューがあります。

項　目	内　　容	参照ページ
LFEレベル	ドルビーデジタル、DTSおよびAACでのLFE信号の再生レベルを調節します。	118
ダイナミックレンジ	ドルビーデジタル、DTSおよびAAC再生時のダイナミックレンジを調節します。	118
パラメトリックEQ	パラメトリックイコライザーを使って、各スピーカーの音色を調節します。	119
トーンコントロール	スピーカーまたはヘッドホンの低音域と高音域を調節します。	120
リップシンク	音声と映像のずれを補正します。	121
EXTDサラウンド	6.1／7.1チャンネル再生時のデコーダーを選びます。	121
チャンネルミュート	チャンネルごとに音声をミュートします。	122
多重モノラル音声	AACモノラル音声入力時に出力する音声を選びます。	122

マニュアル設定:映像の設定

映像の出力に関して以下のメニューを設定／変更できます。以下の8つのメニューがあります。

項　目	内　　容	参照ページ
ビデオコンバージョン	映像信号を、違う種類の映像信号に変換するかしないかを設定します。	123
コンポーネントI/P	インターレース信号をプログレッシブ信号へ変換するかしないかを設定します。	123
HDMI解像度	HDMI端子から出力する映像信号の解像度変換を設定します。	124
HDMIアスペクト	縦横比4:3のHDMI映像信号を画面に映し出すときに、16:9に変換します。	124
ショートメッセージ	テレビ画面表示下部に表示されるメッセージについて設定します。	125
オンスクリーン表示	iPodやUSBデバイス、ネットワークオーディオ操作時のメニュー画面表示時間を設定します。	125
表示位置の調整	テレビ画面表示の位置を調節します。	125
壁紙の設定	壁紙の種類を設定します。	125

マニュアル設定:基本設定

お使いのスピーカーシステムに合わせ、以下のメニューを設定／変更できます。以下の4つのメニューがあります。

項　目	内　　容	参照ページ
テストトーン	基本設定を行うときに、テストトーンを使うか使わないかを設定します。	126
スピーカーの設定	ご使用になるスピーカーに合わせて、サイズや有無などを設定します。	126
スピーカーの距離	各スピーカーからリスニングポジションまでの距離に合わせて、音の到達するタイミングを設定します。	128
スピーカーの音量	各スピーカーからの出力レベルを設定します。	129

マニュアル設定:ネットワーク/USB設定

IPアドレスの設定や再生スタイルの変更など、ネットワーク接続や再生方法に関して以下のメニューを設定／変更できます。以下の3つのメニューがあります。

項　目	内　　容	参照ページ
ネットワーク設定	本機のIPアドレスやサブネットマスクなど、ネットワーク接続に関するメニューを設定します。	130
プレイスタイル	パソコンやUSBデバイスを楽しむ際のリピート／シャッフル再生を設定します。	131
ネットワーク情報	マックアドレスなどの情報を表示します。	131

マニュアル設定:その他の設定

その他様々な機能に関して以下のメニューを設定／変更できます。以下の7つのメニューがあります。

項　目	内　　容	参照ページ
本体表示器の設定	フロントパネルディスプレイ表示について設定します。	132
iPod	iPodの充電モードを設定します。	132
音声入力初期値	電源を入れたときに適用する音声入力端子を設定します。	133
デコードモード初期値	電源を入れたときに適用するデコードモードを設定します。	133
EXTDサラウンド初期値	電源を入れたときに適用するデコーダーを設定します。	133
設定の保護	誤操作によって設定値が変更されないように保護します。	133
HDMI設定	HDMI音声入力信号を本機で再生するか、他の機器に伝送するかを設定します。	134

自動測定メニュー

YPAO(Yamaha Parametric Room Acoustic Optimizer)により、最適な視聴空間を自動的に設定します(54ページ)。

システム・メモリー

お好みに合わせて設定した音場プログラムやパラメーターなどの設定を呼び出したり記憶させたりします(138ページ)。

信号の情報

入力されている音声信号および映像信号の情報を表示します(144ページ)。

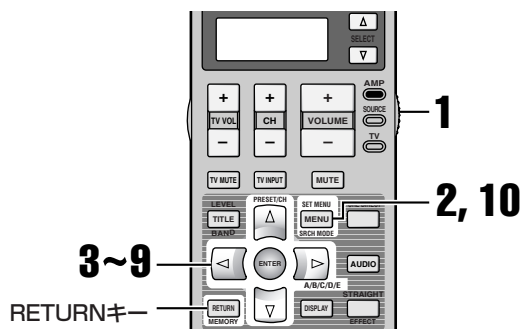
表示言語

テレビ画面表示の言語を選択します(146ページ)。

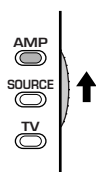
セットメニューの表示と操作方法

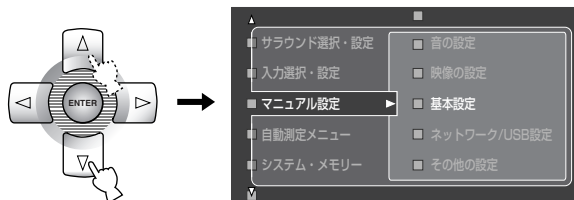
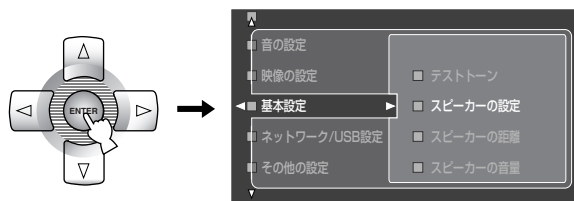
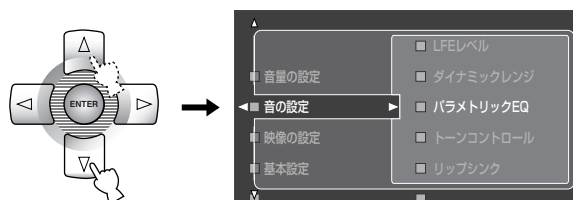
セットメニューの設定操作について説明します。セットメニューの各項目の詳細については116～134ページをご覧ください。

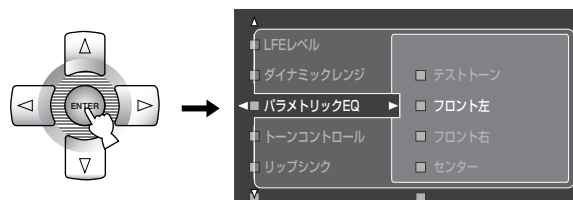
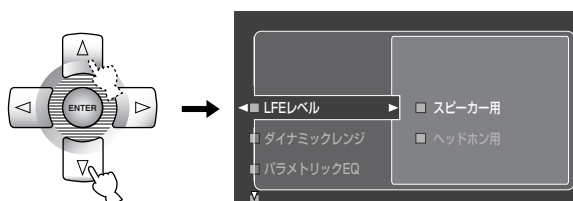
ご注意

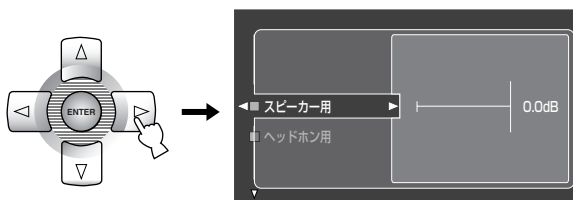
操作を始める前に、本機および本機に接続したテレビの電源が入っていることを確認してください。

ヒント

セットメニュー操作中に1つ前のメニュー表示に戻りたい場合は、リモコンの◁キーを押します。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

2 SET MENUキーを押して、セットメニュー画面を表示する

3 △／▽キーを押して、「マニュアル設定」を選ぶ

4 ENTERキーを押す

5 △／▽キーを繰り返し押して、設定したいメニューがあるカテゴリーを選ぶ

6 ENTERキーを押す

選んだカテゴリー内のメニューが表示されます。

7 △／▽キーを繰り返し押して、設定したいメニューを選ぶ

8 ▷キーを押す

選んだメニューの設定画面が表示されます。

項目によっては、△／▽／◁／▷またはENTERキーを押してサブメニューを選びます。

9 △／▽／◁／▷キーを押して、設定を変更する

10 セットメニューを終了するときは、SET MENUキーを押す

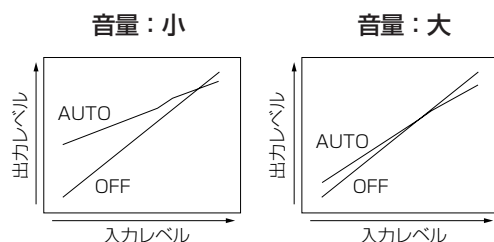
音量を設定する（音量の設定）

音量に関するさまざまな設定を変更します。

音量とダイナミックレンジを連動させる（Adaptive DRC）

本機の音量とダイナミックレンジ（最大音量から最小音量までの幅）を連動して調節します。夜間の再生時などに音量を小さくすると、ダイナミックレンジは自動的に圧縮され、小さい音量でも聴きやすくなります。
（「マニュアル設定」→「音量の設定」→「Adaptive DRC」）

選択項目：自動、オフ
初期設定：オフ

自動
ダイナミックレンジを自動的に調節します。
オフ
ダイナミックレンジを自動的に調節しません。

ヒント
- 「音の設定」の「ダイナミックレンジ」で、ダイナミックレンジを3段階から選ぶこともできます。
- ヘッドホンを使って再生しているときなどにも効果的です。

ご注意
ピュアダイレクトモード（96ページ）で再生しているときは、「Adaptive DRC」は機能しません。

ダイナミックレンジとは？

再生するソースに含まれる、最小音量から最大音量までの幅を表わします。ダイナミックレンジを圧縮して音量幅を小さくすると、小音量域成分は引き上げられ、大音量域成分は引き下げられます。これにより、小音量域成分は聞き取りやすく、大音量域成分は音量を抑えて再生されます。

音量とDSPレベルを連動させる（Adaptive DSP Level）

本機の音量とDSPレベル（101ページ）を連動して調節します。音量を小さくすると、DSPレベルは自動的に強くなります。
（「マニュアル設定」→「音量の設定」→「Adaptive DSP Level」）

選択項目：自動、オフ
初期設定：オフ

自動
DSPレベルを自動的に調節します。
オフ
DSPレベルを自動的に調節しません。

ご注意
「自動」に設定しても、音場パラメーター「エフェクト量の加減」（101ページ）の設定値は変わりません。

音量の上限を設定する（音量の上限）

音量が間違って上がり過ぎないように、音量の最大値を設定します。例えば、「−5.0dB」に設定しているときは、音量の可変範囲は−80.0dBから−5.0dBになります。初期設定値（+16.5dB）では、最大音量まで出力します。音量の最大値を制限しない場合は、「+16.5dB」に設定してください。

（「マニュアル設定」→「音量の設定」→「音量の上限」）

選択項目：＋16.5dB、＋15.0dB、＋10.0dB、+5.0dB、0dB、−5.0dB、−10.0dB、−15.0dB、−20.0dB、−25.0dB、−30.0dB
初期設定値：＋16.5dB

ご注意

- 「自動測定メニュー」（54ページ）の測定中は、「音量の上限」の設定に関わらず音量は自動的に0dBに調節されます。
- 「音量の上限」の設定は「音量の初期値」の設定よりも優先されます。例えば、「音量の上限」を「−30.0dB」、「音量の初期値」を「−20.0dB」に設定しても、次回電源オン時の音量は自動的に「−30.0dB」に制限されます。

音量の初期値を設定する（音量の初期値）

電源をオンにしたときの音量を設定します。「オフ」に設定すると、前回本機の電源をオフにしたときの音量で再生します。

（「マニュアル設定」→「音量の設定」→「音量の初期値」）

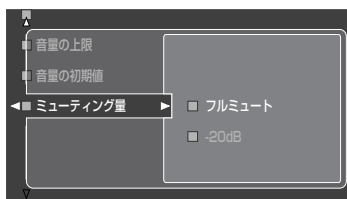
選択項目：オフ、ミュート、−80.0dB〜＋16.5dB
初期設定値：オフ

ご注意

「音量の上限」の設定は「音量の初期値」の設定よりも優先されます。例えば、「音量の上限」を「−30.0dB」、「音量の初期値」を「−20.0dB」に設定しても、次回電源オン時の音量は自動的に「−30.0dB」に制限されます。

ミュート時の音量を設定する（ミューティング量）

ミュート（消音）時に下げる音量を調節します。

（「マニュアル設定」→「音量の設定」→「ミューティング量」）

選択項目：フルミュート、−20dB
初期設定：フルミュート

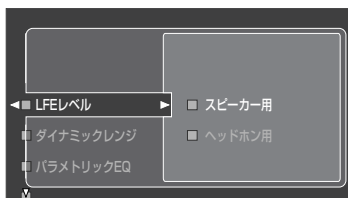
フルミュート
完全に消音し、無音にします。
−20dB
いま聴いている音量よりも、20dB下げて再生します。

音声出力の設定を変更する(音の設定)

音質や音色の調整など、音声の出力に関する設定を行います。操作方法について詳しくは、「セットメニューの表示と操作方法」(115ページ)をご覧ください。

LFEレベル

ドルビーデジタル、DTS、およびAAC信号に含まれる、LFE(低域効果音)の音量を調節します。スピーカーで音を聴く場合と、ヘッドホンで音を聴く場合を個別に調節できます。

(「マニュアル設定」→「音の設定」→「LFEレベル」)

スピーカー用

スピーカーで音を聴く場合のLFEの音量を調節します。

可変範囲：－20.0dB～0.0dB
初期設定値：0.0dB

ヘッドホン用

ヘッドホンで音を聴く場合のLFEの音量を調節します。

可変範囲：－20.0dB～0.0dB
初期設定値：0.0dB

ご注意

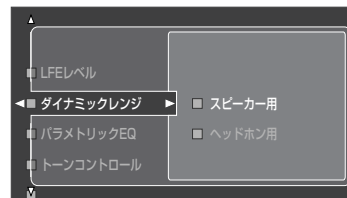
「低音出力先」の設定により、SUBWOOFER PRE OUT端子から一部の信号が出力されない場合があります。

LFE(低域効果音)とは？

映画の爆発シーンなど、意図されたシーンでのみ出力される、重低音による効果音です。

ダイナミックレンジ

ドルビーデジタル、ドルビーTrueHD、DTS、およびAAC再生時のダイナミックレンジを、3段階から選びます。スピーカーで音を聴く場合と、ヘッドホンで音を聴く場合を個別に選べます。

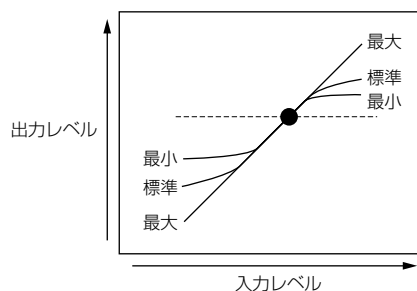
(「マニュアル設定」→「音の設定」→「ダイナミックレンジ」)

スピーカー用

スピーカーで音を聴く場合のダイナミックレンジを選びます。

選択項目：最大、標準、最小／自動
初期設定値：最大

ヘッドホン用

ヘッドホンで音を聴く場合のダイナミックレンジを選びます。

選択項目：最大、標準、最小／自動
初期設定値：最大

最大

入力された信号を補正せず､そのまま再生するダイナミックレンジです。

標準

一般的な家庭用として推奨するダイナミックレンジです。ドルビーTrueHD信号再生時も､入力信号からの情報に関わらず常にダイナミックレンジは標準値に保たれます。

最小／自動

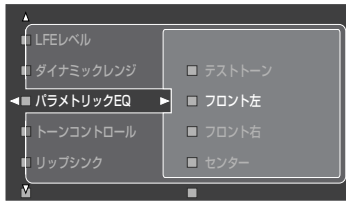
最小： ドルビーデジタル／DTS／AAC信号再生時に設定されます。小音量でも聴きやすく、夜間に音声を楽しむのに適したダイナミックレンジです。

自動： ドルビーTrueHD信号再生時に設定されます。入力信号からの情報に基づき、ダイナミックレンジが自動的に調節されます。

ダイナミックレンジとは？

再生するソースに含まれる、最小音量から最大音量までの幅を表わします。ダイナミックレンジを圧縮して音量幅を小さくすると、小音量域成分は引き上げられ、大音量域成分は引き下げられます。これにより、小音量域成分は聞き取りやすく、大音量域成分は音量を抑えて再生されます。

パラメトリックEQ

パラメトリックイコライザーを使用して、それぞれのスピーカーの音色を合わせます。
（「マニュアル設定」→「音の設定」→「パラメトリックEQ」）

1 △／▽キーを押して、テストトーン、または調節したいスピーカーを選ぶ

テストトーン

テストトーンを出力する、しないを選択します。サラウンドバックスピーカーを1台のみ使っている場合は、「サラウンドバック左」で調節してください。

選択項目：出力しない、出力する
初期設定値：出力しない

フロント左

フロントLスピーカーの音色を調節します。

フロント右

フロントRスピーカーの音色を調節します。

センター

センタースピーカーの音色を調節します。

サラウンド左

サラウンドLスピーカーの音色を調節します。

サラウンド右

サラウンドRスピーカーの音色を調節します。

サラウンドバック左

サラウンドバックLスピーカーの音色を調節します。

サラウンドバック右

サラウンドバックRスピーカーの音色を調節します。

プレゼンス左

プレゼンスLスピーカーの音色を調節します。

プレゼンス右

プレゼンスRスピーカーの音色を調節します。

サブウーファー

サブウーファーの音色を調節します。

2 ▷キーを押す

3 △／▽／◁／▷キーを押して、「選択」を選び、ENTERキーを繰り返し押して、調整したい項目を選択する

バンド

あらかじめ7つの中心周波数（#1～#7）を設定してあります（サブウーファーは#1、#2のみ）。希望する中心周波数を選んでゲインを調整します。この機能で周波数を選んだ場合、「周波数」の項目は調節できません。

ゲイン

レベルの強さを表します。0.5dBごとに、－20.0dBから+6.0dBの間で調節できます。

周波数

可変したい中心周波数を31.3Hzから16.0kHzの間で選びます（サブウーファーは31.3Hzから250Hz）。31.3Hzから157.5Hzの周波数は、#1および#2のバンドでのみ選べます。周波数の調整時には、「バンド」の項目は調節できません。

Q

指定された周波数帯域の帯域幅です。0.500から10.080の間で調節できます。

「バンド」を選択すると、グラフィックイコライザーとして使用できます。

4 ▽キーを押して、「編集」を選び、ENTERキーを押す

選択された項目がハイライトされます。
・◁／▷キーで、調整するバンド、周波数帯、Qを選びます。
・△／▽キーで、選んだ周波数帯のゲインを調整します。
・ENTERキーを押すと「編集」画面から抜けます

5 手順3、4を繰り返して、他の項目を調整する

ヒント

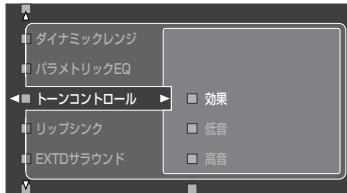
選択したスピーカーのパラメーター設定を初期化するには、「リセット」を選択し、ENTERキーを押します。

6 △／▽／◁／▷キーを押して、「終了」を選び、ENTERキーを押す

テストトーン、スピーカー選択画面に戻ります。

トーンコントロール

スピーカーまたはヘッドホンから出力される音声の低音域と高音域を調節します。

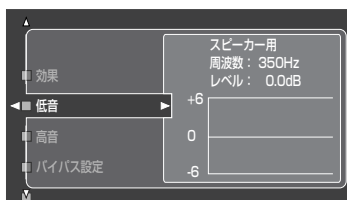
(「マニュアル設定」→「音の設定」→「トーンコントロール」)

効果

スピーカーから出力される音声を調節するか、ヘッドホンから出力される音声を調節するかを選びます。

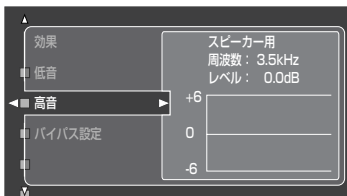
選択項目:スピーカー用、ヘッドホン用

低音

低音域の音色を調節します。ターンオーバー周波数(変化が始まる周波数)は、125Hz、350Hz、500Hzのいずれかを選べます。

可変範囲:−6.0dB〜+6.0dB
初期設定値:0.0dB

高音

高音域の音色を調節します。ターンオーバー周波数(変化が始まる周波数)は、2.5kHz、3.5kHz、8.0kHzのいずれかを選べます。

可変範囲:−6.0dB〜+6.0dB
初期設定値:0.0dB

バイパス設定

トーンコントロールでの調節値を適用するか、適用しないかを設定します。

選択項目:自動、オフ
初期設定値:自動

自動

トーンコントロールが0.0dBに設定されているときに、入力信号や動作モードを判定し、自動的にトーンコントロール回路をバイパスします。

オフ

トーンコントロールの設定値や動作モードに関係なく、入力信号は常にトーンコントロール回路を通ります。

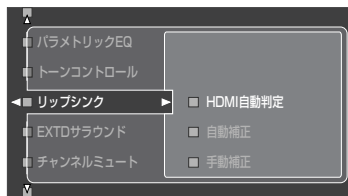
ご注意

ピュアダイレクトモード(96ページ)で再生しているときや、MULTI CH INPUT端子に接続した機器を再生しているときは、トーンコントロールで音色を調節できません。

ヒント

スピーカー用とヘッドホン用のトーンコントロール設定は別々に記憶されます。スピーカー用では、フロントL/R、センター、プレゼンスL/Rの各スピーカーおよびサブウーファーの音質を調節します。

リップシンク

液晶テレビやハイビジョン対応テレビなどでデジタル処理された映像が、音声よりも遅れて出力されることがあります。この出力タイミングのずれを、音声を遅らせて出力することにより補正します。
音を遅らせる時間を設定します。
（「マニュアル設定」→「音の設定」→「リップシンク」）

HDMI自動判定

リップシンクの自動補正機能に対応しているテレビを本機とHDMI接続している場合に、出力タイミングを自動的に補正します。

選択項目：オフ、オン
初期設定：オフ

テレビが自動補正機能に対応している場合：

「**オン**」に設定します。下記の「自動補正」で、補正時間を微調整できます。

テレビが自動補正機能に対応していない、または自動補正機能を使わない、テレビと本機をHDMI接続していない場合：

「**オフ**」に設定します。下記の「手動補正」で、補正時間を手動で調節してください。

自動補正

「HDMI自動判定」を「オン」に設定している場合に、補正時間を微調整します。

可変範囲：0〜240ms

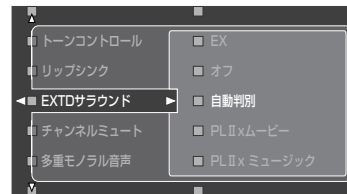
 に表示される「オフセット」は、自動補正機能によって調節された時間と、「自動補正」によって微調整された時間の差を表しています。本機はこの「オフセット」の値を記憶して、自動補正機能を持つ他のテレビにも同じ値を適用します。

手動補正

「HDMI自動判定」を「オフ」に設定している場合や、テレビがリップシンクの自動補正機能に対応していない場合、テレビと本機をHDMI接続していない場合に、手動で補正時間を調節します。

可変範囲：0〜240ms
初期設定：0ms

EXTDサラウンド

マルチチャンネルで記録されたドルビーデジタルまたはDTS信号を、サラウンドバックスピーカーを使って6.1／7.1チャンネルで再生するときのデコーダーを選びます。
（「マニュアル設定」→「音の設定」→「EXTDサラウンド」）

選択項目：自動判別、PLⅡxムービー、PLⅡxミュージック、EX/ES、EX、オフ
初期設定：自動判別

自動判別
本機が確認できる信号（フラグ）が記録されているソースが入力されると、信号に応じて最適なデコーダーを自動的に選び、6.1または7.1チャンネルで再生します。
本機がフラグを認識できない、またはソース自体にフラグが記録されていない場合は、5.1チャンネルで再生します。

PLIIxムービー
プロロジックⅡxデコーダーにより、ドルビーデジタル、DTS、AACを7.1チャンネルで再生します。

PLIIxミュージック
プロロジックⅡxデコーダーにより、ドルビーデジタル、DTS、AACを6.1または7.1チャンネルで再生します。

EX/ES
ドルビーデジタルEXデコーダーにより、ドルビーデジタルおよびAACを6.1または7.1チャンネルで再生します。
またDTS-ESデコーダーにより、DTSを6.1または7.1チャンネルで再生します。

EX
ドルビーデジタルEXデコーダーにより、ドルビーデジタル、DTS、AACを6.1または7.1チャンネルで再生します。

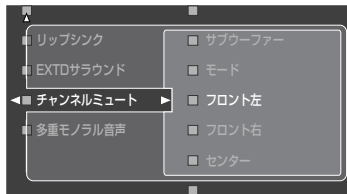
オフ
6.1／7.1チャンネルでの再生はしません。5.1チャンネルで再生します。

ヒント

「その他の設定」の「EXTDサラウンド初期値」で、本機の電源を入れたときに、前回使っていたデコーダーをそのまま使うか、「自動判別」に戻すかを設定できます（133ページ）。

チャンネルミュート

チャンネルを指定して、音声をミュート（消音）します。ミュートされていないチャンネルから出力されている音声を確認することができます。

（「マニュアル設定」→「音の設定」→「チャンネルミュート」）

フロント左

フロント左チャンネルの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

フロント右

フロント右チャンネルの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

センター

センターチャンネルの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

サラウンド左

サラウンド左チャンネルの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

サラウンド右

サラウンド右チャンネルの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

サラウンドバック左

サラウンドバック左チャンネルの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

サラウンドバック右

サラウンドバック右チャンネルの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

プレゼンス左

プレゼンス左チャンネルの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

プレゼンス右

プレゼンス右チャンネルの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

サブウーファー

サブウーファーの音声をミュートするかしないかを設定します。

選択項目：ミュートする、ミュートしない
初期設定値：ミュートしない

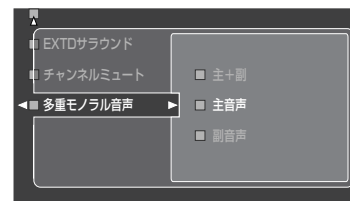
モード

選択項目：禁止、許可
初期設定値：禁止

禁止
各チャンネルの設定にかかわらず、ミュートしません。

許可
「ミュートする」に設定したチャンネルの音声をミュートします。

多重モノラル音声

BS／地上波デジタル放送などで使われているAACモノラル二重音声入力時に、どの音声を出力するか設定します。

選択項目：主＋副、主音声、副音声
初期設定値：主音声

主＋副
主音声と副音声をフロントL／Rスピーカーからそれぞれ同時に出力します。PCM信号が入力されている場合のフロントL／Rチャンネルへの音声の振り分けは、BSデジタルチューナーの設定によって異なります。詳しくはBSデジタルチューナーの取扱説明書をご覧ください。

主音声
主音声のみをフロントL／Rスピーカーから出力します。

副音声
副音声のみをフロントL／Rスピーカーから出力します。

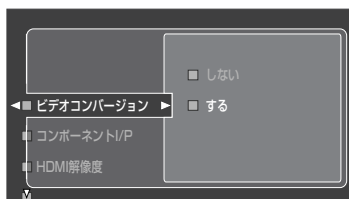
ご注意
- モノラルでない二重音声出力は、本機では設定できません。BSデジタルチューナー側で設定してください。
- AAC、ドルビーデジタル信号の二重音声（デュアルモノ）信号およびAACの音声多重（マルチモノ）信号受信時のみ、設定が有効になります。ただし、AAC多重音声の第3、第4チャンネルは選べません。BSデジタルチューナー側で設定してください。
- 地上波放送などのアナログやPCM信号での二重音声は、チューナーやビデオデッキ側で主音声/副音声を選んでください。

映像出力の設定を変更する(映像の設定)

映像出力や表示に関する設定を行います。操作方法について詳しくは、「セットメニューの表示と操作方法」(115ページ)をご覧ください。
アドバンストセットアップメニュー「INITIALIZE」の「VIDEO」(149ページ)で、「ショートメッセージ」および「オンスクリーン表示」以外の項目を初期設定に戻せます。

ビデオコンバージョン

入力された映像信号を出力するときに、信号を他の種類の信号に変換するか、変更しないかを設定します。

(「マニュアル設定」→「映像の設定」→「ビデオコンバージョン」)

選択項目：しない、する
初期設定値：する

しない
変換しません。

する
変換します。

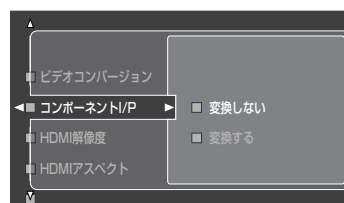
- 変換された映像信号は、MONITOR OUT端子からのみ出力されます。外部機器を使って録画するときは、再生機器と同じ種類の映像接続(SビデオとSビデオなど)を行ってください。
- 480iコンポーネントビデオ信号はSビデオまたはコンポジットビデオ信号に変換され、S VIDEO MONITOR OUT端子およびVIDEO MONITOR OUT端子から出力されます。
- 1080pコンポーネントビデオ信号はCOMPONENT VIDEO MONITOR OUT端子からのみ出力されます。
- 「しない」に設定した場合でも、セットメニューを表示させるときは、各信号が上位変換されて出力されます。

ご注意

- 本機とテレビをコンポーネント接続せずに480p信号をコンポーネント入力した場合、テレビ画面は表示されません。
- 「する」に設定した場合でも、HDMI信号はアナログ信号に変換されません。
- 「しない」に設定した場合、「コンポーネントI/P」、「HDMI解像度」、「HDMIアスペクト」、「ショートメッセージ」の各項目は設定できません。
- ビデオデッキを接続している場合、コンポジットビデオ信号またはSビデオ信号をコンポーネントビデオ信号に変換すると、ビデオデッキの種類によっては画質が劣化する場合があります。
- 「しない」に設定すると、ショートメッセージは表示されません。
- ゲーム機からの信号などの特殊な信号が入力された場合、「する」に設定しても、ショートメッセージは表示されません。
- 特殊な信号を出力する機器と接続した場合、映像が正しく出力されない場合があります。このような場合は、「しない」に設定してください。

コンポーネントI/P

コンポジット端子、Sビデオ端子、コンポーネント端子から入力されたアナログ映像入力信号をコンポーネント端子から出力するときに、480i信号を480p信号に変換するか変換しないかを設定します。

(「マニュアル設定」→「映像の設定」→「コンポーネントI/P」)

選択項目：変換しない、変換する
初期設定値：変換しない

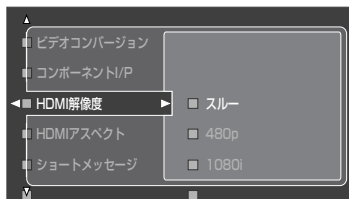
「ビデオコンバージョン」が「する」のときに設定できます。

ご注意

480p信号に対応していないテレビをコンポーネント接続のみしている場合は、「変換する」に設定しないでください。セットメニューが表示されなくなります。あやまって「変換する」に設定してしまい、セットメニューが表示されなくなった場合は、アドバンストセットアップメニュー「INITIALIZE」の「VIDEO」(149ページ)で、設定を工場出荷状態に戻してください。

HDMI解像度

入力したアナログ映像信号をビデオコンバージョン機能によってHDMI信号に変換するときに、解像度を変換します。480i信号は480p、1080i、720p、1080p信号に、480p信号は1080i、720p、1080p信号に変換できます。

（「マニュアル設定」→「映像の設定」→「HDMI解像度」）

選択項目：スルー、480p、1080i、720p、1080p
初期設定値：スルー

スルー
解像度を変換せずにそのまま出力します。
480p
480p信号に変換して出力します。
1080i
1080i信号に変換して出力します。
720p
720p信号に変換して出力します。
1080p
1080p信号に変換して出力します。

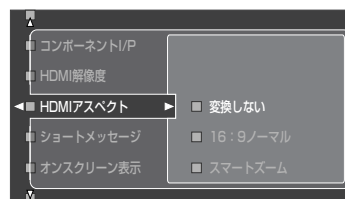
「ビデオコンバージョン」が「する」のときに設定できます。

ご注意

- アドバンストセットアップメニュー「MONITOR CHECK」で、テレビが対応していない解像度を選択できるようにするか、できないようにするかを設定できます（150ページ）。テレビが対応している解像度を本機が検出できない場合は、「MONITOR CHECK」を「SKIP」に設定してから、再度「HDMI解像度」を設定してください。
- 1080iまたは720p、1080p信号に対応していないテレビを接続している場合は、「1080i」または「720p」、「1080p」に設定しないでください。セットメニューが表示されなくなります。あやまって「480p」または「1080i」、「720p」、「1080p」に設定してしまい、セットメニューが表示されなくなった場合は、アドバンストセットアップメニュー「INITIALIZE」の「VIDEO」（149ページ）で、設定を工場出荷状態に戻してください。

HDMIアスペクト

アナログ映像入力信号をビデオコンバージョン機能によってHDMI信号に変換するときに、HDMI OUT端子から出力する縦横比（アスペクト比）4：3のHDMI映像信号を16：9の映像に変換します。

（「マニュアル設定」→「映像の設定」→「HDMIアスペクト」）

選択項目：変換しない、16：9ノーマル、スマートズーム
初期設定値：変換しない

変換しない
縦横比を変換せずに、元の比率で映し出します。
16:9ノーマル
テレビ画面の左右に黒い帯をつけて、4:3の映像を16:9のテレビで最適な映像になるように出力します。
スマートズーム
4:3の映像の左右を引きのばして、16:9のテレビで最適な映像になるように出力します。

ヒント

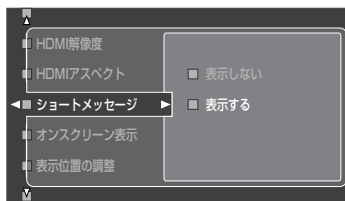
「ビデオコンバージョン」が「する」のときに設定できます。

ご注意

- 「HDMI解像度」で「スルー」を選択している場合は、「HDMIアスペクト」の設定は変更できません。
- アスペクト比が4：3以外の映像信号が入力された場合は、「HDMIアスペクト」の設定は無効になります。
- HDMI IN端子から映像信号を入力している場合や、720pまたは1080iコンポーネントビデオ信号を入力している場合は、「HDMIアスペクト」を設定してもHDMI OUT端子から出力される映像信号のアスペクト比は変わりません。

ショートメッセージ

ショートメッセージとは、入力ソースの変更や音量の調節などの操作をしたときに、テレビ画面の下部に表示される情報です。このショートメッセージを表示するか、表示しないかを設定します。

（「マニュアル設定」→「映像の設定」→「ショートメッセージ」）

選択項目：表示しない、表示する
初期設定値：表示する

ヒント

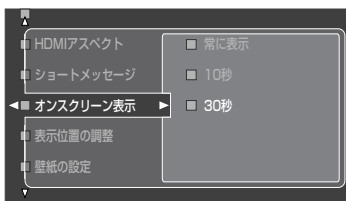
「ビデオコンバージョン」が「する」のときに設定できます。

ご注意

- 入力されている映像信号やお使いのテレビ／プロジェクターによっては、ショートメッセージが乱れて見えることがあります。
- 「表示する」に設定しても、以下の場合はショートメッセージは表示されません。
  - ハイビジョン映像が入力されている
  - HDMI映像信号が入力されている。

オンスクリーン表示

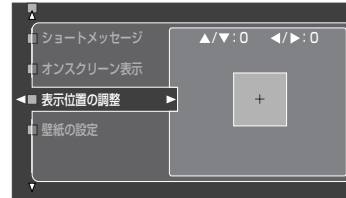
iPodやUSBデバイス、ネットワークオーディオを操作したときに、テレビ画面にメッセージを表示する時間を設定します。

（「マニュアル設定」→「映像の設定」→「オンスクリーン表示」）

選択項目：常に表示、10秒、30秒
初期設定値：30秒

常に表示
メッセージを常に表示します。
10秒
メッセージを10秒間表示します。
30秒
メッセージを30秒間表示します。

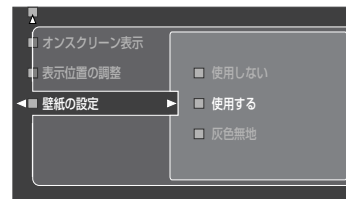
表示位置の調整

テレビ画面に表示される文字の位置を調節します。

（「マニュアル設定」→「映像の設定」→「表示位置の調整」）

可変範囲：−5〜+5（上下）、−5〜+5（左右）
初期設定値：0

壁紙の設定

映像が入力されていないときに表示する、壁紙を選びます。

（「マニュアル設定」→「映像の設定」→「壁紙の設定」）

選択項目：使用しない、使用する、灰色無地
初期設定値：使用する

ご注意

「ビデオコンバージョン」を「しない」に設定している場合は、「使用する」または「灰色無地」に設定しても壁紙は表示されません。

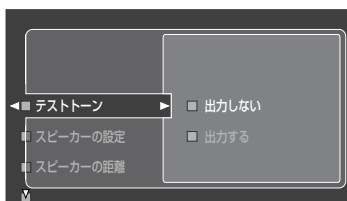
スピーカーの設定を変更する(基本設定)

お使いのスピーカーシステムに合わせて、視聴環境を設定します。操作方法について詳しくは、「セットメニューの表示と操作方法」(115ページ)をご覧ください。

ご注意
ヘッドホンを接続しているときは、基本設定を設定できません。「Can' t Change!」と表示されます。

テストトーン

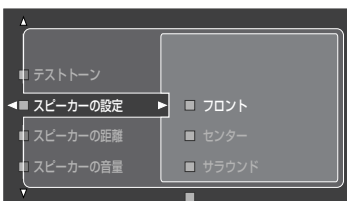
基本設定の他の項目(「スピーカーの設定」、「スピーカーの距離」、「スピーカーの音量」)を使って調整するときに、テストトーンを使うか使わないかを設定します。

(「マニュアル設定」→「基本設定」→「テストトーン」)

選択項目:出力しない、出力する
初期設定値:出力しない

ご注意
「出力する」に設定すると、大きなテストトーンが出ます。
小さなお子さまなどをリスニングルームに立ち入らせないようご配慮ください。

スピーカーの設定

ご使用になるスピーカーに合わせて、スピーカーのサイズ、有無などを設定します。

(「マニュアル設定」→「基本設定」→「スピーカーの設定」)

フロント

フロントL/Rスピーカーのサイズを設定します。

選択項目:大、小
初期設定値:大

ウーファーの口径が16cm未満のフロントスピーカーを接続している場合:
「小」を選びます。

ウーファーの口径が16cm以上のスピーカーを接続している場合:
「大」を選びます。

ヒント

- 「低音出力先」を「フロントに出力」に設定している場合、LFE信号、フロントL/Rチャンネルの低音域、「小」に設定した各スピーカーの低音域は、「フロント」の設定にかかわらずフロントL/Rスピーカーから出力されます。
- 「低音出力先」を「フロントに出力」に設定している場合は、「大」のみ選べます。また、「フロント」を「小」に設定している場合でも、「低音出力先」を「フロントに出力」に変更すると、設定は自動的に「大」に変更されます。

センター

センタースピーカーのサイズ、有無を設定します。

選択項目:大、小、無
初期設定値:小

センタースピーカーを接続していない場合:
「無」を選びます。センターチャンネル信号はフロントL/Rスピーカーに同じ音量レベルで振り分けられます。

ウーファーの口径が16cm未満のセンタースピーカーを接続している場合:
「小」を選びます。

ウーファーの口径が16cm以上のセンタースピーカーを接続している場合:
「大」を選びます。

サラウンド

サラウンドL/Rスピーカーのサイズ、有無を設定します。

選択項目:大、小、無
初期設定値:小

サラウンドL/Rスピーカーを接続していない場合:
「無」を選びます。自動的にバーチャルシネマDSP(87ページ)が選択され、サラウンドL/Rチャンネル信号はフロントL/Rスピーカーに同じ音量レベルで振り分けられます。

ウーファーの口径が16cm未満のサラウンドL/Rスピーカーを接続している場合:
「小」を選びます。

ウーファーの口径が16cm以上のサラウンドL/Rスピーカーを接続している場合:
「大」を選びます。

サラウンドバック

サラウンドバックスピーカーのサイズ、本数、有無を設定します。

選択項目:大2台、小2台、大1台、小1台、無
初期設定値:小2台

サラウンドバックL/Rスピーカーを接続していない場合:
「無」を選びます。サラウンドバックチャンネル信号はサラウンドL/Rスピーカーに同じ音量レベルで振り分けられます。

ウーファーの口径が16cm未満のサラウンドバックスピーカーを1本のみ接続している場合：

「**小1台**」を選びます。

ウーファーの口径が16cm未満のサラウンドバックL／Rスピーカーを接続している場合：

「**小2台**」を選びます。

ウーファーの口径が16cm以上のサラウンドバックスピーカーを1本のみ接続している場合：

「**大1台**」を選びます。

ウーファーの口径が16cm以上のサラウンドバックL／Rスピーカーを接続している場合：

「**大2台**」を選びます。

ヒント

アドバンストセットアップメニューの「BI-AMP」を「ON」に設定した場合は、自動的に「無」が選択されます（149ページ）。

プレゼンス

プレゼンスL／Rスピーカーを使うか、使わないかを設定します。

選択項目：使用する、使用しない
初期設定値：使用する

プレゼンスL／Rスピーカーを接続していない場合：

「**使用しない**」を選びます。プレゼンスL／Rチャンネル信号はフロントL／Rスピーカーに同じ音量レベルで振り分けられます。

プレゼンスL／Rスピーカーを接続している場合：

「**使用する**」を選びます。

ヒント

- アドバンストセットアップメニューの「BI-AMP」を「ON」に設定した場合は、自動的に「使用しない」が選択されます（149ページ）。
- 「使用する」に設定している場合、音場パラメーター「セリフの位置調整」を調節できます（101ページ）。
- 「使用する」に設定しているときのみCINEMA DSP 3Dモード（93ページ）を選べます。

低音出力先

低音成分を出力するスピーカーを設定します。

選択項目：フロントとサブウーファー、サブウーファーのみ、フロントに出力
初期設定値：フロントとサブウーファー

サブウーファーを接続していて、自然な再生を楽しみたい場合：

「**サブウーファーのみ**」に設定します。LFE信号と、「小」に設定した各チャンネルの低音域がサブウーファーに出力されます。

サブウーファーを接続していない場合：

「**フロントに出力**」に設定します。LFE信号と、フロントL／Rチャンネルおよび「小」に設定した各チャンネルの低音域がフロントL／Rスピーカーに出力されます。

サブウーファーを接続していて、より豊な低音を楽しみたい場合：

「**フロントとサブウーファー**」に設定します。LFE信号と、「小」に設定した、フロントL／R以外の各チャンネルの低音域がサブウーファーから出力されます。
フロントL／Rチャンネルの低音域は、「フロント」の設定にかかわらずフロントL／Rスピーカーとサブウーファーから出力されます。
CDを再生するときに、サブウーファーを使って低音域を補強したい場合などにこの設定にすると効果的です。

低音クロスオーバー

「小」に設定した各スピーカーに出力する低音成分の周波数下限を設定します。設定値よりも低い周波数の低音成分は、サブウーファーまたは「大」に設定した各スピーカーから出力されます。「低音出力先」を「フロントに出力」に設定している場合は、フロントスピーカーから出力されます。

選択項目：40Hz、60Hz、80Hz、90Hz、100Hz、110Hz、120Hz、160Hz、200Hz
初期設定値：80Hz

お使いのサブウーファーに音量およびクロスオーバー周波数の設定機能がある場合は、音量を半分または半分よりやや小さめ、クロスオーバー周波数を最大に設定してください。

位相

ご使用になるサブウーファーの位相を設定します。低音が物足りない場合などにお試しください。

選択項目：正相、逆相
初期設定値：正相

PR/SBの優先

2チャンネル信号をシネマDSP音場プログラムで再生するときに、優先的に音を出すスピーカーを選びます。

選択項目：プレゼンス、サラウンドバック
初期設定値：サラウンドバック

プレゼンス

プレゼンススピーカーから音声を出力します。

サラウンドバック

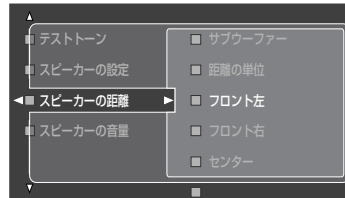
サラウンドバックスピーカーから音声を出力します。

ヒント

- 入力信号や音場プログラムと、各スピーカーからの音声出力の関係については、「入力信号と再生スピーカー対応表」をご覧ください（94ページ）。
- CINEMA DSP 3Dモード（93ページ）がオンのときは、常にプレゼンススピーカーから音声を出力します。

スピーカーの距離

各スピーカーからの音が同時にリスニングポジション(視聴位置)に届くように、スピーカーから音が出るタイミングを調節します。音が出るタイミングは、各スピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定することで調節されます。

(「マニュアル設定」→「基本設定」→「スピーカーの距離」)

フロント左

フロントLスピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：3.00m (10.0ft)

フロント右

フロントRスピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：3.00m (10.0ft)

センター

センタースピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：2.60m (8.5ft)

サラウンド左

サラウンドLスピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：2.40m (8.0ft)

ヒント

サラウンドバックスピーカーを1台のみ使っている場合は、「サラウンドバック左」で設定してください。

サラウンド右

サラウンドRスピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：2.40m (8.0ft)

サラウンドバック左

サラウンドバックLスピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：2.40m (8.0ft)

サラウンドバック右

サラウンドバックRスピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：2.40m (8.0ft)

プレゼンス左

プレゼンスLスピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：3.00m (10.0ft)

プレゼンス右

プレゼンスRスピーカーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：3.00m (10.0ft)

サブウーファー

サブウーファーからリスニングポジションまでの距離を設定します。

可変範囲：0.30～24.00m (1.0～80.0ft)
初期設定値：3.00m (10.0ft)

距離の単位

表示する距離の単位を切り替えます。

選択項目：メートル、フィート
初期設定値：メートル

ご注意

- 「スピーカーの設定」で「無」に設定されているスピーカーの距離は調節できません。
- 「スピーカーの設定」の「低音出力先」を、「フロントに出力」に設定している場合は、サブウーファーの距離は調節できません。

スピーカーの音量

リスニングポジションで聞こえる各スピーカーからの音量が同じになるように、それぞれのスピーカーの音量を個別に調節します。
(「マニュアル設定」→「基本設定」→「スピーカーの音量」)

ヒント

音圧計をお持ちの場合は、音圧計をCウェイト/スローモードに設定したうえで、各スピーカーからの音量がリスニングポジションで75dB SPLになるよう調節してください。

フロント左

フロントLスピーカーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:0.0dB

フロント右

フロントRスピーカーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:0.0dB

センター

センタースピーカーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:−1.0dB

サラウンド左

サラウンドLスピーカーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:−1.0dB

サラウンド右

サラウンドRスピーカーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:−1.0dB

サラウンドバック左

サラウンドバックLスピーカーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:−1.0dB

ヒント

サラウンドバックスピーカーを1台のみ使っている場合は、「サラウンドバック左」で調節してください。

サラウンドバック右

サラウンドバックRスピーカーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:−1.0dB

プレゼンス左

プレゼンスLスピーカーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:0.0dB

プレゼンス右

プレゼンスRスピーカーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:0.0dB

サブウーファー

サブウーファーからの音量を調節します。

可変範囲:−10.0〜+10.0dB
初期設定値:0.0dB

ご注意

- 「スピーカーの設定」で「無」に設定されているスピーカーの音量は調節できません。
- 「スピーカーの設定」の「低音出力先」を、「フロントに出力」に設定している場合は、サブウーファーの音量は調節できません。

ネットワーク／USBの設定を変更する(ネットワーク／USB設定)

ネットワークに関する設定項目や、パソコンおよびUSBデバイスに保存されたファイルを再生するときの方法などを設定します。
操作方法について詳しくは、「セットメニューの表示と操作方法」(115ページ)をご覧ください。
アドバンストセットアップメニュー「INITIALIZE」の「NETWORK」(149ページ)で、すべての項目を工場出荷状態に戻せます。

ネットワーク設定

IPアドレスなどのネットワーク設定値の確認や、ネットワーク設定をします。設定は、DHCPサーバー機能によって自動的に設定する方法と、IPアドレス、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイ、DNSサーバーアドレスを手動で設定する方法があります。ルーターにDHCPサーバー機能がある場合は、「DHCP」メニューで「オン」を選べば、簡単に設定できます。
(「マニュアル設定」→「ネットワーク／USB設定」→「ネットワーク設定」)

ご注意
上図はオンスクリーン表示の一例です。

1 △／▽キーを押して、「DHCP」のオン／オフを選ぶ

DHCP

ネットワークを自動的に設定するか、手動で設定するかを選びます。

選択項目：オフ、オン
初期設定値：オン

オフ
ネットワークを手動で設定します。
オン
ネットワークを自動で設定します。

ヒント
通常は「オン」を選ぶことをおすすめします。その際、ルーターにDHCPサーバー機能があることをご確認ください。

ご注意
自動設定した数値は手動で変更できません。

2 ENTERキーを押す

手順1で「オフ」を選んだ場合は、手順3へ進みます。
「オン」を選んだ場合は、手順8へお進みください。

3 △／▽キーを押して、「IPアドレス」を選ぶ

IP アドレス

IPアドレスを手動で設定します。

4 ▷キーを押す

5 ◁／▷キーで数値の入力位置を合わせる

6 △／▽キーで数値を変更する

手順5、6を繰り返してください。

7 数値を変更し終わったら、ENTERキーを押す

「ネットワーク設定」画面に戻ります。
下記の4つの項目も同様に設定してください。

サブネット マスク

サブネットマスクを手動で設定します。

ヒント
通常は「255.255.255.0」を入力してください。

デフォルトゲートウェイ

デフォルトゲートウェイを手動で設定します。

DNS サーバー(P)

プライマリーDNSサーバーを手動で設定します。

ヒント
DNSアドレスが1つの場合は、「DNSサーバー(P)」に入力してください。

DNS サーバー(S)

セカンダリーDNSサーバーを手動で設定します。

ヒント
DNSアドレスが2つ以上ある場合は、1つを「DNS サーバー(P)」に、ほかの1つを「DNS サーバー(S)」に入力してください。

8 すべての項目を入力したら、△／▽キーを押して「設定」を選ぶ

「ENTERで設定」と表示されます。

設定

「DHCP」で「オン」を選んだ場合は、自動設定を開始します。手動設定した場合は、上記の5つの項目で変更した数値を設定します。

9 ENTERキーを押す

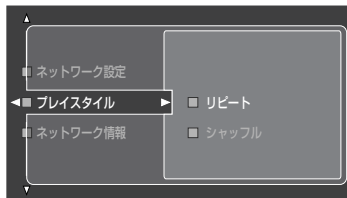
設定を終了します。

ヒント
ADVANCED SETUPメニュー「INITIALIZE」の「NETWORK」で、ネットワークの設定を初期状態に戻せます(149ページ)。

ご注意
ネットワーク環境を変更した場合、ネットワークを再設定しなければならないことがあります。

プレイスタイル

パソコンやUSBデバイスを再生しているときの再生スタイルを設定します。

（「マニュアル設定」→「ネットワーク／USB設定」→「プレイスタイル」）

リピート

曲やアルバムを繰り返し再生します。

選択項目：オフ、1曲、全曲
初期設定値：オフ

オフ
リピート再生しません。

1曲
選んだ曲を繰り返し再生します。オンスクリーン画面右上に「」が表示されます。

全曲
選んだディレクトリ内のすべての曲を繰り返し再生します。オンスクリーン画面右上に「」が表示されます。

「1曲」を選んでいるときに本機の電源をオフにした場合、設定が「オフ」にリセットされます。

シャッフル

曲やアルバムの順番をランダムに再生します。

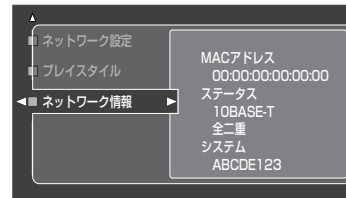
選択項目：オフ、オン
初期設定値：オフ

オフ
ランダム再生しません。

オン
選んだディレクトリ内のすべての曲をランダムに再生します。オンスクリーン画面右上に「」が表示されます。

ネットワーク情報

マックアドレスやネットワークとの接続状況を表示します。

（「マニュアル設定」→「ネットワーク／USB設定」→「ネットワーク情報」）

MACアドレス

本機のマックアドレスを表示します。

ステータス

ネットワークとの接続状況を表示します。

表示項目：接続されていません、10BASE-T、100BASE-TX、全二重、半二重

ご注意
ネットワークが接続されていない場合は、「接続されていません」と表示されます。

システム

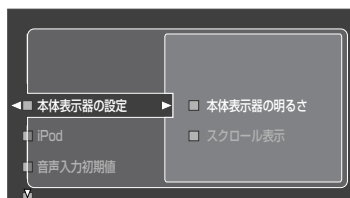
本機に割り当てられたシステムIDを表示します。

その他の設定を変更する(その他の設定)

表示の設定など、様々な機能の設定を行います。操作方法について詳しくは、「セットメニューの表示と操作方法」(115ページ)をご覧ください。

本体表示器の設定

フロントパネルディスプレイ表示の明るさや、スクロール表示の方法を設定します。

(「マニュアル設定」→「その他の設定」→「本体表示器の設定」)

本体表示器の明るさ

フロントパネルディスプレイ表示の明るさを調節します。数値が小さいほど表示が暗くなり、数値が大きいほど表示が明るくなります。

可変範囲：－4～0
初期設定値：0

スクロール表示

iPodやネットワークオーディオ、USBデバイスの曲名や放送局名などがフロントパネルディスプレイに表示されるときに、14文字を超える場合の表示方法を設定します。

選択項目：継続、1回
初期設定値：継続

継続

すべての文字をスクロールしながら、繰り返し表示します。

1回

すべての文字を一度スクロールして表示したあと、スクロールを停止し、最初の文字から14文字目までを表示します。

iPod

本機がスタンバイのときに、本機に接続したヤマハ製ドック(YDS-10など)にセットしたiPodの充電モードを設定します。

(「マニュアル設定」→「その他の設定」→「iPod」)

スタンバイ時の充電

選択項目：オフ、自動
初期設定値：自動

オフ

本機がスタンバイのときはiPodを充電しません。

自動

iPodを充電します。

ヒント

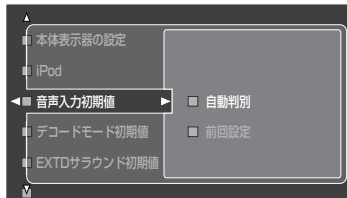
本機の電源がオンのときは、「スタンバイ時の充電」の設定にかかわらず、常にiPodを充電しています。

ご注意

本機が対応していないiPod(クリックホイール、nano、mini以外)は充電できません。

音声入力初期値

電源を入れたときに適用する入力モードを設定します。入力モードについて詳しくは、「入力信号を切り替える（入力モード切り替え）」をご覧ください（108ページ）。

（「マニュアル設定」→「その他の設定」→「音声入力初期値」）

選択項目：自動判別、前回設定
初期設定値：自動判別

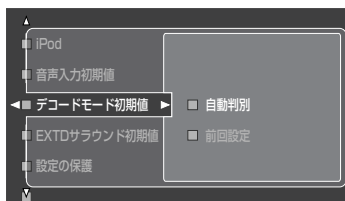
自動判別
電源をオンにしたときに自動的に入力モードを「AUTO」に設定します。

前回設定
前回使っていた入力モードの設定を適用します。

「音声入力選択」で、入力モードを設定することができます（135ページ）。

デコードモード初期値

電源を入れたときに適用するデコードモードを設定します。デコードモードについて詳しくは、「入力選択・設定」の「デコードモード」をご覧ください（136ページ）。

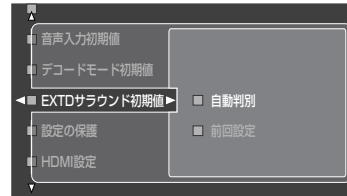
（「マニュアル設定」→「その他の設定」→「デコードモード初期値」）

選択項目：自動判別、前回設定
初期設定値：自動判別

自動判別
電源をオンにしたときに自動的にデコードモードを「自動判別」に設定します。

前回設定
前回使っていたデコードモードの設定を適用します。

EXTDサラウンド初期値

電源を入れたときに適用する6.1／7.1チャンネル再生時のデコーダーを設定します。6.1／7.1チャンネル再生時のデコーダーについて詳しくは、「音の設定」の「EXTDサラウンド」をご覧ください（121ページ）。

（「マニュアル設定」→「その他の設定」→「EXTDサラウンド初期値」）

選択項目：自動判別、前回設定
初期設定：自動判別

自動判別
電源をオンにしたときに自動的にデコーダーを「自動判別」に設定します。

前回設定
前回使っていたデコーダーの設定を適用します。

設定の保護

変更した設定値を保護します。「保護」に設定すると、誤操作による設定値の変更を防ぎます。

（「マニュアル設定」→「その他の設定」→「設定の保護」）

選択項目：可変、保護
初期設定値：可変

「保護」に設定すると以下の設定が保護されます。

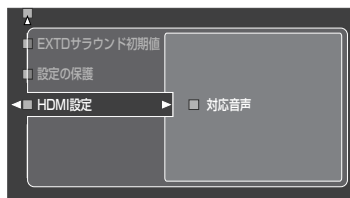
・音場パラメーターの設定（99ページ）
・「自動測定メニュー」の設定（54ページ）
・「設定の保護」以外の「マニュアル設定」の設定
・「システムメモリー」で保存した設定（138ページ）
・スピーカーの音量設定（109ページ）

ヒント

- 「保護」に設定しても、「システム・メモリー」の「設定の呼び出し」で設定を呼び出せます（140ページ）。
- 保護されている設定を変更しようとすると、テレビ画面に「保護されています」と表示されます。

HDMI設定

本機のHDMI IN端子から入力した音声信号を、本機で再生するか、本機のHDMI OUT端子に接続した機器で再生するかを選択します。

（「マニュアル設定」→「その他の設定」→「HDMI設定」）

対応音声

選択項目：DSP-AX3800、その他機器
初期設定：DSP-AX3800

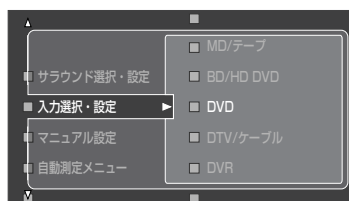
DSP-AX3800
入力信号を本機で再生します。HDMI IN端子に接続したHDMI機器から入力した信号は、HDMI OUT端子に伝送しません。

その他機器
HDMI OUT端子に接続した機器で再生します。再生可能な信号をHDMI OUT端子に伝送します。

ご注意

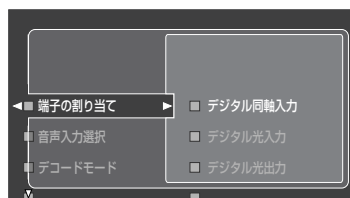
- 本機の電源がオフのときは、「その他の機器」に設定していてもHDMI IN端子からの入力信号はHDMI OUT端子に伝送されません。
- 接続機器の仕様により、信号が再生できない場合があります。接続機器の仕様については、接続機器の取扱説明書をご覧ください。

入出力の設定を変更する（入力選択・設定）

各入力ソースごとに、入出力端子の割り当てなど、信号の入出力に関する設定を行います。最初に、以下の中から設定を変更したい入力ソースを選びます。

チューナー	BD/HD DVD	補助入力
マルチCH入力	DVD	ドック
フォノ	DTV/ケーブル	PC/MCX
CD	DVR	ネットラジオ
CD-R	VCR	USB
MD/テープ		

ご注意
- 入力ソースにより、設定できるセットメニュー項目は変わります。
- 「補助入力」と「ドック」、および「PC/MCX」と「ネットラジオ」、「USB」は、入力しているソースによって表示が切り替わります。

端子の割り当て

本機のコンポーネントビデオ／D5ビデオ入力端子やデジタル入出力端子、HDMI入力端子に外部機器を接続するときに、外部機器の名称とは違う機器名が書かれている端子に接続すると、入力ソースを外部機器の名称通りに正しく選択できなくなってしまいます。
ここでは、DVDレコーダーを「DVR」と書かれていない端子に接続しても、「DVR」キーを押せば正しくDVDレコーダーを選択できるように設定する場合を例に説明します。
（「入力選択・設定」→「<入力ソース名>」→「端子の割り当て」）

選択項目：接続しない、デジタル同軸入力①～③、デジタル光入力④～⑦、デジタル光出力⑧⑨、コンポーネント映像[A]～[C]、HDMI IN1～IN3
初期設定値：デジタル同軸入力①－CD、②－DVD、③－DVR
デジタル光入力④－CD、⑤－BD/HD DVD、⑥－DVD、⑦－DTV/CBL
デジタル光出力⑧－CD-R、⑨－MD/TAPE
コンポーネント映像[A]－BD/HD DVD、[B]－DVD、[C]－DTV/CBL
HDMI IN1－BD/HD DVD、IN2－DVD、IN3－DTV/CBL、IN4－DVR

例： **DVDレコーダーが使う同軸デジタル端子の割り当てを変更する**
DVDレコーダー用の同軸デジタル端子は初期設定で③に設定されています。
これを①に変更したい場合は、「DVR－デジタル同軸入力」で①を選び、ENTERキーを押します。
「①CD」が「①DVR」へと変わり、割り当てが変更されます。（このときCDプレーヤーの割り当ては、DVDレコーダーの割り当てと入れ替わり、「③CD」となります）

ヒント
- ①～⑨、[A]～[C]、IN1～IN3の文字は実際にリアパネルの端子に印刷されている文字と対応しています。
- 「コンポーネント映像」は映像系の入力を選んでいるときのみ、端子の割り当てを変更できます。

ご注意
- 選んだ入力ソースの音声は、「接続しない」に設定されている端子からは出力されません。
- フロントパネルのOPTICAL端子の入力はV-AUX（補助入力）に固定されています。端子の割り当てを変更することはできません。

音声入力選択

入力モードを切り替えます。音声信号をどの接続端子から入力するかを自動的に切り替えたり、特定の接続端子に固定したりすることができます。
（「入力選択・設定」→「<入力ソース名>」→「音声入力選択」）

選択項目：自動判別、HDMI、同軸/光、アナログ
初期設定値：自動判別

自動判別
自動的に入力端子を選びます。以下の順序で入力端子を選びます。
①HDMI
②同軸デジタル
③光デジタル
④アナログ

HDMI
HDMI端子に固定されます。HDMI信号以外の信号が入力されても再生されません。

同軸/光
同軸／光デジタル信号に固定されます。両方同時に入力している場合は、同軸デジタル信号を優先します。同軸／光デジタル信号以外の信号が入力されても再生されません。

アナログ
アナログ端子に固定されます。アナログ信号以外の信号が入力されても再生されません。

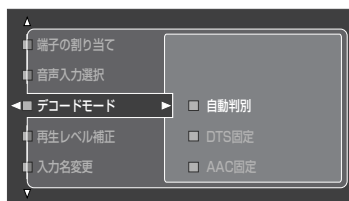
- リモコンのAUDIO SELECTキーを押して、入力モードを切り替えることもできます(108ページ)。
- セットメニュー「音声入力初期値」(133ページ)で、電源を入れたときに適用する入力モードを設定できます。

ご注意

- 各入力端子に外部機器が接続されていない場合、入力モードを指定しても音声は出力されません。
- 「デコードモード」(下記参照)で、「DTS固定」または「AAC固定」を選択している場合、「アナログ」にしてもアナログ音声は出力されません。

デコードモード

デコードモードを切り替えます。選択した音声入力端子から入力する信号を、DTSなどの特定の信号に固定したりすることができます。

(「入力選択・設定」→「<入力ソース名>」→「デコードモード」)

選択項目：自動判別、DTS固定、AAC固定
初期設定値：自動判別

自動判別
自動的に入力信号を選択します。

DTS固定
DTS信号に固定されます。DTS信号以外の信号が入力されても再生されません。

AAC固定
AAC信号に固定されます。AAC信号以外の信号が入力されても再生されません。

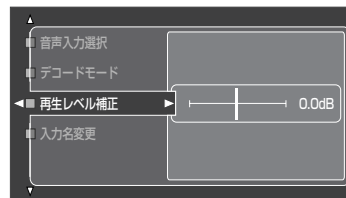
- DTS-CDを再生する場合は、「DTS」に設定して再生することをおすすめします。
- 「デコードモード初期値」で、本機の電源を入れたときに、前回使っていたデコードモードをそのまま使うか、「自動判別」に戻すかを設定できます(133ページ)。

ご注意

- 同軸デジタル入力端子と光デジタル入力端子へ同時にデジタル信号が入力されると、同軸デジタル入力端子への入力信号が優先されます。
- プレーヤーから出力されるデジタル信号に、音量可変などの処理がされている場合は、本機とプレーヤーをデジタル接続しても、DTS音声は再生されません。

再生レベル補正

入力ソース間の音量差を補正します。入力ソースごとに異なる音量を同じレベルに補正すれば、入力ソースを切り替えるたびに音量を微調整する必要がなくなります。

(「入力選択・設定」→「<入力ソース名>」→「再生レベル補正」)

可変範囲：−6.0dB〜+6.0dB
初期設定値：0.0dB

「NET/USB」を選んでいる場合は、ネットワークオーディオおよびUSBデバイスの再生レベルを個別に設定できます。

入力名変更

各入力ソース名を変更します。変更後はその名前でテレビ画面に入力名が表示されます。

(「入力選択・設定」→「<入力ソース名>」→「入力名変更」)

1　◁／▷キーで文字の入力位置を合わせる

2　ENTERキーを繰り返し押して、入力する文字群を選ぶ

入力できる文字は以下のとおりです。

- 英大文字: A〜Z
- 英小文字: a〜z
- 数字: 0〜9
- スペース(空白)
- 記号: ＃＊＋，－．／：＜＞？など
- カナ文字：ア〜ー
- メーカー名：ヤマハなど

3 **∆／∇キーで入力する文字を選ぶ**

文字は最大9文字まで入力できます。手順1〜3を繰り返してください。

4 **文字を入力し終わったら、▷キーで「決定」を選び、ENTERキーを押す**

ヒント

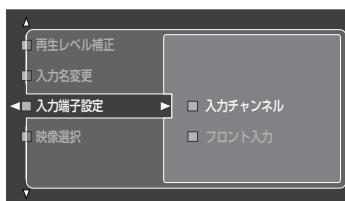
- テレビ画面の表示を英語に設定している場合、入力できる文字は英大文字、英小文字、数字、記号、スペースです。
- リモコンディスプレイに表示される機器名も変更できます。詳しくは、「リモコンに表示される機器の名前を変更する」をご覧ください（165ページ）。

ご注意

「表示言語」（146ページ）で「日本語」を選んでいる場合、またはアドバンストセットアップメニュー「GUI LANGUAGE」（150ページ）で「JAPANESE」を選んでいる場合、「入力名変更」で変更した内容はフロントパネルディスプレイ表示に反映されません。

入力端子設定

MULTI CH INPUT端子に接続された機器の音声を再生するときに、入力する信号のチャンネル数を設定します。ここでは、サブウーファー用のLFE 0.1チャンネルも1チャンネルとして数えます。

（「入力選択・設定」→「マルチCH入力」→「入力端子設定」）

入力チャンネル

入力する信号のチャンネル数を設定します。

選択項目：6チャンネル、8チャンネル
初期設定値：6チャンネル

6チャンネル
5.1チャンネル信号を入力するときの設定です。

8チャンネル
7.1チャンネル信号を入力するときの設定です。アナログ音声入力端子をフロントチャンネル用の端子として使います。この設定を選択すると、右記の「フロント入力」メニューが表示されます。フロントチャンネル用として使うアナログ音声入力端子を設定してください。

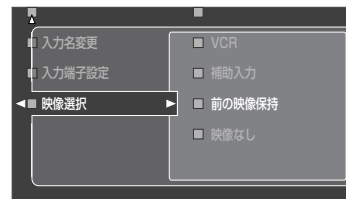
フロント入力

上記「入力チャンネル」で「8チャンネル」を選択した場合に表示されます。フロントチャンネル用の端子として使うアナログ音声入力端子を設定します。「マルチチャンネル出力端子がある機器を接続する」（45ページ）の「7.1チャンネル音声を入力する場合」で、フロントチャンネル用として接続した端子に合わせて設定してください。
たとえば、「7.1チャンネル音声を入力する場合」のようにBD/HD DVDアナログ音声入力端子に接続した場合は、「BD/HD DVD」に設定してください。

選択項目：BD/HD DVD、DVD、DTV/ケーブル、DVR、VCR、補助入力、CD、CD-R、MD/テープ
初期設定値：BD/HD DVD

映像選択

MULTI CH INPUT端子に接続された機器の音声を楽しみながら、バックグラウンドビデオ機能（97ページ）を使って映像も楽しむときに、組み合わせる映像入力ソースを選びます。

（「入力選択・設定」→「マルチCH入力」→「入力端子設定」）

選択項目：BD/HD DVD、DVD、DTV/ケーブル、DVR、VCR、補助入力、前の映像保持、映像なし
初期設定値：前の映像保持

BD/HD DVD〜補助入力
選んだ映像入力ソースを再生します。

前の映像保持
前回選んだ映像入力ソースを再生します。

映像なし
バックグラウンドビデオ機能を使いません。

本機の設定を呼び出す・保存する(システムメモリー)

本機の状態(各種設定や音場プログラムなど)を保存し、あとで簡単に呼び出して使うことができます。例えば、複数のリスニングポジションでYPAOによる測定を行い、それぞれを保存して、あとで使い分けたりすることができます。
また、特性の違うスピーカーを2組接続している場合に、それぞれのスピーカー設定を保存して使い分けたりするときに便利です。
以下の設定を保存できます。

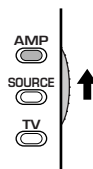
設定	ページ
サラウンド選択・設定	99
音量の設定(「音量の初期値」以外)	116
音の設定*(「EXTDサラウンド」、「チャンネルミュート」以外)	118
映像の設定(「ショートメッセージ」以外)	123
基本設定	126
本体表示器の設定	132
対応音声	134
選んでいる音場プログラム(またはピュアダイレクトモード)	88
トーンコントロール*	120

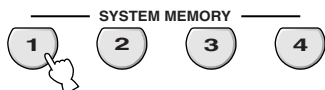
＊ ヘッドホン用の「ダイナミックレンジ」、「LFEレベル」、およびトーンコントロールの設定は保存されません。

現在の設定を保存する

SYSTEM MEMORYキーを使って保存する

リモコンのSYSTEM MEMORY1～4キーを使って、現在の設定を保存します。

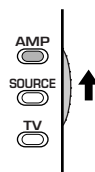
1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

2 設定を保存するSYSTEM MEMORYキーを約4秒間押し続ける

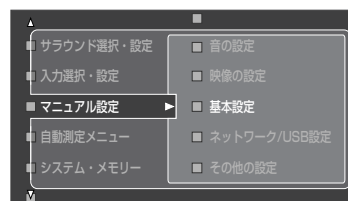
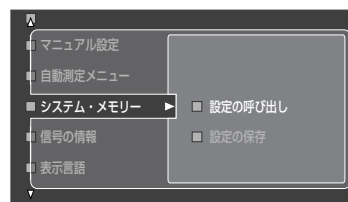
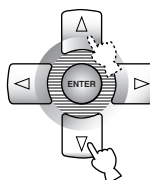
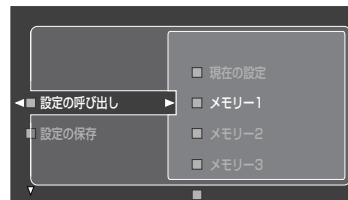
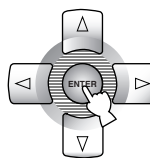
フロントパネルディスプレイに「MEMORY 1 SAVE Done」(例)と表示され、押したSYSTEM MEMORYキーに現在の設定が保存されます。

ヒント

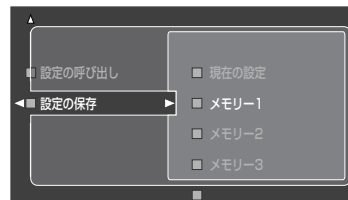
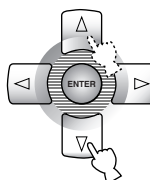
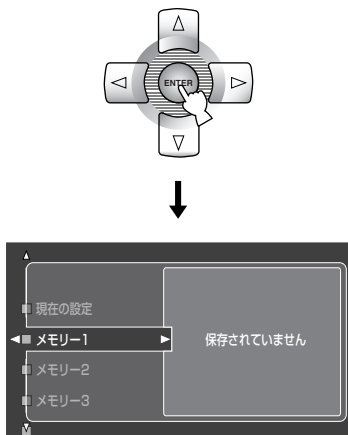
- SYSTEM MEMORYキーに設定がすでに保存されている場合は、新しい設定が上書きされます。
- SYSTEM MEMORY1～4キーの設定は、右記「セットメニューを使って保存する」のメモリー1～4の設定に対応しています。

セットメニューを使って保存する

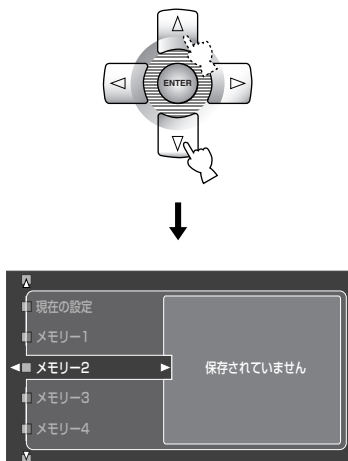
セットメニュー「システムメモリー」を使えば、メモリー1からメモリー6までの6通りの設定を保存できます。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

2 SET MENUキーを押す

テレビ画面にメニューが表示されます。

3 △／▽キーを押して、「システムメモリー」を選ぶ

4 ENTERキーを押す

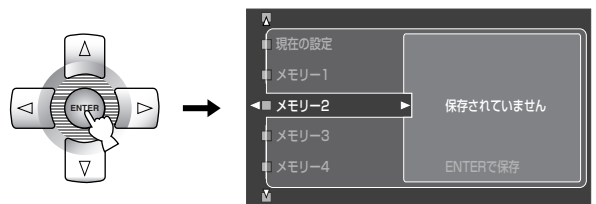
5 △／▽キーを押して、「設定の保存」を選ぶ

6 ENTERキーを押す

7 △／▽キーを繰り返し押して、設定を保存するメモリー（メモリー1～6）を選ぶ

選んだメモリーに設定がすでに保存されている場合は、保存されている設定がテレビ画面に表示されます。設定が保存されていない場合は、「保存されていません」と表示されます。

ヒント

メモリー1～4の設定は、「SYSTEM MEMORYキーを使って保存する」（138ページ）のSYSTEM MEMORY1～4キーの設定に対応しています。メモリー1からメモリー4までのメモリーに設定を保存すれば、SYSTEM MEMORY1～4キーを押して、保存した設定を簡単に呼び出せます。

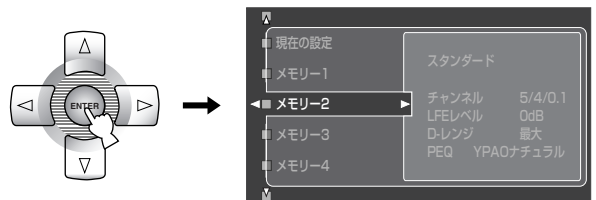
8 ENTERキーを押す

「ENTERで保存」と表示されます。

ヒント

設定を保存しない場合は、◁キーを押してください。

9 ENTERキーをもう1度押す

手順7で選んだメモリーに現在の設定が保存されます。

ヒント

選んだメモリーに設定がすでに保存されている場合は、新しい設定が上書きされます。

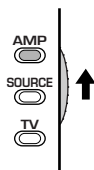
10 設定を終了する場合は、SET MENUキーを押す

テレビ画面の表示が消えます。

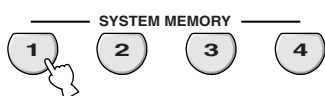
保存した設定を呼び出す

SYSTEM MEMORYキーを使って呼び出す

リモコンのSYSTEM MEMORY1～4キーを使って、保存した設定を呼び出します。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

2 設定を呼び出すSYSTEM MEMORYキーを押す

フロントパネルディスプレイに「MEMORY 1 LOAD Press again」（例）と表示されます。

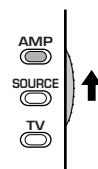
ヒント

選んだメモリーに設定が保存されていない場合は、フロントパネルディスプレイに「EMPTY」と表示されます。

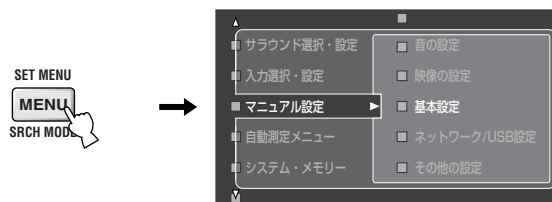
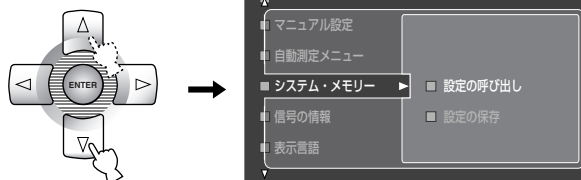
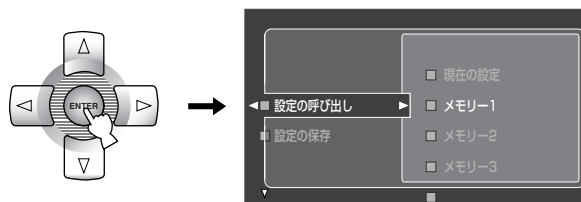
3 SYSTEM MEMORYキーをもう1度押す

押したSYSTEM MEMORYキーに保存されている設定を呼び出します。

セットメニューを使って呼び出す

セットメニュー「システムメモリー」を使って、メモリー1からメモリー6に保存した設定を呼び出します。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ

2 SET MENUキーを押す

テレビ画面にメニューが表示されます。

3 △／▽キーを押して、「システムメモリー」を選ぶ

4 ENTERキーを押す

5 △／▽キーを押して、「設定の呼び出し」を選ぶ

6 ENTERキーを押す

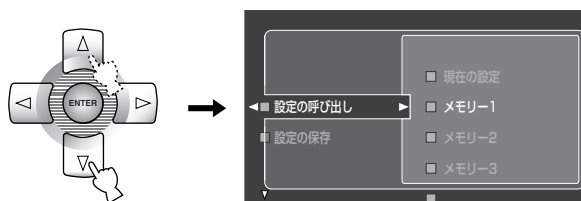
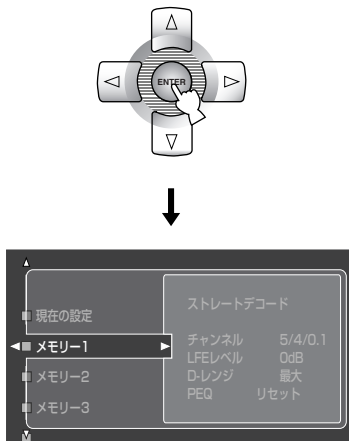
7 △／▽キーを繰り返し押して、設定を呼び出すメモリーを選ぶ

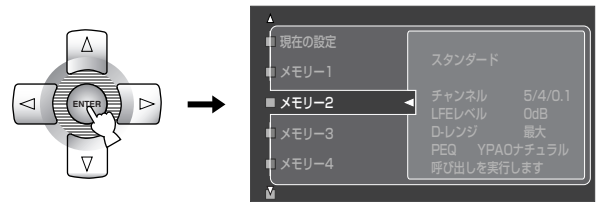
保存されている設定がテレビ画面に表示されます。設定が保存されていない場合は、「保存されていません」と表示されます。

選んだメモリーに保存されている設定

8 ENTERキーを押す

「ENTERで呼び出し」と表示されます。

設定を呼び出さない場合は、◁キーを押してください。

9 ENTERキーをもう1度押す

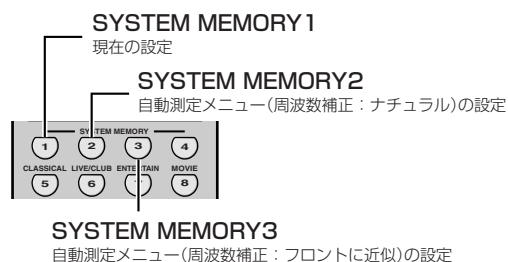
「呼び出しを実行します」と表示され、選んだメモリーの設定を呼び出します。

10 設定を終了する場合は、SET MENUキーを押す

テレビ画面表示が消えます。

メニューで設定を変更する

メモリー機能の使用例

自動測定メニューでの設定とマニュアル設定での設定を比較する

異なる「周波数補正」を選んで実施した自動測定メニューでの設定と、お好みに合わせて手動で調節したマニュアル設定での設定（現在の設定）をそれぞれメモリーに保存すれば、設定方法による音響効果の違いを簡単に比較できます。

1 **操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ**

2 **SYSTEM MEMORY1キーを約4秒間押し続ける**

現在の設定をSYSTEM MEMORY1キーに保存します。

3 **自動測定メニューを実施する**

「周波数補正」を「ナチュラル」に設定してください（61ページ）。

4 **SYSTEM MEMORY2キーを約4秒間押し続ける**

「ナチュラル」で実施した自動測定メニューの設定をSYSTEM MEMORY2キーに保存します。

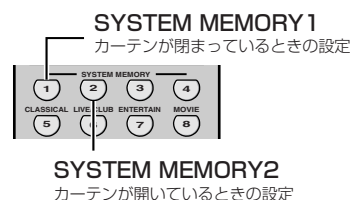
5 **自動測定メニューを実施する**

「周波数補正」を「フロントに近似」に設定してください（61ページ）。

6 **SYSTEM MEMORY3キーを約4秒間押し続ける**

「フロントに近似」で実施した自動測定メニューの設定をSYSTEM MEMORY3キーに保存します。

リスニングルーム環境の違いによって使い分ける

リスニングルームの環境は、時間帯などにより異なる場合があります。例えば、カーテンを開けている時間帯と閉めている時間帯ではリスニングルームの音響特性は異なります。それぞれの環境での設定をメモリーに保存して使い分ければ、環境に適した再生が簡単に楽しめます。

1 **リスニングルームのカーテンを閉める**

2 **操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ**

3 **自動測定メニューを実施する**

4 **SYSTEM MEMORY1キーを約4秒間押し続ける**

カーテンが閉まっているときの設定をSYSTEM MEMORY1キーに保存します。

5 **リスニングルームのカーテンを開ける**

6 **自動測定メニューを実施する**

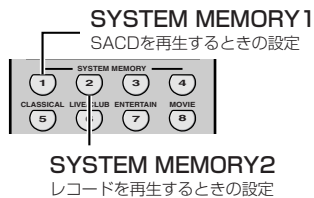
7 **SYSTEM MEMORY2キーを約4秒間押し続ける**

カーテンが開いているときの設定をSYSTEM MEMORY2キーに保存します。

ソフトの違いに応じて使い分ける

コンテンツが同じでも種類が異なるソフト(SACDとレコードなど)を同じ音場プログラムを使って再生する場合、音場パラメーターの設定が同じだと、両方のソフトで満足する音響効果はなかなか得られません。それぞれのソフトでの設定をメモリーに保存して使い分ければ、ソフトに適した再生が簡単に楽しめます。

SYSTEM MEMORY1
SACDを再生するときの設定

SYSTEM MEMORY2
レコードを再生するときの設定

1 **SACDを再生する**

2 **音場プログラムを選び、音場パラメーターを調節する**

音場プログラムおよび音場パラメーターについて詳しくは、88、99ページをご覧ください。

3 **操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ**

4 **SYSTEM MEMORY1キーを約4秒間押し続ける**

現在の音場パラメーターの設定をSYSTEM MEMORY1キーに保存します。

5 **本機の入力を「PHONO」に切り替え、レコードを再生する**

6 **音場パラメーターを調節する**

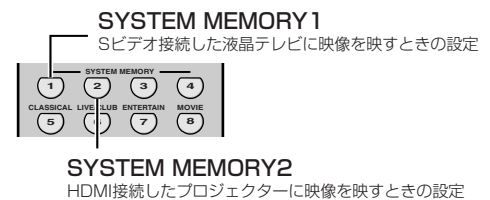
7 **SYSTEM MEMORY2キーを約4秒間押し続ける**

現在の音場パラメーターの設定を設定をSYSTEM MEMORY2キーに保存します。

モニターの違いに応じて使い分ける

異なる種類のモニター(液晶テレビとプロジェクターなど)を本機に2台接続している場合、モニターを切り替えるたびに映像と音声の出力タイミングがずれてしまうことがあります。それぞれのモニターで調節した、映像と音声の出力タイミング設定をメモリーに保存して使い分ければ、モニターに適した再生が簡単に楽しめます。

SYSTEM MEMORY1
Sビデオ接続した液晶テレビに映像を映すときの設定

SYSTEM MEMORY2
HDMI接続したプロジェクターに映像を映すときの設定

1 **映像ソース(DVDなど)を再生し、液晶テレビに映像を映す**

2 **操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPを選ぶ**

3 **セットメニュー「手動補正」を調節する**

「手動補正」について詳しくは、121ページをご覧ください。

4 **SYSTEM MEMORY1キーを約4秒間押し続ける**

液晶テレビ用のタイミング補正の設定をSYSTEM MEMORY1キーに保存します。

5 **映像を映すモニターをプロジェクターに切り替える**

6 **セットメニュー「手動補正」を調節する**

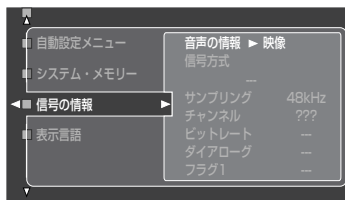
7 **SYSTEM MEMORY2キーを約4秒間押し続ける**

プロジェクター用のタイミング補正の設定をSYSTEM MEMORY2キーに保存します。

入力信号情報を表示する（信号の情報）

音声入力信号と映像入力信号のさまざまな情報を表示させることができます。操作方法について詳しくは、「セットメニューの表示と操作方法」（115ページ）をご覧ください。

音声の情報

音声信号のフォーマット、チャンネル数やサンプリング周波数などの情報を表示します。

信号方式

音声入力信号のフォーマット(信号方式)を表示します。

表示	信号方式
アナログ	アナログ信号
PCM	PCM信号
DSD	DSD信号
デジタル	デジタル信号
DD デジタル	ドルビーデジタル信号
DD デジタルEX	ドルビーデジタルEX信号
DD デジタルプラス	ドルビーデジタルプラス信号
DD デジタルプラスEX	ドルビーデジタルプラスEX信号
DD TrueHD	ドルビーTrueHD信号
DTS	DTS信号
DTS 96/24	DTS 96/24信号
DTS-ES Mtrx	DTS ESマトリックス信号
DTS-ES Dscrt	DTS ESディスクリート信号
DTS-96/24 ES Mtrx	DTS 96/24 ESマトリックス信号
DTS-HD MSTR	DTS-HDマスターオーディオ信号
DTS-HD HI RES	DTSハイレゾリューションオーディオ信号
DTS Express	DTS Express信号
AAC	AAC信号
WMA	WMA信号
MP3	MP3信号
– – –	その他の信号
???	不明な信号

サンプリング

デジタル信号入力時に、音声入力信号のサンプリング周波数を表示します。サンプリング周波数が不明な場合は、「???」と表示されます。

チャンネル

音声入力信号のチャンネル数を表示します。
左から、「フロントチャンネル数/サラウンドチャンネル数/LFEチャンネル」を表わしています。例えば、「3/2/0.1」と表示された場合は、「フロント3チャンネル/サラウンド2チャンネル/LFE0.1チャンネル」の信号が入力されています。
また、「1＋1」と表示された場合は、二カ国語放送などの主＋副の2チャンネルの信号が入力されています。チャンネル数が不明な場合は、「???」と表示されます。また、7.1よりも多いチャンネル数の信号が入力された場合は、「－－－」と表示されます。

ビットレート

音声入力信号の1秒あたりのデータ量(ビットレート)を表示します。ビットレートが不明な場合は、「---」と表示します。

ご注意
AAC信号のビットレートは、再生中に変化することがありますが、正常な動作です。

ダイアローグ

ドルビーデジタル、DTS信号入力時に、音量が異なるさまざまなソフトに対し、自動的に一定の音量で再生されるように調節するダイアログ・ノーマライゼーション機能がはたらきます。この機能がはたらいている場合に、調節しているレベル量を表示します（－31～0dB）。

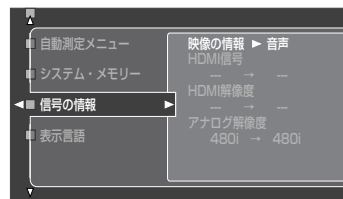
フラグ1／フラグ2

音声入力信号に含まれている、ある動作をさせるための識別信号(フラグ)を表示します。

表示	フラグ
プリエンファシス	プリエンファシス処理されたPCM信号入力時に表示されます。
カラオケ	ドルビーデジタルカラオケ信号入力時に表示されます。
サラウンドEX	ドルビーデジタルEX信号入力時に表示されます。
DPLエンコード	プロロジックエンコードされたドルビーデジタル信号入力時に表示されます。
ESマトリックス	DTS ESマトリックス信号入力時に表示されます。
ESディスクリート	DTS ESディスクリート信号入力時に表示されます。
96 kHz/24 bit	DTS 96/24信号入力時に表示されます。
– – –	フラグが認識できない場合に表示されます。

⊳キーを押すと、「映像の情報」画面に切り替わります(145ページ)。

映像の情報

映像信号の方式や解像度などの情報を表示します。

HDMI信号

映像入力信号のフォーマット(信号方式)を表示します。

表示	信号方式
HDMI	HDMI信号
DVI	DVI信号
アナログ	アナログ信号
– – –	信号が認識できない場合に表示します。

HDMI解像度

HDMI出力端子から映像信号を出力しているときに入力信号と出力信号の解像度を表示します。
解像度が不明な場合は、「???」と表示されます。

アナログ解像度

D5／コンポーネントビデオ出力端子から映像信号を出力しているときに、入力信号と出力信号の解像度を表示します。

HDMIエラー

HDMI機器を接続したときのエラーメッセージを表示します。

表示	内容
デバイス数超過	制限台数を超えるHDMI機器が接続されています。
HDCP認証失敗	HDCPの認証に失敗しました。

HDMIメッセージ

本機に接続しているテレビがHDMI出力信号の解像度に対応していない場合や、1080pコンポーネントビデオ信号を入力している場合に「範囲外の解像度」と表示します。

⊳キーを押すと、「音声の情報」画面に切り替わります(144ページ)。

テレビ画面で表示する言語を切り替える(表示言語)

GUIをモニターに映し出しているときに、表示する言語を6種類の中から選択できます。操作方法について詳しくは、「セットメニューの表示と操作方法」(115ページ)をご覧ください。

選択項目： English、日本語、Français、Deutsch、Español、Русский
初期設定値：日本語

English
英語で表示します。

日本語
日本語で表示します。

Français
フランス語で表示します。

Deutsch
ドイツ語で表示します。

Español
スペイン語で表示します。

Русский
ロシア語で表示します。

- アドバンストセットアップメニュー「GUI LANGUAGE」(150ページ)でも表示言語を切り替えられます。
- あやまって表示言語を切り替えてしまった場合は、アドバンストセットアップメニュー「GUI LANGUAGE」(150ページ)で「JAPANESE」を選べば、日本語の表示に戻せます。

アドバンストセットアップメニューを設定する

フロントパネルディスプレイに表示されているメニューで、さまざまな項目を設定します。

1　本機の電源がオフになっていることを確認する

2　STRAIGHT／EFFECTキーを押しながら、MASTER ON/OFFスイッチを押す

フロントパネルディスプレイにアドバンストセットアップメニューが表示されます。

3　PROGRAMセレクターを回して、変更したい項目を選ぶ

フロントパネルディスプレイに表示された項目が切り替わります。

4　STRAIGHT／EFFECTキーを押して、設定を変更する

5　MASTER ON／OFFスイッチを押して、本機の電源をオフにする

設定が保存されます。

次に電源を入れたときから、変更した設定が有効になります。

REMOTE SENSOR

リモコンでの本体操作を有効にするか無効にするかを設定します。

選択項目：ON、OFF
初期設定：ON

ON
リモコンの操作を有効にします。本機をリモコンで操作できます。通常はこの設定でお使いください。

OFF
リモコンの操作を無効にします。本機をリモコンで操作できません。

RS232C STANDBY

本機がスタンバイのときに、RS-232C端子からのデータを受信するか、受信しないかを設定します。

選択項目：NO、YES
初期設定：NO

NO
RS-232C端子からのデータを受信しません。

YES
RS-232C端子からのデータを受信します。

ご注意

RS-232C端子はサービス用の端子です。ユーザーは使用しません。通常は「NO」に設定してください。

RC AMP ID

複数のヤマハ製アンプ／レシーバーを同じ部屋で使用している場合などに、それらが同時にリモコン操作を受け付けて動作してしまわないよう、本体のアンプ用リモコンIDを変更します。リモコンのアンプ操作用ライブラリーコードも合わせて変更してください。

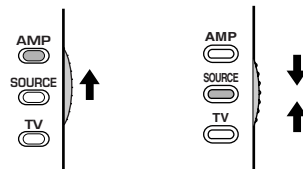
選択項目：ID1、ID2
初期設定：ID1

ID1
リモコンのアンプ操作用ライブラリーコード「2001」に対応します。

ID2
リモコンのアンプ操作用ライブラリーコード「2002」に対応します。

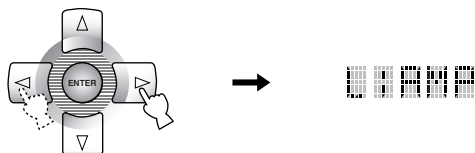
リモコンのアンプ操作用ライブラリーコードを変更する

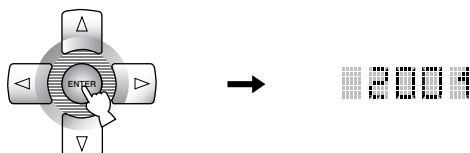
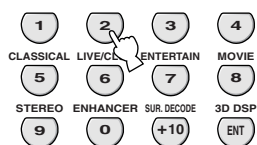
リモコンのアンプ操作用ライブラリーコードを本機のリモコンIDに合わせて変更します。

1　操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPまたはSOURCEを選ぶ

2 LEARNボタンを3秒以上押し続ける

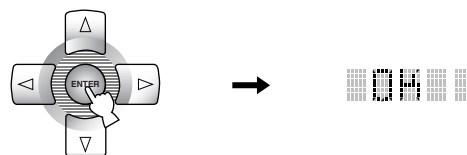
ボールペンなど、先の細いもので押します。

ご注意
- LEARNボタンは3秒以上押しつづけてください。短く押して離すと、ラーニングモードに切り替わります（163ページ）。
- 手順2以降の操作は、それぞれ操作後30秒以内に行ってください。そのままにしておくとライブラリーコードの設定が自動的に中止されます。この場合は、手順2から操作しなおしてください。

3 リモコンディスプレイに「L;AMP」と表示されるまで◁／▷キーを繰り返し押す

4 ENTERキーを押す

現在設定されているライブラリーコードがリモコンディスプレイに表示されます。

5 数字キーを押して、4桁のライブラリーコードを入力する

アンプライブラリーコード設定（リモコンの設定）	機能	リモコンアンプ用ID設定（本体の設定）
2001（初期設定）	通常コードで本機を操作する場合の設定です。	ID1（初期設定）
2002	予備コードで本機を操作する場合の設定です。	ID2

6 ENTERキーを押す

ライブラリーコードが正しく入力されると、リモコンディスプレイに「OK」と表示されます。
誤って入力されると、「NG」と表示されます。この場合は、手順2から操作しなおしてください。

7 LEARNボタンを押して、ライブラリーコードの設定を終了する

リモコンが通常の状態に戻ります。

RC TUNER ID

複数のヤマハ製チューナー／レシーバーを同じ部屋で使用している場合などに、それらが同時にリモコン操作を受け付けて動作してしまわないよう、本体のチューナー用リモコンIDを変更します。リモコンのチューナー操作用ライブラリーコードも合わせて変更してください。

選択項目：ID1、ID2
初期設定：ID1

ID1
リモコンのチューナー操作用ライブラリー「2602」に対応しています。

ID2
リモコンのチューナー操作用ライブラリー「2603」に対応しています。

リモコンのチューナー操作用ライブラリーコードを変更する

リモコンのチューナー操作用ライブラリーコードを本機のリモコンIDに合わせて変更します。

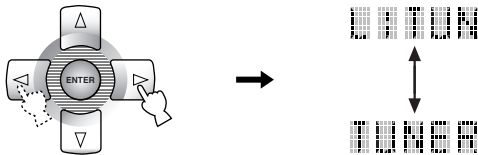
1 TUNERキーを押して、リモコンをチューナーモードに切り替える

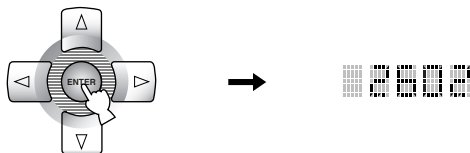
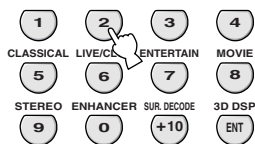
2 *LEARNボタンを3秒以上押し続ける*

ボールペンなど、先の細いもので押します。

ご注意

- LEARNボタンは3秒以上押しつづけてください。短く押して離すと、ラーニングモードに切り替わります（163ページ）。
- 手順2以降の操作は、それぞれ操作後30秒以内に行ってください。そのままにしておくとライブラリーコードの設定が自動的に中止されます。この場合は、手順2から操作しなおしてください。

3 *リモコンディスプレイに「L；TUN」と「TUNER」が交互に表示されるまで◁／▷キーを繰り返し押す*

4 *ENTERキーを押す*

現在設定されているライブラリーコードがリモコンディスプレイに表示されます。

5 *数字キーを押して、4桁のライブラリーコードを入力する*

チューナーライブラリーコード設定（リモコンの設定）	機能	リモコンチューナー用ID設定（本体の設定）
2602 （初期設定）	通常コードで本機を操作する場合の設定です。	ID1 （初期設定）
2603	予備コードで本機を操作する場合の設定です。	ID2

6 *ENTERキーを押す*

ライブラリーコードが正しく入力されると、リモコンディスプレイに「OK」と表示されます。
誤って入力されると、「NG」と表示されます。この場合は、手順2から操作しなおしてください。

7 *LEARNボタンを押して、ライブラリーコードの設定を終了する*

リモコンが通常の状態に戻ります。

BI-AMP

スピーカーをバイアンプ接続（35ページ）して、バイアンプ機能を使うか使わないかを設定します。

選択項目：OFF、ON
初期設定：OFF

OFF
バイアンプ機能を使いません。

ON
バイアンプ機能を使います。ウーファーとツィーターを別々のアンプで駆動します。

INITIALIZE

本機の設定を工場出荷状態に戻します。

選択項目：DSP PARAM、VIDEO、ALL、CANCEL
初期設定：CANCEL

DSP PARAM
音場パラメーターをすべて初期設定に戻します。

VIDEO
セットメニュー「映像の設定」の「ショートメッセージ」（125ページ）、「オンスクリーン表示」（125ページ）以外の「映像の設定」（123ページ）項目を初期設定に戻します。

NETWORK
セットメニュー「ネットワーク／USB設定」（130ページ）で変更した全項目を工場出荷状態に戻します。

ALL
本機の設定をすべて初期設定に戻します。

CANCEL
本機の設定を初期設定に戻しません。

ご注意

音場パラメーターをサブプログラムごとに初期設定に戻す場合は、音場パラメーター「初期化」をお使いください。

TV FORMAT

お使いのテレビに合わせて、本機のMONITOR OUTから出力されるテレビ画面表示用信号の方式を切り替えます。

選択項目：PAL、NTSC
初期設定：NTSC

PAL
PAL方式に切り替えます。

NTSC
NTSC方式に切り替えます。通常はこの設定でお使いください。

MONITOR CHECK

セットメニュー「映像の設定」の「HDMI解像度」（124ページ）で、本機とHDMI接続したテレビが対応していない解像度を選択できるようにするか、選択できないようにするかを設定します。

選択項目：YES、SKIP
初期設定：YES

YES
テレビが対応していない解像度を選択できないようにします。

SKIP
テレビが対応していない解像度を選択できるようにします。

GUI LANGUAGE

テレビ画面で表示する言語を切り替えます。

選択項目：JAPANESE、FRENCH、GERMAN、SPANISH、RUSSIAN、ENGLISH
初期設定：JAPANESE

JAPANESE
日本語で表示します。

FRENCH
フランス語で表示します。

GERMAN
ドイツ語で表示します。

SPANISH
スペイン語で表示します。

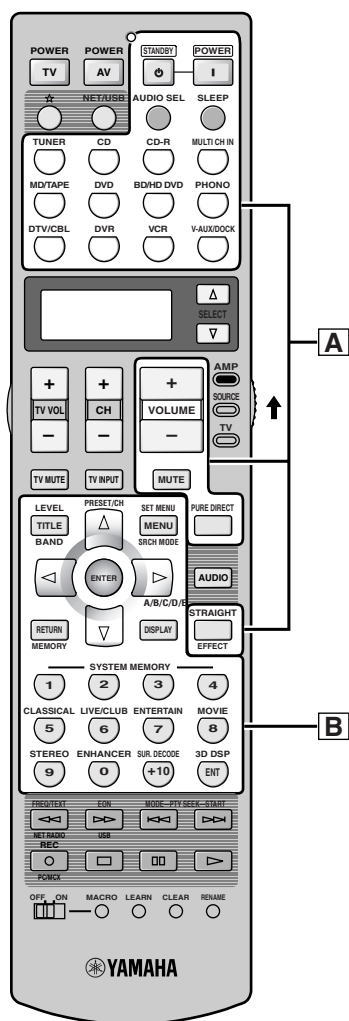
RUSSIAN
ロシア語で表示します。

ENGLISH
英語で表示します。

リモコンのはたらき

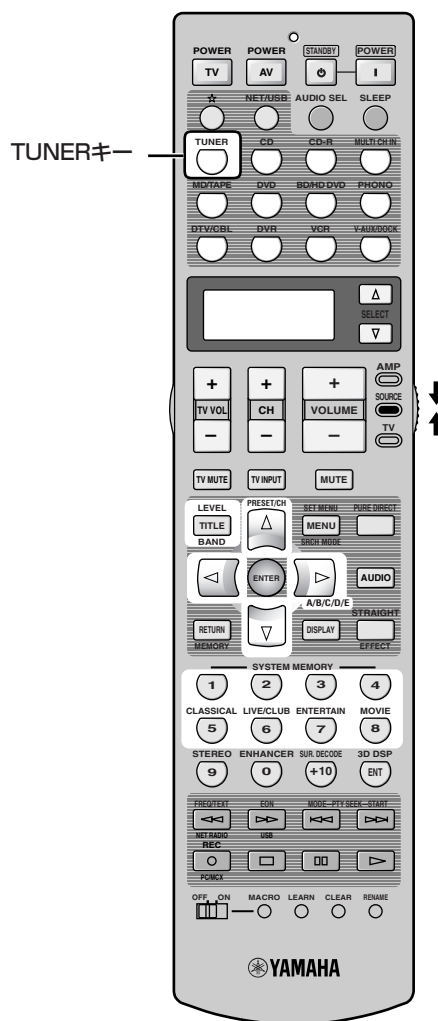
他の機器のリモコン信号を記憶させたり、リモコンコードを設定したりすることにより、本機のリモコンでDVDプレーヤーやCDプレーヤー、テレビなど、本機以外のAV機器を操作することができます。また、マクロ機能を使うと、一連のキー操作を1つのキーでできるようになり、操作性が格段に向上します。

アンプ機能を操作する

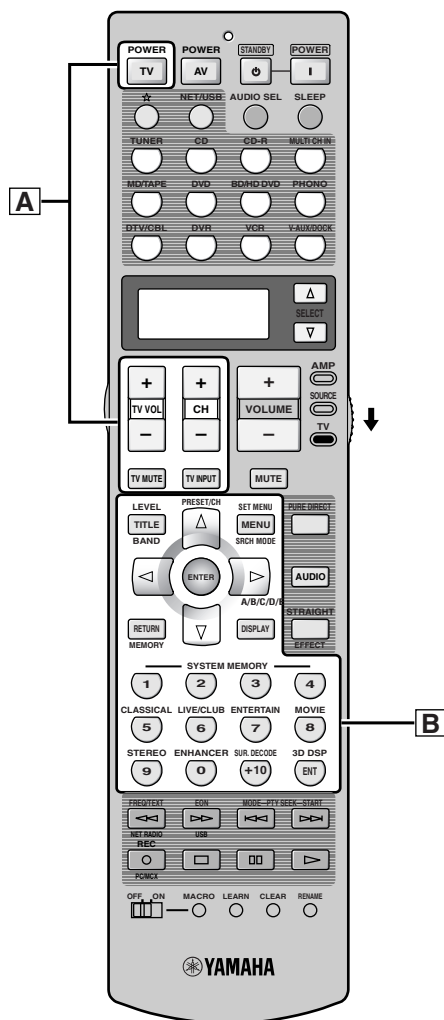
アンプ機能の操作に使用するキーは、下図の白色で示した部分です。操作機器選択スイッチで「AMP」を選んでください。
各キーの機能について詳しくは、「アンプ機能の操作」をご覧ください(14ページ)。

A 操作機器選択スイッチの位置にかかわらず、本機のアンプ機能を操作できます。

B 操作機器選択スイッチを「AMP」にセットしたときに、本機を操作できます。

チューナー機能を操作する

チューナー機能の操作に使用するキーは、下図の白色で示した部分です。操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、TUNERキーを押してください。
各キーの機能について詳しくは、「FM／AMチューナーを操作する」をご覧ください(158ページ)。

テレビを操作する

本機のリモコンにテレビのリモコンコードを設定すれば(154ページ)、テレビを操作できます。テレビの操作に使用するキーは、下図の白色で示した部分です。操作機器選択スイッチで「TV」を選び、テレビのリモコンコードを設定した入力選択キー(DTV/CBLまたはPHONOキー)を押してください。

各キーの機能について詳しくは、「テレビを操作する」をご覧ください(161ページ)。

A 操作機器選択スイッチの位置にかかわらず、テレビを操作できます。

TV POWER：テレビの電源を切り替えます。

TV VOL +／–：テレビの音量を操作します。

CH +／–：テレビのチャンネルを切り替えます。

TV MUTE：テレビを一時的に消音します。

TV INPUT：テレビの映像入力を切り替えます。

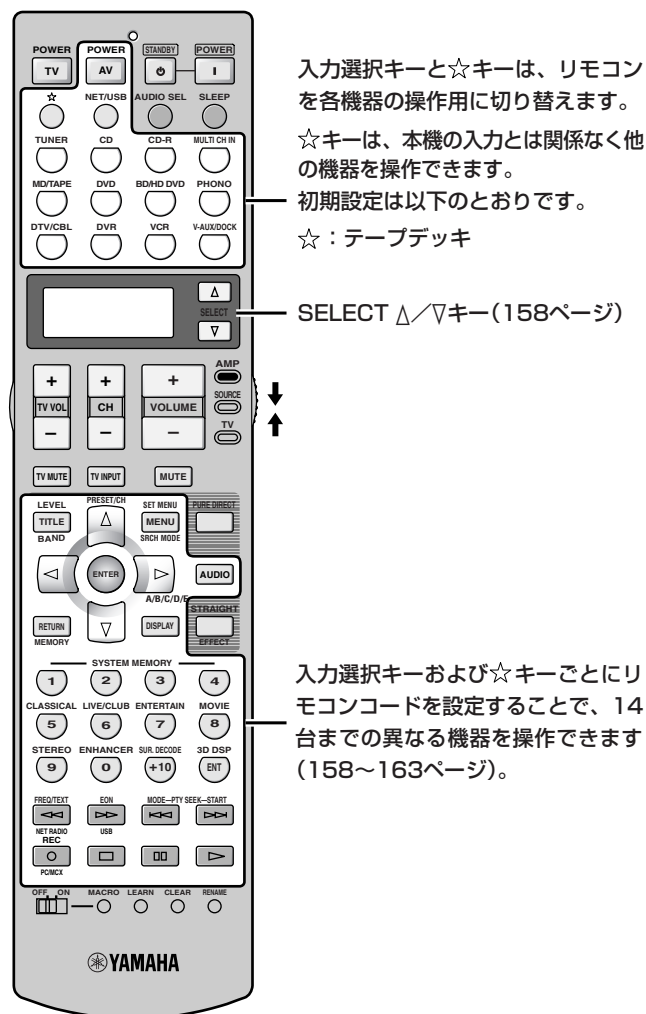
B 操作機器選択スイッチを「TV」にセットしたときに、テレビを操作できます。

ヒント

テレビのリモコンコードをDTV/CBLとPHONOの両方のキーに設定した場合は、DTV/CBLキーに設定したテレビを操作できます。

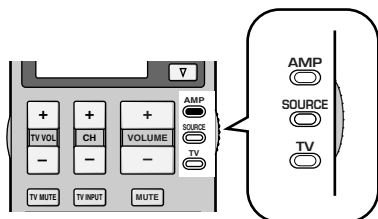
他の外部機器を操作する

本機のリモコンに他の外部機器のリモコンコードを設定すれば(154ページ)、それらの機器を操作できます。外部機器の操作に使うキーは、下図の白色で示した部分です。操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーを押してください。

各キーの機能について詳しくは、「設定した機器を操作する」をご覧ください(158ページ)。

ヒント

SELECTΔ／∇キーで、入力ソースは切り替えずにリモコンで操作する機器のみ切り替えられます(153ページ)。

操作機器選択スイッチの役割

2つ以上の役割を持つキーの操作内容を切り替えます。

音場プログラムの選択など、本機のアンプ機能の操作主体で使う場合：
「AMP」にセットします。

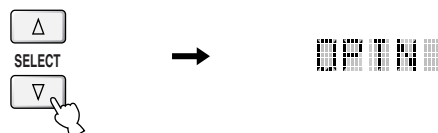
数字キーの入力など、本機のチューナー機能や他の機器の操作主体で使う場合：
「SOURCE」にセットします。

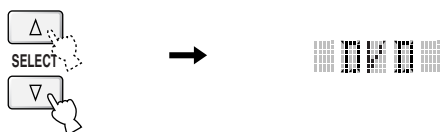
本機の操作に関係なく、テレビのリモコンとして使う場合：
「TV」にセットします。
DTV/CBLキーまたはPHONOキーにリモコンコードを設定したテレビを操作できます。テレビのリモコンコードを両方のキーに設定した場合は、DTV/CBLキーに設定したテレビを操作できます。

操作する機器を切り替える

SELECT∆／∇キーを押すと、入力ソースは切り替えずに、リモコンで操作する機器だけを切り替えることができます。操作する機器は、リモコンディスプレイに表示されます。

OPTN(オプション)モード

入力選択キーでの切り替えに関係なく操作したい機能をラーニングする場合は、「OPTN」にラーニングすると便利です。SELECT∇キーを押して「OPTN」を選ぶと、ラーニングした機器を操作できます。

ヒント
マクロ機能(166ページ)だけに使うリモコン信号は、OPTNモードにしてラーニングすることをおすすめします。

ご注意
OPTNモードには、リモコンコードを設定できません。

本機のリモコンで本機以外の機器を操作する

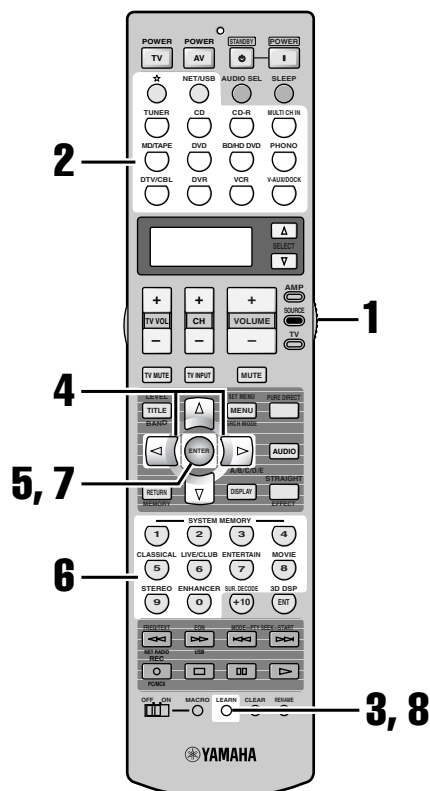
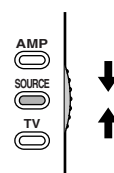
リモコンで操作する機器を設定する

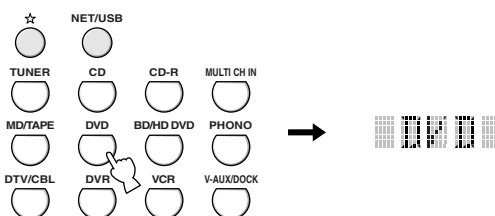
リモコンコードを設定することにより、本機のリモコンで他のメーカーの機器を操作できます。リモコンコードは各入力選択キーまたは☆キーに設定できます。☆、NET/USB、TUNER、CD、CD-R、MULTI CH IN、MD/TAPE、DVD、BD/HD DVD、DVR、V-AUX/DOCKの機器操作キーには、工場出荷時にあらかじめヤマハのリモコンコードが設定されています。

初期設定

入力選択キー	機器の種類（ライブラリー）	ヤマハ初期設定コード
☆	TAPE	2700
NET/USB	TUNER	2607
TUNER	TUNER	2602
CD	CD	2300
CD-R	CD-R	2400
MULTI CH IN	DVD	2100
MD/TAPE	MD	2500
DVD	DVD	2100
BD/HD DVD	DVD	2100
PHONO	TV	–
DTV/CBL	TV	–
DVR	DVR	2807
VCR	VCR	–
V-AUX/DOCK	TUNER	2606

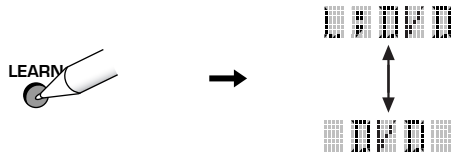
ご注意

- お使いのヤマハ機器によっては、上図の「ヤマハ初期設定コード」では操作できない場合があります。この場合は、他のヤマハリモコンコードをお試しください。
- 付属のリモコンは、市販されているすべてのAV機器（ヤマハAV機器を含む）のリモコンコードを内蔵しているわけではありませんので、お使いの機器を操作できない場合があります。いずれのリモコンコードでも操作ができない場合は、ラーニング機能（163ページ）を利用するか、お使いの機器のリモコンをお使いください。
- 1つの入力選択キーに対して、1つのリモコンコードしか設定できません。
- すでにラーニングを設定している場合、ラーニングによる機能がリモコンコードの機能より優先されます。
- 手順で指定されたキー以外を操作したり、2つ以上のキーを同時に押したりすると、リモコンディスプレイに「ERROR」と表示されます。このような場合は手順に沿ってはじめから操作しなおしてください。

1 ***操作機器選択スイッチをスライドさせて、SOURCEを選ぶ***

2 ***設定を変更したい入力選択キーを押す***

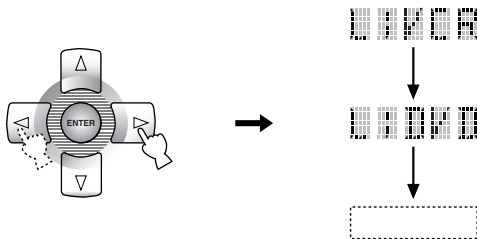
ご注意

手順3以降の操作は、それぞれ操作後30秒以内に行ってください。そのままにしておくとリモコンコード設定が自動的に中止されます。この場合は、手順3から操作しなおしてください。

3 ***LEARNボタンを3秒以上押し続ける***

ボールペンなど、先の細いもので押します。リモコンディスプレイに機器の種類(ライブラリー)と、選んだ入力ソースの名前が交互に表示されます。

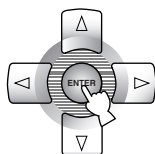
ご注意

LEARNボタンは3秒以上押しつづけてください。短く押して離すと、ラーニングモードに切り替わります(163ページ)。

4 ***設定されている機器の種類(ライブラリー)を変更する場合は、◁／▷キーを押して、使いたい機器の種類(ライブラリー)を選ぶ***

本機のリモコンには、AMP、TV、CAB(CABLE)、SAT(SATELLITE)、VCR、DVD、DVR、LD、CD、CDR(CD-R)、MD、TAP(TAPE)、TUN(TUNER)の13種類のライブラリーが用意されています。

ヒント

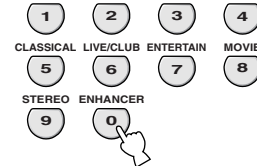
手順2で選択した入力とは異なる機器のリモコンコードを設定する場合にライブラリーを変更すれば、変更したライブラリーがリモコンディスプレイに表示されるため、操作する機器が確認しやすくなります。たとえば、DVDキーにDVDレコーダーのリモコンコードを設定する場合、ライブラリーを「DVR」に変更すれば、DVDキーを押すとリモコンディスプレイに「DVR」と表示されます。

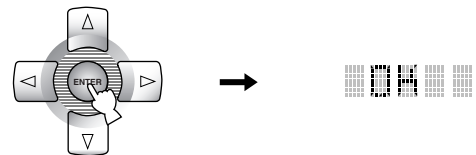
5 ***ENTERキーを押す***

設定されているリモコンコードがリモコンディスプレイに表示されます。

ご注意

選んだ機器用にリモコンコードが設定されていない場合は、「0000」とリモコンディスプレイに表示されます。

6 ***数字キーを押して、4桁のリモコンコードを入力する***

リモコンコードについては、「リモコンコード一覧」(156〜157ページ)を参照してください。

7 ***ENTERキーを押す***

リモコンコードが正しく入力されると、リモコンディスプレイに「OK」と表示されます。

ご注意

リモコンコードが正しく入力されなかった場合は、リモコンディスプレイに「NG」と表示されます。このような場合は、手順4から操作しなおしてください。

8 ***LEARNボタンを押して、リモコンコードの設定を終了する***

リモコンが通常の状態に戻ります。

9 ***動作を確認する***

操作機器選択スイッチをスライドさせて「SOURCE」または「TV」を選び、「POWER」や「► (PLAY)」などの各キーを押して、お使いの機器が正しく動作するか確認してください。正しく動作しないときは同じメーカーの別のリモコンコードを選んでみてください。

リモコンコード一覧

本機のリモコンに内蔵のライブラリーは全世界対応です。下表は主に日本で流通しているメーカーのリモコンコードです。下表のメーカー製品であっても形式、年式によって使用できないものがあります。他社のリモコンコードを設定した場合、機種によっては操作できないもの、または限られた機能しか操作できないものがあります。この場合は、お使いの機器専用のリモコンをご利用ください。

TV（TV）

メーカー名	リモコンコード				
DAEWOO	0036	0057	0064	0119	0135
	0181	0197	0205	0207	0401
	0478	0650	0661	1688	
FUJITSU	0710	0836			
FUNAI	0207	0198	0291		
GOLDSTAR	0057	0064	0136	0181	0205
	0404				
HITACHI	0036	0057	0119	0132	0136
	0172	0190	0205	0252	0383
	0508	0575	0605	1172	1283
LG	0057	0064	0087	0135	0205
	0741				
MITSUBISHI	0057	0120	0135	0177	0181
	0205	0207	0263	0277	0539
	0863	1277			
NEC	0036	0057	0078	0181	0183
	0197	0205	0482	0524	1731
PANASONIC	0064	0078	0081	0190	0277
	0677	1437			
PHILIPS	0027	0057	0064	0078	0081
	0119	0135	0205	0401	0583
	0717	1481			
PIONEER	0136	0190	0193	0314	0706
	0787	0893			
SAMSUNG	0036	0057	0064	0087	0117
	0119	0181	0205	0291	0397
	0583	0614	0645	0729	0793
	0839	0841			
SANYO	0131	0181	0207	0235	0366
	0826				
SHARP	0057	0120	0677		
SONY	0027	0677	0861	1127	1532
	1678				
TOSHIBA	0087	0181	0183	0535	0645
	0677	0859	1283	1383	1683
	1731				
VICTOR	0080	0277	0677	0680	
YAMAHA	0057	0172	0677	0796	0860
	2900（プロジェクター）	2901（プロジェクター）			
	2903	2904（プロジェクター）			

ケーブルテレビチューナー（CAB）

メーカー名	リモコンコード			
PIONEER	0171	0560	0904	1904

BSデジタルチューナー（SAT）

メーカー名	リモコンコード			
PANASONIC	0274	0728	0874	1347
SONY	0666	0874	1666	
TOSHIBA	0776	0817	1776	

テープデッキ（TAP）

メーカー名	リモコンコード	
AIWA	0056	
MARANTZ	0056	
PIONEER	0054	
SANSUI	0056	
SONY	0270	
YAMAHA	2700	2701

ビデオデッキ（VCR）

メーカー名	リモコンコード				
AIWA	0027	0064	0334	0375	0379
DAEWOO	0072	0131	0305	0669	1305
FUNAI	0027				
GOLDSTAR	0064	0252	0507	1264	
HITACHI	0027	0064	0068	0069	0267
LG	0064	0069	0072	0507	
MITSUBISHI	0068	0070	0094	0108	0834
NEC	0062	0064	0068	0075	0094
	0131				
PANASONIC	0062	0252	0253	0643	1062
	1589				
SAMSUNG	0072	0267	0459		
SANYO	0074	0131	0267		
SHARP	0075	0834			
SHINTOM	0099	0131			
SONY	0027	0059	0060	0062	0663
	1259				
TOSHIBA	0068	0070	0072	0094	0108
	0872				
VICTOR	0068	0094			
YAMAHA	0068				

DVDプレーヤー（DVD）

メーカー名	リモコンコード			
DENON	0517			
HITACHI	0600	0691		
KENWOOD	0517	0561		
MITSUBISHI	0548			
ONKYO	0530			
PANASONIC	0517	0659	1389	
PHILIPS	0530	0566	0673	0881
PIONEER	0552	0598	0658	0659
RCA	0549	0598	0744	
SAMSUNG	0600			
SHARP	0657			
SONY	0560	0891		
TOSHIBA	0530			
VICTOR	0585	0650		
YAMAHA	0517	0566	0572	2100

HD DVDプレーヤー

メーカー名	リモコンコード
TOSHIBA	2103

メーカー名	リモコンコード		

DVDレコーダー（DVR）

PANASONIC	2800	2801	2802
PHILIPS	2808		
SHARP	2812	2813	
SONY	2809	2810	2811

ブルーレイディスクプレーヤー

PANASONIC	2800	2801	2802
SAMSUNG	2816		

LDプレーヤー（LD）

DENON	0086
MARANTZ	0091
MITSUBISHI	0086
PHILIPS	0091
PIONEER	0086
SONY	0228
YAMAHA	2200

CDプレーヤー（CD）

AIWA	0184	
DENON	0900	
HITACHI	0059	
KENWOOD	0055	0064
MARANTZ	0056	0184
PANASONIC	0056	
PHILIPS	0184	
PIONEER	0059	0332
SANSUI	0184	0332
SANYO	0206	
SHARP	0064	
SONY	0027	
TECHNICS	0056	
VICTOR	0099	
YAMAHA	2300	2301

CDレコーダー（CDR）

KENWOOD	0653
MARANTZ	0653
PHILIPS	0653
YAMAHA	2400

MDレコーダー（MD）

KENWOOD	0708		
ONKYO	0895		
SHARP	0888		
SONY	0517		
YAMAHA	2500	2501	2502

チューナー（TUN）

YAMAHA	2602	2603

その他の機器（TUN）

YAMAHA(iPod)	2606

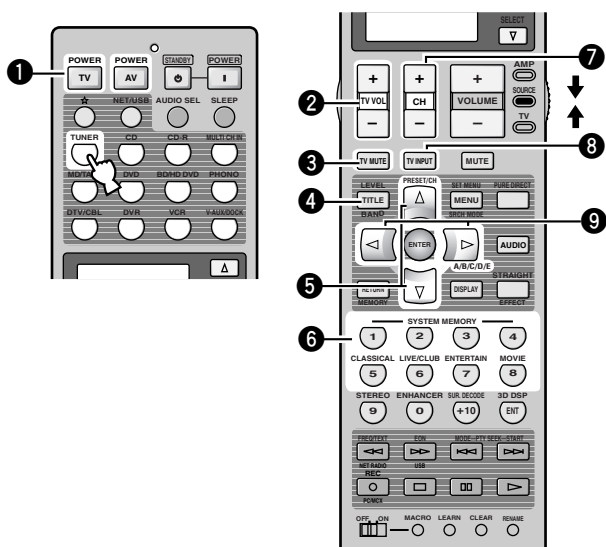
ご注意

お使いの機器の製品名から、その機器に対応するリモコンコードは特定できません。

設定した機器を操作する

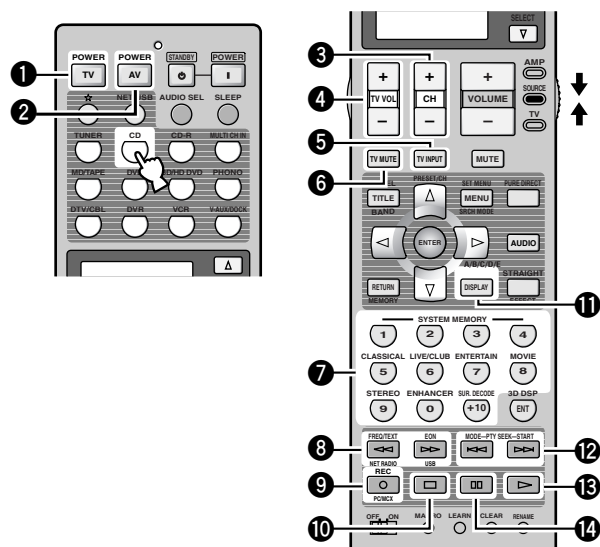
お使いの機器のリモコンコードを設定すれば、その機器を本機のリモコンで操作できます。

- お使いの機器によっては、いくつかのキーが機能しないことがあります。このような場合には、ラーニングをする（163ページ）か、お使いの機器のリモコンをご使用ください。
- お使いの機器によっては、キー操作と説明が一致しないことがあります。
- 本機以外の機器を操作する場合には、あらかじめリモコンコードを設定しておく必要があります。☆、TUNER、CD、CD-R、MULTI CH IN、MD/TAPE、DVD、BD/HD DVD、DVR、V-AUX/DOCK、の各キーには、工場出荷時にヤマハリモコンコードが設定されていますが、動作しない場合は他のリモコンコードに設定しなおしてください。

FM／AMチューナーを操作する

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーのTUNERキーを押すとFM／AMチューナーを操作できます。

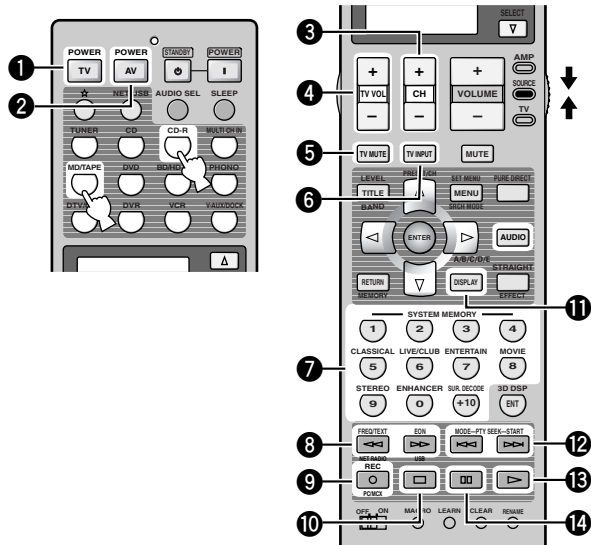
操作例

❶ （テレビ）電源を入／切する
❷ （テレビ）音量を調節する
❸ （テレビ）消音する
❹ バンド(FM／AM)を切り替える
❺ プリセット番号を切り替える
❻ プリセット番号を直接指定する
❼ （テレビ）チャンネルを切り替える
❽ （テレビ）入力を切り替える
❾ プリセットグループ(A/B/C/D/E)を切り替える

CDプレーヤーを操作する

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーのCDキーを押すとCDプレーヤーを操作できます。

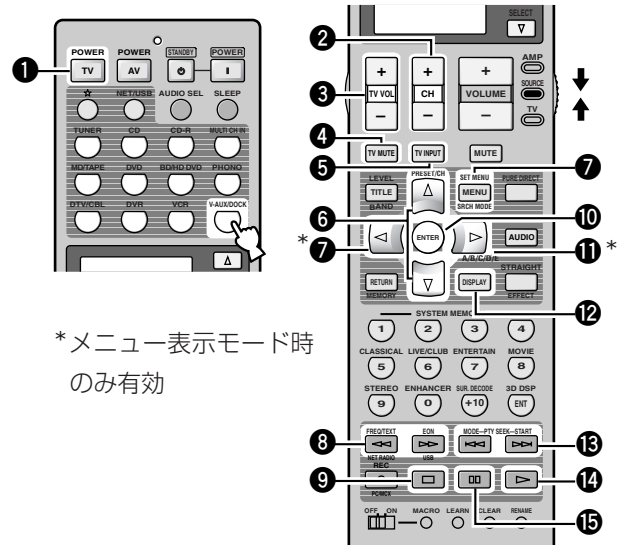
操作例

❶ （テレビ）電源を入／切する
❷ 電源を入／切する
❸ （テレビ）チャンネルを切り替える
❹ （テレビ）音量を調節する
❺ （テレビ）入力を切り替える
❻ （テレビ）消音する
❼ 数字を入力する
❽ 早送り／早戻しをする
❾ （CDチェンジャー）ディスクを選ぶ
❿ 停止する
⓫ ディスプレイ表示を切り替える
⓬ 次／前の曲の頭出しをする
⓭ 再生を開始する
⓮ 再生を一時停止する

MDレコーダー／CDレコーダーを操作する

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーのMD/TAPEキーを押すとMDレコーダーを、CD-Rキーを押すとCDレコーダーを操作できます。

操作例

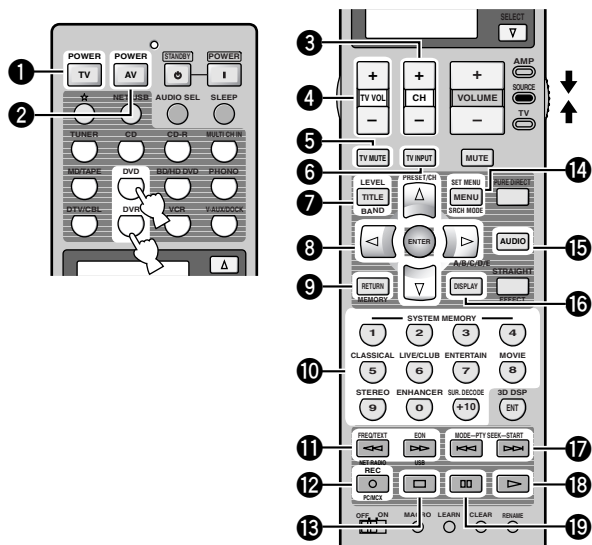
❶ （テレビ）電源を入／切する
❷ 電源を入／切する
❸ （テレビ）チャンネルを切り替える
❹ （テレビ）音量を調節する
❺ （テレビ）消音する
❻ （テレビ）入力を切り替える
❼ 数字を入力する
❽ 早送り／早戻しをする
❾ 録音を開始する
❿ 停止する
⓫ ディスプレイ表示を切り替える
⓬ 次／前の曲の頭出しをする
⓭ 再生を開始する
⓮ 再生／録音を一時停止する

iPodを操作する

＊メニュー表示モード時のみ有効

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーのV-AUX/DOCKキーを押すとヤマハ製ドック（別売YDS-10など）にセットしたiPodを操作できます。

操作例

❶ （テレビ）電源を入／切する
❷ （テレビ）チャンネルを切り替える
❸ （テレビ）音量を調節する
❹ （テレビ）消音する
❺ （テレビ）入力を切り替える
❻ カーソルを上下に移動する
❼ 前の画面に戻る
❽ 早送り／早戻しをする
❾ 停止する
❿ メニュー項目を選択する／決定する
⓫ メニュー項目を選択する
⓬ ノーマルモード/メニュー表示モードを切り替える
⓭ 現在／次の曲の頭出しをする
⓮ 再生を開始する（ノーマルモード時は再生／一時停止）
⓯ 再生を一時停止する（ノーマルモード時は再生／一時停止）

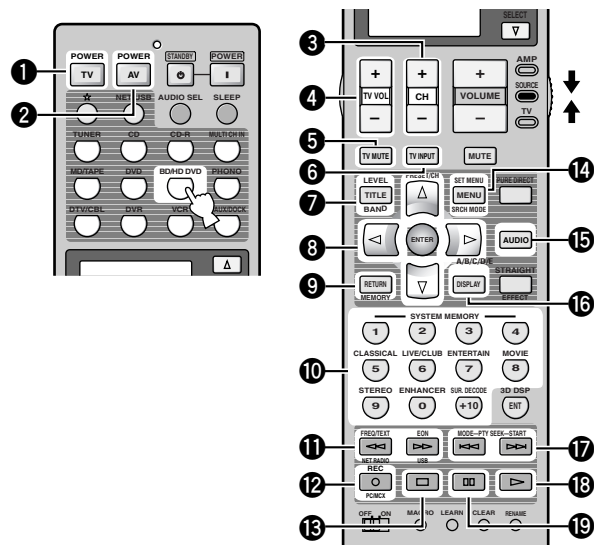
DVDプレーヤー／DVDレコーダーを操作する

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーのDVDキーを押すとDVDプレーヤーを、DVRキーを押すとDVDレコーダーを操作できます。

操作例

❶ （テレビ）電源を入／切する
❷ 電源を入／切する
❸ （テレビ）チャンネルを切り替える
❹ （テレビ）音量を調節する
❺ （テレビ）消音する
❻ （テレビ）入力を切り替える
❼ タイトルメニューを表示する
❽ メニュー項目を選択する／決定する
❾ 前の画面に戻る
❿ 数字を入力する
⓫ 早送り／早戻しをする
⓬ （DVDチェンジャー）ディスクを選ぶ
（DVDレコーダー）録画を開始する
⓭ 停止する
⓮ DVDメニューを表示する
⓯ オーディオメニューを表示する
⓰ ディスプレイ表示を切り替える
⓱ 次／前のチャプターの頭出しをする
⓲ 再生を開始する
⓳ 再生を一時停止する

ヒント

DVRキーにDVDレコーダーのリモコンコードを設定している場合、テレビの操作モードで、DVRに切り替えることなくDVDレコーダーを操作できます。

BD／HD DVDプレーヤー、BD／HD DVDレコーダーを操作する

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーのBD/HD DVDキーを押すとブルーレイディスク／HD DVDプレーヤー、またはブルーレイディスク／HD DVDレコーダーを操作できます。

操作例

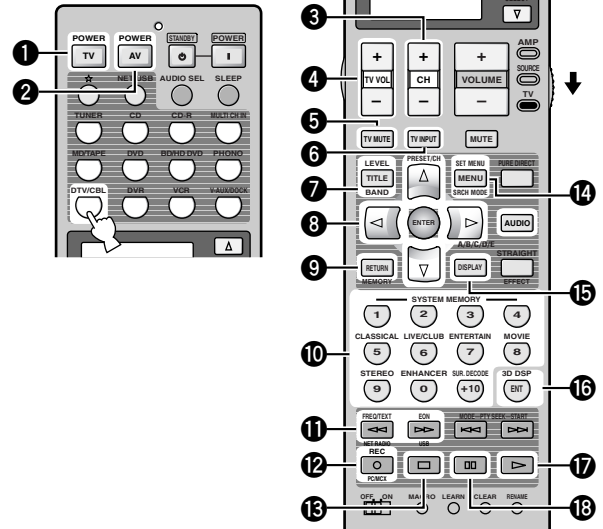
❶ （テレビ）電源を入／切する
❷ 電源を入／切する
❸ （テレビ）チャンネルを切り替える
❹ （テレビ）音量を調節する
❺ （テレビ）消音する
❻ （テレビ）入力を切り替える
❼ タイトルメニューを表示する
❽ メニュー項目を選択する／決定する
❾ 前の画面に戻る
❿ 数字を入力する
⓫ 早送り／早戻しをする
⓬ （BD／HD DVDレコーダー）録画を開始する
⓭ 停止する
⓮ メニューを表示する
⓯ オーディオメニューを表示する
⓰ ディスプレイ表示を切り替える
⓱ 次／前のチャプターの頭出しをする
⓲ 再生を開始する
⓳ 再生を一時停止する

ビデオデッキを操作する

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーのVCRキーを押すと、ビデオデッキを操作できます。

操作例

❶ (テレビ)電源を入／切する
❷ 電源を入／切する
❸ チャンネルを切り替える
❹ (テレビ)音量を調節する
❺ (テレビ)消音する
❻ (テレビ)入力を切り替える
❼ タイトルメニューを表示する
❽ 前の画面に戻る
❾ チャンネルを直接指定する
❿ 早送り／巻戻しをする
⓫ 録画を開始する(2回押すと録画を開始します)
⓬ 停止する
⓭ チャンネルを決定する
⓮ 再生を開始する
⓯ 再生／録画を一時停止する

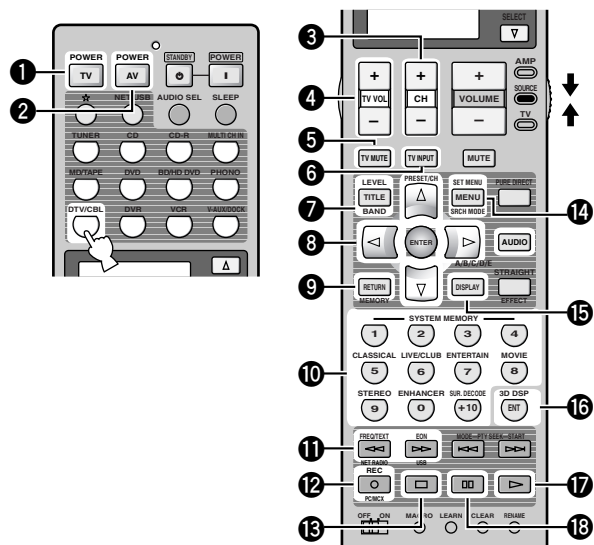
テレビを操作する

操作機器選択スイッチで「TV」を選び、入力選択キーのDTV/CBLキーを押すと、テレビを操作できます。

操作例

❶ 電源を入／切する
❷ (DVDレコーダー)電源を入／切する
❸ チャンネルを切り替える
❹ 音量を調節する
❺ 消音する
❻ 入力を切り替える
❼ タイトルを表示する
❽ メニュー項目を選択する／決定する
❾ 前の画面に戻る
❿ チャンネルを直接指定する
⓫ (DVDレコーダー)早送り／巻戻しをする
⓬ (DVDレコーダー)録画を開始する(2回押すと録画を開始します)
⓭ (DVDレコーダー)再生／録画を停止する
⓮ メニューを表示する
⓯ ディスプレイ表示を切り替える
⓰ チャンネルを決定する／チャンネルを切り替える(12)
⓱ (DVDレコーダー)再生を開始する
⓲ (DVDレコーダー)再生／録画を一時停止する

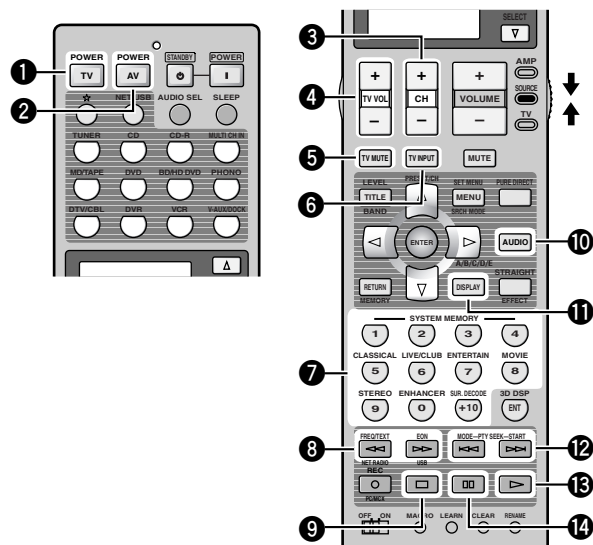
ヒント

- DTVキーにテレビ以外の機器のリモコンコードを設定して操作する場合、PHONOキーにテレビのリモコンコードを設定することにより、他の機器の操作モードでもテレビを操作できます。
- DTVキーとPHONOキーの両方にリモコンコードを設定している場合、他の機器の操作モードではDTVキーに設定したリモコンコードが有効になります。

ケーブルテレビチューナーを操作する

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーのDTV/CBLキーを押すと、ケーブルテレビチューナーを操作できます。

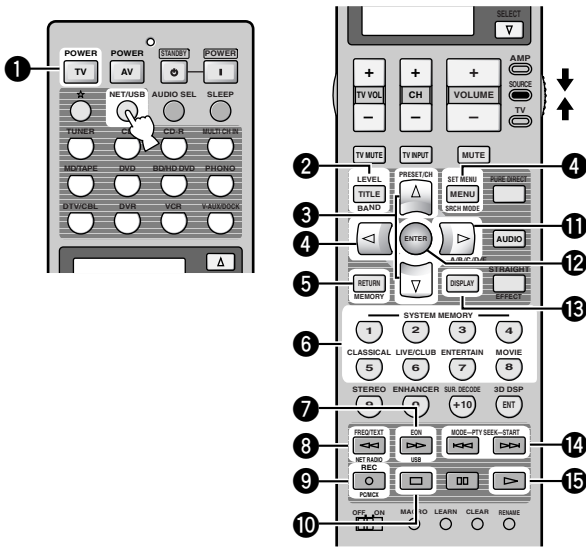
操作例

❶ (テレビ)電源を入/切する
❷ 電源を入/切する
❸ チャンネルを切り替える
❹ (テレビ)音量を調節する
❺ (テレビ)消音する
❻ (テレビ)入力を切り替える
❼ タイトル(トップメニュー)を表示する
❽ メニュー項目を選択する/決定する
❾ 前の画面に戻る
❿ チャンネルを直接指定する
⓫ (ビデオ)早送り/巻戻しをする
⓬ (ビデオ)録画を開始する(2回押すと録画を開始します)
⓭ (ビデオ)再生/録画を停止する
⓮ メニューを表示する
⓯ ディスプレイ表示を切り替える
⓰ チャンネルを決定する
⓱ (ビデオ)再生を開始する
⓲ (ビデオ)再生/録画を一時停止する

LDプレーヤーを操作する

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、LDプレーヤーを接続した端子に対応するキーを押すと、LDプレーヤーを操作できます。

操作例

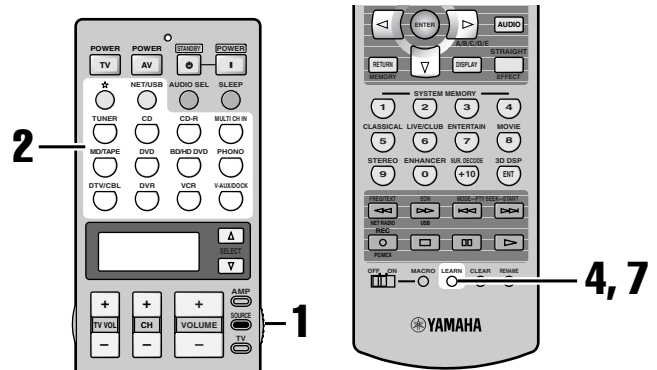
❶ (テレビ)電源を入/切する
❷ 電源を入/切する
❸ (テレビ)チャンネルを切り替える
❹ (テレビ)音量を調節する
❺ (テレビ)消音する
❻ (テレビ)入力を切り替える
❼ 数字を入力する
❽ 早送り/早戻しをする
❾ 停止する
❿ オーディオメニューを表示する
⓫ ディスプレイ表示を切り替える
⓬ 次/前のチャプターの頭出しをする
⓭ 再生を開始する
⓮ 再生を一時停止する

ネットワークオーディオ/USBデバイスを操作する

操作機器選択スイッチで「SOURCE」を選び、入力選択キーのNET/USBキーを押すと、ネットワークオーディオ/USBを操作できます。

操作例

❶ (テレビ)電源を入／切する
❷ ブックマークを登録/削除する(インターネットラジオ時)
❸ 上／下のメニューにカーソルを移動する
❹ 1つ前の表示に戻る
❺ ショートカットを登録する
❻ ショートカット番号を選択する
❼ USBを入力選択する
❽ インターネットラジオを入力選択する
❾ パソコンを入力選択する
❿ 再生を停止する
⓫ メニュー項目を選択する
⓬ メニュー項目を選択する／決定する
⓭ ディスプレイ表示を切り替える
⓮ 次／前の曲の頭出しをする
⓯ 再生を開始する

他の機器のリモコン機能を記憶させる(ラーニング)

リモコンコードを設定してもお使いの機器を操作できない場合や、お使いの機器のリモコンコードがない場合は、その機器のリモコン信号を本機のリモコンに記憶(ラーニング)させることで操作ができるようにします。入力選択した機器ごとに別の機能をラーニングできます。

1 入力機器選択スイッチをスライドさせて、SOURCEを選ぶ

ご注意

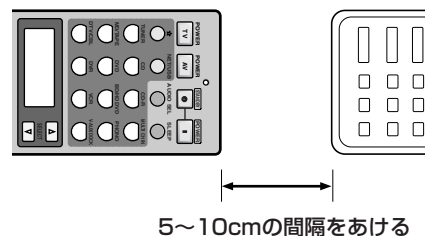
「AMP」を選んでラーニングすると、本機を操作できなくなります。

2 操作したい機器の入力選択キーまたは☆キーを押す

リモコンディスプレイに、選んだ入力ソースの名前が表示されます。

3 本機のリモコンと、外部機器のリモコンを約5〜10cm離し、赤外線送受信部が互いに対向するように置く

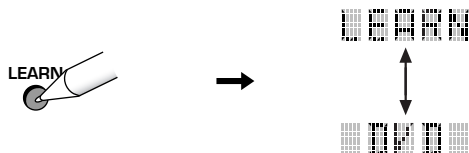
5〜10cmの間隔をあける

リモコンを使いこなす

ご注意

手順4以降の操作は、それぞれ操作後30秒以内に行ってください。そのままにしておくとラーニングが自動的に中止されます。この場合は、手順4から操作しなおしてください。

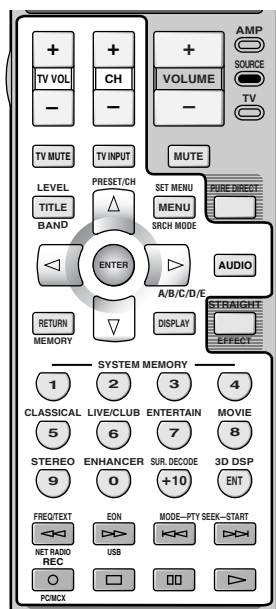
4 LEARNボタンを押す

ボールペンなど先の細いもので押します。リモコンディスプレイに「LEARN」と、選んだ入力ソースの名前が交互に表示されます。

ご注意

LEARNボタンを3秒以上押すと、リモコンコード設定モードに切り替わります（154ページ）。

5 新しい機能をラーニングしたい、本機のリモコンキーを押す

白枠で囲まれているキーにラーニングできます。
リモコンディスプレイに「LEARN」と表示されます。

LEARN

6 リモコンディスプレイに「OK」と表示されるまで、外部機器のリモコンのラーニングさせたい機能のキーを押し続ける

OK

ご注意

- 「NG」と表示されたときは、正しくラーニングされていません。手順5から操作をやりなおしてください。
- メモリー容量がいっぱいになっている場合は、リモコンディスプレイに「FULL」と表示され、それ以上のラーニングはできません。新しいラーニングをするときは、ラーニング済みのキーから不要なものを消去してください。

ヒント

- 別の機能をラーニングするには、続けて手順5〜6を繰り返します。
- 別の機器に機能をラーニングする場合は、SELECT∆／∇キーを押して機器を変更し、手順5〜6を繰り返します。

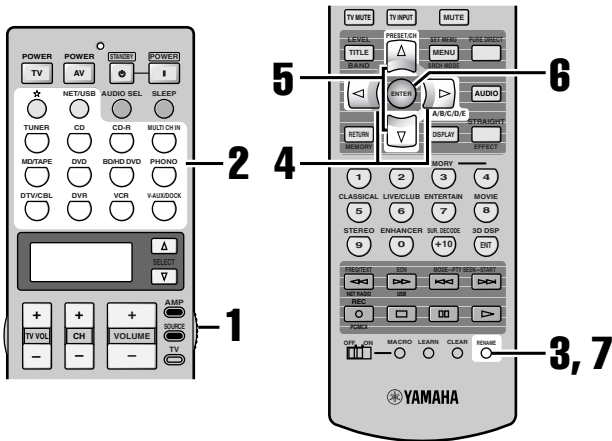
7 LEARNボタンを押して、ラーニングを終了する

リモコンが通常の状態に戻ります。

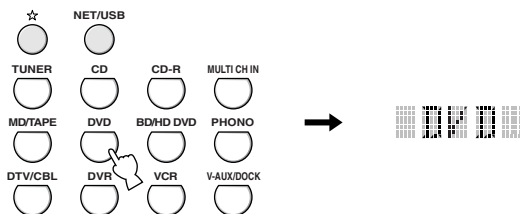
ご注意

- 以下の場合は、ラーニングできないことがあります。
  - 本機のリモコンまたは外部機器のリモコンの乾電池が消耗している
  - 2台のリモコンの間隔が近すぎる、または離れすぎている
  - リモコンの受光部の角度が適切でない
  - リモコンに直射日光が当たっている
  - 信号が特殊だったり、連続している
- 手順で指定されたキー以外を操作したり、2つ以上のキーを同時に押したりすると、リモコンディスプレイに「ERROR」と表示されます。このような場合は、手順に沿ってはじめから操作しなおしてください。

リモコンに表示される機器の名前を変更する

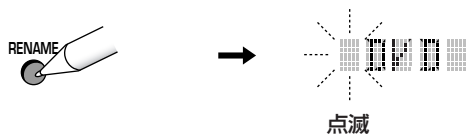
入力選択キーを押してリモコンのディスプレイに表示される機器名は、入力機器を接続した端子名に対応しています。端子名と異なった機器を本機に接続したときや、お使いのシステムに合ったわかりやすい名前をつけたいときなどに、リモコンに表示される機器名を変更することができます。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPまたはSOURCEを選ぶ

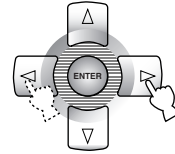
2 名前を変更したい機器の入力選択キーまたは☆キーを押す

選択した入力ソースの名前がリモコンディスプレイに表示されます。

3 RENAMEボタンを押す

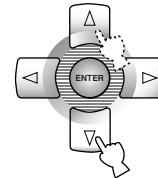
ボールペンなど、先の細いもので押します。左端の文字スペースが点滅します。

点滅

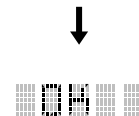
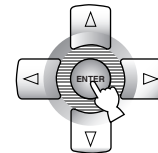
ご注意

手順3以降の操作は、それぞれ操作後30秒以内に行ってください。そのままにしておくと設定が自動的に中止されます。このような場合は、手順3から操作しなおしてください。

4 ◁／▷キーを押して、文字を入力したい位置にカーソルを移動する

5 △／▽キーを押して、入力する文字を選ぶ

入力できる文字は以下のとおりです。

- アルファベット大文字：A～Z
- 数字：1～9、0
- 記号：+、–、：、/
- スペース（空白）

必要に応じて手順4と5を繰り返します。文字は最大5文字まで入力できます。

6 入力が完了したら、ENTERキーを押す

名前が正しく変更されると、リモコンディスプレイに「OK」と表示されます。

ご注意

名前が正しく変更されなかった場合は、リモコンディスプレイに「NG」と表示されます。このような場合は、手順4から設定をやりなおしてください。

7 RENAMEボタンを押して、名前の変更を終了する

リモコンが通常の状態に戻ります。

ご注意

手順で指定されたキー以外を操作したり、2つ以上のキーを同時に押したりすると、リモコンディスプレイに「ERROR」と表示されます。このような場合は、手順に沿ってはじめから操作しなおしてください。

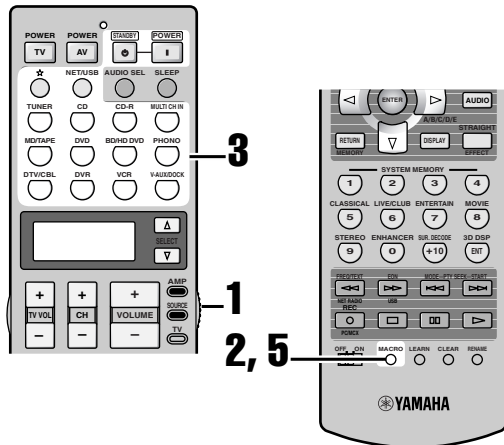
マクロ機能を使う

マクロ機能とは、ソースを再生するときに行う一連のキー操作を1つのキーでできるようにする機能です。
たとえばCDを再生する場合、通常、(1)システムの電源を入れる→(2)入力ソースをCDに切り替える→(3)再生を開始する…などの操作が必要です。マクロ機能を使うと、マクロキーのCDキーを押すだけでこのような一連の操作を済ますことができます。
下のリストに表示されたマクロキーにはマクロ機能があらかじめ登録されていますが、オリジナルのマクロ操作を設定することもできます。

<table>
<tr><th>マクロキー</th><th>1番目</th><th>2番目</th><th>3番目</th></tr>
<tr><td>STANDBY</td><td>本機がスタンバイになる</td><td>—</td><td>—</td></tr>
<tr><td>POWER</td><td>本機の電源が入る(接続した機器の電源が入る)*1</td><td>テレビの電源が入る*2</td><td>—</td></tr>
<tr><td>☆</td><td rowspan="2">本機の電源が入る</td><td>—</td><td rowspan="2">—</td></tr>
<tr><td>NET/USB</td><td>入力ソースの切り替え(NET/USB)</td></tr>
<tr><td>TUNER</td><td rowspan="13">本機の電源が入る(接続した機器の電源が入る)*1</td><td>入力ソースの切り替え(TUNER)*3</td><td>—</td></tr>
<tr><td>CD</td><td>入力ソースの切り替え(CD)</td><td>CDの再生が始まる*4</td></tr>
<tr><td>CD-R</td><td>入力ソースの切り替え(CD-R)</td><td>CD-Rの再生が始まる*4</td></tr>
<tr><td>MULTI CH IN</td><td>入力ソースの切り替え(MULTI CH IN)</td><td>—</td></tr>
<tr><td>MD/TAPE</td><td>入力ソースの切り替え(MD/TAPE)</td><td>MD/TAPEの再生が始まる*4</td></tr>
<tr><td>DVD</td><td>入力ソースの切り替え(DVD)</td><td>DVDの再生が始まる*4</td></tr>
<tr><td>BD/HD DVD</td><td>入力ソースの切り替え(BD/HD DVD)</td><td>BD/HD DVDの再生が始まる*4</td></tr>
<tr><td>PHONO</td><td>入力ソースの切り替え(PHONO)</td><td>—</td></tr>
<tr><td>DTV/CBL</td><td>入力ソースの切り替え(DTV/CBL)</td><td>—</td></tr>
<tr><td>DVR</td><td>入力ソースの切り替え(DVR)</td><td>DVRの再生が始まる*4</td></tr>
<tr><td>VCR</td><td>入力ソースの切り替え(VCR)</td><td>VCRの再生が始まる*4</td></tr>
<tr><td>V-AUX/DOCK</td><td>入力ソースの切り替え(V-AUX/DOCK)</td><td>—</td></tr>
</table>

*1 本機に接続した機器の電源を本機に連動させて入れるには、接続機器の電源プラグを本機のAC OUTLETSに接続します(機器によっては電源の入／切が本機に連動しないものもあります。接続する機器の取扱説明書を参照してください)。
*2 DTV/CBLキーまたはPHONOキーにテレビのリモコンコードを設定した場合、入力ソースを切り替えなくてもテレビの電源を入れられます。DTV/CBLキーとPHONOキーの両方にテレビのリモコンコードを設定した場合は、DTV/CBLキーに設定したリモコンコードが優先されます。
*3 入力ソースがTUNERに切り替わると、本機のチューナーはスタンバイになる前に受信していた局を受信します。
*4 初期設定では、ヤマハ製のMDレコーダー、CDプレーヤー、CDレコーダー、DVDプレーヤー、ブルーレイディスクプレーヤー、HD DVDプレーヤー、DVDレコーダーにのみ対応しています。これら以外の機器をマクロ操作する場合は、登録したい機器のライブラリーの▷キーにラーニング機能を割り当てる(163ページ)か、リモコンコードを設定する(154ページ)必要があります。

マクロを設定する

オリジナルのマクロを設定します。

ご注意
- 新しいマクロを設定しても、工場出荷時に登録されているマクロは消去されません。新しく設定したマクロの内容を消去すると、工場出荷時に登録されているマクロを使うことができます。
- 工場出荷時に登録されているマクロに新しい信号を追加することはできません。マクロを設定すると、すべて新しい内容に変わります。
- マクロ設定は、本リモコンにラーニングや登録済み(またはヤマハプリセット)のキー信号をマクロキーに設定(転送)させて行います。必要に応じて、あらかじめ他の機器のキーをラーニングしておいてください。
- 音量の操作など、連続的に出力される信号は、本リモコンでは短時間のコードとして記憶されます。したがって、そのようなキーをマクロ設定に入れることはおすすめしません。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPまたはSOURCEを選ぶ

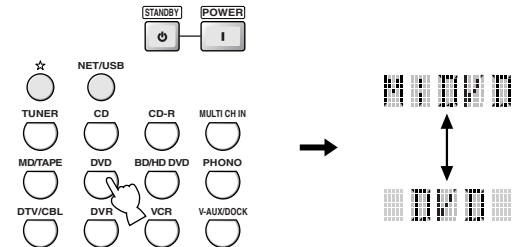
2 MACROボタンを押す

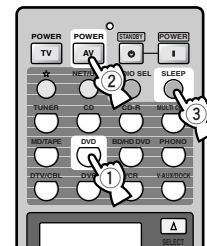
ボールペンなど先の細いもので押します。リモコンディスプレイに「MCR ?」と表示されます。

ご注意
手順2以降操作は、それぞれ操作後30秒以内に行ってください。そのままにしておくとマクロ設定が自動的に中止されます。この場合は、手順2から操作しなおしてください。

3 設定したいマクロキーを押す

リモコンディスプレイに、マクロ設定するキーと、選んだ入力ソースの名前が交互に表示されます。

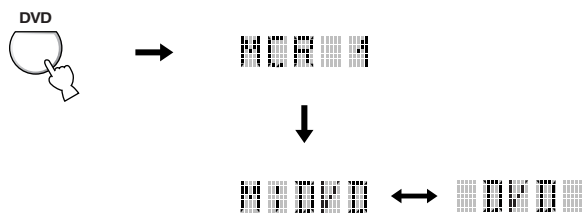
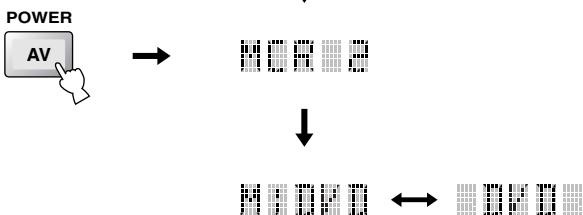
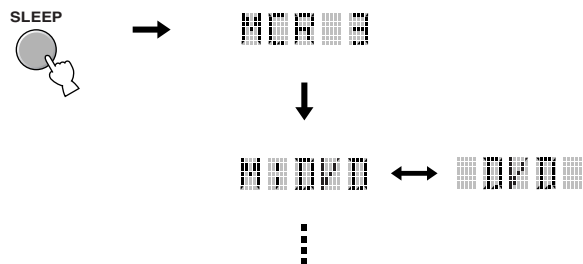
例： DVDキーにマクロを設定する
「M：DVD」と「DVD」が交互に表示されます。

ご注意
マクロキー以外のキーを押すと、「AGAIN」と表示されます。

4 マクロの内容を設定する

① 入力をDVDに切り替える
② DVDプレーヤーの電源を入れる
③ スリープタイマーを設定する

上記①〜③の操作を、DVDキーを押すだけでできるようにマクロ設定します。

ご注意
お使いの機器によっては、マクロの設定通りに作動しない場合があります。

リモコンディスプレイの表示は以下のように変わります。

① DVDキーを押す

② POWERキーを押す

③ SLEEPキーを押す

最大10種類のキー信号を設定することができます。10個目のキー信号を設定すると「FULL」と表示され、マクロ設定が自動的に中止されます。

ご注意

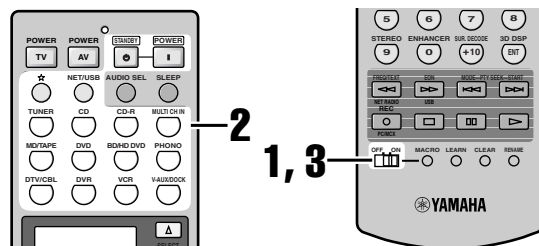
機器を変更したいときは、入力選択キーやSELECT∆／∇キーで機器を選択しなおします。入力選択キーで機器を選択すると、本機の入力切り替えが一連のマクロ設定に組み込まれ、機器操作キーも入力機器に応じて切り替わります。SELECT∆／∇キーで機器を選択すると、入力ソースは変わらずに、機器操作キーは選択した機器に合わせて切り替わります。

5 MACROボタンを押して、マクロ設定を終了する

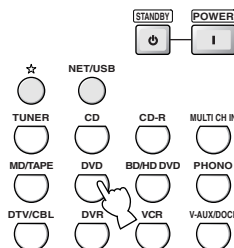
リモコンが通常の状態に戻ります。

ご注意

手順で指定されたキー／スイッチ以外を操作したり、2つ以上のキーを同時に押したりすると、リモコンディスプレイに「ERROR」と表示されます。このような場合は、手順に沿ってはじめから操作しなおしてください。

マクロ機能を使う

1 MACRO ON／OFFスイッチを「ON」に合わせる

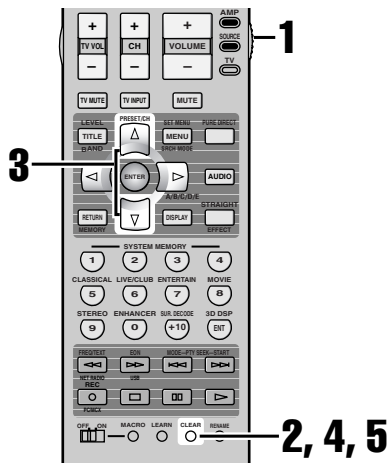
2 希望のマクロキーを押す

すべてのマクロ信号の出力が終わるまで、リモコンの赤外線送受信部を本体および操作する機器のリモコン受光窓の方向に向け続けてください。

3 MACRO ON／OFFスイッチを「OFF」に合わせる

ご注意

マクロ操作中は、すべてのマクロ信号の出力が終わるまで（トランスミッションインジケーターが消灯するまで）、他のキーの操作を受け付けません。

リモコンを初期化する

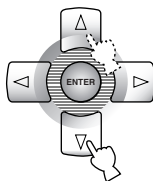
登録したライブラリーやマクロ操作、リモコンコードやラーニングした操作を取り消して、工場出荷時の設定に戻せます。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPまたはSOURCEを選ぶ

ご注意

手順2以降の操作は、それぞれ操作後30秒以内に行ってください。そのままにしておくと消去が自動的に中止されます。この場合は、手順2から操作しなおしてください。

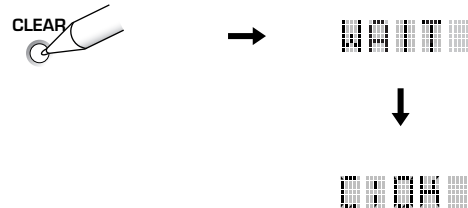
2 CLEARボタンを押す

ボールペンなど、先の細いもので押します。リモコンディスプレイに「CLEAR」と表示されます。

3 ∆／∇キーを押して、消去モードを選ぶ

消去モードは以下の6種類です。

L：(機器名)：	表示されている入力機器の操作キーにラーニングされた機能をすべて消去します。入力選択キー、またはSELECT∆／∇キーで消去する入力機器を選択してください。
L：AMP：	本機の操作キーにラーニングされた機能をすべて消去します。
L：ALL：	入力機器に関わらず、ラーニングされた機能をすべて消去します。
M：ALL：	マクロの設定をすべて工場出荷時の設定に戻します。
RNAME：	変更した入力ソースの名前をすべて工場出荷時の設定に戻します。
FCTRY：	リモコンコードを含む、すべてのリモコンの設定を工場出荷時の設定に戻します。

4 CLEARボタンを3秒以上押し続ける

リモコンディスプレイに「WAIT」と表示されます。手順3で選択した機能や設定が正しく消去されると、「C；OK」と表示されます。

ご注意

- 正しく消去されなかった場合は、リモコンディスプレイに「C；NG」と表示されます。このような場合は、手順3から消去をやりなおしてください。
- 「L：ALL」と「FCTRY」は、完了までに約30秒かかります。

5 CLEARボタンを押して、消去を終了する

リモコンが通常の状態に戻ります。

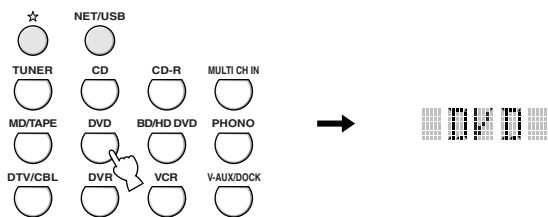
ご注意

手順で指定されたキー以外を操作したり、2つ以上のキーを同時に押したりすると、リモコンディスプレイに「ERROR」と表示されます。このような場合は、手順に沿ってはじめから操作しなおしてください。

ラーニングされた機能を消去する

ラーニングされた機能のうち、特定のキーに割り当てた機能だけを消去できます。

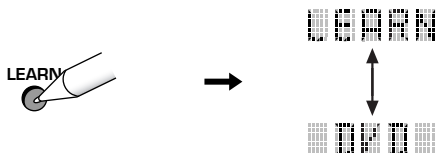
1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPまたはSOURCEを選ぶ

2 取り消したい機器の入力選択キーを押す

ご注意

手順3以降の操作は、それぞれ操作後30秒以内に行ってください。そのままにしておくと消去が自動的に中止されます。この場合は、手順3から操作しなおしてください。

3 LEARNボタンを押す

ボールペンなど、先の細いもので押します。リモコンディスプレイに「LEARN」と選択した入力ソース名が交互に表示されます。

ご注意

LEARNボタンを3秒以上押すと、リモコンコード設定モードに切り替わります。

4 CLEARボタンを押しながら、機能を消去したいキーを3秒以上押す

消去が正しく行われると、リモコンディスプレイに「C；OK」と表示されます。

引き続き消去したいキーがある場合は、「C；OK」の表示が消えてから、手順4の操作を繰り返してください。

ご注意

- 「C；NG」と表示されたときは、消去が正しく行われていません。もう一度CLEARボタンを押しながら、消去したいキーを押してください。
- 一度ラーニングされた機能を消去してしまうと、消去されたキーの機能は工場出荷時の状態（リモコンコードを設定している場合は設定した機器の機能）に戻ります。

ヒント

別の機器にラーニングした機能を消去する場合は、SELECT∆/∇キーを押して機器を変更し、手順4を繰り返します。

5 CLEARボタンを離して、クリアモードを終了する

リモコンがラーニングモードに戻ります。

6 LEARNボタンを押して、消去を終了する

リモコンが通常の状態に戻ります。

ご注意

手順で指定されたキー以外を操作したり、2つ以上のキーを同時に押したりすると、リモコンディスプレイに「ERROR」と表示されます。このような場合は、手順に沿ってはじめから操作しなおしてください。

マクロに設定された機能を消去する

マクロに設定された機能のうち、特定のキーに割り当てた機能だけを消去することができます。

1 操作機器選択スイッチをスライドさせて、AMPまたはSOURCEを選ぶ

ご注意

手順2以降の操作は、それぞれ操作後30秒以内に行ってください。そのままにしておくと消去が自動的に中止されます。この場合は、手順2から操作しなおしてください。

2 MACROボタンを押す

ボールペンなど、先の細いもので押します。リモコンディスプレイに「MCR ?」と表示されます。

3 CLEARボタンを押しながら、機能を消去したいキーを3秒以上押す

消去が正しく行われると、リモコンディスプレイに「C;OK」と表示されます。

引き続き消去したいキーがある場合は、「C;OK」の表示が消えてから、手順3の操作を繰り返してください。

ご注意

- 「C;NG」と表示されたときは、消去が正しく行われていません。もう一度CLEARボタンを押しながら、消去したいキーを押してください。
- 一度マクロに設定された機能を消去してしまうと、消去されたキーの機能は工場出荷時の状態に戻ります。

4 CLEARボタンを離す

リモコンがマクロ設定モードに戻ります。

5 MACROボタンを押して、消去を終了する

リモコンが通常の状態に戻ります。

ご注意

手順で指定されたキー以外を操作したり、2つ以上のキーを同時に押したりすると、リモコンディスプレイに「ERROR」と表示されます。このような場合は、手順に沿ってはじめから操作しなおしてください。

故障かな？と思ったら

ご使用中に本機が正常に作動しなくなった場合は下記の点をご確認ください。対処しても正常に動作しない場合や、下記以外で異常が認められた場合は、本機をスタンバイ状態にし、電源プラグをコンセントから抜いてからお買上げ店または最寄りのヤマハ電気音響製品サービス拠点にお問い合わせください。

全般

症状	原因	対策	参照ページ
電源を入れてもすぐに切れてしまう	電源コードがしっかり接続されていない。	電源コードをACコンセントおよび本体AC IN端子にしっかりと差し込んでください。	50
	(再度電源を入れたときに、「CHECK SP WIRES!」と表示されるとき)スピーカーケーブルがショートした状態で電源を入れたため、保護回路により電源が切れた。	すべてのスピーカーケーブルが正しく接続されているか確認してください。	32
	内部マイコンが外部電気ショック(落雷または過度の静電気)、または電源電圧の低下によりフリーズしている。	ACコンセントから電源プラグを抜き、約30秒後にもう一度差し込んでください。	—
STANDBY/ONキー(POWERキー)を押しても電源が入らない	電源コードがしっかり接続されていない。	電源コードをACコンセントおよび本体AC IN端子にしっかりと差し込んでください。	50
	内部マイコンが外部電気ショック(落雷または過度の静電気)、または電源電圧の低下によりフリーズしている。	ACコンセントから電源プラグを抜き、約30秒後にもう一度差し込んでください。	—
使用中に突然電源が切れる	機器内部の温度が上昇したため、保護回路が働き電源が切れた。	温度が下がるのを待って(約1時間程度)、電源を入れなおしてください。	—
	スリープタイマーが作動した。	電源を入れてソースを再生しなおしてください。	—
ショート表示が出ない	セットメニュー「映像の設定」の「ショートメッセージ」を「表示しない」に設定している。	「表示する」に設定してください。	125
	セットメニュー「映像の設定」の「ビデオコンバージョン」を「しない」に設定している。	「する」に設定してください。	123
	HDMI映像信号を再生している。		—
	ハイビジョン映像が入力されている。		—
音声や画像が出ない	再生機器がしっかり接続されていない。	接続を確認してください。	38
	スピーカーがしっかり接続されていない。	接続を確認してください。	32
	再生したいソースが正しく選ばれていない。	INPUTセレクターや入力選択キーで、再生したいソースを正しく選んでください。	67
	音量が小さい。	音量を大きくしてください。	69
	消音されている。	リモコンのMUTEキーまたはVOLUME＋／－キーを押して消音を解除し、音量を調節してください。	69
	CD-ROMなど本機で再生できない信号が入力されている。	本機で再生可能な信号のソースを再生してください。	—
	HDMI接続時に音声を再生する機器が本機に設定されていない。	セットメニュー「対応音声」を「DSP-AX3800」に設定してください。	134
	接続しているHDMI機器が著作権保護(HDCP)に対応していない。	著作権保護に対応した機器を接続してください。	—

症状	原因	対策	参照ページ
音声や画像が出ない	テレビをHDMI接続していて、テレビが対応していない映像信号を本機が出力している。	アドバンストセットアップメニュー「INITIALIZE」で「VIDEO」を選び、映像に関する設定を初期化してください。	149
		アドバンストセットアップメニュー「MONITOR CHECK」を「YES」に設定してください。	150
	ピュアダイレクトモードで再生している。	PURE DIRECTキーを押して、ピュアダイレクトモードをオフにしてください。	96
	非標準信号が入力されている		—
音声が突然出なくなる	消音された。	リモコンのMUTEキーまたはVOLUME＋／−キーを押して消音を解除し、音量を調節してください。	69
片側のチャンネルの音声がほとんど出ない	再生機器やスピーカーがしっかり接続されていない。	接続を確認してください。また、スピーカーケーブルが断線していないか確認してください。	32
	セットメニュー「スピーカーの音量」が正しく設定されていない	同じ音量で出るように調節してください。	129
エフェクトスピーカー（センター、サラウンドL／R、サラウンドバックL／R）から音声が出ない	音場効果をかけずに再生している。	STRAIGHT／EFFECTキーを押して、音場効果をかけて再生してください。	97
	再生するソースと音場プログラムの組み合わせによっては、音が出ないチャンネルがあります。	ほかの音場プログラムをお試しください。	88
センタースピーカーから音声が出ない	センタースピーカーの音量が絞られている。	センタースピーカーの音量を調節してください。	129
	セットメニュー「スピーカーの設定」の「センター」を、「無」に設定している。	お使いのセンタースピーカーに合わせて、「大」または「小」に設定してください。	126
	7ch Stereo以外のHiFi DSP音場プログラムを選んでいる。	ほかの音場プログラムをお試しください。	88
サラウンドL／Rスピーカーから音声が出ない	サラウンドL／Rスピーカーの音量が小さい。	サラウンドL／Rスピーカーの音量を調節してください。	129
	セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンド」を、「無」に設定している。	お使いのサラウンドL／Rスピーカーに合わせて、「大」または「小」に設定してください。	126
	ノーマルサラウンドプログラムで、モノラルソースを再生している。	ほかの音場プログラムをお試しください。	88
	SURROUND BACK端子に接続している。	SURROUND端子に接続してください。	32
サラウンドバックスピーカーから音声が出ない	サラウンドバックスピーカーの音量が小さい。	サラウンドバックスピーカーの音量を調節してください。	129
	セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンド」を、「無」に設定している。	「サラウンド」を「無」に設定すると、自動的に「サラウンドバック」も「無」に設定されます。「サラウンド」の設定を、「大」または「小」に設定してください。	126
	セットメニュー「スピーカーの設定」の「サラウンドバック」を、「無」に設定している。	お使いのサラウンドバックスピーカーに合わせて、「大2台」、「大1台」、「小2台」、「小1台」のいずれかに設定してください。	126
	CINEMA DSP 3Dモードがオンになっている。	オフに設定してください。	93
サブウーファーから音声が出ない	セットメニュー「スピーカーの設定」の「低音出力先」を「フロントに出力」に設定したまま、ドルビーデジタル、DTSおよびAAC信号を再生している。	「サブウーファーのみ」または「フロントとサブウーファー」に設定してください。	127
	セットメニュー「スピーカーの設定」の「低音出力先」を「サブウーファーのみ」または「フロントに出力」に設定したまま、2チャンネル信号を再生している。	「フロントとサブウーファー」に設定してください。	127
	再生しているソースにLFEや低音信号が含まれていない。		—

症状	原因	対策	参照ページ
サブウーファーから音声が出ない	2チャンネルソースをピュアダイレクトモードで再生している場合は、サブウーファーから音が出ません。	PURE DIRECTキーを押して、ピュアダイレクトモードをオフにしてください。	96
音声入力信号をお好みの音声フォーマットで再生できない(フロントパネルディスプレイに入力ソースやデコーダーインジケーターが点灯しない)	接続したプレーヤーなどのデジタル音声出力が正しく設定されていない。	お使いのプレーヤーの取扱説明書を参照し、正しく設定してください。	—
	入力モードを「ANALOG」に設定している。	「AUTO」に設定してください。	108
AACソフトの再生ができない(本機のディスプレイにAACインジケーターが点灯しない)	入力モードを「DTS」または「ANALOG」に設定している。	「AUTO」に設定してください。	108
	接続したチューナーなどの設定が「AAC自動」または「AAC出力」に設定されていない	お使いのプレーヤーの取扱説明書を参照し、正しく設定してください。	—
アナログ音声の再生ができない	入力モードを「AUTO」または「DTS」に設定している。	「ANALOG」に設定してください。	108
低音の再生不良	セットメニュー「スピーカーの設定」の「低音クロスオーバー」が正しく設定されていない。	お使いのスピーカーシステムに合わせて正しく設定してください。	127
	セットメニュー「スピーカーの設定」の設定が、実際のスピーカーシステムの構成と一致していない。	お使いのスピーカーシステムに合わせて各スピーカーを正しく設定してください。	126
ハム音が出る	ステレオピンケーブルがしっかり接続されていない。	ステレオピンケーブルをしっかり差し込んでください。	38
	レコードプレーヤーのアースがSIGNAL GND端子に接続されていない。	アースコードを本機のSIGNAL GND端子に接続してください。	41
レコードの再生音が小さい	MCカートリッジが装着されたレコードプレーヤーで再生している。	MCヘッドアンプまたはMCトランスを介してレコードプレーヤーを本機に接続してください。	41
音量を上げることができない、または音が歪んでいる	本機のOUT(REC)端子に接続された機器の電源が入っていない。	AVアンプという製品ジャンルの特性上、OUT(REC)端子に接続している機器の電源が切れている場合に、再生音が歪んだり、音量が下がったりすることがあります。本機に接続しているすべての機器の電源を入れてください。	—
サラウンドと音場効果を付加した音を録音できない	サラウンドと音場効果を付加した音は録音できません。		—
録音できない	デジタル録音時にアナログで信号を入力している。	デジタル接続をして、デジタルで信号を入力してください。	—
	本機と再生機器および録音機器がデジタル接続されていない。	デジタル接続をしてください。	38
	アナログ録音時にデジタルで信号を入力している。	アナログ接続をして、アナログで信号を入力してください。	—
	本機と再生機器および録音機器がアナログ接続されていない。	アナログ接続をしてください。	38
	録音機器によっては、ドルビーデジタル、DTSおよびAACなどのデジタルデータを録音できません。		—
音場パラメーターやセットメニューなどを変更できない	セットメニュー「設定の保護」を「保護」に設定している。	「可変」に設定してください。	133
セットメニューなどの設定内容が消えている	1週間以上電源コンセントを抜いていたり、外部タイマーが切れたままになっていた。	1週間以上電源コンセントを抜いたままにしておくと、内蔵メモリの内容が消えてしまうことがあります。もう1度設定しなおしてください。	—
本機が正常に作動しない	内部マイコンが外部電気ショック(落雷または過度の静電気)、または電源電圧の低下によりフリーズしている。	ACコンセントから電源プラグを抜き、約30秒後にもう1度差し込んでください。	—
本機に接続している機器にヘッドホンを接続して聴いていると、音が歪む	本機の電源がスタンバイになっている。	本機の電源を入れてください。	51
デジタル機器や高周波機器からの雑音を受けている	本機とデジタル機器や高周波機器の設置場所が近すぎる。	本機をそれらの機器から離して設置してください。	—

FM／AM放送の受信

症状		原因	対策	参照ページ
プリセット選局ができない		プリセット(メモリー)が消えている。	1週間以上電源コンセントを抜いたままにしておくと、内蔵メモリの内容が消えてしまうことがあります。もう一度プリセットしてください。	71、72
FM	オート選局ができない	放送局から離れた地域で受信しているか、アンテナ入力が弱い。	マニュアル選局をしてください。	70
			屋外アンテナを感度の良い多素子のものに変えてみてください。	—
	ステレオ放送になると雑音が多く聞きづらい	放送局から離れた地域で受信しているか、アンテナ入力が弱い。	アンテナの接続を確認してください。	49
			屋外アンテナを感度の良い多素子のものに変えてください。	—
			マニュアル選局をしてください。	70
	FM専用アンテナを使用しているが、音が歪むなど受信感度が悪い	マルチパス(多重反射)などの妨害電波を受けている。	アンテナの高さや方向、設置場所を変えてください。	—
AM	オート選局ができない	電波が弱い、あるいはアンテナの接続が不完全。	AMループアンテナの方向を変えてください。	49
			マニュアル選局をしてください。	70
	「ジー」、「ザー」、「ガリガリ」などの雑音が入る	空電や雷による雑音、または蛍光灯、モーター、サーモスタット付きの電気器具の雑音を拾っている。	AM屋外アンテナを張り、アースを完全に取ると減少しますが、完全に除去するのは困難です。	—
	「ブンブン」、「ヒューヒュー」などの雑音が入る	本機の近くでテレビを使用している。	本機とテレビを離して設置してください。	—

リモコン

症状	原因	対策	参照ページ
リモコンで操作できない	リモコン操作範囲から外れている。	本体のリモコン受光部から６ｍ以内、角度30°以内の範囲で操作してください。	11
	受光部に日光や照明(インバーター蛍光灯やストロボライトなど)が当たっている。	照明、または本体の向きを変えてください。	—
	乾電池が消耗している。	乾電池をすべて交換してください。	11
	操作機器選択スイッチの設定が正しくない。	操作機器選択スイッチを正しく設定してください。	153
	リモコンのアンプ操作用ライブラリーコードと本体のリモコンIDが一致していない。	ライブラリーコードまたはリモコンIDの設定を変更してください。	147
	リモコンでの本体操作が無効になっている	本体操作を有効にしてください。	147
外部機器がリモコンで操作できない	操作する機器が選ばれていない。	入力選択キーを押して、操作したい機器を選ぶ。	69
	リモコンコードが正しく設定されていない。	リモコンコードを設定しなおすか、同じメーカーのコードの中から別のコードを設定してください。	154
	リモコンコードを正しく設定しても、メーカーまたは機器によっては操作できない場合があります。	リモコンコードで操作できない機能は、機器のリモコンから本機のリモコンに記憶(ラーニング)させてください。	163
リモコンが新しい機能を記憶(ラーニング)しない	本機のリモコンまたは他の機器のリモコンの電池が消耗している。	電池を交換してください。	11
	２台のリモコン間の距離が離れすぎているか、近すぎる。	2台のリモコンを5～10cmの距離に配置してください。	163
	他の機器のリモコンの信号コードと本機のリモコンとの互換性がない。	記憶(ラーニング)はできません。	—
	メモリ容量がいっぱいになっている。	ラーニングされている機能のうち、不要なものを消去してください。	170

ネットワークオーディオ／USBデバイスの再生

症状	原因	対策	参照ページ
パソコンおよびインターネットラジオが正しく動作しない	IPアドレスが正しく設定されていない。	ルーターのDHCP機能をオンにするか、ネットワーク環境にあわせて、セットメニュー「ネットワーク/USB設定」を手動で設定してください。	130
	ネットワークケーブルが接続されていない。	ネットワーク接続を確認してください。	48
パソコンの音楽ファイルが再生できない	パソコンにWindows Media Player 11またはWindows Media Connect 2.0がインストールされていない。	パソコンにWindows Media Player 11またはWindows Media Connect 2.0をインストールしてください。	—
	音楽ファイルがMP3、WAV（PCMのみ）、WMA以外のフォーマットで記録されている。	MP3、WAV（PCMのみ）、WMAで記録された音楽ファイルを再生してください。	—
		MP3、WAV（PCMのみ）、WMAで記録された音楽ファイルであっても、本機で再生できないものがあります。	—
	音楽ファイルに著作権保護がかけられている。	著作権保護がかけられている音楽ファイルは再生できません。	—
Windows Media Player 11またはWindows Media Connect 2.0に接続できない	OSにWindows XPを使用しているパソコンで、ドメインにログオンしている。	ドメインではなく、ローカルマシンにログオンしてください。	—
インターネットラジオが再生できない	ネットワーク機器のファイアウォールがはたらいている。	ネットワーク機器のファイアウォールの設定を確認してください。	—
	インターネットの接続が切断されている。	ネットワーク機器の設定が正しいことを確認し、必要に応じてネットワーク接続業者にお問い合わせください。	—
USBデバイスの音楽ファイルやディレクトリがブラウズできない	音楽ファイルやディレクトリがFAT領域以外の場所に保存されている。	音楽ファイルやディレクトリをFAT領域に保存してください。	—
	ディレクトリに500をこえるディレクトリ／ファイルが保存されている。	1つのディレクトリにつき、500以内のディレクトリ／ファイルを保存してください。	—
USBデバイスを認識できない	USBデバイスがUSBマスストレージクラスに対応していない。	USBマスストレージクラスに対応したUSBデバイスをお使いください。	83
		USBマスストレージクラスに対応したUSBデバイスであっても、本機で再生できないものがあります。	83
	マスストレージクラス/MTP対応のUSBデバイスがMTP側に設定されている。	マスストレージクラス側に設定してください。	—
		USBデバイスを接続してから、本機の電源をオンにしてください。	51
USBデバイスを接続しているが、「Disconnected」と表示される	本機がUSBデバイスを不正と認識している。	1度本機の電源をオフにしたのち、再びオンにしてください。	51
数字キーを押してもショートカットが呼び出されない	USBデバイスが正しく接続されていない。	正しく接続してください。	46
	パソコンの電源が入っていない。	電源を入れてください。	—
	ラジオ局に一時的にアクセスできない。	しばらく待ってから再度お試しください。	—
	ラジオ局がサービスを停止した。		—
	ショートカットを登録したときとは違うUSBデバイスを接続している。	ショートカットを登録したUSBデバイスを接続してください。	46
ショートカットキーを押すと、登録していない曲やラジオ局が呼び出される	ショートカットを登録したときとは違うUSBデバイスを接続している。	ショートカットを登録したUSBデバイスを接続してください。	46
	ショートカットを登録した音楽ファイルを別の場所に移動した。	ショートカットを再設定してください。	84
	ショートカットを登録した音楽ファイルが保存されているディレクトリに、別の音楽ファイルを追加した、またはディレクトリ内の別の音楽ファイルを削除した。	ショートカットを再設定してください。	84

音声フォーマット編

ドルビーサラウンド

ドルビーサラウンドは、ダイナミックで臨場感豊かな音響効果のために、フロントL／Rチャンネル(ステレオ音声)、会話などを再生するセンターチャンネル(モノラル音声)、効果音のサラウンドチャンネル(モノラル音声)の、アナログ4チャンネル方式を採用しています。サラウンドチャンネルの再生域は狭くなっています。
現在、ほとんどのソフトに普及している方式です。本機内蔵のドルビープロロジックデコーダーは、各チャンネルの音量を自動的に調整して安定させ、音の移動感や方向性を強調して、より正確なデジタル処理を行います。

ドルビーデジタル

ドルビーデジタルは、完全に独立したマルチチャンネル音声を再生できるデジタルサラウンドシステムです。全帯域の音声成分を持つフロント3チャンネル(フロントL／R、センター)と、サラウンド2チャンネル(サラウンドL／R)、低音域専用のLFEチャンネルの合計5.1チャンネルで構成されます。
サラウンド2チャンネルがステレオで収録されているため、ドルビーサラウンドと比較して、音の移動感や周囲の環境音がより明確になります。全帯域の5チャンネルの幅広いダイナミックレンジと正確な音の定位によって、これまでにない迫力と現実感を再現できます。

ドルビーデジタルサラウンドEX

本機は5.1チャンネルのソースに、サラウンドバックチャンネルを加えて6.1チャンネル再生を可能にする、ドルビーデジタルサラウンドEXソフト対応のドルビーデジタルEXデコーダーを内蔵しています(サラウンドバックチャンネルはサラウンドLとサラウンドRチャンネルから作られます)。
ドルビーデジタルサラウンドEXで録音された映画のサウンドトラックを再生する際に、最良の音声を再生できます。この追加チャンネルにより、特に飛び越えたり飛び回ったりといった動きのあるシーンで、よりダイナミックでリアルな動作音をお楽しみいただけます。

ドルビーデジタルプラス

ブルーレイディスクやHD DVDなどの次世代光ディスクやデジタルテレビ放送向けに開発された高品質音声フォーマットです。ブルーレイディスクではオプション採用、HD DVDでは標準採用され、最大7.1チャンネルのディスクリート音声信号を最大転送レート6Mbpsで収録可能です。従来のドルビーデジタルと互換性があるため、ドルビーデジタル対応の機器でも再生できます。

ドルビープロロジックⅡ

2チャンネルで記録された音声を信号処理し、優れた分離感を保ったまま5.1チャンネル音声に変換します。映画用のMovieモードと、音楽などのステレオソース用のMusicモード、ゲーム用のGameモードが用意されています。従来の2チャンネル音声(モノラル音声を除く)だけで記録された古い映画も、5.1チャンネルの迫力ある音声で楽しめます。

ドルビープロロジックⅡx

2チャンネルで記録された音声はもちろん、マルチチャンネルで記録された音声をも信号処理し、自然な7.1チャンネル音声をフルレンジで再生します。映画用のMovieモード、音楽用のMusicモード、ゲーム用のGameモードが用意されています。

ドルビーTrueHD

ブルーレイディスクやHD DVDなどの次世代光ディスク向けに開発されたロスレス(可逆型)高品質音声フォーマットです。ブルーレイディスクではオプション採用、HD DVDでは標準採用され、96kHz／24bit時には最大8チャンネル、192kHz／24bit時には最大6チャンネルのディスクリート音声信号を最大転送レート18Mbpsで収録可能です。従来のドルビーデジタルと互換性があるため、ドルビーデジタル対応の機器でも再生できます。ダイアログノーマライゼーションやダイナミックレンジコントロールをサポートしています。スタジオマスター品質の音声が楽しめます。

AAC(アドバンスト・オーディオ・コーディング)

MPEG-2オーディオ規格の1つで、BS／地上波デジタル放送で採用されています。モノラル音声から最大で7チャンネル音声までを効率良く圧縮して記録、伝送できます。
本機はAACデコーダーを搭載しているので、BS／地上波デジタルチューナーで受信した番組の5.1チャンネル音声をデコード(復調)して再生できます。

DSD(Direct Stream Digital)

スーパーオーディオCDに採用されている音声フォーマットです。シンプルな回路構成とすることで、再生周波数範囲100kHz、ダイナミックレンジ120dB以上を実現しています。

DTSデジタルサラウンド

DTSデジタルサラウンドは、アナログの映画音声に取って代わる5.1チャンネル方式のデジタルサウンドトラックとして開発された技術です。この技術を家庭用に調整したものが、本機で採用しているDTSシステムです。
極めて劣化が少なく、クリアな音質の6チャンネル(フロントL／R、センター、サラウンドL／Rチャンネル、サブウーファー用LFE0.1チャンネルを加えた5.1チャンネル)で構成されています。

DTS-ES

本機は5.1チャンネルのソースに、サラウンドバックチャンネルを加えて6.1チャンネル再生を可能にする、DTS-ESデコーダーを内蔵しています。5.1チャンネルの信号と独立して記録されたサラウンドバックチャンネル信号を再生する、ディスクリート方式と、サラウンドL／Rチャンネル信号からサラウンドバックチャンネル信号を生成して再生する、マトリクス方式の2つの方式に対応しています。
DTS-ESで録音された音楽や、映画のサウンドトラックを再生する際に、最良の音声を再生できます。

DTS Express

ブルーレイディスクやHD DVDなどの次世代光ディスク向けに開発された音声フォーマットで、ネットワーク・ストリーミング用に最適化された低ビットレート信号です。ブルーレイディスクではセカンダリーオーディオ、HD DVDではサブオーディオで使用され、本編の再生を楽しみながらインターネットを経由して映画制作者のコメントなどを楽しめます。

DTS-HD ハイレゾリューションオーディオ

ブルーレイディスクやHD DVDなどの次世代光ディスク向けに開発された高品質音声フォーマットです。ブルーレイディスクおよびHD DVDでオプション採用され、96kHz／24bitで最大7.1チャンネルのディスクリート音声信号を、ブルーレイディスクでは最大転送レート6Mbps、HD DVDでは最大3Mbpsで収録可能です。従来のDTSデジタルサラウンドと互換性があるため、DTSデジタルサラウンド対応の機器でも再生できます。

DTS-HD マスターオーディオ

ブルーレイディスクやHD DVDなどの次世代光ディスク向けに開発されたロスレス（可逆型）高品質音声フォーマットです。ブルーレイディスクおよびHD DVDで標準採用され、96kHz／24bitで最大7.1チャンネルのディスクリート音声信号を、ブルーレイディスクでは転送レート最大24.5Mbps、HD DVDでは最大18Mbpsで収録可能です。従来のDTSデジタルサラウンドと互換性があるため、DTSデジタルサラウンド対応の機器でも再生できます。スタジオマスター品質の音声が楽しめます。

DTS Neo：6

2チャンネル信号のソースを、サラウンドバックを含めた7チャンネルで再生できます。再生するソースに合わせて、音楽用のMusicモードと、映画用のCinemaモードが用意されています。すべてのチャンネルを全帯域で再生できるだけでなく、ディスクリート方式で記録されたソースのようなチャンネルの分離感を体感できます。

DTS 96/24

DTS 96/24フォーマットで収録されたソフトに記録されている、DTS信号の拡張用データを使用して「サンプリング周波数96kHz／量子化ビット数24ビット」の高音質での5.1チャンネル再生が可能です。

PCM(リニアPCM)

MP3形式やATRAC形式のようにアナログ音声信号を圧縮せずに、そのまま符号化して録音・伝送する方式です。
「PCM」は、パルス・コード・モジュレーションの略で、デジタル信号をパルスの符号にして変調記録するという意味です。
音楽CDや、DVDオーディオの録音方法などで採用されています。PCM方式では、非常に短く区切った単位時間あたりの信号の大きさを数値に置き換える(サンプリング)手法を用いています。

SRS CS Ⅱ（SRS Circle Surround Ⅱ）

SRS CS Ⅱ（SRS Circle Surround Ⅱ）は、6.1チャンネルマトリクス処理を行う高性能デコーディングシステムです。オリジナルのSRS Circle Surroundシステムの次の世代を担うこの技術により、セリフをより明瞭に再生したり、フロントチャンネルとサブウーファーから映画館さながらの低音を再生したりすることができます。再生するソースに合わせて、音楽用のMusicモードと、映画用のCinemaモードが用意されています。

MP3

MPEGで利用される音声圧縮方式の一つです。人間の感じ取りにくい部分のデータを間引く非可逆圧縮方式を採用しています。音楽CD並の音質を保ったままデータ量を約1／10に圧縮できると言われています。

WAV

Windows標準の音声ファイルの形式です。デジタル音声信号の保存形式などを規定しています。通常は非圧縮（PCM）のデータが使用されますが、任意の圧縮方式も利用できます。

WMA（Windows Media Audio)

Microsoft社が開発した音声圧縮方式です。人間の感じ取りにくい部分のデータを間引く非可逆圧縮方式を採用しています。音楽CD並の音質を保ったまま約1／20に圧縮できると言われています。

音場プログラム編

サイレントシネマ

ヘッドホンでマルチスピーカーによる音場プログラムを擬似的に再現するための、ヤマハ独自のシステムです。音場プログラムごとにヘッドホン用の設定値が用意されているため、自然で立体感あふれる音場プログラムをヘッドホンでもお楽しみいただけます。

シネマDSP(デジタル・サウンド・フィールド・プロセッサー)

ドルビーサラウンドやDTSのシステムは、本来映画館用に設計されているため、ご家庭では部屋の広さや壁の材質、スピーカーの数などの条件の違いによって、同じソフトであっても視聴感に差が出てしまいます。
ヤマハシネマDSPは、豊富な実測データに基づく独自の音場技術を応用することで、さまざまなデジタル音声フォーマットと組み合わせて音のスケールや奥行き、音量感を補い、ご家庭でも映画館のような視聴体験を実現します。

バーチャルシネマDSP

サラウンドL／Rスピーカーを設置していなくとも、仮想的にサラウンドL／Rスピーカーの音場を再現することで、音場プログラムを楽しめます。
センタースピーカーを設置できない場合でも、フロントL／Rスピーカーだけで、バーチャルシネマDSPをお楽しみいただけます。

音声・映像編

インターレース
一画面の走査線を奇数段、偶数段にわけ、交互に表示する走査方式です。通常のテレビなどに使われています。

コンポジットビデオ信号
輝度を表すY信号と、色を表すC信号をひとつにまとめて伝送する方式です。テレビのNTSC信号などが採用しています。

コンポーネントビデオ信号
映像信号を、輝度を表すY信号と、色を表すPB／CB信号およびPR／CR信号の3系統に分けて伝送する方式です。それぞれの信号を独立して伝送するため、色をより忠実に再現できます。また、コンポーネントビデオ信号は、色を表わす信号から輝度を表わす信号を引いているので、色差信号とも呼ばれます。

ディープカラー
HDMI 1.3がサポートしている映像技術です。RGBまたはYcbCr信号の処理を、従来の8ビットに対して10／12／16ビットで処理することで、より豊かな色調表現が可能です。表現できる色の数が従来の数百万色から数億色に増えたことにより、グラデーションの表現力や暗部のディテール再現力が向上し、カラーバンディング（しま模様状になる色の変化）の少ない画像を楽しめます。

プログレッシブ
一画面すべての走査線を、一度に表示する走査方式です。走査線をわけて交互に表示するインターレース方式に比べ、ちらつきの少ない、滑らかな映像を映し出すことができます。

サンプリング周波数
アナログ音声信号をデジタル信号化する際に、1秒間にサンプリング(信号の大きさを数値に置き換えること)を行う回数をサンプリング周波数といいます。
再生できる周波数帯は「サンプリング周波数」で決まり、サンプリング周波数が高いほど再生可能な音域が広がることになります。

量子化ビット数
アナログ音声信号をデジタル信号化する際に、音の大きさを数値化するときのきめ細かさを量子化ビット数といいます。
音量の差を表わすダイナミックレンジは「量子化ビット数」で決まり、量子化ビット数が大きいほど音の大きさの変化をきめ細かく再現できることになります。

D端子
コンポーネントビデオ信号とコントロール信号(走査線、アスペクト比、インターレース／プログレッシブの情報)を、一本の専用ケーブルで接続できます。その性能に応じてランクがD1からD5に分けられています。本機にはD5ビデオ端子が装備されており、D1からD5の規格に対応しています。

HDMI
High-Definition Multimedia Interfaceの略です。パソコンディスプレイなどで使われているDVI（Digital Video Interface）端子を拡張した、次世代テレビ向けのデジタルインターフェースの規格です。HDMI対応機器とHDMI対応のプラズマディスプレイなどを接続することで、圧縮されていないデジタル映像と音声（ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AAC、またはリニアPCM）を1本のケーブルで伝送できます。接続にはHDMIケーブルをお使いください。

LFE(ロー・フリケンシー・エフェクト)0.1チャンネル
音声成分の帯域が20～120Hzの、低音域専用チャンネルです。ドルビーデジタルとDTS、AACで、全帯域用の5チャンネルに加えて、効果的な場面で低音を増強するために使用されます。音声の帯域が低域のみに制限されているので、0.1と表現されます。

Sビデオ信号
映像信号を、輝度を表すY信号と、色を表すC信号に分けて伝送する方式です。S ビデオ端子で接続すると、コンポジットビデオ信号より美しい映像で録画／再生をお楽しみいただけます。

その他

リップシンク（Lip sync）
HDMI 1.3がサポートしている、音声と映像の出力タイミングのずれを自動的に補正する技術です。映像信号の大容量化にともなう信号処理の複雑化により、音声出力に対して映像出力が遅れてしまうことがあります。この映像出力の遅延を自動的に検知し、遅延時間に合わせて音声を遅らせて出力することにより、音声と映像の出力タイミングを同期させています。

ブルーレイディスク
ハイビジョン時代に対応した次世代光ディスクです。
CDやDVDで使用されている赤色レーザーよりも波長が短い青紫色レーザーを使用することで、CDやDVDと同じ12 cmサイズのディスクでありながら、ＤＶＤの約５倍の大容量（５０ＧＢ、２層）を実現しています。また、５４Ｍｂｐｓ～72Mbpsの高転送レートにより、デジタルハイビジョンの高画質映像を余すところなく再生できます。

HD DVD
ハイビジョン時代に対応した次世代光ディスクで、ＤＶＤフォーラムによって策定されています。
CDやDVDで使用されている赤色レーザーよりも波長が短い青紫色レーザーを使用することで、CDやDVDと同じ12 cmサイズのディスクでありながら、ＤＶＤの約３倍の大容量（30GB、2層）を実現しています。また、最大データ転送レートは36.55Mbpsです。現行のDVDと同じディスク構造を採用しているため、既存のDVD規格との高い互換性を持ち、また、低コストを実現しているのが特長です。

GPL／LGPL適用ソフトウェアについて

本製品には、GNU General Public License (GPL) または GNU Lesser General Public License(LGPL) に基づきライセンスされるソフトウェアが含まれています。 お客様は、当該ソフトウェアのソースコードを入手し、GPL または LGPL に従い、複製、頒布および改変することができます。
当該ソースコードは以下サイトからダウンロードできます。

http://www.yamaha.co.jp/product/av/support/index.html

ソースコードをCD-ROMなど物理媒体での提供をご希望される場合には、実費にて承ります。以下の住所までご連絡ください。

〒430-8650 浜松市中区中沢町10-1 ヤマハ株式会社 AV機器事業部

ソースコードのご提供は原則として本製品のご購入の日から3年間とします。

GNU GENERAL PUBLIC LICENSE

Version 2, June 1991

Preamble

The licenses for most software are designed to take away your freedom to share and change it. By contrast, the GNU General Public License is intended to guarantee your freedom to share and change free software--to make sure the software is free for all its users. This General Public License applies to most of the Free Software Foundation's software and to any other program whose authors commit to using it. (Some other Free Software Foundation software is covered by the GNU Library General Public License instead.) You can apply it to your programs, too.

When we speak of free software, we are referring to freedom, not price. Our General Public Licenses are designed to make sure that you have the freedom to distribute copies of free software (and charge for this service if you wish), that you receive source code or can get it if you want it, that you can change the software or use pieces of it in new free programs; and that you know you can do these things.

To protect your rights, we need to make restrictions that forbid anyone to deny you these rights or to ask you to surrender the rights. These restrictions translate to certain responsibilities for you if you distribute copies of the software, or if you modify it.

For example, if you distribute copies of such a program, whether gratis or for a fee, you must give the recipients all the rights that you have. You must make sure that they, too, receive or can get the source code. And you must show them these terms so they know their rights.

We protect your rights with two steps: (1) copyright the software, and (2) offer you this license which gives you legal permission to copy, distribute and/or modify the software.

Also, for each author's protection and ours, we want to make certain that everyone understands that there is no warranty for this free software. If the software is modified by someone else and passed on, we want its recipients to know that what they have is not the original, so that any problems introduced by others will not reflect on the original authors' reputations.

Finally, any free program is threatened constantly by software patents. We wish to avoid the danger that redistributors of a free program will individually obtain patent licenses, in effect making the program proprietary. To prevent this, we have made it clear that any patent must be licensed for everyone's free use or not licensed at all.

The precise terms and conditions for copying, distribution and modification follow.

TERMS AND CONDITIONS FOR COPYING, DISTRIBUTION AND MODIFICATION

0. This License applies to any program or other work which contains a notice placed by the copyright holder saying it may be distributed under the terms of this General Public License. The "Program", below, refers to any such program or work, and a "work based on the Program" means either the Program or any derivative work under copyright law: that is to say, a work containing the Program or a portion of it, either verbatim or with modifications and/or translated into another language. (Hereinafter, translation is included without limitation in the term "modification".) Each licensee is addressed as "you".

   Activities other than copying, distribution and modification are not covered by this License; they are outside its scope. The act of running the Program is not restricted, and the output from the Program is covered only if its contents
   constitute a work based on the Program (independent of having been made by running the Program). Whether that is true depends on what the Program does.

1. You may copy and distribute verbatim copies of the Program's source code as you receive it, in any medium, provided that you conspicuously and appropriately publish on each copy an appropriate copyright notice and disclaimer of warranty; keep intact all the notices that refer to this License and to the absence of any warranty; and give any other recipients of the Program a copy of this License along with the Program.

   You may charge a fee for the physical act of transferring a copy, and you may at your option offer warranty protection in exchange for a fee.

2. You may modify your copy or copies of the Program or any portion of it, thus forming a work based on the Program, and copy and distribute such modifications or work under the terms of Section 1 above, provided that you also meet all of these conditions:

   a) You must cause the modified files to carry prominent notices stating that you changed the files and the date of any change.
   b) You must cause any work that you distribute or publish, that in whole or in part contains or is derived from the Program or any part thereof, to be licensed as a whole at no charge to all third parties under the terms of this License.
   c) If the modified program normally reads commands interactively when run, you must cause it, when started running for such interactive use in the most ordinary way, to print or display an announcement including an appropriate copyright notice and a notice that there is no warranty (or else, saying that you provide a warranty) and that users may redistribute the program under these conditions, and telling the user how to view a copy of this License. (Exception: if the Program itself is interactive but does not normally print such an announcement, your work based on the Program is not required to print an announcement.)

   These requirements apply to the modified work as a whole. If identifiable sections of that work are not derived from the Program, and can be reasonably considered independent and separate works in themselves, then this License, and its terms, do not apply to those sections when you distribute them as separate works. But when you distribute the same sections as part of a whole which is a work based on the Program, the distribution of the whole must be on the terms of this License, whose permissions for other licensees extend to the entire whole, and thus to each and every part regardless of who wrote it.

Thus, it is not the intent of this section to claim rights or contest your rights to work written entirely by you; rather, the intent is to exercise the right to control the distribution of derivative or collective works based on the Program.

In addition, mere aggregation of another work not based on the Program with the Program (or with a work based on the Program) on a volume of a storage or distribution medium does not bring the other work under the scope of this License.

3. You may copy and distribute the Program (or a work based on it, under Section 2) in object code or executable form under the terms of Sections 1 and 2 above provided that you also do one of the following:

   a) Accompany it with the complete corresponding machinereadable source code, which must be distributed under the terms of Sections 1 and 2 above on a medium customarily used for software interchange; or,
   b) Accompany it with a written offer, valid for at least three years, to give any third party, for a charge no more than your cost of physically performing source distribution, a complete machine-readable copy of the corresponding source code, to be distributed under the terms of Sections 1 and 2 above on a medium customarily used for software interchange; or,
   c) Accompany it with the information you received as to the offer to distribute corresponding source code. (This alternative is allowed only for noncommercial distribution and only if you received the program in object code or executable form with such an offer, in accord with Subsection b above.)

   The source code for a work means the preferred form of the work for making modifications to it. For an executable work, complete source code means all the source code for all modules it contains, plus any associated interface definition files, plus the scripts used to control compilation and installation of the executable. However, as a special exception, the source code distributed need not include anything that is normally distributed (in either source or binary form) with the major components (compiler, kernel, and so on) of the operating system on which the executable runs, unless that component itself accompanies the executable.

   If distribution of executable or object code is made by offering access to copy from a designated place, then offering equivalent access to copy the source code from the same place counts as distribution of the source code, even though third parties are not compelled to copy the source along with the object code.

4. You may not copy, modify, sublicense, or distribute the Program except as expressly provided under this License. Any attempt otherwise to copy, modify, sublicense or distribute the Program is void, and will automatically terminate your rights under this License. However, parties who have received copies, or rights, from you under this License will not have their licenses terminated so long as such parties remain in full compliance.

5. You are not required to accept this License, since you have not signed it. However, nothing else grants you permission to modify or distribute the Program or its derivative works. These actions are prohibited by law if you do not accept this License. Therefore, by modifying or distributing the Program (or any work based on the Program), you indicate your acceptance of this License to do so, and all its terms and conditions for copying, distributing or modifying the Program or works based on it.

6. Each time you redistribute the Program (or any work based on the Program), the recipient automatically receives a license from the original licensor to copy, distribute or modify the Program subject to these terms and conditions. You may not impose any further restrictions on the recipients' exercise of the rights granted herein. You are not responsible for enforcing compliance by third parties to this License.

7. If, as a consequence of a court judgment or allegation of patent infringement or for any other reason (not limited to patent issues), conditions are imposed on you (whether by court order, agreement or otherwise) that contradict the conditions of this License, they do not excuse you from the conditions of this License. If you cannot distribute so as to satisfy simultaneously your obligations under this License and any other pertinent obligations, then as a consequence you may not distribute the Program at all. For example, if a patent license would not permit royalty-free redistribution of the Program by all those who receive copies directly or indirectly through you, then the only way you could satisfy both it and this License would be to refrain entirely from distribution of the Program.

   If any portion of this section is held invalid or unenforceable under any particular circumstance, the balance of the section is intended to apply and the section as a whole is intended to apply in other circumstances.

   It is not the purpose of this section to induce you to infringe any patents or other property right claims or to contest validity of any such claims; this section has the sole purpose of protecting the integrity of the free software distribution system, which is implemented by public license practices. Many people have made generous contributions to the wide range of software distributed through that system in reliance on consistent application of that system; it is up to the author/donor to decide if he or she is willing to distribute software through any other system and a licensee cannot impose that choice.

   This section is intended to make thoroughly clear what is believed to be a consequence of the rest of this License.

8. If the distribution and/or use of the Program is restricted in certain countries either by patents or by copyrighted interfaces, the original copyright holder who places the Program under this License may add an explicit geographical distribution limitation excluding those countries, so that distribution is permitted only in or among countries not thus excluded. In such case, this License incorporates the limitation as if written in the body of this License.

9. The Free Software Foundation may publish revised and/or new versions of the General Public License from time to time. Such new versions will be similar in spirit to the present version, but may differ in detail to address new problems or concerns.

   Each version is given a distinguishing version number. If the Program specifies a version number of this License which applies to it and "any later version", you have the option of following the terms and conditions either of that version or of any later version published by the Free Software Foundation. If the Program does not specify a version number of this License, you may choose any version ever published by the Free Software Foundation.

10. If you wish to incorporate parts of the Program into other free programs whose distribution conditions are different, write to the author to ask for permission. For software which is copyrighted by the Free Software Foundation, write to the Free Software Foundation; we sometimes make exceptions for this. Our decision will be guided by the two goals of preserving the free status of all derivatives of our free software and of promoting the sharing and reuse of software generally.

NO WARRANTY

11. BECAUSE THE PROGRAM IS LICENSED FREE OF CHARGE, THERE IS NO WARRANTY FOR THE PROGRAM, TO THE EXTENT PERMITTED BY APPLICABLE LAW. EXCEPT WHEN OTHERWISE STATED IN WRITING THE COPYRIGHT HOLDERS AND/OR OTHER PARTIES PROVIDE THE PROGRAM "AS IS" WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EITHER EXPRESSED OR IMPLIED, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. THE ENTIRE RISK AS TO THE QUALITY AND PERFORMANCE OF THE PROGRAM IS WITH YOU. SHOULD THE PROGRAM PROVE DEFECTIVE, YOU ASSUME THE COST OF ALL NECESSARY SERVICING, REPAIR OR CORRECTION.

12. IN NO EVENT UNLESS REQUIRED BY APPLICABLE LAW OR AGREED TO IN WRITING WILL ANY COPYRIGHT HOLDER, OR ANY OTHER PARTY WHO MAY MODIFY AND/OR REDISTRIBUTE THE PROGRAM AS PERMITTED ABOVE, BE LIABLE TO YOU FOR DAMAGES, INCLUDING ANY GENERAL, SPECIAL, INCIDENTAL OR CONSEQUENTIAL DAMAGES ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THE PROGRAM (INCLUDING BUT NOT LIMITED TO LOSS OF DATA OR DATA BEING RENDERED INACCURATE OR LOSSES SUSTAINED BY YOU OR THIRD PARTIES OR A FAILURE OF THE PROGRAM TO OPERATE WITH ANY OTHER PROGRAMS), EVEN IF SUCH HOLDER OR OTHER PARTY HAS BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

END OF TERMS AND CONDITIONS

How to Apply These Terms to Your New Programs

If you develop a new program, and you want it to be of the greatest possible use to the public, the best way to achieve this is to make it free software which everyone can redistribute and change under these terms.

To do so, attach the following notices to the program. It is safest to attach them to the start of each source file to most effectively convey the exclusion of warranty; and each file should have at least the "copyright" line and a pointer to where the full notice is found.

<one line to give the program's name and an idea of what it does.>
Copyright (C) <year> <name of author>

This program is free software; you can redistribute it and/or modify it under the terms of the GNU General Public License as published by the Free Software Foundation; either version 2 of the License, or (at your option) any later version.

This program is distributed in the hope that it will be useful, but WITHOUT ANY WARRANTY; without even the implied warranty of MERCHANTABILITY or FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. See the GNU General Public License for more details.

You should have received a copy of the GNU General Public License along with this program; if not, write to the Free Software Foundation, Inc., 59 TemplePlace, Suite 330, Boston, MA 02111-1307 USA.

Also add information on how to contact you by electronic and paper mail.

If the program is interactive, make it output a short notice like this when it starts in an interactive mode:

Gnomovision version 69, Copyright (C) year name of author Gnomovision comes with ABSOLUTELY NO WARRANTY; for details type `show w'. This is free software, and you are welcome to redistribute it under certain conditions; type `show c' for details.

The hypothetical commands `show w' and `show c' should show the appropriate parts of the General Public License. Of course, the commands you use may be called something other than `show w' and `show c'; they could even be mouse-clicks or menu items--whatever suits your program.

You should also get your employer (if you work as a programmer) or your school, if any, to sign a "copyright disclaimer" for the program, if necessary. Here is a sample; alter the names:

Yoyodyne, Inc., hereby disclaims all copyright interest in the program `Gnomovision' (which makes passes at compilers) written by James Hacker.

<signature of Ty Coon>, 1 April 1989
Ty Coon, President of Vice

This General Public License does not permit incorporating your program into proprietary programs. If your program is a subroutine library, you may consider it more useful to permit linking proprietary applications with the library. If this is what you want to do, use the GNU Library General Public License instead of this License.

GNU LESSER GENERAL PUBLIC LICENSE

Version 2.1, February 1999

Copyright (C) 1991, 1999 Free Software Foundation, Inc. 59 TemplePlace, Suite 330, Boston, MA 02111-1307 USA

Everyone is permitted to copy and distribute verbatim copies of this license document, but changing it is not allowed.

[This is the first released version of the Lesser GPL. It also counts as the successor of the GNU Library Public License, version 2, hence the version number 2.1.]

Preamble

The licenses for most software are designed to take away your freedom to share and change it. By contrast, the GNU General Public Licenses are intended to guarantee your freedom to share and change free software--to make sure the software is free for all its users.

This license, the Lesser General Public License, applies to some specially designated software packages--typically libraries--of the Free Software Foundation and other authors who decide to use it. You can use it too, but we suggest you first think carefully about whether this license or the ordinary General Public License is the better strategy to use in any particular case, based on the explanations below.

When we speak of free software, we are referring to freedom of use, not price. Our General Public Licenses are designed to make sure that you have the freedom to distribute copies of free software (and charge for this service if you wish); that you receive source code or can get it if you want it; that you can change the software and use pieces of it in new free programs; and that you are informed that you can do these things.

To protect your rights, we need to make restrictions that forbid distributors to deny you these rights or to ask you to surrender these rights. These restrictions translate to certain responsibilities for you if you distribute copies of the library or if you modify it.

For example, if you distribute copies of the library, whether gratis or for a fee, you must give the recipients all the rights that we gave you. You must make sure that they, too, receive or can get the source code. If you link other code with the library, you must provide complete object files to the recipients, so that they can relink them with the library after making changes to the library and recompiling it. And you must show them these terms so they know their rights.

We protect your rights with a two-step method: (1) we copyright the library, and (2) we offer you this license, which gives you legal permission to copy, distribute and/or modify the library.

To protect each distributor, we want to make it very clear that there is no warranty for the free library. Also, if the library is modified by someone else and passed on, the recipients should know that what they have is not the original version, so that the original author's reputation will not be affected by problems that might be introduced by others.

Finally, software patents pose a constant threat to the existence of any free program. We wish to make sure that a company cannot effectively restrict the users of a free program by obtaining a restrictive license from a patent holder. Therefore, we insist thatany patent license obtained for a version of the library must be consistent with the full freedom of use specified in this license.

Most GNU software, including some libraries, is covered by the ordinary GNU General Public License. This license, the GNU Lesser General Public License, applies to certain designated libraries, and is quite different from the ordinary General Public License. We use this license for certain libraries in order to permit linking those libraries into non-free programs.

When a program is linked with a library, whether statically or using a shared library, the combination of the two is legally speaking a combined work, a derivative of the original library. The ordinary General Public License therefore permits such linking only if the entire combination fits its criteria of freedom. The Lesser General Public License permits more lax criteria for linking other code with the library.

We call this license the "Lesser" General Public License because it does Less to protect the user's freedom than the ordinary General Public License. It also provides other free software developers Less of an advantage over competing non-free programs. These disadvantages are the reason we use the ordinary General Public License for many libraries. However, the Lesser license provides advantages in certain special circumstances.

For example, on rare occasions, there may be a special need to encourage the widest possible use of a certain library, so that it becomes a de-facto standard. To achieve this, non-free programs must be allowed to use the library. A more frequent case is that a free library does the same job as widely used non-free libraries. In this case, there is little to gain by limiting the free library to free software only, so we use the Lesser General Public License.

In other cases, permission to use a particular library in non-free programs enables a greater number of people to use a large body of free software. For example, permission to use the GNU C Library in non-free programs enables many more people to use the whole GNU operating system, as well as its variant, the GNU/Linux operating system.

Although the Lesser General Public License is Less protective of the users' freedom, it does ensure that the user of a program that is linked with the Library has the freedom and the wherewithal to run that program using a modified version of the Library.

The precise terms and conditions for copying, distribution and modification follow. Pay close attention to the difference between a "work based on the library" and a "work that uses the library". The former contains code derived from the library, whereas the latter must be combined with the library in order to run.

TERMS AND CONDITIONS FOR COPYING, DISTRIBUTION AND MODIFICATION

0. This License Agreement applies to any software library or other program which contains a notice placed by the copyright holder or other authorized party saying it may be distributed under the terms of this Lesser General Public License (also called "this License"). Each licensee is addressed as "you".

   A "library" means a collection of software functions and/or data prepared so as to be conveniently linked with application programs (which use some of those functions and data) to form executables.

   The "Library", below, refers to any such software library or work which has been distributed under these terms. A "work based on the Library" means either the Library or any derivative work under copyright law: that is to say, a work containing the Library or a portion of it, either verbatim or with modifications and/or translated straightforwardly into another language. (Hereinafter, translation is included without limitation in the term "modification".)

   "Source code" for a work means the preferred form of the work for making modifications to it. For a library, complete source code means all the source code for all modules it contains, plus any associated interface definition files, plus the scripts used to control compilation and installation of the library.

   Activities other than copying, distribution and modification are not covered by this License; they are outside its scope. The act of running a program using the Library is not restricted, and output from such a program is covered only if its contents constitute a work based on the Library (independent of the use of the Library in a tool for writing it). Whether that is true depends on what the Library does and what the program that uses the Library does.

1. You may copy and distribute verbatim copies of the Library's complete source code as you receive it, in any medium, provided that you conspicuously and appropriately publish on each copy an appropriate copyright notice and disclaimer of warranty; keep intact all the notices that refer to this License and to the absence of any warranty; and distribute a copy of this License along with the Library.

   You may charge a fee for the physical act of transferring a copy, and you may at your option offer warranty protection in exchange for a fee.

2. You may modify your copy or copies of the Library or any portion of it, thus forming a work based on the Library, and copy and distribute such modifications or work under the terms of Section 1 above, provided that you also meet all of these conditions:

   a) The modified work must itself be a software library.
   b) You must cause the files modified to carry prominent notices stating that you changed the files and the date of any change.
   c) You must cause the whole of the work to be licensed at no charge to all third parties under the terms of this License.
   d) If a facility in the modified Library refers to a function or a table of data to be supplied by an application program that uses the facility, other than as an argument passed when the facility is invoked, then you must make a good faith effort to ensure that, in the event an application does not supply such function or table, the facility still operates, and performs whatever part of its purpose remains meaningful.

      (For example, a function in a library to compute square roots has a purpose that is entirely well-defined independent of the application. Therefore, Subsection 2d requires that any application-supplied function or table used by this function must be optional: if the application does not supply it, the square root function must still compute square roots.)

   These requirements apply to the modified work as a whole. If identifiable sections of that work are not derived from the Library, and can be reasonably considered independent and separate works in themselves, then this License, and its terms, do not apply to those sections when you distribute them as separate works. But when you distribute the same sections as part of a whole which is a work based on the Library, the distribution of the whole must be on the terms of this License, whose permissions for other licensees extend to the entire whole, and thus to each and every part regardless of who wrote it.

   Thus, it is not the intent of this section to claim rights or contest your rights to work written entirely by you; rather, the intent is to exercise the right to control the distribution of derivative or collective works based on the Library.

   In addition, mere aggregation of another work not based on the Library with the Library (or with a work based on the Library) on a volume of a storage or distribution medium does not bring the other work under the scope of this License.

3. You may opt to apply the terms of the ordinary GNU General Public License instead of this License to a given copy of the Library. To do this, you must alter all the notices that refer to this License, so that they refer to the ordinary GNU General Public License, version 2, instead of to this License. (If a newer version than version 2 of the ordinary GNU General Public License has appeared, then you can specify that version instead if you wish.) Do not make any other change in these notices.

   Once this change is made in a given copy, it is irreversible for that copy, so the ordinary GNU General Public License applies to all subsequent copies and derivative works made from that copy.

   This option is useful when you wish to copy part of the code of the Library into a program that is not a library.

4. You may copy and distribute the Library (or a portion or derivative of it, under Section 2) in object code or executable form under the terms of Sections 1 and 2 above provided that you accompany it with the complete corresponding machinereadable source code, which must be distributed under the terms of Sections 1 and 2 above on a medium customarily used for software interchange.

   If distribution of object code is made by offering access to copy from a designated place, then offering equivalent access to copy the source code from the same place satisfies the requirement to distribute the source code, even though third parties are not compelled to copy the source along with the object code.

5. A program that contains no derivative of any portion of the Library, but is designed to work with the Library by being compiled or linked with it, is called a "work that uses the Library". Such a work, in isolation, is not a derivative work of the Library, and therefore falls outside the scope of this Licence.

   However, linking a "work that uses the Library" with the Library creates an executable that is a derivative of the Library (because it contains portions of the Library), rather than a "work that uses the library". The executable is therefore covered by this License. Section 6 states terms for distribution of such executables.

   When a "work that uses the Library" uses material from a header file that is part of the Library, the object code for the work may be a derivative work of the Library even though the source code is not. Whether this is true is especially significant if the work can be linked without the Library, or if the work is itself a library. The threshold for this to be true is not precisely defined by law.

   If such an object file uses only numerical parameters, data structure layouts and accessors, and small macros and small inline functions (ten lines or less in length), then the use of the object file is unrestricted, regardless of whether it is legally a derivative work. (Executables containing this object code plus portions of the Library will still fall under Section 6.)

   Otherwise, if the work is a derivative of the Library, you may distribute the object code for the work under the terms of Section 6. Any executables containing that work also fall under Section 6, whether or not they are linked directly with the Library itself.

6. As an exception to the Sections above, you may also combine or link a "work that uses the Library" with the Library to produce a work containing portions of the Library, and distribute that work under terms of your choice, provided that the terms permit modification of the work for the customer's own use and reverse engineering for debugging such modifications.

   You must give prominent notice with each copy of the work that the Library is used in it and that the Library and its use are covered by this License. You must supply a copy of this License. If the work during execution displays copyright notices, you must include the copyright notice for the Library among them, as well as a reference directing the user to the copy of this License. Also, you must do one of these things:

   a) Accompany the work with the complete corresponding machine-readable source code for the Library including whatever changes were used in the work (which must be distributed under Sections 1 and 2 above); and, if the work is an executable linked with the Library, with the complete machine-readable "work that uses the Library", as object code and/or source code, so that the user can modify the Library and then relink to produce a modified executable containing the modified Library. (It is understood that the user who changes the contents of definitions files in the Library will not necessarily be able to recompile the application to use the modified definitions.)
   b) Use a suitable shared library mechanism for linking with the Library. A suitable mechanism is one that (1) uses at run time a copy of the library already present on the user's computer system, rather than copying library functions into the executable, and (2) will operate properly with a modified version of the library, if the user installs one, as long as the modified version is interface-ompatible with the version that the work was made with.
   c) Accompany the work with a written offer, valid for at least three years, to give the same user the materials specified in Subsection 6a, above, for a charge no more than the cost of performing this distribution.
   d) If distribution of the work is made by offering access to copy from a designated place, offer equivalent access to copy the above specified materials from the same place.
   e) Verify that the user has already received a copy of these materials or that you have already sent this user a copy.

   For an executable, the required form of the "work that uses the Library" must include any data and utility programs needed for reproducing the executable from it. However, as a special exception, the materials to be distributed need not include anything that is normally distributed (in either source or binary form) with the major components (compiler, kernel, and so on) of the operating system on which the executable runs, unless that component itself accompanies the executable.

   It may happen that this requirement contradicts the license restrictions of other proprietary libraries that do not normally accompany the operating system. Such a contradiction means you cannot use both them and the Library together in an executable that you distribute.

7. You may place library facilities that are a work based on the Library side-by-side in a single library together with other library facilities not covered by this License, and distribute such a combined library, provided that the separate distribution of the work based on the Library and of the other library facilities is otherwise permitted, and provided that you do these two things:

   a) Accompany the combined library with a copy of the same work based on the Library, uncombined with any other library facilities. This must be distributed under the terms of the Sections above.
   b) Give prominent notice with the combined library of the fact that part of it is a work based on the Library, and explaining where to find the accompanying uncombined form of the same work.

8. You may not copy, modify, sublicense, link with, or distribute the Library except as expressly provided under this License. Any attempt otherwise to copy, modify, sublicense, link with, or distribute the Library is void, and will automatically terminate your rights under this License. However, parties who have received copies, or rights, from you under this License will not have their licenses terminated so long as such parties remain in full compliance.

9. You are not required to accept this License, since you have not signed it. However, nothing else grants you permission to modify or distribute the Library or its derivative works. These actions are prohibited by law if you do not accept this License. Therefore, by modifying or distributing the Library (or any work based on the Library), you indicate your acceptance of this License to do so, and all its terms and conditions for copying, distributing or modifying the Library or works based on it.

10. Each time you redistribute the Library (or any work based on the Library), the recipient automatically receives a license from the original licensor to copy, distribute, link with or modify the Library subject to these terms and conditions. You may not impose any further restrictions on the recipients' exercise of the rights granted herein. You are not responsible for enforcing compliance by third parties with this License.

11. If, as a consequence of a court judgment or allegation of patent infringement or for any other reason (not limited to patent issues), conditions are imposed on you (whether by court order, agreement or otherwise) that contradict the conditions of this License, they do not excuse you from the conditions of this License. If you cannot distribute so as to satisfy simultaneously your obligations under this License and any other pertinent obligations, then as a consequence you may not distribute the Library at all. For example, if a patent license would not permit royalty-free redistribution of the Library by all those who receive copies directly or indirectly through you, then the only way you could satisfy both it and this License would be to refrain entirely from distribution of the Library.

    If any portion of this section is held invalid or unenforceable under any particular circumstance, the balance of the section is intended to apply, and the section as a whole is intended to apply in other circumstances.

    It is not the purpose of this section to induce you to infringe any patents or other property right claims or to contest validity of any such claims; this section has the sole purpose of protecting the integrity of the free software distribution system which is implemented by public license practices. Many people have made generous contributions to the wide range of software distributed through that system in reliance on consistent application of that system; it is up to the author/donor to decide if he or she is willing to distribute software through any other system and a licensee cannot impose that choice.

    This section is intended to make thoroughly clear what is believed to be a consequence of the rest of this License.

12. If the distribution and/or use of the Library is restricted in certain countries either by patents or by copyrighted interfaces, the original copyright holder who places the Library under this License may add an explicit geographical distribution limitation excluding those countries, so that distribution is permitted only in or among countries not thus excluded. In such case, this License incorporates the limitation as if written in the body of this License.

13. The Free Software Foundation may publish revised and/or new versions of the Lesser General Public License from time to time. Such new versions will be similar in spirit to the present version, but may differ in detail to address new problems or concerns.

    Each version is given a distinguishing version number. If the Library specifies a version number of this License which applies to it and "any later version", you have the option of following the terms and conditions either of that version or of any later version published by the Free Software Foundation. If the Library does not specify a license version number, you may choose any version ever published by the Free Software Foundation.

14. If you wish to incorporate parts of the Library into other free programs whose distribution conditions are incompatible with these, write to the author to ask for permission. For software which is copyrighted by the Free Software Foundation, write to the Free Software Foundation; we sometimes make exceptions for this. Our decision will be guided by the two goals of preserving the free status of all derivatives of our free software and of promoting the sharing and reuse of software generally.

NO WARRANTY

15. BECAUSE THE LIBRARY IS LICENSED FREE OF CHARGE, THERE IS NO WARRANTY FOR THE LIBRARY, TO THE EXTENT PERMITTED BY APPLICABLE LAW. EXCEPT WHEN OTHERWISE STATED IN WRITING THE COPYRIGHT HOLDERS AND/OR OTHER PARTIES PROVIDE THE LIBRARY "AS IS" WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EITHER EXPRESSED OR IMPLIED, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. THE ENTIRE RISK AS TO THE QUALITY AND PERFORMANCE OF THE LIBRARY IS WITH YOU. SHOULD THE LIBRARY PROVE DEFECTIVE, YOU ASSUME THE COST OF ALL NECESSARY SERVICING, REPAIR OR CORRECTION.

16. IN NO EVENT UNLESS REQUIRED BY APPLICABLE LAW OR AGREED TO IN WRITING WILL ANY COPYRIGHT HOLDER, OR ANY OTHER PARTY WHO MAY MODIFY AND/OR REDISTRIBUTE THE LIBRARY AS PERMITTED ABOVE, BE LIABLE TO YOU FOR DAMAGES, INCLUDING ANY GENERAL, SPECIAL, INCIDENTAL OR CONSEQUENTIAL DAMAGES ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THE LIBRARY (INCLUDING BUT NOT LIMITED TO LOSS OF DATA OR DATA BEING RENDERED INACCURATE OR LOSSES SUSTAINED BY YOU OR THIRD PARTIES OR A FAILURE OF THE LIBRARY TO OPERATE WITH ANY OTHER SOFTWARE), EVEN IF SUCH HOLDER OR OTHER PARTY HAS BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

END OF TERMS AND CONDITIONS

How to Apply These Terms to Your New Libraries

If you develop a new library, and you want it to be of the greatest possible use to the public, we recommend making it free software that everyone can redistribute and change. You can do so by permitting redistribution under these terms (or, alternatively, under the terms of the ordinary General Public License).

To apply these terms, attach the following notices to the library. It is safest to attach them to the start of each source file to most effectively convey the exclusion of warranty; and each file should have at least the "copyright" line and a pointer to where the full notice is found.

<one line to give the library's name and an idea of what it does.>
Copyright (C) <year> <name of author>

This library is free software; you can redistribute it and/or modify it under the terms of the GNU Lesser General Public License as published by the Free Software Foundation; either version 2.1 of the License, or (at your option) any later version.

This library is distributed in the hope that it will be useful, but WITHOUT ANY WARRANTY; without even the implied warranty of MERCHANTABILITY or FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE. See the GNU Lesser General Public License for more details.

You should have received a copy of the GNU Lesser General Public License along with this library; if not, write to the Free Software Foundation, Inc., 59 TemplePlace, Suite 330, Boston, MA 02111-1307 USA.

Also add information on how to contact you by electronic and paper mail.

You should also get your employer (if you work as a programmer) or your school, if any, to sign a "copyright disclaimer" for the library, if necessary. Here is a sample; alter the names:

Yoyodyne, Inc., hereby disclaims all copyright interest in the library `Frob' (a library for tweaking knobs) written by James Random Hacker.

<signature of Ty Coon>, 1 April 1990
Ty Coon, President of Vice

That's all there is to it!

主な仕様

オーディオ部

定格出力(6Ω、20Hz〜20kHz、0.06% THD)
フロントL/R .... 140W+140W
センター 140W
サラウンドL/R .... 140W+140W
サラウンドバックL/R .... 140W+140W

実用最大出力(JEITA、6Ω、1kHz、10% THD)
フロントL/R .... 185W+185W
センター 185W
サラウンドL/R .... 185W+185W
サラウンドバックL/R .... 185W+185W

ダンピングファクター(8Ω、20Hz〜20kHz)
フロントL/R 150以上

入力感度/インピーダンス
PHONO(MM) 3.5mV/47kΩ
CD他 200mV/47kΩ
MULTI CH INPUT 200mV/47kΩ

最大許容入力
PHONO(MM)(1kHz、0.1% THD) 60mV以上
CD他(1kHz、0.5% THD) 2.4V以上

出力電圧/インピーダンス
OUT(REC) 200mV/900Ω
PREOUT 1.0V/1.2kΩ
SUBWOOFER 2.0V/1.2kΩ

ヘッドホン出力/インピーダンス 150mV/100Ω

周波数特性
CD他(PURE DIRECT時)−フロントL/R(10Hz〜100kHz)
.... −3.0dB

全高調波歪率(20Hz〜20kHz)
PHONO(MM)−REC OUT(1V) 0.02%以下
CD他−フロントSP OUT(65W/8Ω) 0.04%以下

S/N比(IHF-Aネットワーク、入力ショート)
PHONO(MM)(2.5mV入力)−SP OUT 80dB以上
CD他(250mV入力)−SP OUT 100dB以上

残留ノイズ(IHF-Aネットワーク)
フロントSP OUT 150μV以下

チャンネルセパレーション(1kHz/10kHz)
PHONO(入力ショート) 60dB以上/55dB以上
CD他(5.1kΩ入力ショート) 60dB以上/45dB以上

トーンコントロール
BASS .... ±6dB/50Hz
TREBLE .... ±6dB/20kHz

A/Dコンバーター
..... デルタシグマ方式192kHz対応24ビットA/Dコンバーター

D/Aコンバーター
.... 192kHz対応24ビットD/Aコンバーター

ビデオ部

ビデオ信号方式(壁紙) .... NTSC

ビデオ信号方式(ビデオコンバージョン) .... NTSC/PAL

コンポジットビデオ信号レベル 1Vp-p/75Ω

Sビデオ信号レベル
Y 1Vp-p/75Ω
C 0.286Vp-p/75Ω

コンポーネントビデオ信号レベル
Y 1Vp-p/75Ω
P_B、P_R 0.7Vp-p/75Ω

ビデオ最大許容入力(VIDEO CONV. OFF) 1.5Vp-p以上

S/N比(VIDEO CONV. OFF) 60dB以上

周波数帯域(MONITOR OUT)(VIDEO CONV. OFF)
COMPONENT VIDEO .... 5Hz〜100MHz、±3dB
D5 VIDEO .... 5Hz〜100MHz、±3dB

FMチューナー部

受信周波数 .... 76.0MHz〜90.0MHz

実用感度(IHF) .... 1.0μV(11.2dBf)

S/N比(IHF)
モノ 76dB
ステレオ 70dB

歪率(1kHz)
モノ 0.2%
ステレオ 0.3%

ステレオセパレーション 42dB

周波数特性 .... 20Hz〜15kHz、+0.5/−2dB

AMチューナー部

受信周波数 .... 531kHz〜1611kHz

実用感度 300μV/m

総合

電源電圧 .... AC100V、50/60Hz

消費電力 400W

待機時消費電力 0.1W以下

ACアウトレット(電源スイッチ連動×2) 合計100W

寸法(幅×高さ×奥行き) .... 435×171×438.5mm

質量 18.4kg

* 仕様、および外観は、改良のため予告なく変更することがあります。

本機は「JIS C 61000-3-2」適合品です。
JIS C 61000-3-2適合品とは、日本工業規格「電磁両立性第3-2部：限度値ー高調波電流発生限度値(1相当たりの入力電流が20A以下の機器)」に基づき、商用電力系統の高調波環境目標レベルに適合して設計・製造した製品です。

音楽を楽しむエチケット
楽しい音楽も時と場所によっては大変気になるものです。隣近所への配慮を十分にしましょう。静かな夜間には小さな音でもよく通り、特に低音は床や壁などを伝わりやすく、思わぬところに迷惑をかけてしまいます。適当な音量を心がけ、窓を閉めたり、ヘッドホンをご使用になるのも一つの方法です。音楽はみんなで楽しむもの、お互いに心を配り快適な生活環境を守りましょう。

索引

ア行

カ行

サ行

タ行

ナ行

ハ行

マ行

ラ行

A、B、C、D、E、F

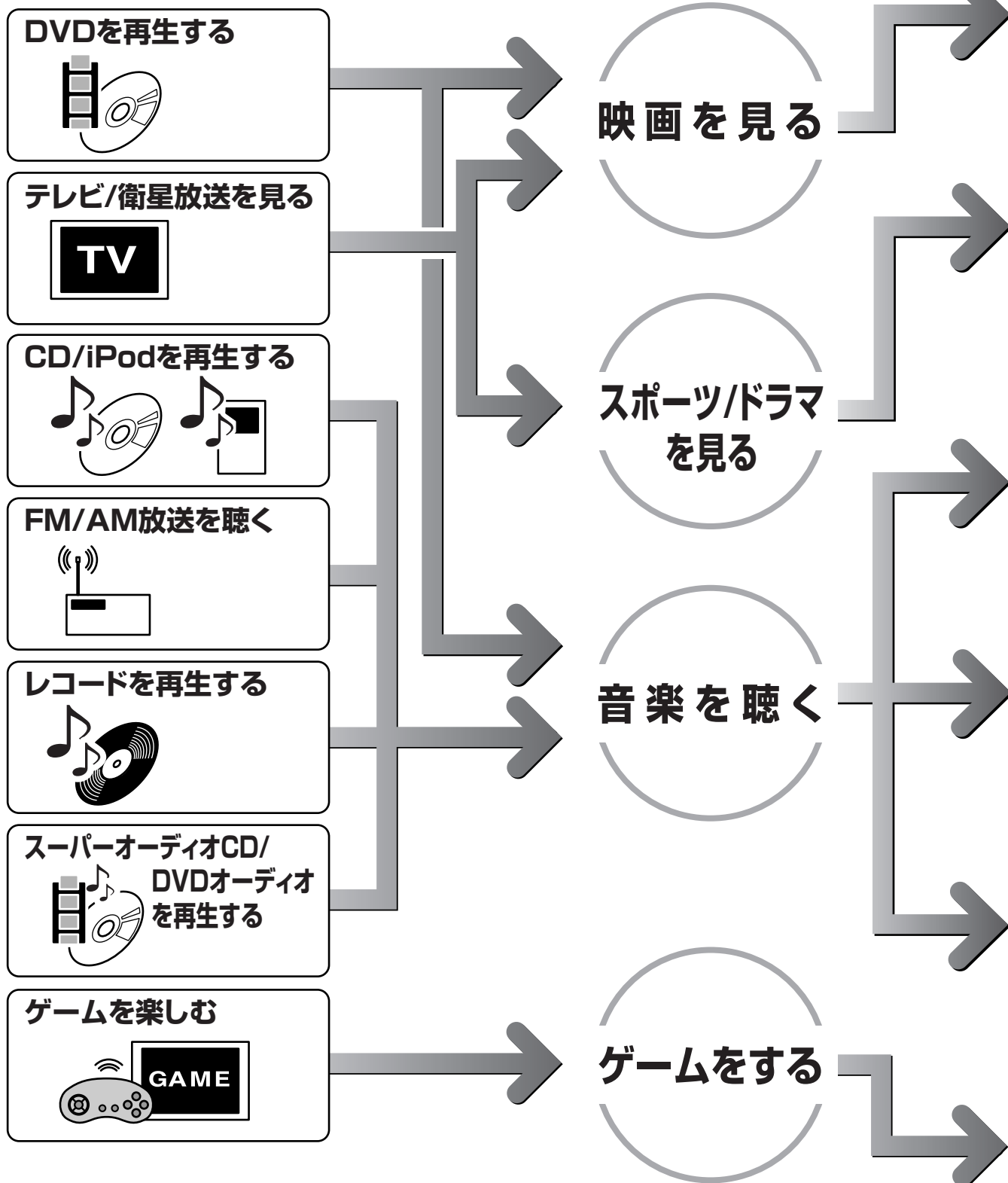
G、H、I、J、K、L

M、N、O、P、Q、R

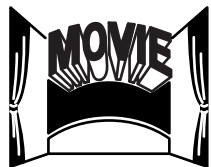
S、T、U、V、W、X、Y、Z

数字、記号

何を見ますか、何を聴きますか？

本機でお楽しみいただける音場プログラムの一覧です。見たい/聴きたいものに合わせて、音場プログラムを選び、再生してみましょう。音場プログラムの詳細については88ページをご覧ください。

効果的にお楽しみいただくには

音場を選びます	特長または最適ソース

映画館の感覚で聴きたい

MOVIE 8 **MOVIE**

- **Standard** —— 後方から包み込まれるようなサラウンドの効果に重点をおいた音場
- **Spectacle** —— 壮大なスケール感を演出するスペクタクルな音場
- **Sci-Fi** —— 最新のSFX映画の緻密なサウンドデザインを鮮やかに描き分ける抜けの良い音場
- **Adventure** —— アクション&アドベンチャー映画に最適な音場
- **Drama** —— ストーリーを重視した映画をじっくりと楽しめる音場
- **Mono Movie** —— 往年のモノラル映画を当時の映画館の雰囲気で楽しめる音場

雰囲気よく聴きたい

ENTERTAIN 7 **ENTERTAINMENT**

- **Sports** —— バラエティやスポーツ中継番組など、適用範囲の広い音場

大ホール感覚で聴きたい

CLASSICAL 5 **CLASSICAL**

- **Hall in Munich** —— 広く奥行きのあるホールの音場
- **Hall in Vienna** —— 響きが豊かな古典的な中ホールの音場
- **Hall in Amsterdam** —— 響きが豊かな古典的な大ホールの音場
- **Church in Freiburg** —— 非常に長い残響時間を持つ教会特有の音場
- **Chamber** —— 宮廷の大広間の音場

ライブハウス/コンサート感覚で聴きたい

LIVE/CLUB 6 **LIVE/CLUB**

- **Village Vanguard** —— ニューヨークの著名なジャズクラブの音場
- **Warehouse Loft** —— コンクリート造りの倉庫の音場
- **Cellar Club** —— 天井が低いアットホームなライブハウスの音場
- **The Roxy Theatre** —— ロサンゼルスのホットなロックライブハウスの音場
- **The Bottom Line** —— ニューヨークで話題のライブハウス「ザ･ボトム･ライン」の音場

ENTERTAIN 7 **ENTERTAINMENT**

- **Music Video** —— ポップス･ロック･ジャズなどのライブステージを再現する音場
- **Recital/Opera** —— ステージの臨場感と、音楽の楽しさを演出する音場

豊かな音声で聴きたい

ENHANCER 0 **MUSIC ENHANCER**

- **Straight Enhancer** —— 2チャンネル／マルチチャンネル圧縮オーディオをダイナミックに再生する音場
- **7ch Enhancer** —— 7チャンネルステレオで音楽をダイナミックに再生する音場

ゲームの世界に浸りたい

ENTERTAIN 7 **ENTERTAINMENT**

- **Action Game** —— 音声の移動がはげしいアクションゲーム向けの音場
- **Roleplaying Game** —— ストーリー重視の演出性の高いゲーム向けの音場

ヤマハホットラインサービスネットワーク

ヤマハホットラインサービスネットワークは、本機を末永く、安心してご愛用いただくためのものです。
サービスのご依頼、お問い合わせは、お買い上げ店、またはお近くのサービス拠点にご連絡ください。

ヤマハAV製品の機能や取り扱いに関するお問い合わせ

■ ヤマハオーディオ&ビジュアルホームページ

お客様から寄せられるよくあるご質問をまとめておりますので、ご参考にしてください。

http://www.yamaha.co.jp/audio/

■ AVお客様ご相談センター

ナビダイヤル（全国共通） 0570-01-1808

全国どこからでも市内通話料金でご利用いただけます。

携帯電話、PHS、IP電話からは下記番号におかけください。
TEL（053）460-3409
FAX（053）460-3459
〒430-8650 静岡県浜松市中区中沢町10-1

受 付 日：月～土曜日（祝日およびセンターの休業日を除く）
受付時間：10:00～12:00、13:00～18:00

ヤマハAV製品の修理、サービスパーツに関するお問い合わせ

■ ヤマハ電気音響製品修理受付センター

ナビダイヤル（全国共通） 0570-01-2808

全国どこからでも市内通話料金でご利用いただけます。

携帯電話、PHS、IP電話からは下記番号におかけください。
TEL（053）460-4830
FAX（053）463-1127

受 付 日：月～土曜日（祝日およびセンターの休業日を除く）
受付時間：月～金曜日 9:00～19:00　土曜日 9:00～17:30

修理お持ち込み窓口
受 付 日：月～金曜日（祝日および弊社の休業日を除く）
受付時間：9:00～17:45

北海道 〒064-8543 札幌市中央区南10条西1丁目1-50
ヤマハセンター内
FAX (011)512-6109

首都圏 〒143-0006 東京都大田区平和島2丁目1-1
京浜トラックターミナル内14号棟A-5F
FAX (03)5762-2125

浜松 〒435-0016 浜松市東区和田町200
ヤマハ(株)和田工場内
FAX (053)462-9244

名古屋 〒454-0058 名古屋市中川区玉川町2丁目1-2
ヤマハ(株)名古屋倉庫3F
FAX (052)652-0043

大阪 〒564-0052 吹田市広芝町10-28
オーク江坂ビルディング2F
FAX (06)6330-5535

九州 〒812-8508 福岡市博多区博多駅前2丁目11-4
FAX (092)472-2137

*名称、住所、電話番号、URLなどは変更になる場合があります。

● 保証期間
お買い上げ日から1年間です。

● 保証期間中の修理
保証書の記載内容に基づいて修理させていただきます。詳しくは保証書をご覧ください。

● 保証期間が過ぎているとき
修理によって製品の機能が維持できる場合にはご要望により有料にて修理いたします。

● 修理料金の仕組み
技術料　故障した製品を正常に修復するための料金です。技術者の人件費、技術教育費、測定機器等設備費、一般管理費等が含まれています。
部品代　修理に使用した部品代金です。その他修理に付帯する部材等を含む場合もあります。
出張料　製品のある場所へ技術者を派遣する場合の費用です。別途、駐車料金をいただく場合があります。

● 補修用性能部品の最低保有期間
補修用性能部品の最低保有期間は、製造打ち切り後8年です。補修用性能部品とは、その製品の機能を維持するために必要な部品です。

● 製品の状態は詳しく
サービスをご依頼されるときは製品の状態をできるだけ詳しくお知らせください。また製品の品番、製造番号などもあわせてお知らせください。
※ 品番、製造番号は製品の背面もしくは底面に表示してあります。

● スピーカーの修理
スピーカーの修理可能範囲はスピーカーユニットなど振動系と電気部品です。尚、修理はスピーカーユニット交換となりますので、エージングの差による音色の違いが出る場合があります。

● 摩耗部品の交換について
本機には使用年月とともに性能が劣化する摩耗部品(下記参照)が使用されています。摩耗部品の劣化の進行度合は使用環境や使用時間等によって大きく異なります。
本機を末永く安定してご愛用いただくためには、定期的に摩耗部品を交換されることをおすすめします。
摩耗部品の交換は必ずお買い上げ店、またはヤマハ電気音響製品修理受付センターへご相談ください。

摩耗部品の一例
ボリュームコントロール、スイッチ･リレー類、接続端子、ランプ、ベルト、ピンチローラー、磁気ヘッド、光ヘッド、モーター類など

※ このページは、安全にご使用いただくためにAV製品全般について記載しております。

永年ご使用の製品の点検を！

愛情点検

こんな症状はありませんか？

- 電源コード･プラグが異常に熱い。
- コゲくさい臭いがする。
- 電源コードに深いキズか変形がある。
- 製品に触れるとピリピリと電気を感じる。
- 電源を入れても正常に作動しない。
- その他の異常･故障がある。

すぐに使用を中止してください。

事故防止のため電源プラグをコンセントから抜き、
必ず販売店に点検をご依頼ください。
なお、点検･修理に要する費用は販売店にご相談ください。

ヤマハ株式会社

Printed in Malaysia　WK69540-1

YAMAHA

DSP-AX3800

スタートアップガイド

スピーカーや外部機器を接続し、DVD の再生を楽しむまでの流れを説明します。

1 スピーカーを設置・接続する

2 DVD プレーヤーやテレビを接続する

3 DVD を再生する

接続に必要なものを確認しましょう

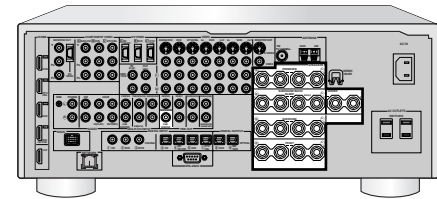
本製品に付属しているもの

- □ 電源コード
- □ スピーカーターミナルレンチ

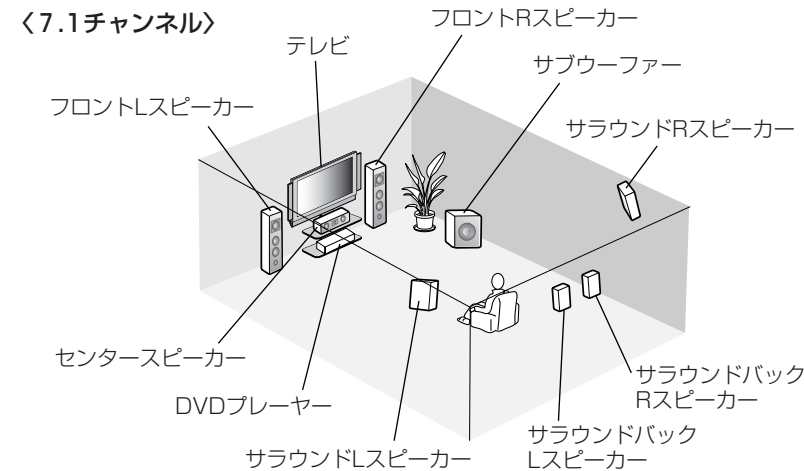
本製品に付属していないもの

- □ スピーカー【7.1チャンネル構成の場合】
  - □ フロントスピーカー(2台)
  - □ センタースピーカー(1台)
  - □ サラウンドスピーカー(2台)
  - □ サラウンドバックスピーカー(2台)
- □ サブウーファー(1台)
- □ スピーカーケーブル(7本)【7.1チャンネル構成の場合】
- □ サブウーファー用ピンケーブル(1本)
- □ DVDプレーヤー(1台)
- □ テレビ(1台)
- □ ビデオ用ピンケーブル(2本)
- □ 光ファイバーケーブル(1本)

1 スピーカーを設置・接続する

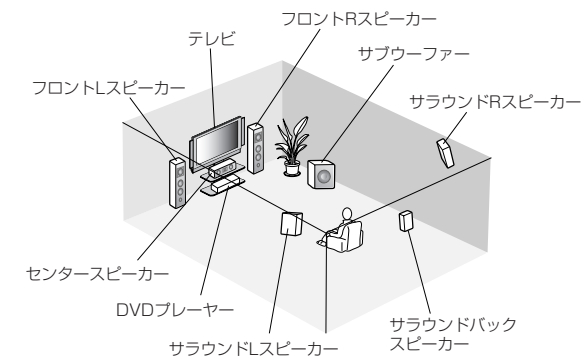
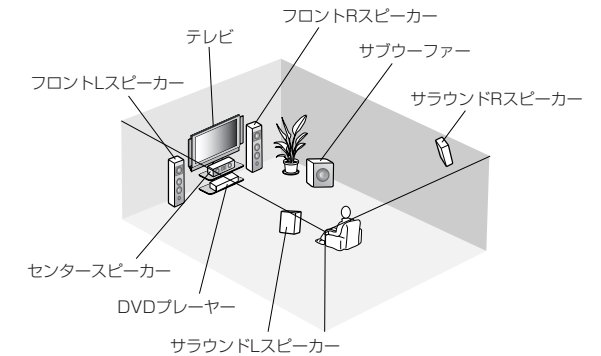
以下のスピーカーを接続して、7.1チャンネルのホームシアター環境を構築します。
フロントL／Rスピーカー
センタースピーカー
サラウンドL／Rスピーカー
サラウンドバックL／Rスピーカー
サブウーファー

本機やサブウーファーの電源コードがACコンセントに接続されていないことをご確認ください。

手順1 スピーカーを設置する

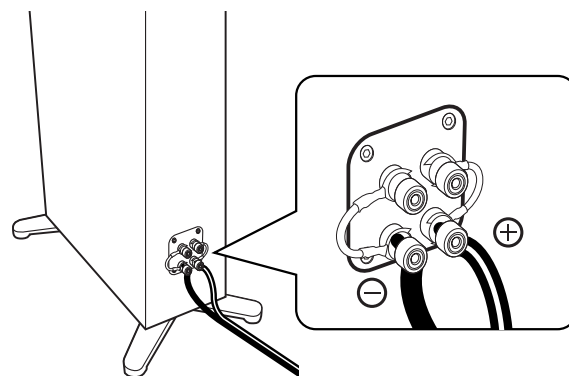
下図を参考に各スピーカーを配置します。

〈7.1チャンネル〉

ご注意
サラウンドスピーカー、サラウンドバックスピーカーはブラケットなどを使って壁や天井に固定してください。

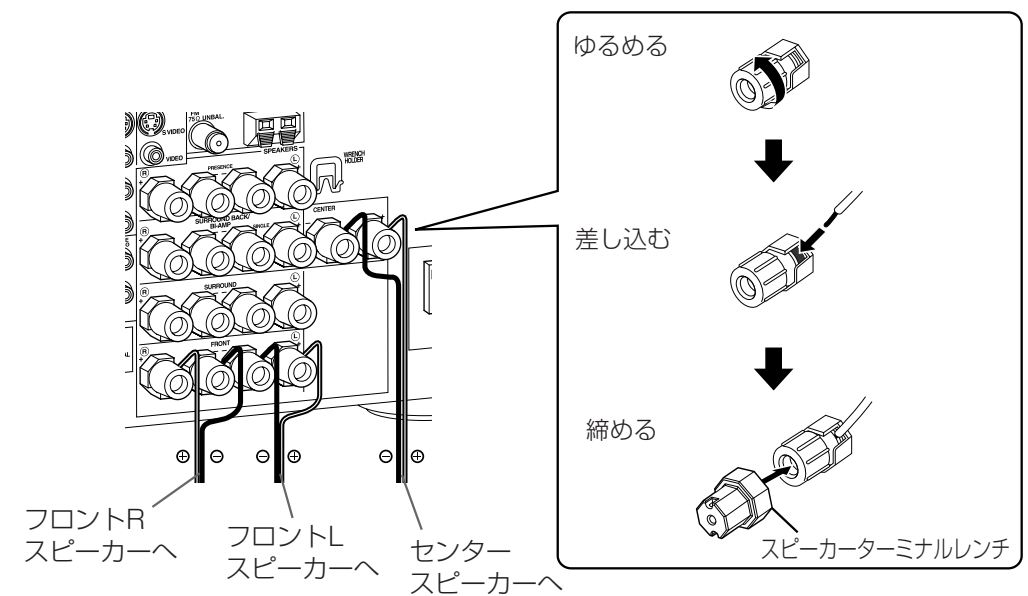
ヒント
6.1チャンネル／5.1チャンネル構成の場合は、下図のように接続してください。

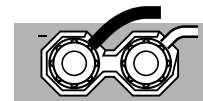
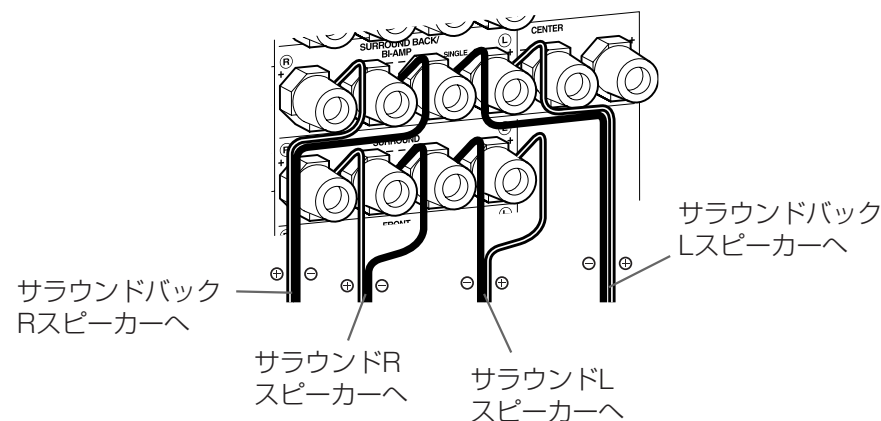
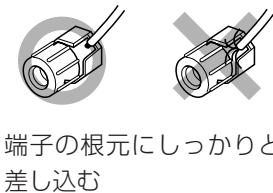
〈6.1チャンネル〉

〈5.1チャンネル〉

手順2 スピーカーを接続する

スピーカーケーブルを使って、スピーカーを本機の SPEAKERS 端子に接続します。

1 スピーカーケーブルをスピーカーに接続する。

スピーカーケーブル両端の絶縁部を10mm くらいはがし、芯線をしっかりとよじる。

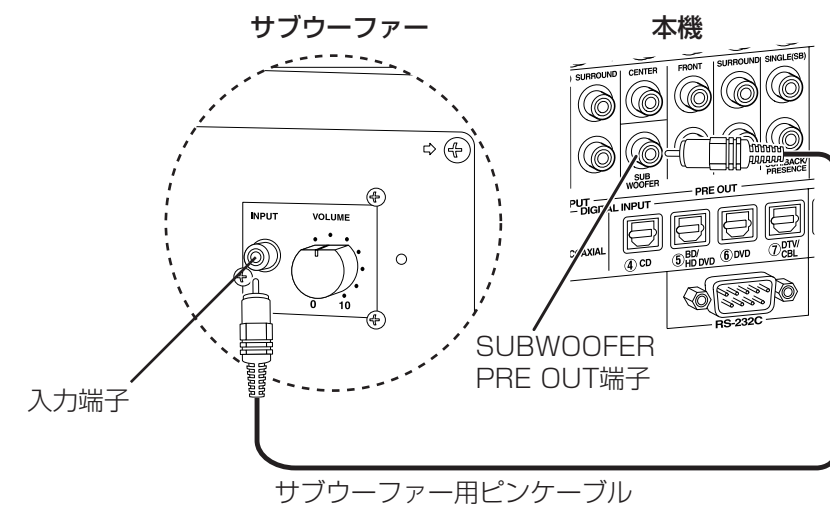
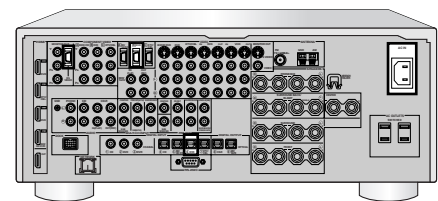
ご注意
スピーカーとの接続については、スピーカーに付属の取扱説明書もあわせてご覧ください。

2 フロントL／RスピーカーをFRONT端子に、センタースピーカーをCENTER端子に接続する。

ご注意
スピーカーケーブルは絶縁部を挟まないように接続してください。音が出ないことがあります。

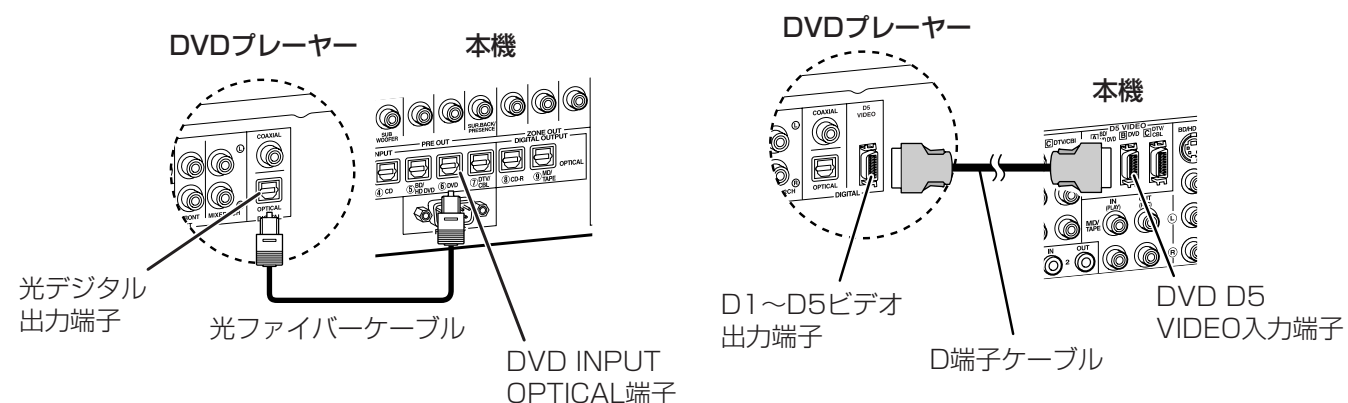
3 サラウンドL／RスピーカーをSURROUND端子に、サラウンドバックL／RスピーカーをSURROUND BACK端子に接続する。

手順3 サブウーファーを接続する

サブウーファー用ピンケーブルを使って、サブウーファーの入力端子と本機の SUBWOOFER PRE OUT 端子を接続します。

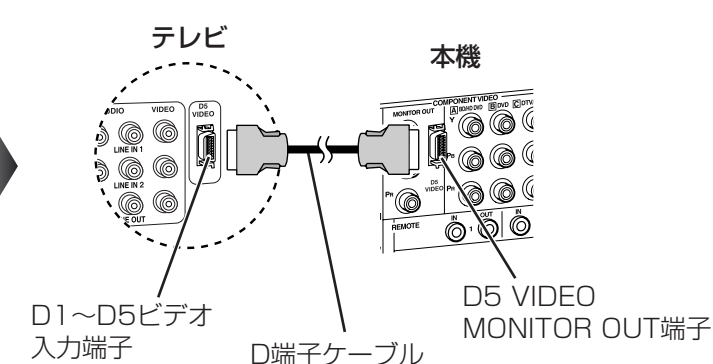
裏面につづく

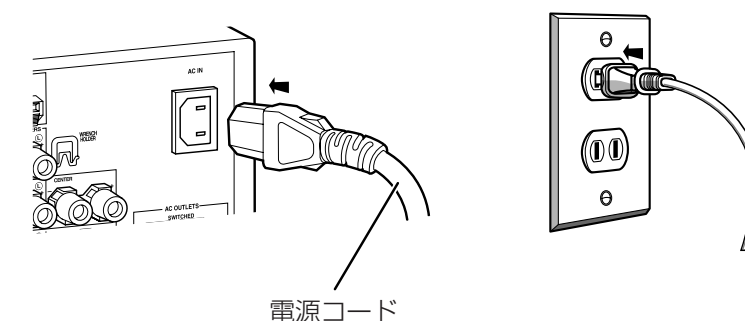
Printed in Malaysia WK69460

2 DVD プレーヤーやテレビを接続する

本機や外部機器の電源コードがACコンセントに接続されていないことをご確認ください。

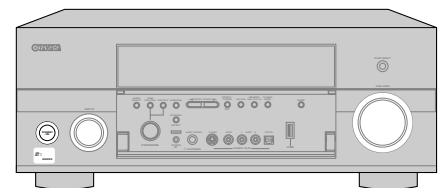
手順 1 DVD プレーヤーを接続する

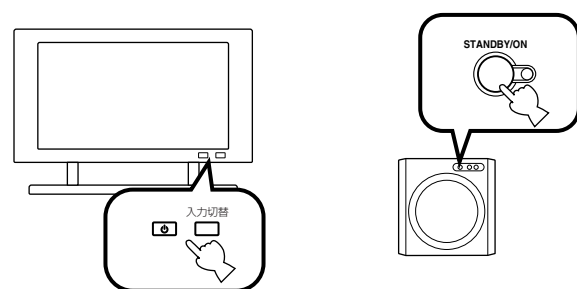
光ファイバーケーブルを使って、DVD プレーヤーの光デジタル出力端子と本機の DVD DIGITAL INPUT OPTICAL 端子を接続します。また、D 端子ケーブルを使って、DVD プレーヤーのD1～D5ビデオ出力端子と本機のDVD D5 VIDEO 入力端子を接続します。

光ファイバーケーブルの両端に保護用キャップが付いている場合は、取り外してから接続してください。

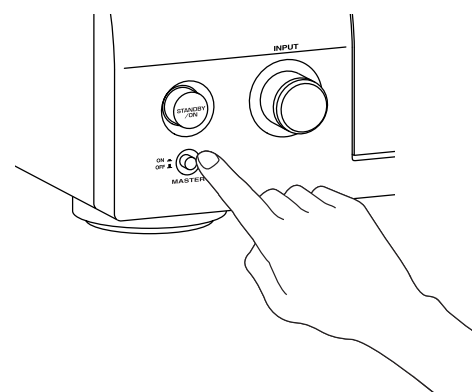
手順 2 テレビを接続する

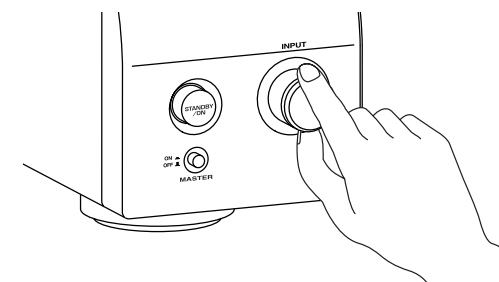
D端子ケーブルを使って、テレビのD1～D5ビデオ入力端子と本機の D5 VIDEO MONITOR OUT 端子を接続します。

手順 3 電源コードを接続する

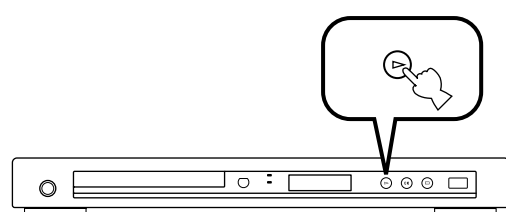
本機の AC IN 端子に電源コードを差し込んでから、本機と外部機器の電源プラグをコンセントに接続します。

3 DVD を再生する

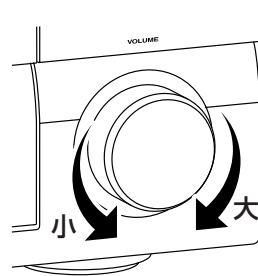
DVD プレーヤーで DVD の再生を楽しむ方法を説明します。

手順 1 テレビとサブウーファーの電源をオンにし、テレビの入力を切り替える

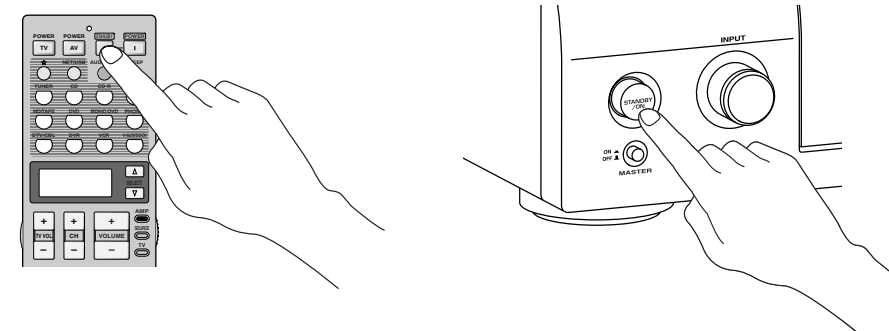
テレビとサブウーファーの電源をオンにし、テレビの入力を本機の映像に切り替えます。操作について詳しくは、テレビやサブウーファーの取扱説明書をご参照ください。

手順 2 MASTER ON/OFF キーを押す

MASTER ON/OFF キーを押すと、フロントパネルディスプレイに「MAIN ON」と表示され、本機の電源がオンになります。

手順 3 INPUT セレクターを回して「DVD」を選ぶ

フロントパネルディスプレイに「DVD」と表示されるまで、INPUT セレクターを回します。

手順 4 DVD を再生する

DVD プレーヤーの操作については、DVD プレーヤーに付属の取扱説明書をご参照ください。

手順 5 音量を調節する

お好みの音量になるようにVOLUMEコントロールを回して音量を調節します。右に回すと音量は大きくなり、左に回すと小さくなります。

ヒント

- 本機の電源がオンのときにリモコンのSTANDBYキーを押すと、電源はスタンバイになります。また、電源がスタンバイのときにリモコンのPOWERキーを押すと、電源はオンになります。
- 本体のSTANDBY/ONキーを押して、オン／スタンバイを切り替えることもできます。

こんなことをしたいときは・・・

■ 接続

プレゼンススピーカーを接続したい(36ページ)
D端子ケーブル以外のケーブルでテレビを接続したい(37ページ)
D端子ケーブルや光ファイバーケーブル以外のケーブルでDVDプレーヤーを接続したい(39ページ)
テレビ／DVDプレーヤー以外の機器を接続したい(38、40～49ページ)

■ 再生

DVDプレーヤー以外の機器を再生したい(66ページ)
FM／AM放送を聴きたい(70ページ)
iPodを再生したい(75ページ)
ネットワークオーディオ／USBデバイスを再生したい(78ページ)

■ サウンド

音場プログラムを使って臨場感を楽しみたい(88ページ)
高品質な音声を楽しみたい(96ページ)

■ 設定

リスニングルームの音響特性やスピーカーの性能を自動的に測定して、リアルな臨場感を楽しみたい(自動測定メニュー)(54ページ)